

坂城町埋蔵文化財調査報告書 第5集

# 豊饒堂遺跡・上町遺跡 寺浦遺跡・東町遺跡

長野県坂城町県単街路・県単高速道路関連道路改良事業発掘調査報告書

BUGYODO SITE・UWAMACHI SITE・TERAURA SITE・HIGASHIMACHI SITE

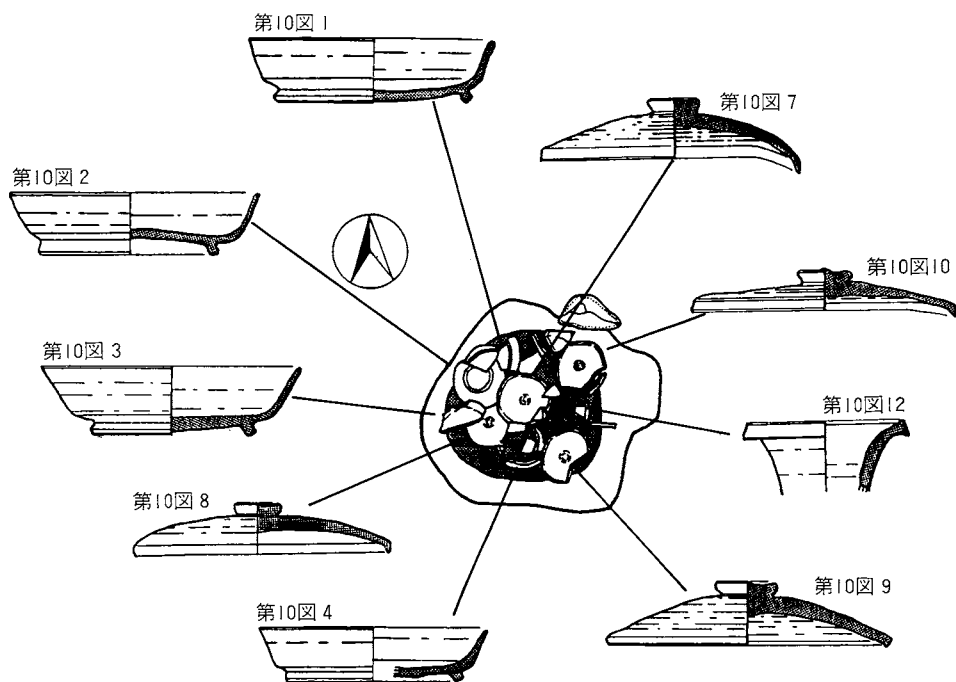
1996

更埴建設事務所 坂城町教育委員会

# 豊饒堂遺跡・上町遺跡 寺浦遺跡・東町遺跡

長野県坂城町県単街路・県単高速道路関連道路改良事業発掘調査報告書

BUGYODO SITE・UWAMACHI SITE・TERAURA SITE・HIGASHIMACHI SITE



豊饒堂遺跡01号火葬墓址遺物出土状況（遺構1：80・遺物1：4）

1996

更埴建設事務所 坂城町教育委員会

## 序

町の街路事業（坂都5号線）及び県単高速道路関連道路改良事業（坂城インター線）に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、平成5年から平成7年まで3年間行なわれました。

豊饒堂・上町・寺浦・東町の4遺跡から、弥生時代から平安時代にかけての竪穴住居址が40棟、古墳後期から近世までの掘立柱建物址が20棟、奈良時代の火葬墓1基等の遺構が発掘されました。

また遺物としては、土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器等々が出土しました。

3年間にわたる調査の中で、平成5年度は冷夏、6年度は猛暑、7年度は長雨等あり、調査にあたった方々には、大変なご苦勞をいただきました。

この調査は、県の指導を受けながら進めてまいりました。特に県教育委員会文化課の小平和夫氏には、調査指導者として大変お世話になりました。

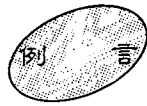
調査の途上、町民の皆さんを対象に、現地説明会を開催し、大勢の方にご参加いただき、埋蔵文化財に対する関心と理解を深めていただけたことは、ありがたいことでした。

また調査団の関係各位には、快く作業にご協力願ひ、所期の目的にしたがった調査ができましたことに対し、心からお礼申し上げます。

坂城町教育委員会

教育長 西沢民雄





- 1 本書は長野県埴科郡坂城町県単街路・県単高速道路関連道路改良事業（通称坂城インター線）に伴う豊饒堂遺跡・上町遺跡・寺浦遺跡・東町遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、更埴建設事務所から委託をうけた坂城町教育委員会が実施した。
- 3 本報告書に使用した航空写真は、(株)ジャスティックが撮影したものである。
- 4 石器及び土器の一部の実測は(株)ジャスティックに委託した。
- 5 本報告書の執筆・編集は小平光一が行った。
- 6 本遺跡の調査における出土遺物、実測図等は坂城町教育委員会が保管している。
- 7 字界図作成にあたって、森大造氏に絵図の解説をしていただいた。厚く御礼申し上げる次第である。
- 8 本報告書作成にあたって下記の方々、機関からご助言・ご配慮を賜った。記して厚く御礼申し上げる次第である。(50音順・敬称略)

大竹憲昭 川上 元 尾見智志 倉沢正幸 小池幸夫  
 坂井美嗣 佐々木多四郎 丸山敏一郎 翠川泰弘  
 森嶋 稔 柳沢 亮 山岡邦章 和根崎 剛  
 (社)更埴広域シルバー人材センター  
 長野県教育委員会文化課



- 1 遺構名は時代別でなく、遺跡ごとの通し番号である。遺構の略称は以下の通りである。

H→竪穴住居址	F→掘立柱建物址
T a→竪穴状遺構	O→火葬墓址
D→土坑址	Q→特殊遺構
P→ピット	S→石

- 2 挿図の縮尺は以下の通りである。

竪穴住居址・掘立柱建物址・竪穴状遺構・  
 土坑址・特殊遺構→1:80  
 住居址カマド・火葬墓址→1:40  
 遺構配置図→1:500  
 土器→1:4 石器→1:2 1:1  
 貨幣→1:1

- 3 挿図中のスクリーントーンは以下を表す。

遺構

遺構構築土		焼土	
堅い床面範囲			

遺物

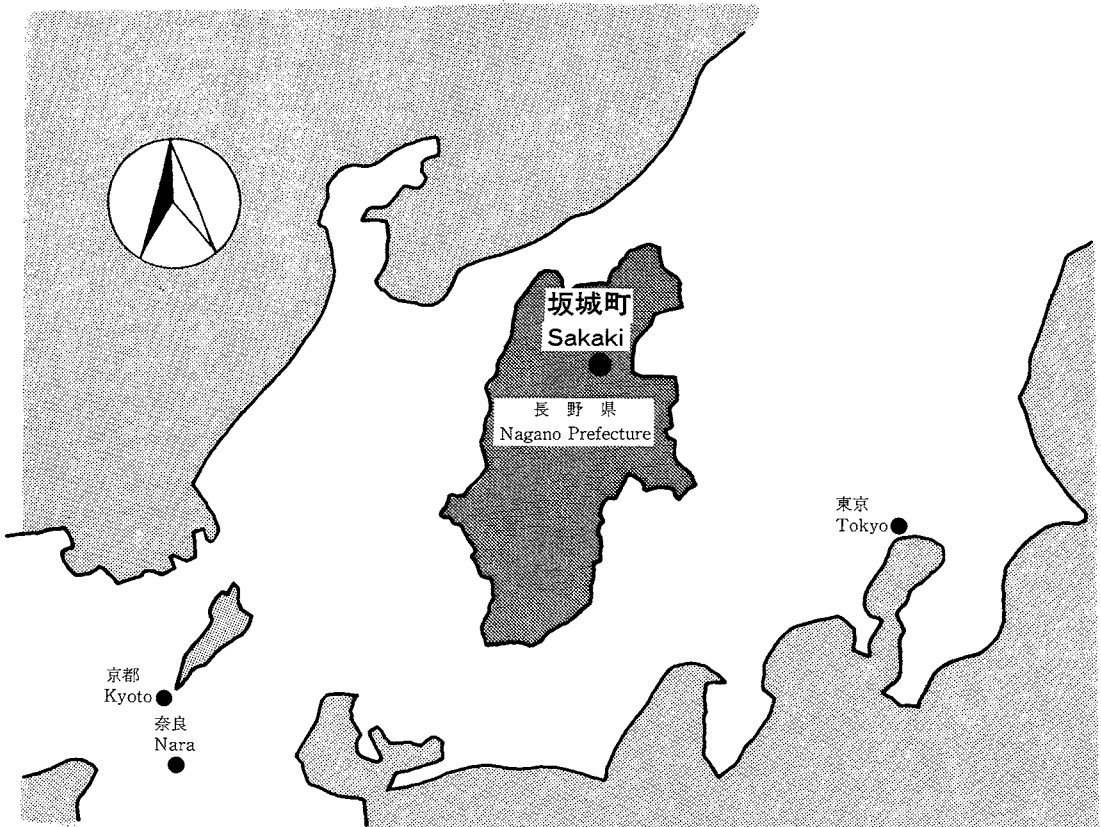
縄文土器断面		弥生土器赤色処理	
土師器黒色処理・須恵器断面			
灰釉陶器断面		緑釉陶器断面	

- 4 土層の色調は『新版 標準土色帖』の標記に基づいて示した。
- 5 遺跡面積の計測には、プランクスセブンを用い、3回の計測の平均値を面積として示した。



# 豊饒堂遺跡・上町遺跡・寺浦遺跡・東町遺跡

序	1 遺跡の立地と概要	8
例言・凡例	2 基本層序	9
目次	3 調査日誌	9
<b>第Ⅰ章 発掘調査の経緯</b>	<b>第2節 I区の遺構と遺物</b>	<b>10</b>
第1節 調査に至る経緯	1 竪穴状遺構	10
第2節 調査の方法	2 火葬墓	10
<b>第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境</b>	<b>第3節 II区の遺構と遺物</b>	<b>12</b>
第1節 地理的環境	1 竪穴住居址	12
第2節 歴史的環境	2 土坑址	14
<b>第Ⅲ章 豊饒堂遺跡</b>	3 特殊遺構	16
第1節 調査概要	4 遺構外出土遺物	18
	<b>第4節 III区の遺構と遺物</b>	<b>18</b>
	1 竪穴住居址	18
	<b>第5節 写真図版</b>	<b>21</b>



## 第IV章 上町遺跡

- 第1節 調査概要———24
  - 1 遺跡の立地と概要———24
  - 2 基本層序———25
  - 3 調査日誌———25
- 第2節 I区の遺構と遺物———26
  - 1 竪穴住居址———26
  - 2 掘立柱建物址———34
  - 3 土坑址———35
- 第3節 II区の遺構と遺物———37
  - 1 竪穴住居址———37
  - 2 土坑址———42
  - 3 遺構外出土遺物———44
- 第4節 III区の遺構と遺物———45
  - 1 土坑址———45
- 第5節 写真図版———47

## 第V章 寺浦遺跡

- 第1節 調査概要———53
  - 1 遺跡の立地と概要———53
  - 2 基本層序———54
  - 3 調査日誌———54
- 第2節 I区の遺構と遺物———55
  - 1 竪穴住居址———55
  - 2 掘立柱建物址———60
  - 3 土坑址———62
- 第3節 II区の遺構と遺物———63
  - 1 竪穴住居址———63
  - 2 掘立柱建物址———73
  - 3 竪穴状遺構———75
  - 4 土坑址———78
- 第4節 III区の遺構と遺物———82
  - 1 竪穴住居址———82
  - 2 土坑址———88

- 第5節 IV区の遺構と遺物———91
  - 1 竪穴住居址———91
  - 2 掘立柱建物址———97
  - 3 土坑址———104
- 第6節 写真図版———108

## 第VI章 東町遺跡

- 第1節 調査概要———123
  - 1 遺跡の立地と概要———123
  - 2 基本層序———123
  - 3 調査日誌———124
- 第2節 遺構と遺物———124
  - 1 掘立柱建物址———124
  - 2 土坑址———126
  - 3 遺構外出土遺物———126
- 第3節 写真図版———127

## 第VII章 成果と課題

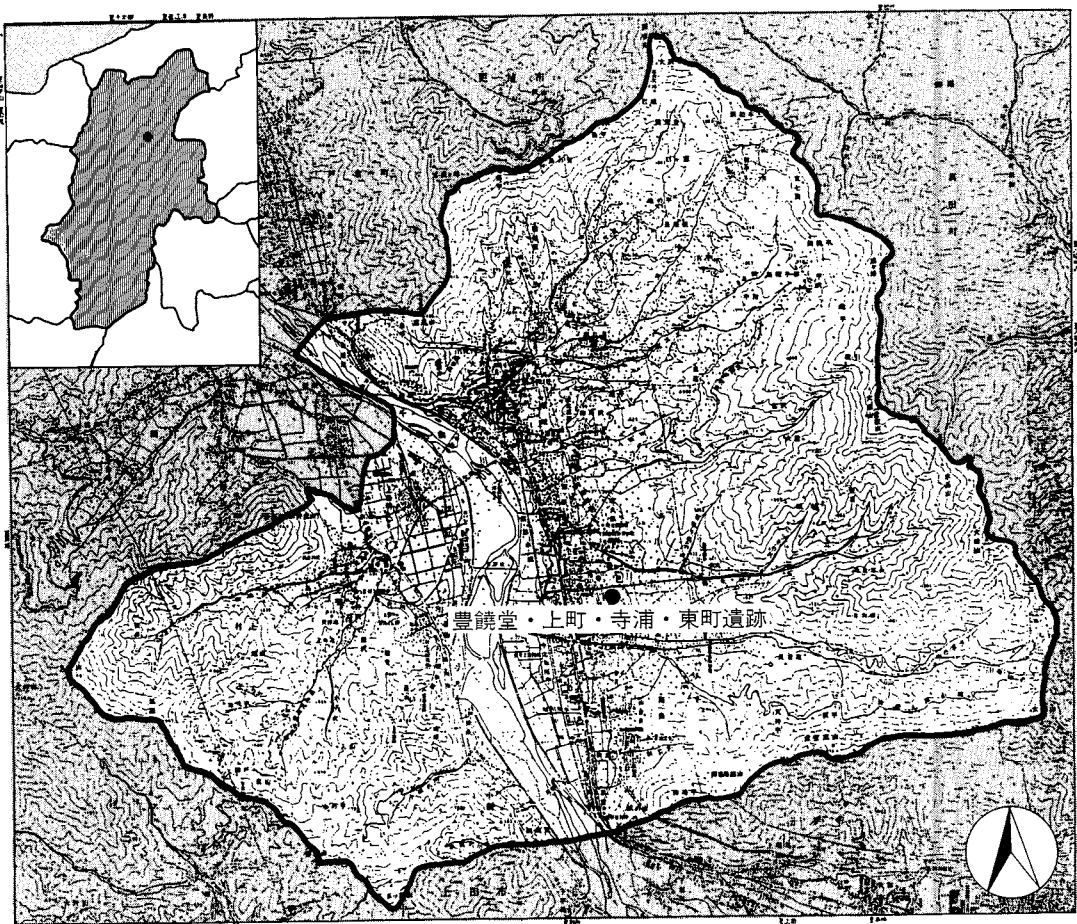
- 第1節 縄文時代———128
- 第2節 弥生時代———128
- 第3節 古 代———129
- 第4節 中世・近世———130

調査体制  
編集後記

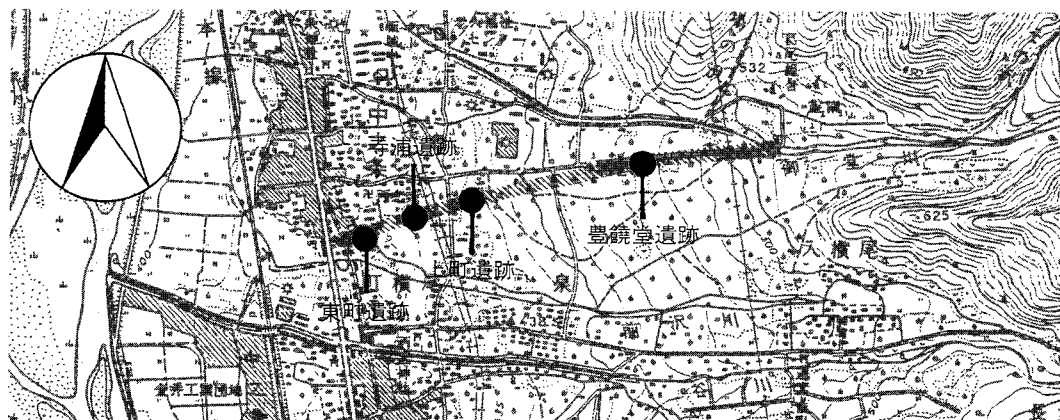
# 第1章 発掘調査の経緯

## 第1節 調査に至る経緯

ながの けんはにしなぐんきかきまち  
長野県埴科郡坂城町は、更埴地方の最南部にあたり、埴科郡旧坂城町・中之条村・南条村と更級郡旧村上村が行政合併し発足した。地理的には長野市を中心とした北信地方と上田市を中心とした東信地方との接点にあたり、北側を更埴市・埴科郡戸倉町・更級郡上山田町、東側を小県郡真田町、西側、南側を上田市とそれぞれ接している（第1図）。面積は53.64km<sup>2</sup>で約1万6,900人の人口があり、町内の350を越える事業所の製造品出荷額等は1,400億円を超え県内町村のトップであり、国内でも特異な田園工業都市である。



第1図 長野県埴科郡坂城町位置図



第2図 豊饒堂・上町・寺浦・東町遺跡位置図（1：25,000）

今回、上信越自動車道の開通に伴い、更埴建設事務所による県単街路・県単高速道路関連道路改良事業（仮称坂城IC～国道18号線アクセス道路、通称坂城インター線）が計画され、遺跡の破壊が余儀なくされることとなり、長野県教育委員会文化課・更埴建設事務所・坂城町教育委員会の3者による保護協議の結果、遺跡範囲確認のため平成4年10月19日～23日試掘調査を実施した。

しかし全道路面積7,200㎡のうち、試掘調査面積520㎡とわずかな調査しか実施できなかったことから、詳細な調査計画を策定するため、引き続き平成5年8月18日～27日試掘調査を実施した。

その結果、豊饒堂遺跡・中之条遺跡群のうち上町遺跡・寺浦遺跡・東町遺跡において竪穴住居址・掘立柱建物址等の遺構、土師器・須恵器等の遺物が検出された。そこで再度の保護協議の結果、3カ年計画で記録保存を実施することとなり、平成5年度は豊饒堂遺跡・東町遺跡・寺浦遺跡Ⅰ・Ⅱ区、平成6年度に上町遺跡・寺浦遺跡Ⅲ・Ⅳ区、平成7年度には残地の調査と整理作業を実施することとなった。

発掘調査は、更埴建設事務所より委託を受けた坂城町教育委員会が主体となり調査を実施し、随時長野県教育委員会文化課の調査指導を仰いだ。

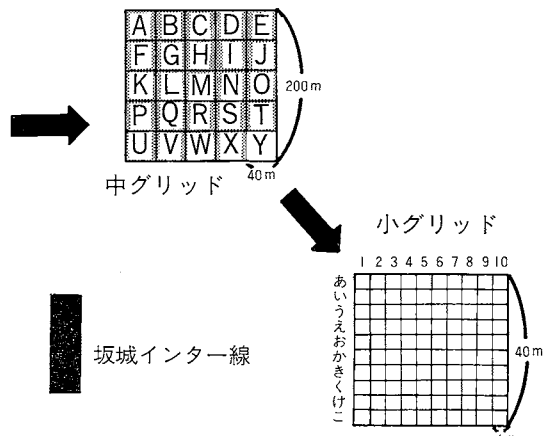
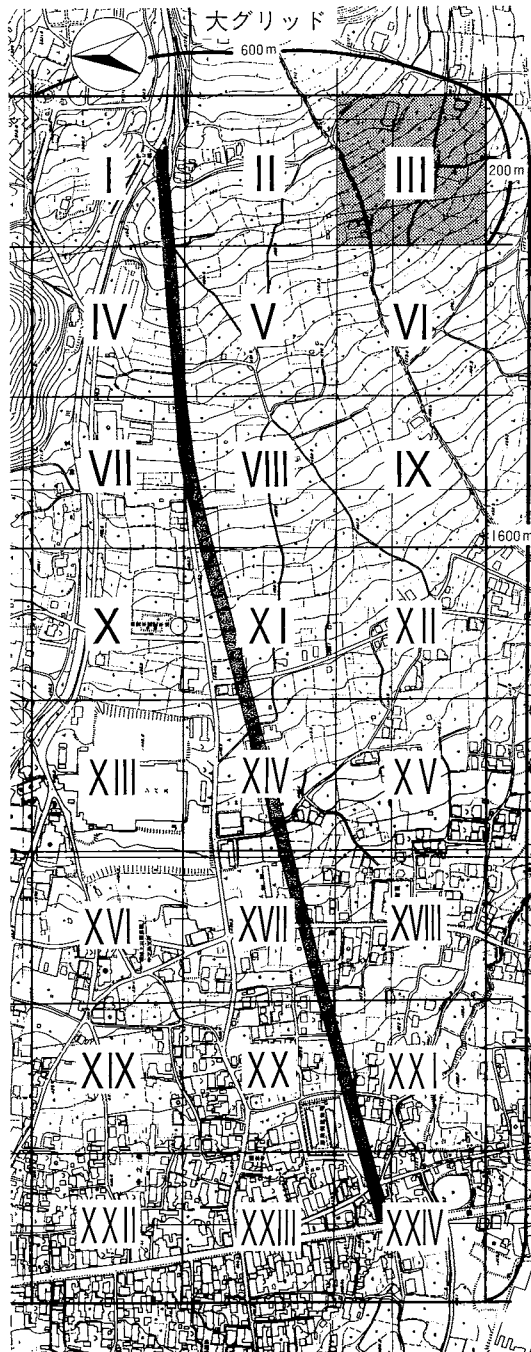
引用参考文献 坂城町『坂城町40周年町勢要覧1995』平成7年

## 第2節 調査の方法

遺構の検出にあたっては、重機によって表土を除去した後、人力によって遺構確認面の精査及び遺構の掘り下げを行い、簡易遣り方実測で図化し、遺構・遺物の測量、写真撮影、遺物の取り上げを行った。

遺構・遺物の測量には正確な位置が記録でき、今後予想される周辺の遺跡の調査にも整合できるVIII系国家座標軸を基にグリッドを組んだ（第3図）。グリッド設定にあたっては調査対象地区を





第3図 大中小グリッド設定図 (1 : 25,000)

東西1,600m、南北600mの長方形区画で囲み、200m×200m方眼に分割されたものを大グリッドと設定し、北東隅より北から南にI・II・III～XXIV区とローマ数字で記号化した。その中を40m×40mの中グリッドで25分割し、北東隅より北から南にA・B・C～Y区とアルファベットの大文字で記号化した。

さらにその中を4m×4mのグリッドで100分割し、東西列を東より五十音順であ・い・う～こ、南北列を北より算用数字で1・2・3～10とし、各グリッドの北東交点を小グリッドとし、遺構検出位置・遺構外出土遺物の取り上げはすべてこれに拠った。

なお便宜上、豊饒堂・上町遺跡ではI区～III区、寺浦遺跡ではI～IV区と調査地区を分割した。

引用参考文献 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財センター『金井城跡』平成2年

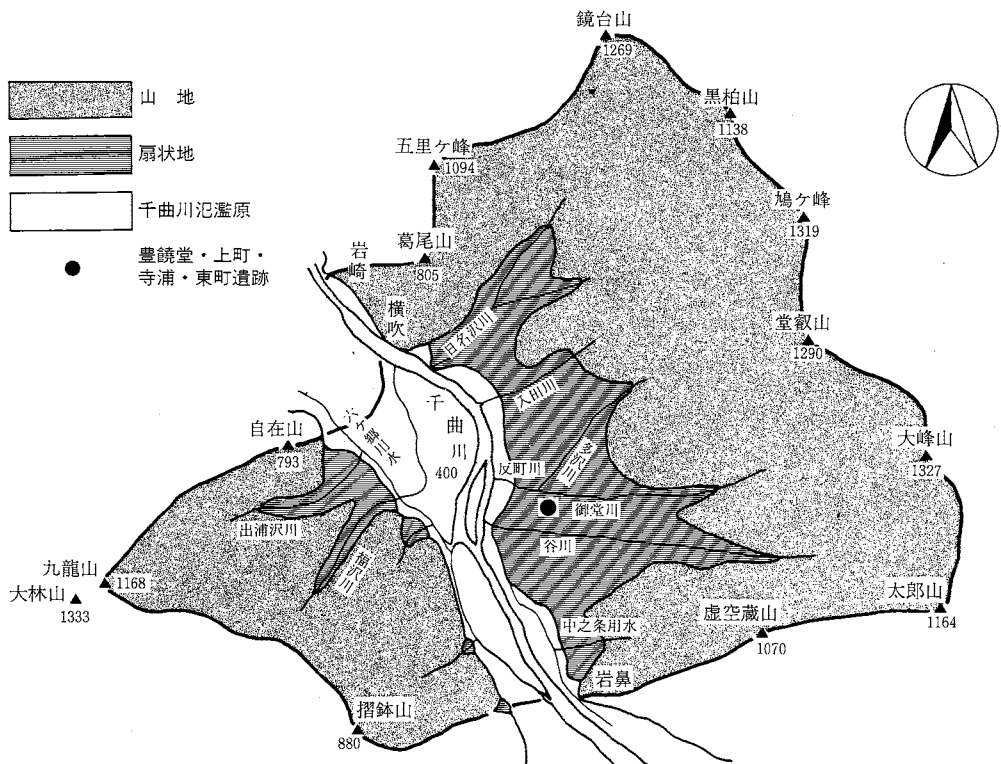
## 第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境

### 第1節 地理的環境

善光寺平を構成する更埴地方最南部に位置する坂城町は、町の中央を北流する千曲川<sup>ちくまがわ</sup>によって、坂城広谷と呼ばれる貫通谷を形成しているが、左岸と右岸では様相が異なる（第4図）。

千曲川左岸は、出浦沢川・福沢川等に形成された小複合扇状地と千曲川の断層崖でなり、断層崖は急崖であるために現在でも泥岩・珩岩の崩落により交通の障害となっている。

逆に右岸は、北側の横吹・南側の岩鼻の断崖、西側の千曲川河床によって制約され、他の地域との交通の障害となるが、日名沢川、入田川・御堂川・谷川等によって形成された複合扇状地は、更埴地方南部で最も開かれた洪積台地をなしている。扇状地の扇端部は段丘崖となり、千曲川沿いの沖積地に到り、微高地上を太平洋側と日本海側を結ぶ国道18号線・JR信越本線が通じている。



第4図 坂城町地形概念図

気候は年間通じて降水量が少なく晴天の日が多い内陸性気候で、過去10年間の平均降水量はおよそ800mm。日本で最も雨量の少ない地域の一つである。年間通じての温度変化は大きい、年間平均気温12.9℃と大気の乾燥とともに暮らしやすい気候である。

今回発掘調査を実施した豊饒堂・上町・寺浦・東町遺跡は、千曲川右岸の中之条地区に位置し、御堂川・前沢川によって形成された複合扇状地の扇尖部～扇端部にあたる。この付近は旧中之条村の集落が発達しており、沖積地は扇状地扇端部の湧水や中之条用水によって水田地帯となっている。

引用参考文献 坂城町誌刊行会『坂城町誌 上巻』昭和54年  
滝沢公男『更埴市南部の地理的環境と交通』『更埴の自然と歴史』平成3年

## 第2節 歴史的環境

現在のところ、坂城町において最も古い資料は保地遺跡で、旧石器時代後期の上ヶ屋形彫刻器・小形の尖頭器が数点採取されている。

縄文時代—本格的な調査が実施されたのは数例に過ぎず、採集遺物が多い。金井遺跡群で早期と思われる特殊磨石が出土している。込山A・B遺跡では前期、中期の土器や住居址が確認され、金井遺跡でも中期の勝坂式土器や出尻土偶が採集されている。晩期では保地遺跡(昭和42年調査)で亀ヶ岡系の土器群が出土し、込山E遺跡からは遮光器土偶の頭部が採集されている。

千曲川の沖積地においては東裏遺跡II・青木下遺跡(平成4・5年調査)で中期～晩期にかけての土器・石器が出土し、塚田遺跡II(平成5年調査)でも前期～晩期の土器が出土している。住居址は検出されていないが、集落址が付近に存在する可能性を示唆している。

弥生時代—千曲川沖積地の中州と思われる塚田遺跡(平成4年調査)や塚田遺跡IIで後期の集落遺跡が検出された。塚田遺跡IIでは後期後半の箱清水期の集落址が複数期にわたっていることが判明している。

古墳時代—千曲川の自然堤防上と思われる東裏遺跡(昭和58年調査)で、中期末に位置づけられる手捏土器や石製模造品が出土している。隣接する東裏遺跡IIでは中期末に所属すると思われる玉造り工房址が3棟検出された。千曲川段丘上では宮上遺跡II(No.2-5・平成4年調査)や北浦遺跡(No.2-4)で後期の集落遺跡が検出された。

古墳では、豊饒堂遺跡北側山麓に位置する東平古墳(平成5年長野県埋蔵文化財センター調査)が5世紀前半に位置づけられた他、後期古墳は千曲川右岸の中之条の御堂川、南条の谷川の河川沿いに集中し、御堂川古墳群(No.9~12)・谷川古墳群(No.14・15)等が形成されている。左岸では出浦沢川・福沢川の支流に集中し、千曲川水系最大級の石室規模をもつ御厨社古墳がある。

奈良・平安時代—奈良時代の集落遺跡は、現在のところきわめて少ないが寺浦遺跡（No.2-1）・東裏遺跡等で検出された。生産遺跡では土井の入窯跡がある。

平安時代の集落遺跡では今回調査を実施した寺浦・上町遺跡（No.2-2）等があり、東裏遺跡IIでは礎石建物址が検出された。

生産遺跡では青木下遺跡・塚田遺跡・中町遺跡において仁和4（888）年の千曲川の大洪水に被覆された水田層が検出された。

寺院では9世紀初頭の込山廃寺があり、土井の入窯跡の瓦窯で込山廃寺、上田市信濃国分寺・尼寺、更埴市正法廃寺の差し瓦が生産されていたことが判明している。

製鉄遺跡では小山製鉄遺跡（平成5年長野県埋蔵文化財センター調査）がある。

経塚では、明治29年に発見された北日名経塚があり、鋳銅製経筒・和鏡・白磁輪花小皿等が出土し、東京国立博物館に所管されている。経筒には願主定西の名が見え、三重県朝熊山経塚・大阪府金剛山経塚の経筒銘にもその名がみえることから、同一人物説が指摘されている。



第5図 周囲遺跡分布図（1：12,500）



中世・近世—11世紀末嘉保1（1094）年村上郷に配流された源盛清は、源姓村上氏の祖となったとされる。室町時代後期には村上義清が、信濃守護小笠原氏と勢力を二分する国人領主となり、東北信地方に勢力をふるった。義清の居城葛尾城跡は更埴地方最大級の山城で、山麓には居館跡もある。天文22（1553）年武田信玄によって攻略された。

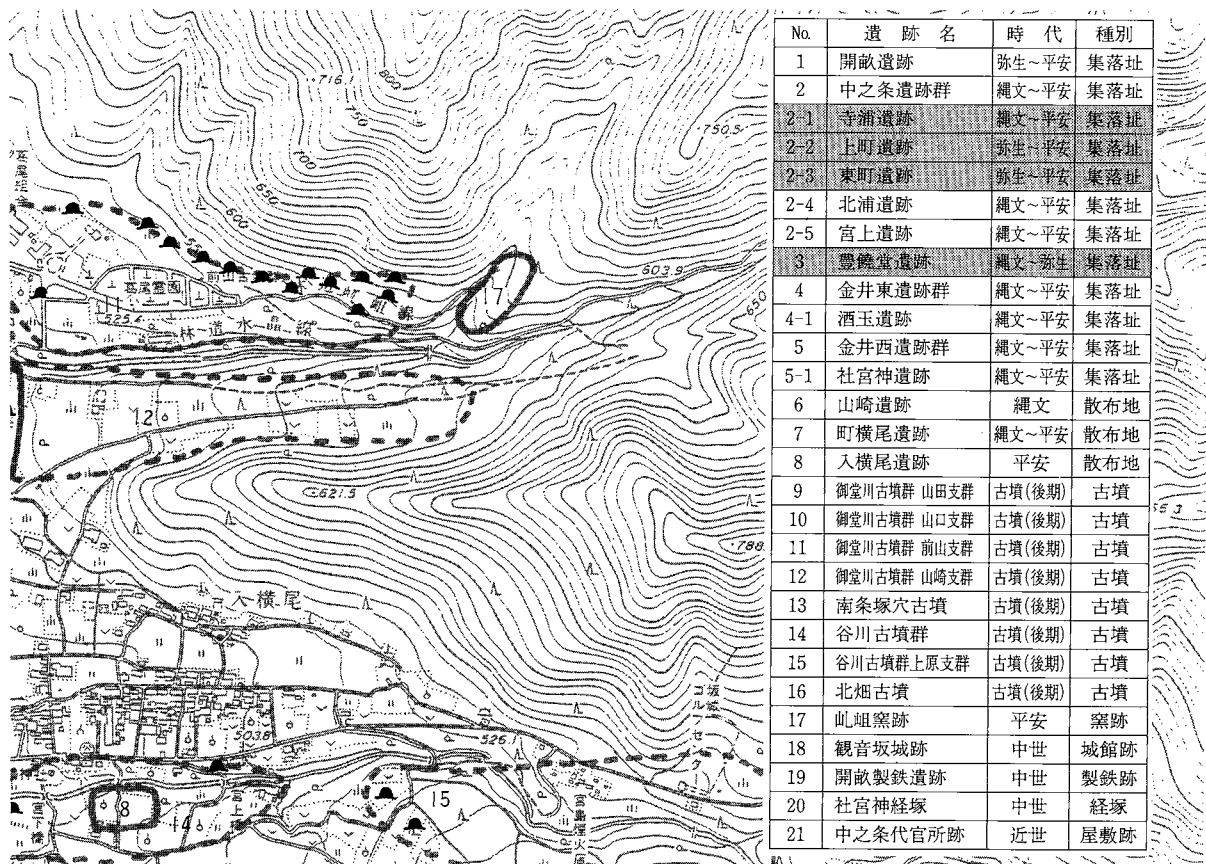
生産遺跡では開畝製鉄遺跡（No.19・昭和52、53年調査）で、村上義清時代末期と肯定できる製鉄炉が2基検出され、千曲川の砂鉄を原料にしていたことや地元産の褐鉄鉱を使用していた可能性があることが判明している。

経塚では社宮神経塚（No.20）で白銅鏡や永楽通宝、金の小粒多数等が発見されている。

近世になると、坂木・中之条村等14ヶ村が幕府の天領となり、坂木村に坂木代官所が設置された。後に中之条村に代官所（No.21）は移転したが、坂木は北国街道の宿駅として発展した。

以上坂城町の遺跡と歴史の概略について触れてみた。

引用参考文献 坂城町誌刊行会『坂城町誌中巻』昭和56年  
 更埴埴科地方誌刊行会『更級埴科地方誌第2巻』昭和53年  
 宮下健司「経塚と浄土信仰」『北信濃の歴史上巻』平成7年



# 第III章 豊饒堂遺跡

## 第1節 調査概要

### 1 遺跡の立地と概要

豊饒堂遺跡は標高454～483m前後を測り、御堂川によって形成された扇状地の扇央部にあたる(第6図)。

平成元年に作成された『坂城町遺跡分布図』によると縄文～弥生時代の集落遺跡に位置づけられ、現在も黒曜石が表面採取できる。当遺跡東側には古墳時代後期の御堂川古墳群が所在する。左岸の山崎支群ムジナ塚古墳は畑地造成のために削平されたが、玉類・馬具類・直刀・須恵器等が出土している。右岸の山麓傾斜地にも前山支群が所在する。当遺跡東端の山崎北遺跡(平成5年長野県埋蔵文化財センター調査)では、平安時代の竪穴住居址、中世の土坑墓等が検出された。御堂川右岸には中世の開畝製鉄遺跡(昭和52・53年調査)が所在するなど、当遺跡周辺は古墳時代後期～中世にかけて重要な位置を占める遺跡に囲まれている。

遺跡名となる「豊饒堂」は慶長7(1602)年の検地帳には「不入道」と記載され、江戸時代後期に作成された『中之条村御林絵図』(格致学校歴史民俗資料館所蔵)には「不入堂」と記載されていることから、明治になって改正されたことがわかる。明治43年発行された『埴科郡志』には「不入堂と発音していることから、恐らく御堂川によって道が分断されている意味で「不行道(不入道)」が転化したものと考えられる。

調査区の調査面積及び検出された遺構の概要は以下のとおりである。

調査面積 I区—305m<sup>2</sup>。II区—755m<sup>2</sup>。III区—43m<sup>2</sup>。計1,103m<sup>2</sup>。

遺構 竪穴住居址—3棟(弥生1・平安2)。竪穴状遺構—1棟(中世1)。火葬墓—1基(奈良



第6図 豊饒堂遺跡位置図(1:5,000)

1)。土坑址—10基。ピット—36基。特殊遺構—1（縄文1）。自然流路—1条。

引用参考文献 信濃史料刊行会『信濃史料第19巻』昭和31年  
長野県埋蔵文化財センター『長野県埋蔵文化財センター年報10』平成6年

## 2 基本層序

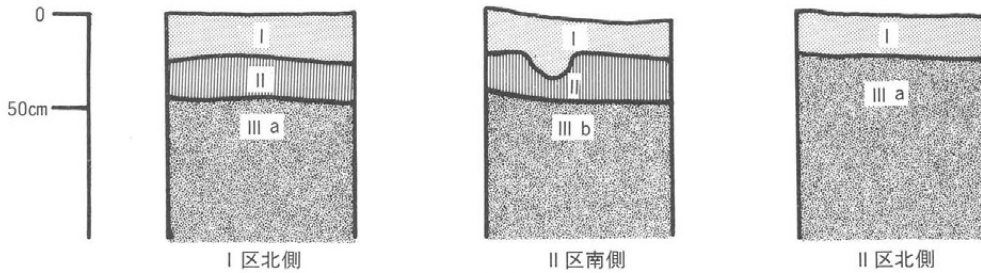
豊饒堂遺跡の基本層序は第7図に示したとおりである。

I 層 耕作土 黒耀石が採集できる。

II 層 暗褐色土 (10YR3/3) 小亜角礫を含む。平均な堆積ではない。窪みなどに溜まっているものと考えられる。火葬墓確認面。

III a 層 黄褐色土 (10YR5/6) 遺構確認面。直径1～5 cm位の礫を多量に含む。

III b 層 黄褐色砂質土 (10YR5/8) 自然流路の覆土。



第7図 豊饒堂遺跡基本層序模式図

## 3 調査日誌

平成5年8月30日(月) 重機でIII区表土除去。

31日(火) 重機でII区表土除去。

プレハブ設置。

9月1日(水) 開始式を行う。II区  
の調査に入る。重機  
でI区表土除去。

6日(月) III区調査に入る。

7日(火) III区H3号住居址完  
掘。

28日(火) I区O1号火葬墓完  
掘。

10月4日(月) I区調査終了。



開始式

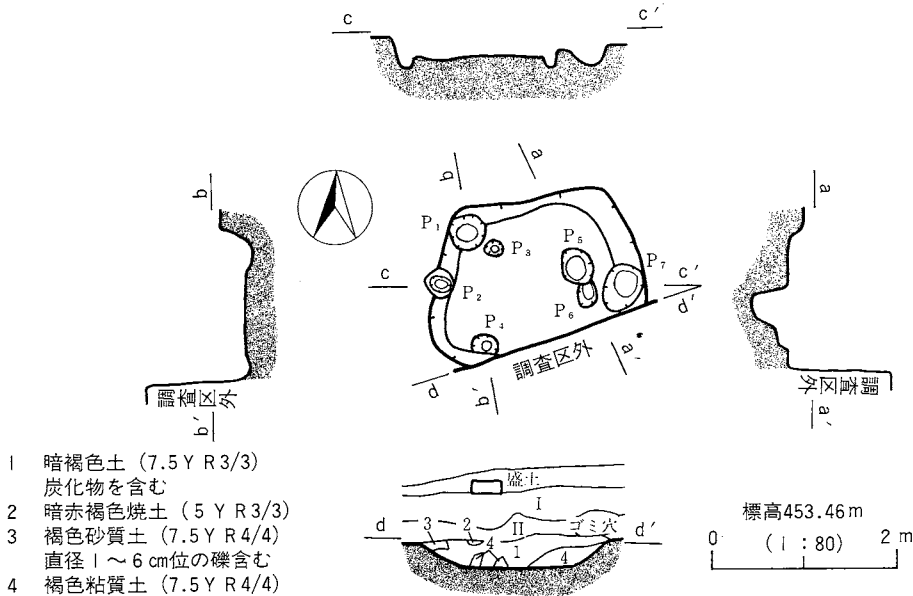
## 第2節 I区の遺構と遺物

### 1 竪穴状遺構

#### 1) T a 1号竪穴状遺構 (第8図)

検出位置—X I Qう8・う9・え8・え9グリッド。

南壁と東西壁の一部が調査区外となるため全容は把握できないが隅丸方形を呈すると思われる。北壁長は1.32m、西壁長は1.14mを測り、主軸方位はN-70°-Eを指す。壁残高は0~27cmを測る。床は平坦で、ピットが7基検出されたが、不規則で支柱穴にあたるピットを断定することはできなかった。遺物は覆土中から内耳土器、安山岩製の石鉢が出土した。時期は出土遺物から室町時代(15世紀)に位置づけられる。



第8図 T a 1号竪穴状遺構実測図

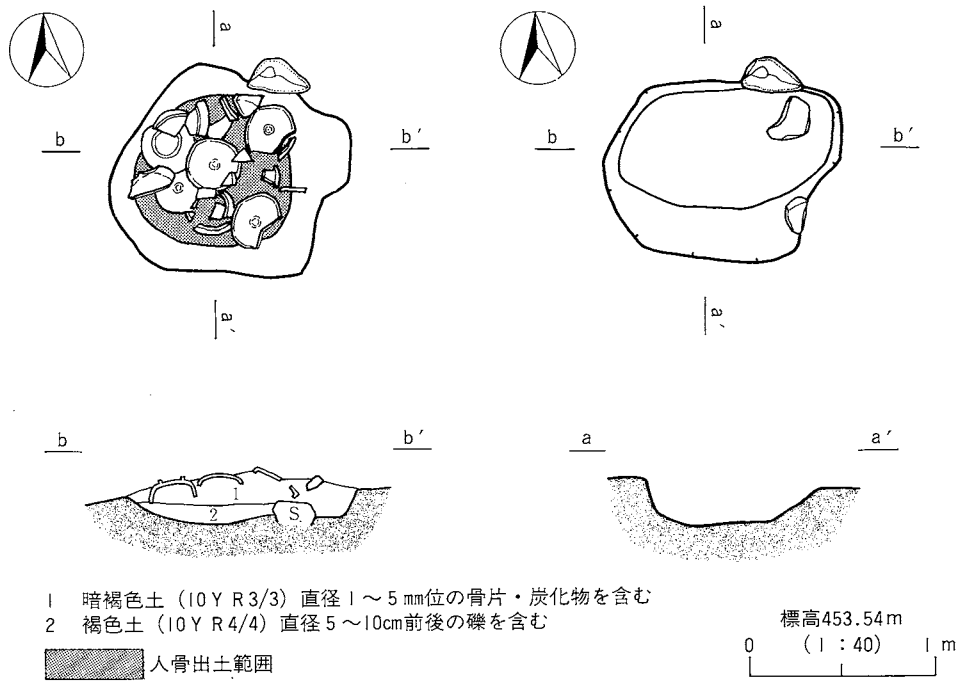
### 2 火葬墓

#### 1) O 1号火葬墓址 (第9図)

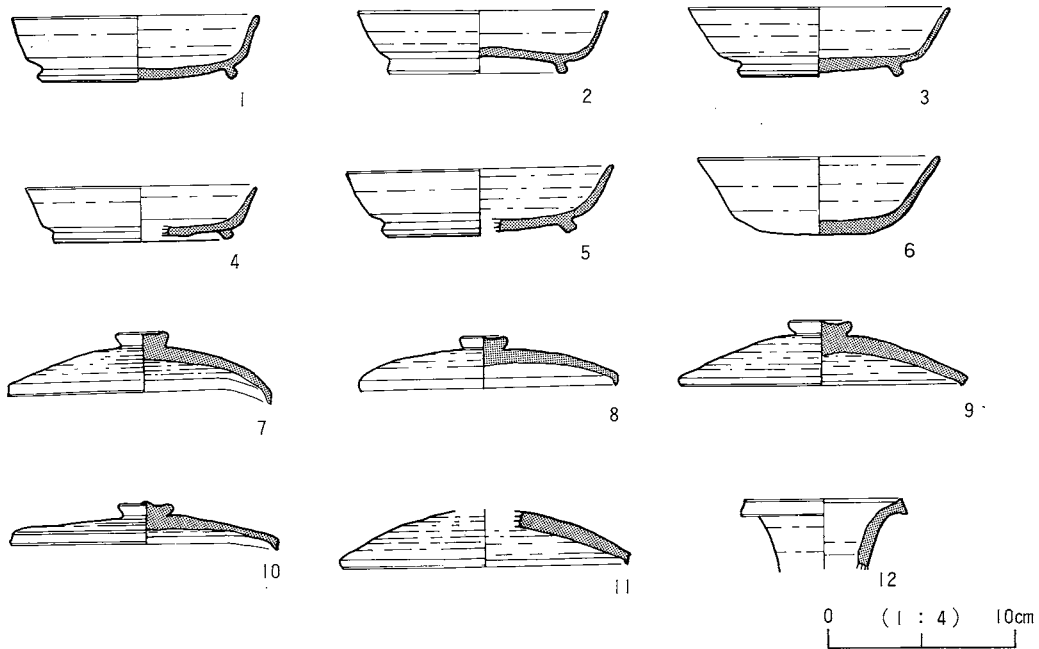
検出位置—X I Qき9グリッド。試掘調査掘削時にII層上面で検出。

長軸1.26m、短軸94cmの不整楕円形を呈し、深さは13cmである。南北主軸はN-90°を指す。細かく砕いた焼骨を炭化物とともに土坑中央部に置き、その上に須恵器杯、蓋、壺片が置かれていた。底面や周囲に熱をうけたり、焼土化した部分がないことから、他所で火葬され、焼骨のみ拾い集めてこの土坑に収め、上から須恵器を被せたものと思われる。遺物は須恵器蓋、杯は完形の





第9図 O1号火葬墓址実測図



第10図 O1号火葬墓址出土遺物実測図

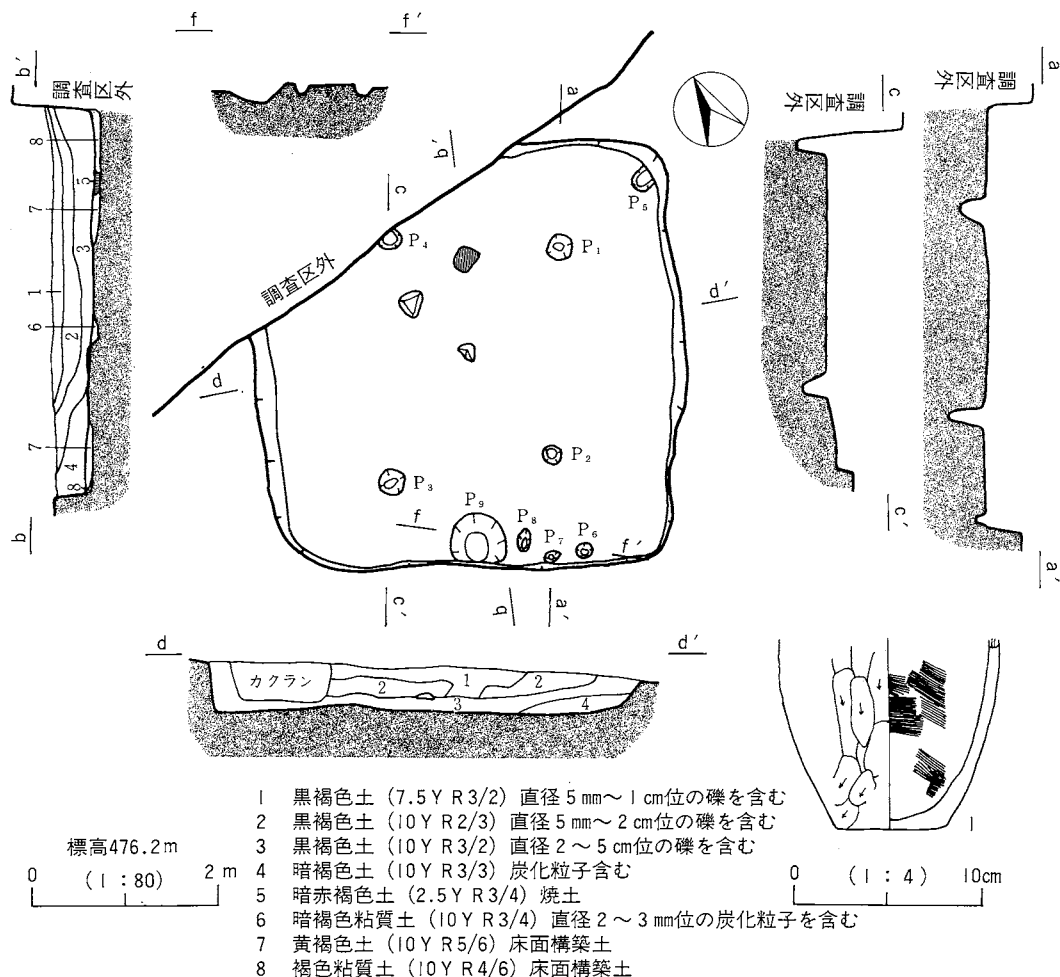
ものが多いが、長頸壺等破片のものも多く含まれている。図示した須恵器坏(第10図1~6)のうち1~5は高台をもつ。底部はへら切り後、回転へら削り調整を施す。坏蓋(第10図7~11)は天井部に肩平な宝珠形つまみをもつ。長頸壺(第10図12)はロクロ調整され、焼成は良好である。覆土中から黒耀石製の石鏃(第21図1)も出土している。時期は出土遺物により奈良時代前半(8世紀)に位置づけられる。

### 第3節 II区の遺構と遺物

#### 1 竪穴住居址

##### 1) H1号住居址(第11図)

検出位置—VII Eく7・く8・け7グリッド。



第11図 H1号住居址・出土遺物実測図

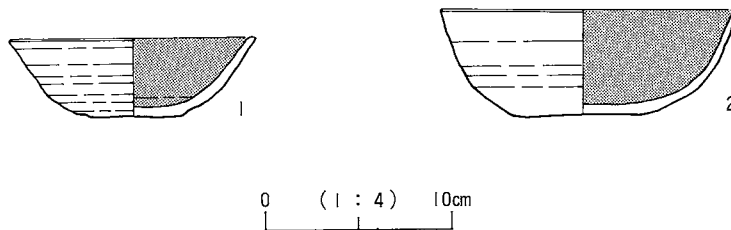
北壁と東西壁の一部が調査区外になるため、全容は把握できないが隅丸方形を呈すると思われる。東壁長は4.14m、南壁長は3.8mで、壁残高は20～56cmを測る。床は平坦で堅固であるが、住居址中央部付近は貼床が希薄ですぐに地山になってしまう。ピットは9基検出され、P<sub>1-4</sub>が支柱穴と思われる。P<sub>6, 8</sub>は入口施設とも考えられる。住居址中央部よりやや北東に焼土址が検出された。1cmのくぼみを有する地床炉と思われる。遺物は覆土、床面から箱清水期の弥生土器が若干細片で出土した。図示できたのはへら削りの甕(第11図1)で床面から出土した。また黒耀石製の石鏃(第21図2)が1層中から出土した。流れ込みと考えられる。以上のことから時期は弥生時代後期後半～古墳時代初頭に位置づけられる。

## 2) H2号住居址(第13図)

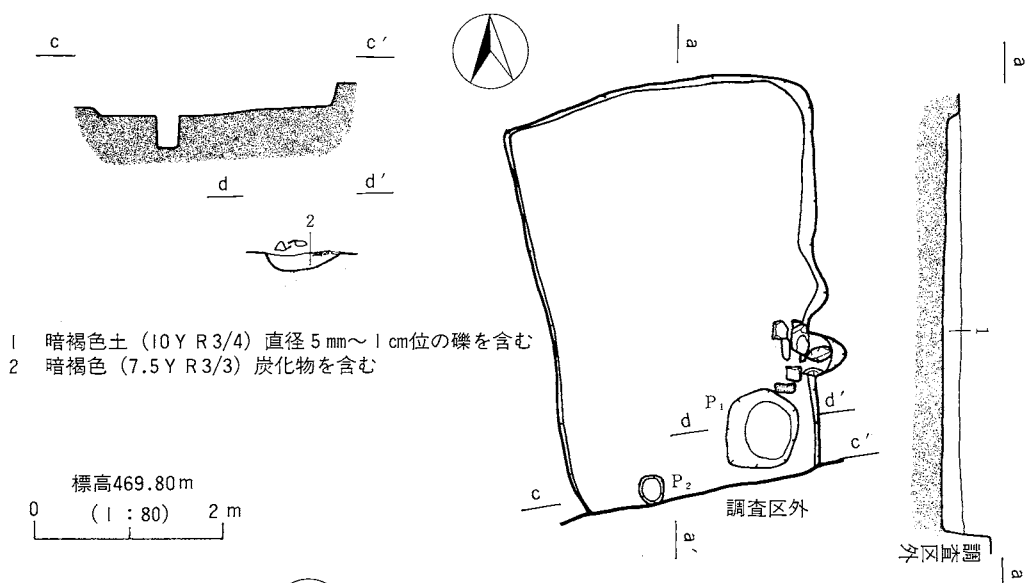
検出位置—ⅧKい2・あ3・い3グリッド。

南壁と東西壁の一部が調査区外となるため、全容は把握できないが隅丸長方形を呈すると思われる。北壁長は2.96mで、カマドを軸とした南北主軸はN-91°-Eを指す。壁残高は1～30cmを測る。全面貼り床だが、カマド付近が堅固だった以外は全体的に軟弱である。カマド右側のP<sub>1</sub>は貯蔵穴と思われ、覆土中から土師器坏・甕、須恵器甕、カマドの袖石と思われる自然礫が出土した。カマドは東壁中央部よりやや南側に位置するものと考えられ、自然礫と粘土によって構築されている。火床面には支柱石も確認された。上層には土師器の甕片が天井部の崩落土によって潰れていた。遺物はカマドと周辺部からまとまって出土しているが完形の土器はなく、土師器・黒色土器・須恵器が主体である。図示した黒色土器坏は内面黒色処理を施され底部は、回転切り(第13図1)、へら切り(第13図2)の調整である。

出土遺物から平安時代(9世紀後半)に位置づけられる。

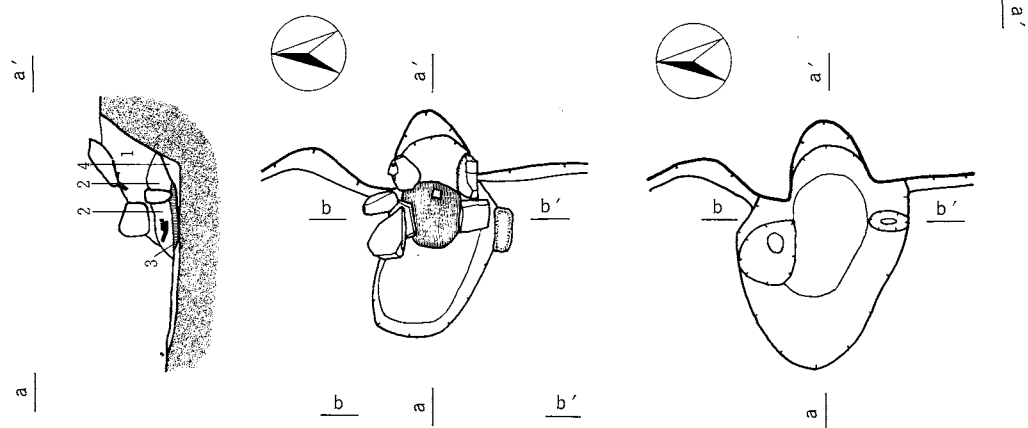


第12図 H2号住居址出土遺物実測図



- 1 暗褐色土 (10Y R 3/4) 直径 5mm~1cm位の礫を含む
- 2 暗褐色 (7.5Y R 3/3) 炭化物を含む

標高469.80m  
0 (1 : 80) 2 m



- 1 暗褐色土 (7.5Y R 3/4) 直径 5mm~1cm位の礫を含む
- 2 暗褐色焼土 (5Y R 3/4)
- 3 暗褐色焼土 (5Y R 5/6) 火床面
- 4 褐色砂質土 (7.5Y R 4/6) カマド掘方

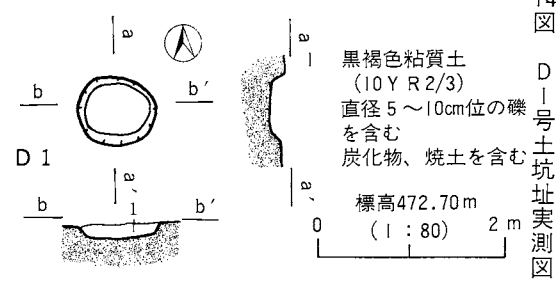
標高469.80m  
0 (1 : 40) 1 m

第13図 H 2号住居址・カマド実測図

## 2 土坑址

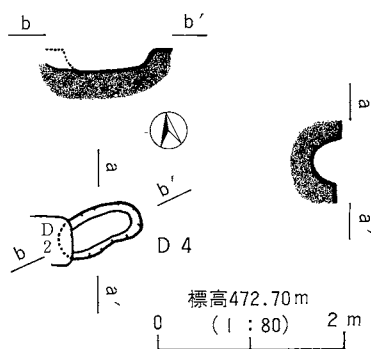
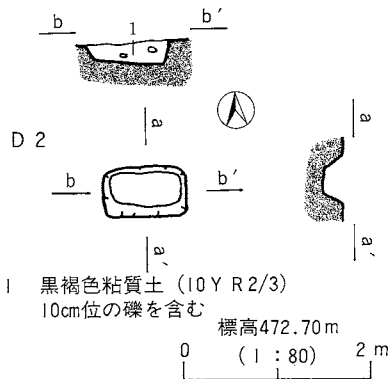
### 1) D I号坑址 (第14図)

検出位置—VII J < 8グリッド。  
長軸86cm、短軸75cmの円形。深さ16cm。覆土中から須恵器杯・甕の羽口・鉄滓が出土した。鉄滓は直径5cm位のものが多く。  
出土遺物から平安時代に位置づけられる。



第14図 D I号土坑址実測図



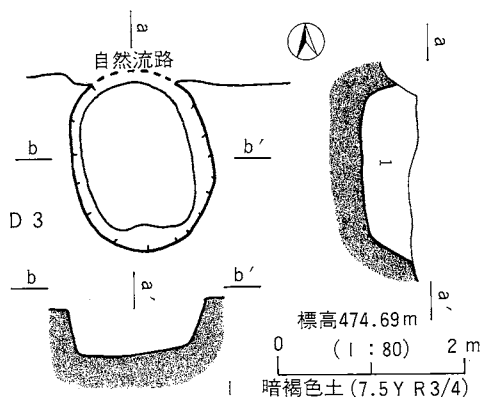


2) D2号土坑址 (第15図)

検出位置—VII J け8グリッド。  
長軸88cm、短軸52cmの長方形。深さ26cm。D4号土坑址を切り構築されている。

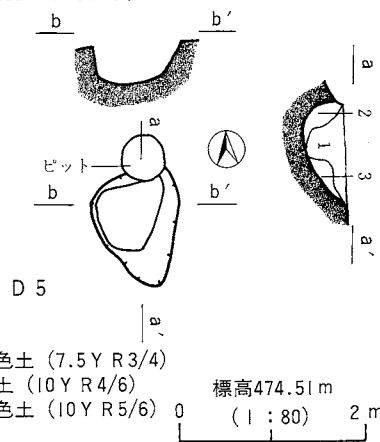
3) D4号土坑址 (第15図)

検出位置—VII J け8グリッド。  
長軸92cm、短軸46cmの長方形。深さ29cm。東側をD2号土坑址に切られる。



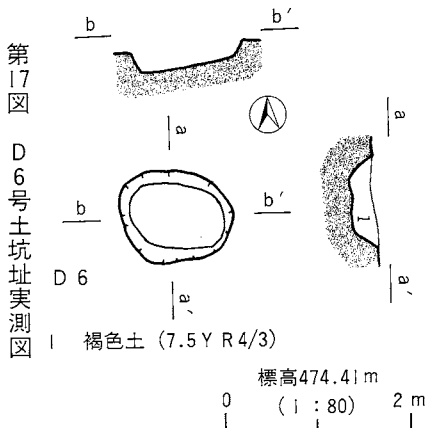
4) D3号土坑址 (第16図)

検出位置—VII J あ10、VII F あ1グリッド。  
長軸1.90m、短軸1.46mの楕円形。深さ61cm。北側を自然流路に切られる。



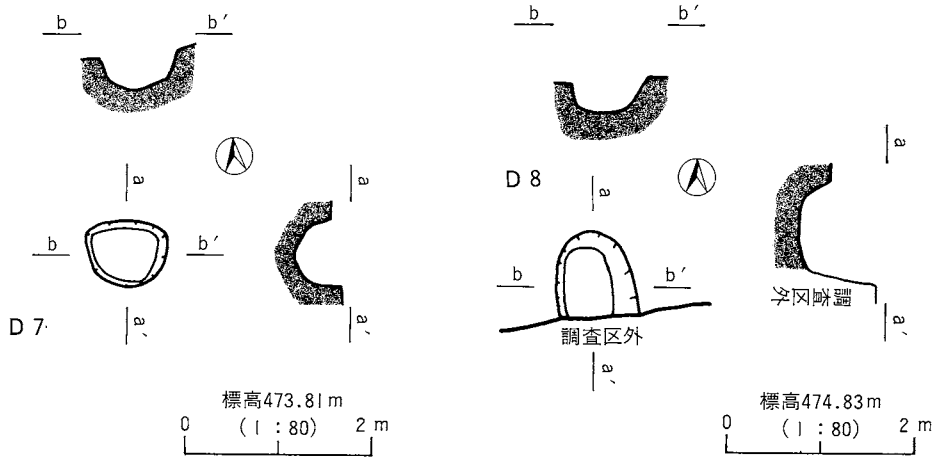
5) D5号土坑址 (第16図)

検出位置—VII あ10・い10、VII F あ1・あ2グリッド。  
長軸1.22m、短軸80cmの不整楕円形。深さ49cm。



6) D6号土坑址 (第17図)

検出位置—VII F い1グリッド。  
長軸1.2m、短軸96cmの楕円形。深さは30cm。D2～D6の時期は不明である。



7) D7号土坑址 (第18図)

検出位置—VIII Fか1・か2グリッド。  
長軸80cm、短軸96cmの楕円形。深さは51cm。

8) D8号土坑址 (第18図)

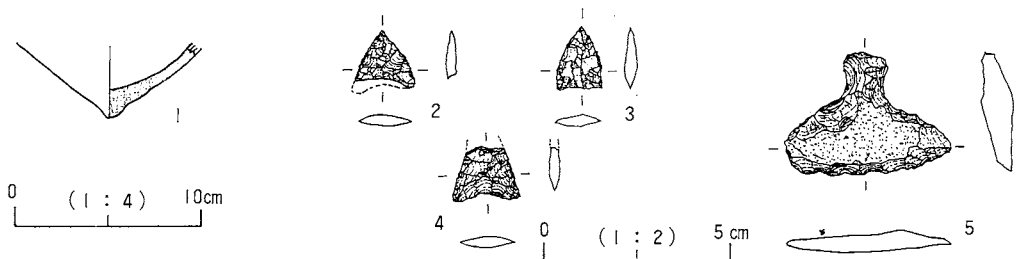
検出位置—VIII Fい1グリッド。  
南側は調査区外となるが、楕円形を呈すると思われる。  
深さ42cm。D7・D8共に時期は不明である。

### 3 特殊遺構

#### 1) Q1特殊遺構 (第20図)

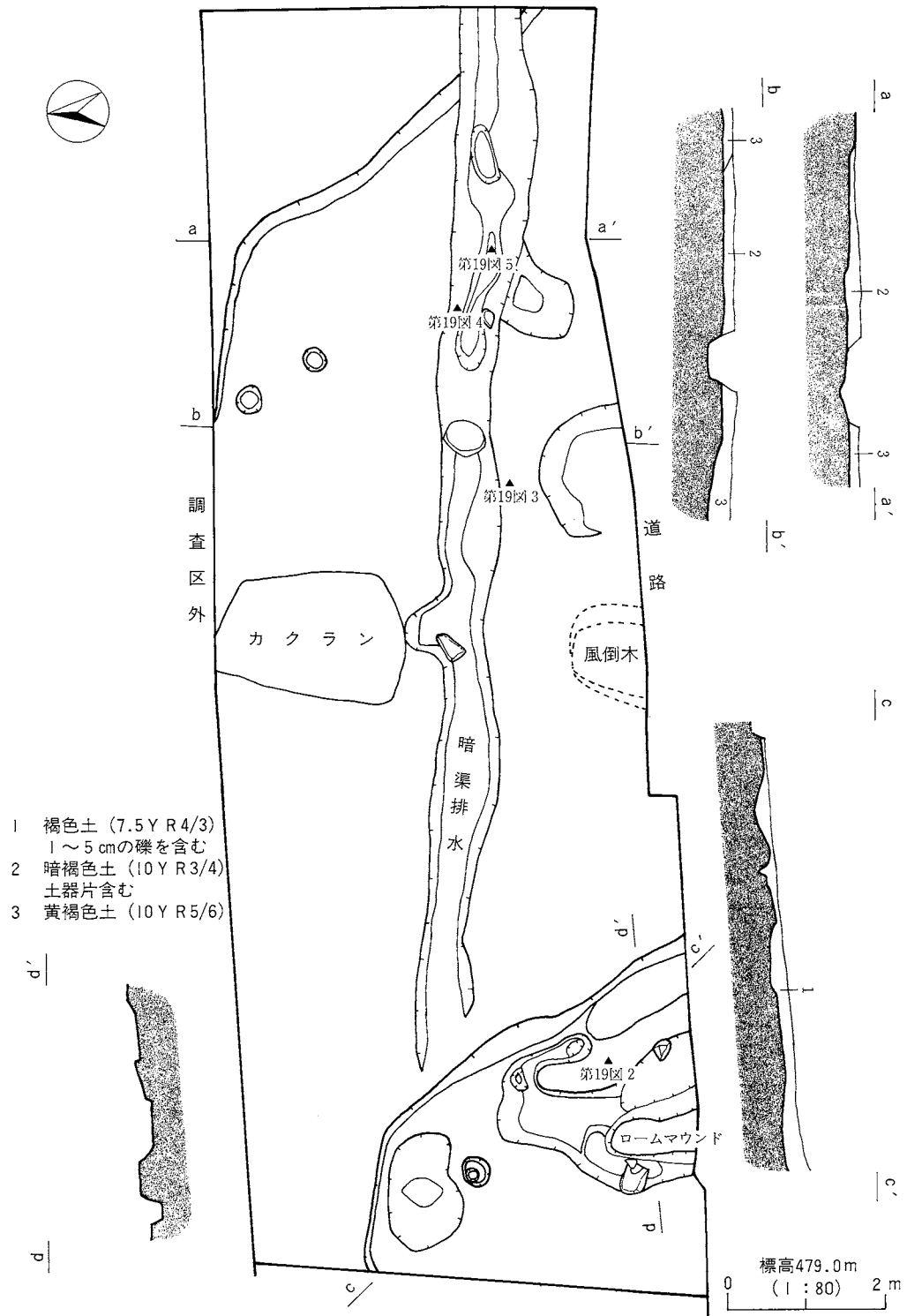
検出位置—XIYき6・7、く6・7、け6・7、こ6・7、Eあ6グリッド。

II層掘り下げの過程で縄文土器・黒曜石片・石鏃・石皿等が出土したため、遺構確認をおこなったところ、落ち込みが検出された。東側は明確な落ち込みが分かりにくい、西側は落ち込みの輪郭が比較的明確に見える。また暗渠排水下層からもピット状の落ち込みが確認された。東南側にはIII層を基調としたマウンド状の高まりがあり、それをとりまくように落ち込みがある。落ち込みからは縄文土器・石鏃・石皿等が出土していることから、人為的な落ち込みとも考えられる。図示できたのは縄文土器深鉢(第19図1)の底部である。石器は黒曜石製の石鏃(第19図2~4)・黒曜石製の石匙(第19図5)が出土した。出土遺物から縄文時代早期に位置づけられる。



第19図 Q1特殊遺構出土遺物実測図

第20図 Q-特殊遺構実測図

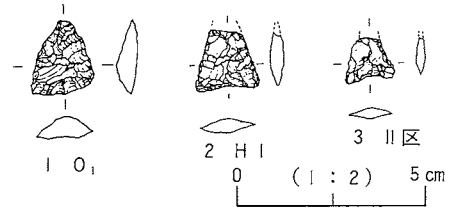


- 1 褐色土 (7.5Y R4/3)  
1 ~ 5 cmの礫を含む
- 2 暗褐色土 (10Y R3/4)  
土器片含む
- 3 黄褐色土 (10Y R5/6)

標高479.0m  
(1 : 80) 2 m

## 4 遺構外出土遺物

I・II区で黒耀石製の石鏃（第21図1～3）が出土している。



第21図 遺構外出土遺物実測図

## 第4節 III区の遺構と遺物

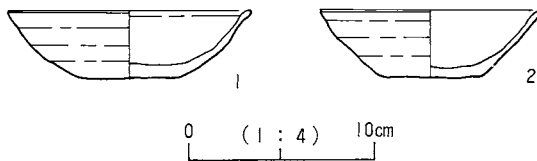
### 1 竪穴住居址

#### 1) H 3号住居址（第23図）

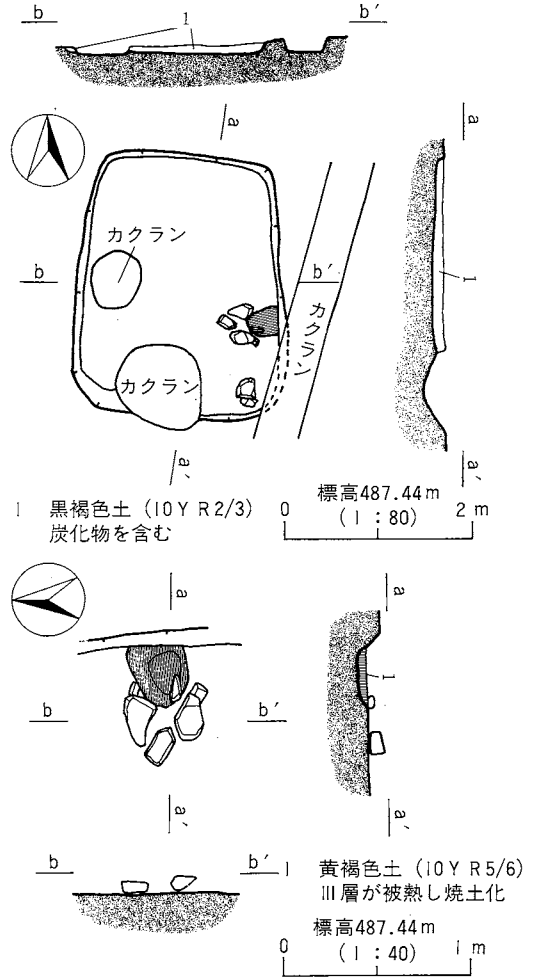
検出位置—VII Jこ4グリッド。

東壁・南壁側は畑灌用パイプ等の攪乱を受けているが、北壁は風倒木を切り構築している。短軸2.40mの隅丸長方形を呈する。北壁長は1.60m、西壁長は2.30mでカマドを軸とした主軸方位はN-89°-Eを指す。壁残高は3～13cmを測る。南西隅に褐色粘土を貼った良好部分があるが、全体的に凹凸が激しい。柱穴は検出されなかった。カマドは東壁中央部よりやや東に位置する。遺存状態は悪く、火床面のみを検出で袖部は残存していなかった。遺物は土師器環・羽釜が出土している。東南部分に細片で集まる。図示した土師器環（第22図1・2）は、底部回転糸切りである。

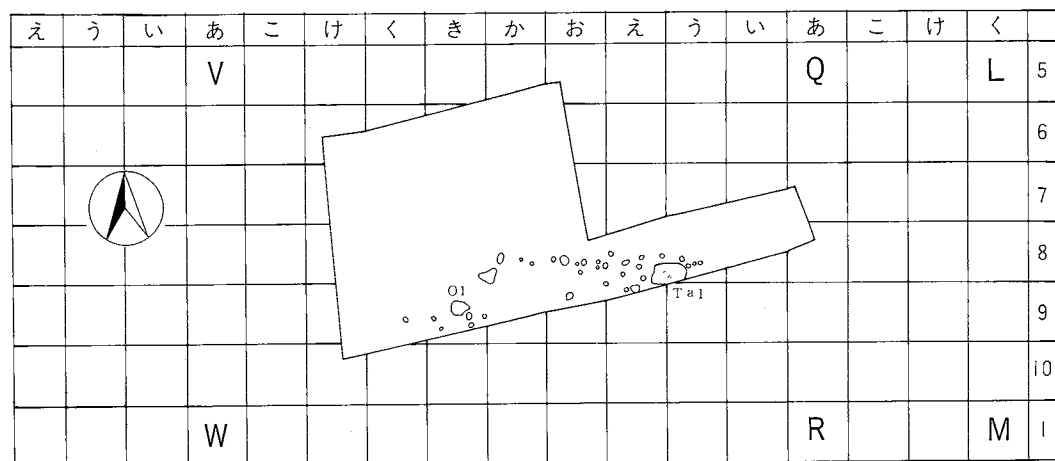
出土遺物から平安時代（10世紀）に位置づけられる。



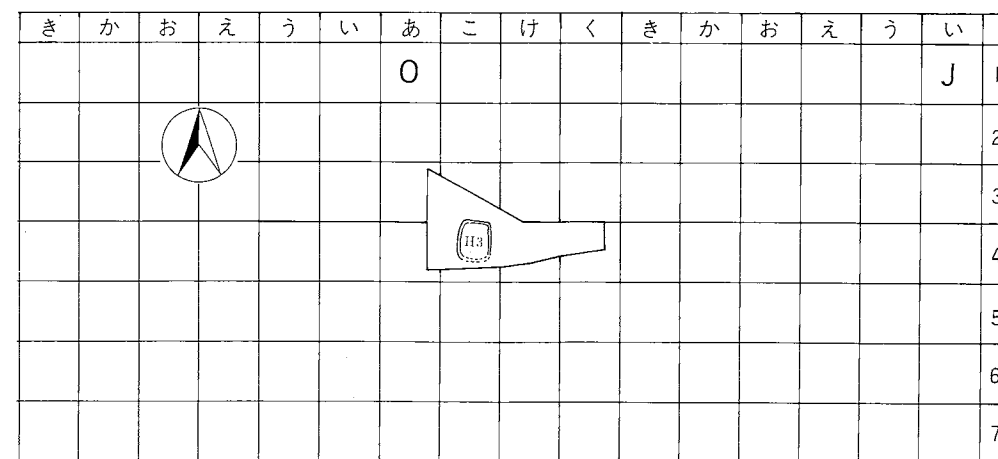
第22図 H 3号住居址出土遺物実測図



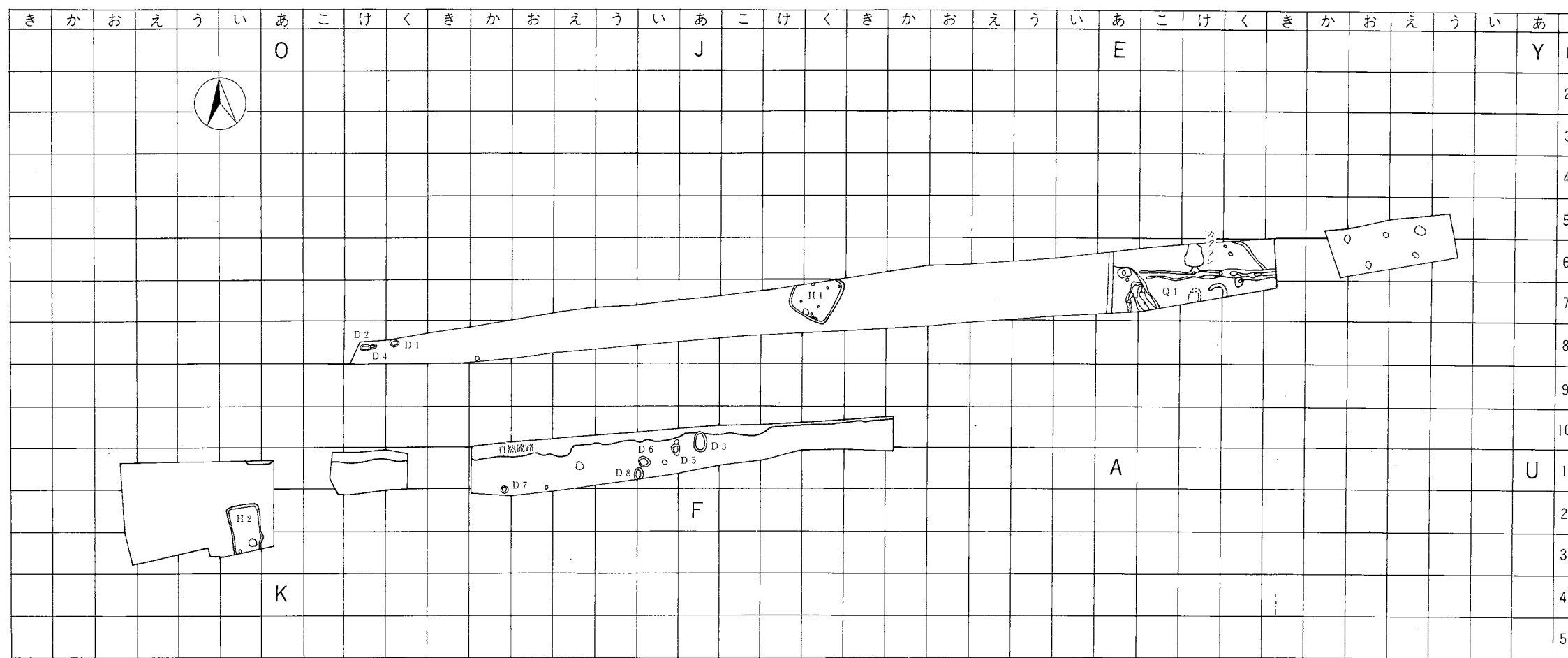
第23図 H 3住居址・カマド実測図



第24図 豊饒堂遺跡Ⅰ区遺構配置図 (1:500)



第25図 豊饒堂遺跡Ⅲ区遺構配置図 (1:500)



第26図 豊饒堂遺跡Ⅱ区遺構配置図 (1:500)

## 第5節 写真図版



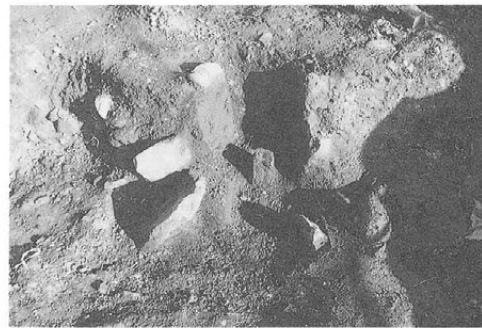
H 1 号住居址 (南より)



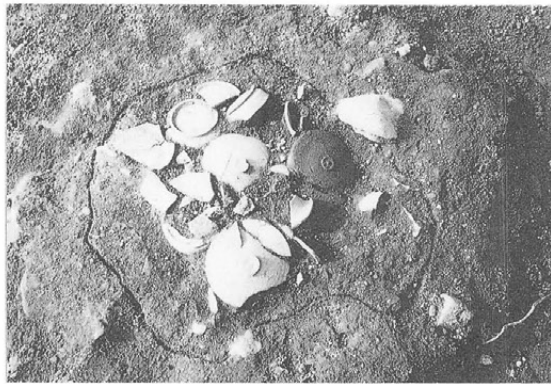
H 3 号住居址 (西より)



H 2 号住居址 (西より)



H 2 号住居址カマド (西より)



0 1 号火葬墓址遺物出土状況 (南より)



0 1 号火葬墓址セクション (南より)



0 1 号火葬墓址完掘 (南より)



II区全景（西より）



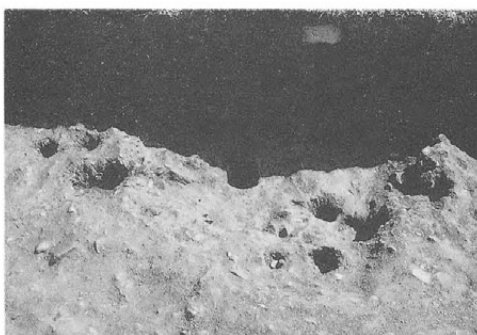
D 1号土坑址（南より）



D 2・4号土坑址（南より）



D 3号土坑址（南より）



T a 1号竖穴状遺構（北より）

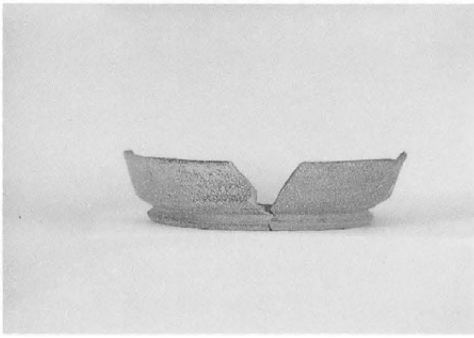


Q 1号特殊遺構（北より）



Q 1号特殊遺構遺物出土状況（南より）





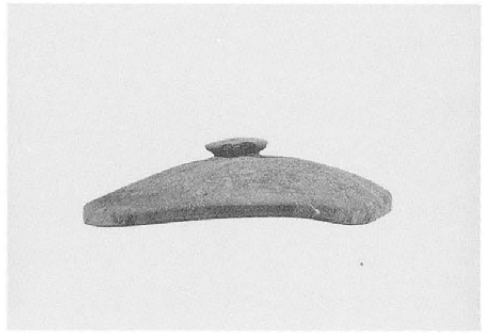
01号火葬墓址第10图1



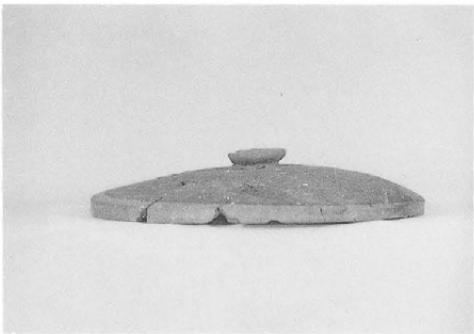
01号火葬墓址第10图2



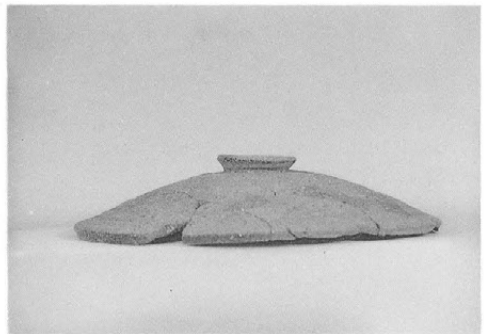
01号火葬墓址第10图3



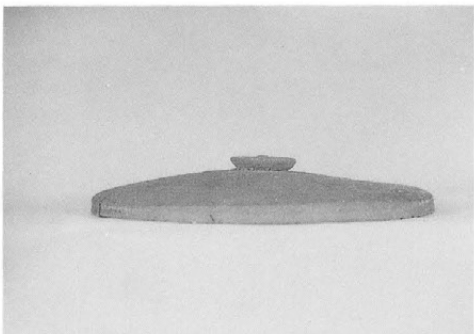
01号火葬墓址第10图7



01号火葬墓址第10图8



01号火葬墓址第10图9



01号火葬墓址第10图10



Q1号特殊遺構石皿

## 第IV章 上町遺跡

### 第1節 調査概要

#### 1 遺跡の立地と概要

中之条遺跡群<sup>うわまち</sup>上町遺跡は標高443~445m前後を測り、御堂川によって形成された扇状地の扇中部にあたる。江戸時代後期に作成された『中之条村御林絵図』(格致学校歴史民俗資料館所蔵)を見ると当遺跡一帯は畑となっていたが、現在は宅地化が進んでいる(第27図)。

平成元年に作成された『坂城町遺跡分布図』によると弥生~平安時代の集落遺跡に位置づけられ、当遺跡南側で隣接する上町遺跡II(平成6年調査)では縄文時代前期の土器が採集され、古墳後期~奈良時代主体の竪穴住居址等が検出された。上町遺跡III(平成7年調査)でも古墳時代後期~平安時代主体の竪穴住居址・掘立柱建物址等が検出されている。西側は産業道路を挟んで寺浦遺跡となり、今回の調査でも古墳後期~平安時代の竪穴住居址・掘立柱建物址等が検出されており、古代坂城郷を考える上で重要な位置を占める遺跡である。

調査区の調査面積及び検出された遺構の概要は以下のとおりである。

調査面積 I区-155㎡。II区-1,324㎡。III区-319㎡。計1,798㎡。

遺構 竪穴住居址-13棟(古墳後期2、奈良・平安11)。掘立柱建物址-2棟(古墳後期~平安2)。土坑-22基。ピット-54基。



第27図 上町遺跡位置図(1:2500)

## 2 基本層序

上町遺跡の基本層序は第28図に示したとおりである。

I a 層攪乱層

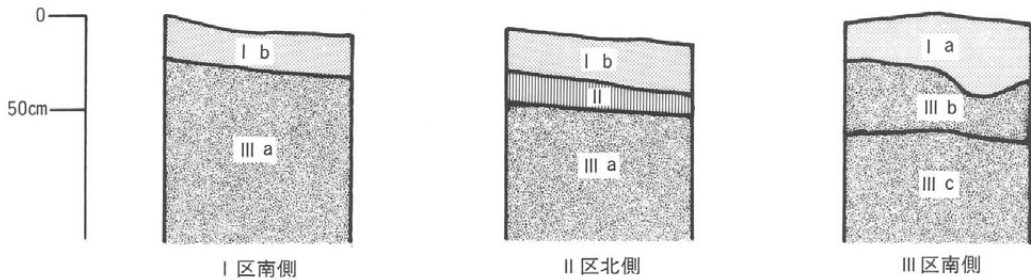
I b 層耕作土

II 層暗褐色土 (10YR 3/4)

III a 層明黄褐色土 (10YR 6/6) I・II区遺構確認面。直径1～5mm位の礫を多量に含む。

III b 層黄褐色砂質土 (10YR 5/8) III区遺構確認面。自然流路の覆土。

III c 層黄褐色土 (10YR 5/6) 礫ほとんどなし。



第28図 上町遺跡基本層序模式図

## 3 調査日誌

- 平成6年4月7日(木) I・III区の表土除去。  
 8日(金) 表土除去終了。  
 12日(火) プレハブ設置。  
 13日(水) 開始式を行い、I・III区調査に入る。
- 5月13日(金) II区表土除去始める。  
 17日(火) H1・4住の下層にH6住が切り合っていることが判明し掘り下げる。  
 19日(木) I区調査終了。  
 20日(金) I区調査区埋め立て。  
 II区調査始める。
- 6月24日(金) 空中写真撮影。  
 7月6日(水) II区調査終了。



表土除去作業



レベル実測

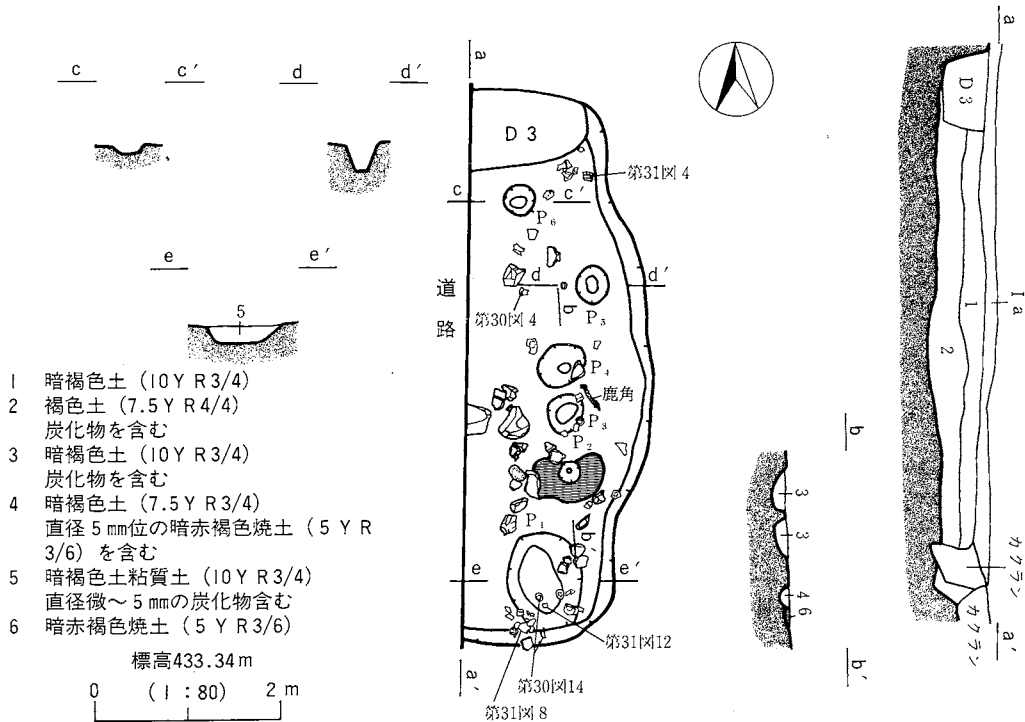
## 第2節 Ⅰ区の遺構と遺物

### 1 竪穴住居址

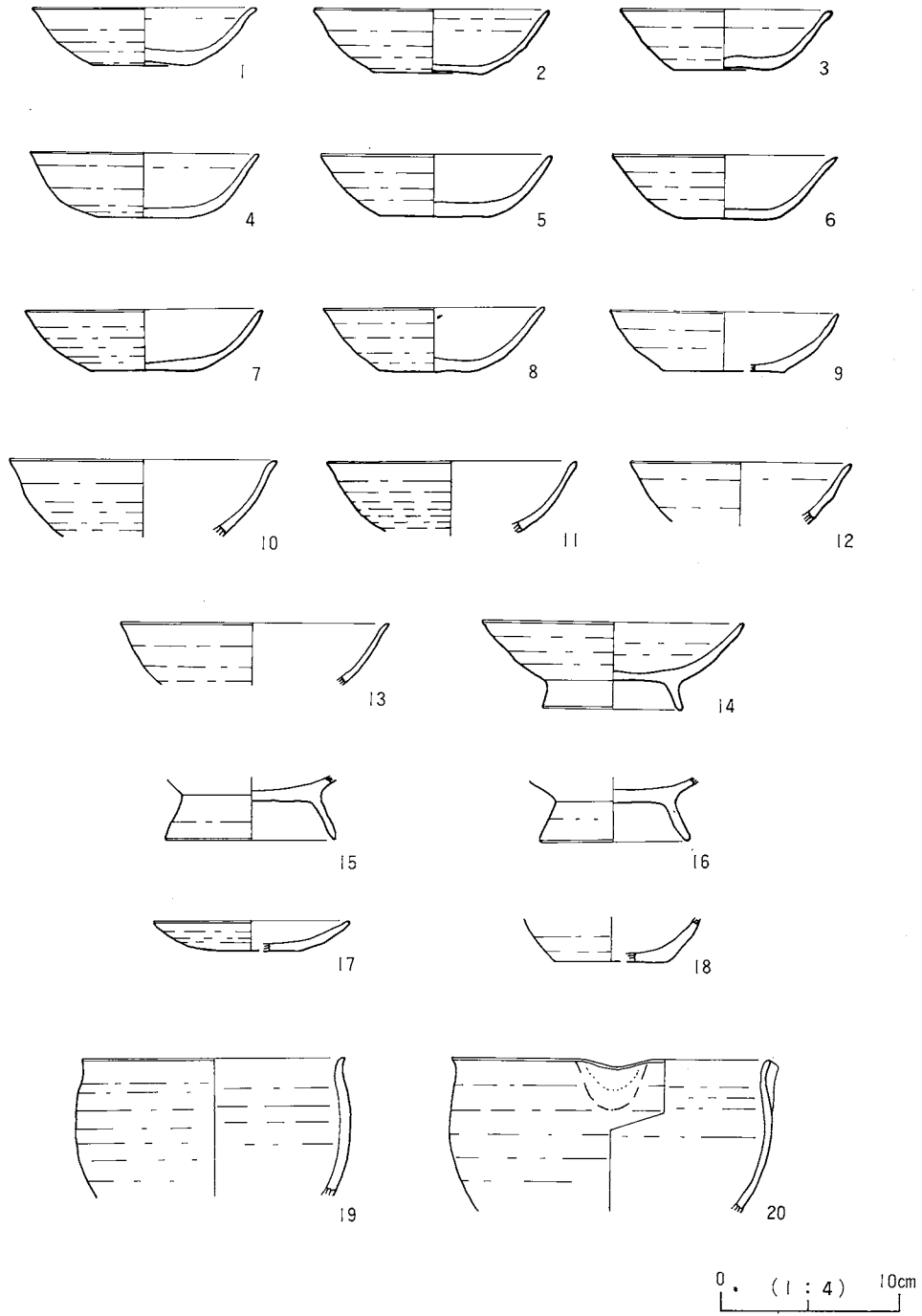
#### 1) H Ⅰ号住居址 (第29図)

検出位置—XⅧOい2・い3グリッド。

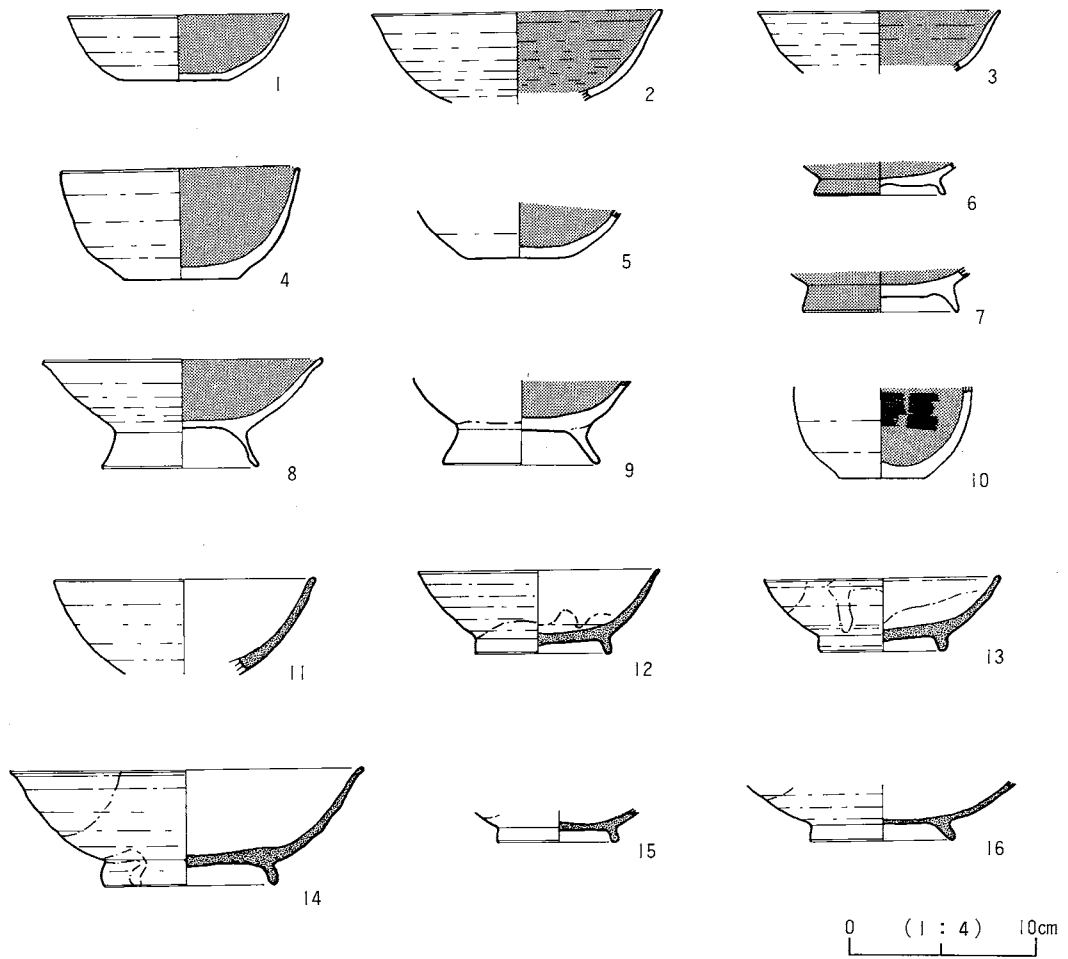
H 4・6号住居址を切り構築。北壁はD 3号土坑址によって切られる。西壁と南北壁の一部が道路となるため、全容は把握できないが隅丸長方形を呈すると思われる。東壁長は5.1mで、南北軸はN-90°-Wを指す。壁残高は11~15cmを測る。床面は軟弱である。ピットは4基検出され、このうちP<sub>1</sub>は貯蔵穴と思われ、覆土中から土師器・灰釉陶器が出土している。カマドは遺存状態が悪く、火床面のみの検出で、付近には構築石材が散在していた。遺物は土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器片がP<sub>1</sub>付近に集中して出土している。検出中住居址中央部の床面で鹿角が検出された。付近には石臼片・中世陶器片も出土していることから、中世の遺構が切り合っていた可能性も考えられるが、掘り込みは確認できなかった。鹿角の用途は不明である。遺物は土師器が主体で、須恵器は小片で甕が若干出土したのみである。図示した土師器坏(第30図1~13)は底部は回転糸切りの調整である。椀(第30図14)はロクロ調整で高台を付する。盤(第30図15・16)は足高高台を有する。皿(第30図17)は底部付近をへう削り?によって調整している。片口鉢(第30図20)



第29図 H Ⅰ号住居址実測図



第30图 H I号住居址出土遗物实测图



第31図 H I号住居址出土遺物実測図

はロクロによる調整で、貯蔵具としては甕（第30図18・19）がある。

図示した黒色土器は内面黒色処理の施された坏（第31図1～5）・椀（第31図6～9）・小型甕（第31図10）である。第31図4の坏には内面に黒色の炭化物が付着する。第31図6・7の椀は内外面黒色処理が施されている。第31図10は焼土址内から出土した甕で底部は糸切りとへら削りによって調整されている。

灰釉陶器では椀が出土しているが完形品はない。図示した椀（第31図11～16）は焼性も良好で漬け掛けで施釉されている。

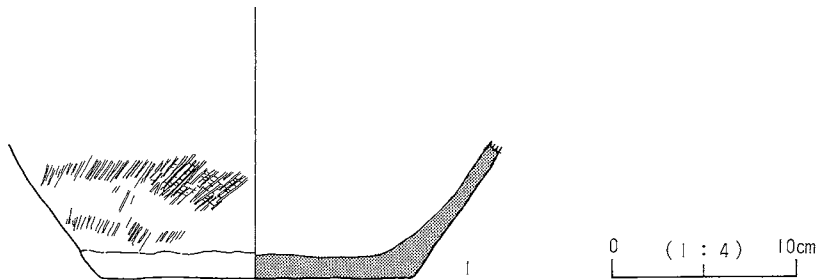
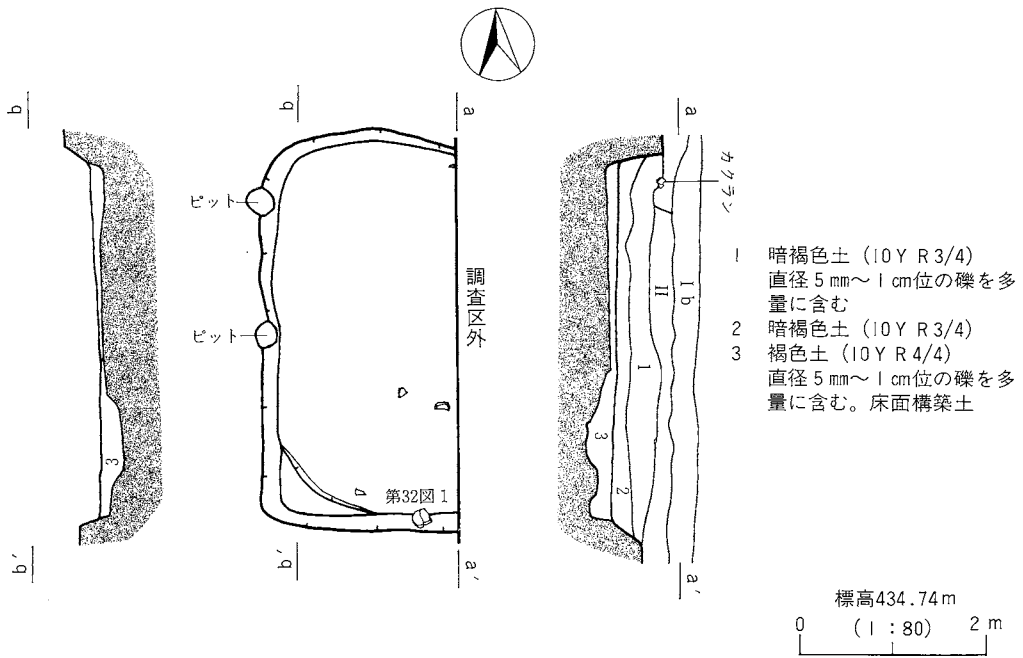
時期は出土遺物から平安時代（9世紀後半～10世紀前半）に位置づけられるが、土師器（皿・盤）・黒色土器・灰釉陶器に時期の下がるものがあり、尚検討が必要である。

2) H 2 号住居址 (第32図)

検出位置—VIIJこ2・こ3グリッド。

西壁を15・16号ピットに切られる。東壁と南北壁の一部が調査区外になるため、全容は把握できないが隅丸長方形を呈すると思われる。西壁長は3.62mで、壁残高は20~28cmを測る。柱穴は検出されなかった。遺物は覆土・床面から土師器・須恵器が少量出土している。掘方は北側は比較的平坦だが、南側をかなり凹凸に掘り込んで床を構築している。

図示したのは須恵器甕 (第32図1) である。体部外面を叩き調整している。1層から出土しており住居廃絶後に破棄されたものと思われる。時期は出土遺物から平安時代 (9世紀前半) に位置づけられる。



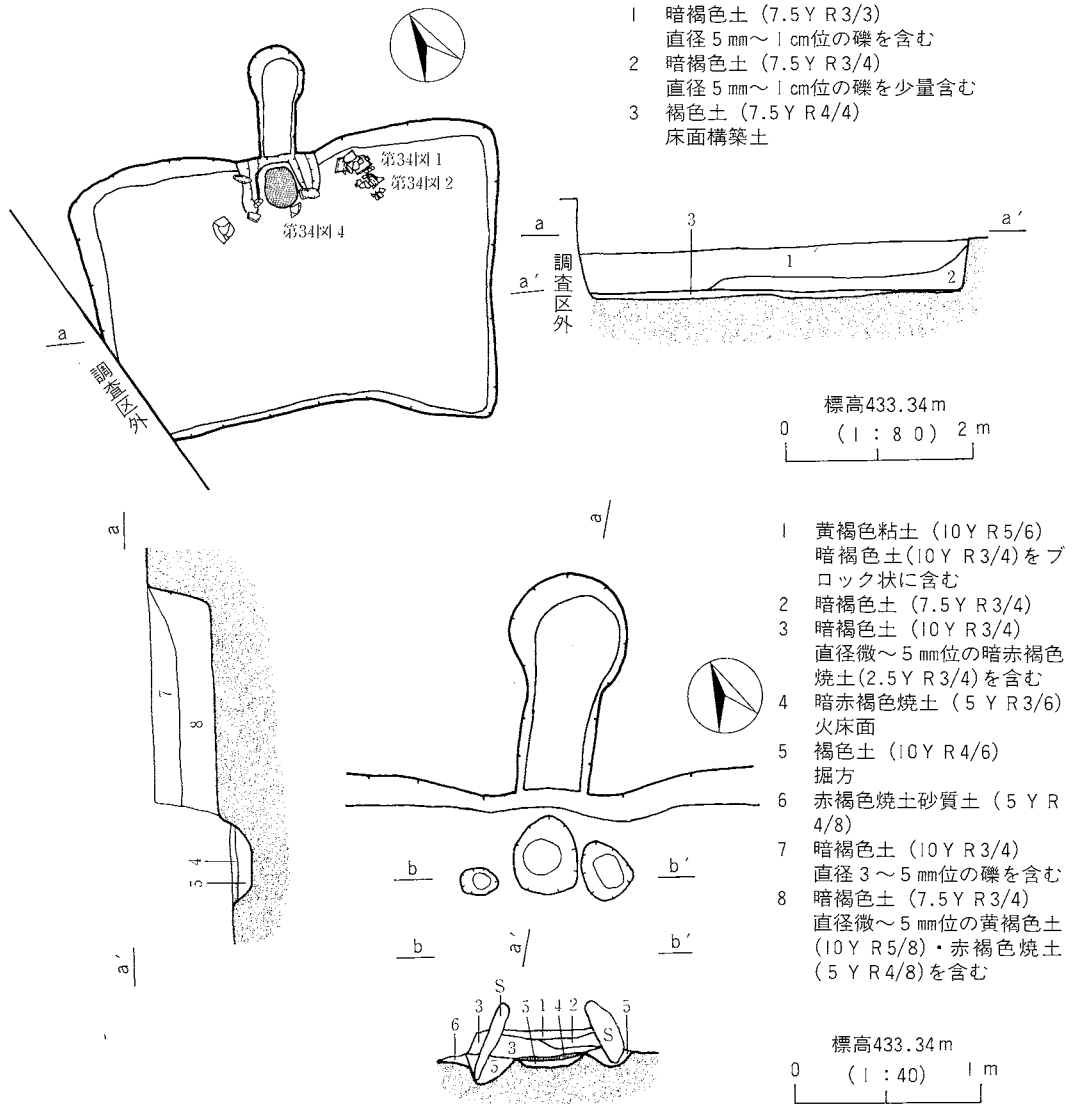
第32図 H 2 号住居址・出土遺物実測図



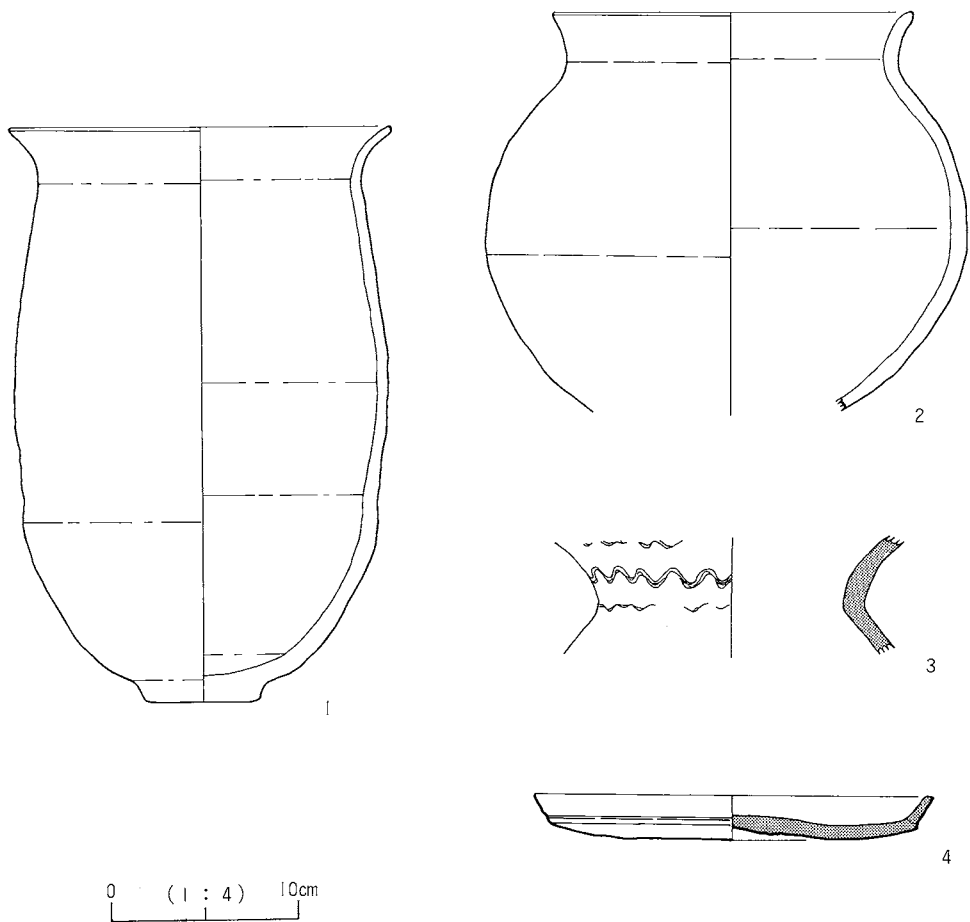
3) H 3 号住居址 (第33図)

検出位置—VIIIあ6・7、い6・7グリッド。

H 5 号住居址を切り構築。南西コーナーの一部が道路のため、全容は確認できなかったが長軸4.4m隅丸長方形を呈すると思われる。北壁長は4.16m、東壁長は2.88mで、カマドを軸とした南北主軸はN-26°-Eを指す。壁残高は39~55cmを測る。床は全面貼床だがカマド周辺部以外は軟弱である。カマドは北壁中央部に位置し、両袖部が残存していた。煙道部は比較的長く張り出す形状で、袖部は河原石と粘土によって構築されていた。遺物はカマドの右袖部付近の床面には土師器甕片が多量に出土した。煙道部覆土中にも土師器甕片が細片で出土している。



第33図 H 3 号住居址・カマド実測図



第34図 H 3号住居址出土遺物実測図

図示した土師器長胴甕・胴部球形胴の甕（第34図1・2）は外面タテケズリである。須恵器甕（第34図3）・盤状の皿（第34図4）は覆土中から出土した。

出土遺物より古墳後期末～奈良時代初頭（7世紀末～8世紀前半）と考えられる。

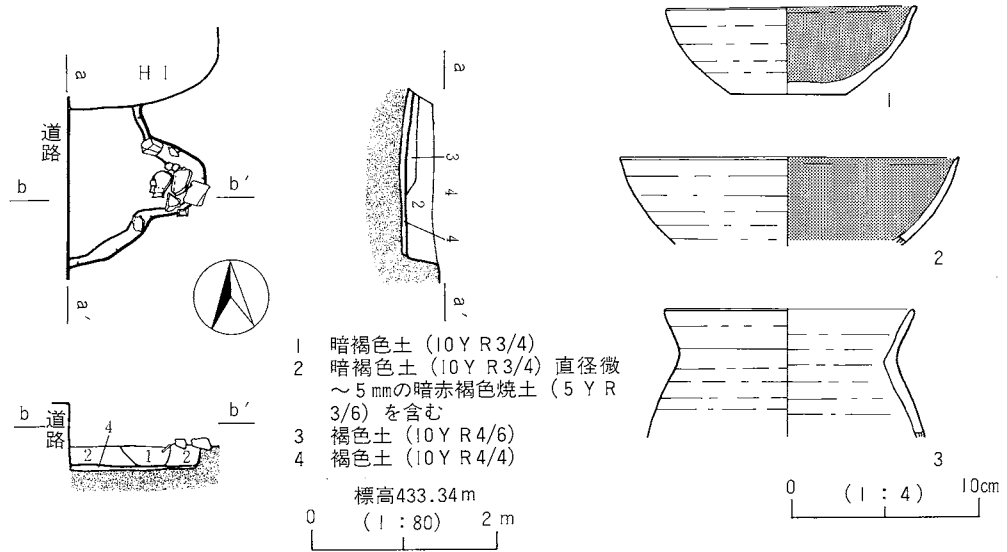
#### 4）H 4号住居址（第35図）

検出位置－XVII0い3グリッド。

H 6号住居址を切り構築。H 1号住居址に切られる。西壁と南北壁の大半が道路のため、全容は把握できなかったが隅丸長方形を呈すると思われる。壁残高は10～23cmを測る。床は平坦であるが柱穴は検出されなかった。南東壁コーナーに自然石・土器片が集中していたため、カマドと考え断面観察を行ったが、袖石、焼土址は検出されなかったため、カマドと断定することはできなかった。遺物は土師器坏、甕が主体で、覆土上層から出土し、床面からの出土はなかった。住居廃絶後に破棄されたと思われる。

図示したのは黒色土器（第35図1・2）の坏で、第35図1は底部へう削りによる調整である。甕

(第35図3)はロクロによる調整の小型甕である。出土遺物から時期は平安時代(9世紀)に位置づけられる

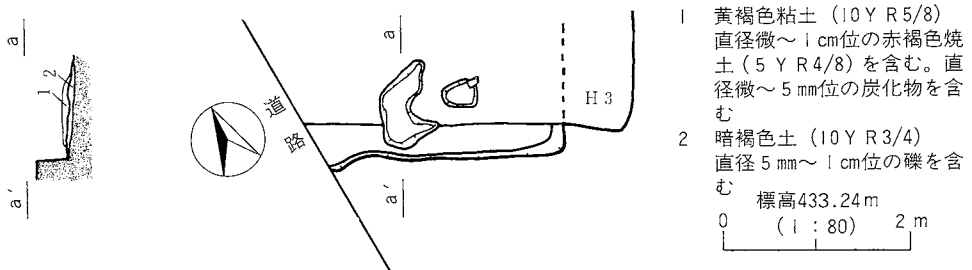


第35図 H4号住居址・出土遺物実測図

5) H5号住居址 (第36図)

検出位置-XVIIIい7グリッド。

H3号住居址によって南壁付近以外は破壊されているため全容は把握できない。壁残高は36~44.5cmを測る。床面から焼土を含む粘土痕が確認されたが、カマドに関係するか不明である。遺物は覆土中から黒色土器坏が少量出土しているが、図示できるものはない。時期はH3号住居址との切り合い関係から古墳時代後期(7世紀後半)に位置づけたい。

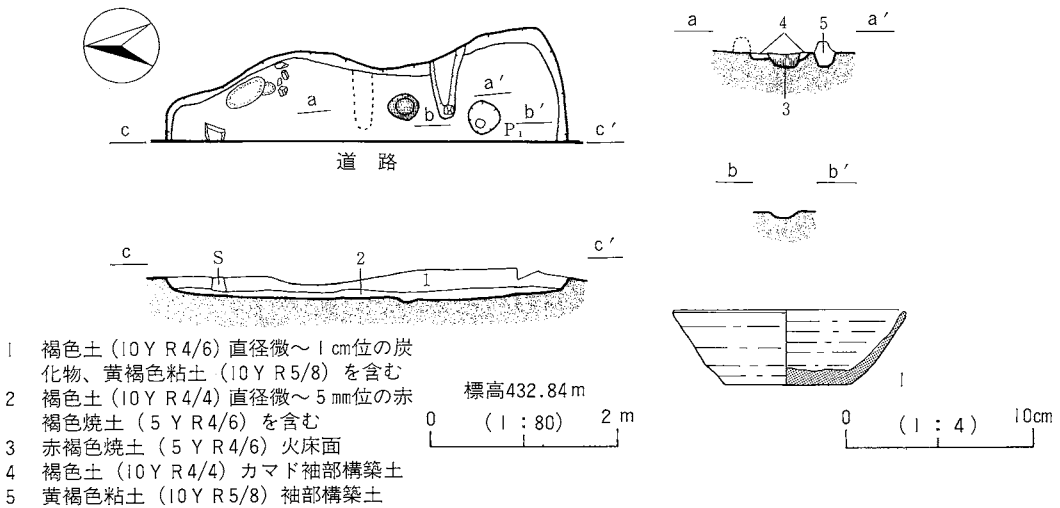


第36図 H5号住居址実測図

6) H 6 号住居址 (第37図)

検出位置—VIIIOい2・3グリッド。

H 1 号住居址に上層を切られる。西壁と南北壁の一部が道路となり、全容は把握できないが隅丸長方形を呈すると思われる。東壁長は3,84mで、カマドを主軸とした南北主軸はN-96°-Eを指す。壁残高は11~23cmを測る。床面からピット1基検出された。北東壁コーナー付近には直径10~50cm程の河原石が床面から検出された。カマドは東壁中央に位置し、袖部を自然石と粘土によって構築されている。遺物は土師器杯・須恵器杯、蓋片が散在して床から出土している。図示したのは須恵器(第37図1)の杯は底部は回転糸きりで調整されている。出土遺物から時期は平安時代(8世紀末~9世紀前期)に位置づけられる。



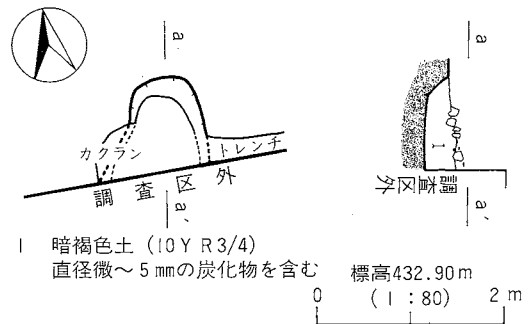
第37図 H 6 号住居址出土遺物実測図

7) H 7 号住居址 (第38図)

検出位置—VIIIOあ4グリッド。

西側の一部が攪乱によって破壊され、南側も調査区外になるため、全容は不明である。床は平坦である。覆土上層から獣骨と思われる小骨が出土している。遺物は須恵器甕片が細片で多量に出土したが、接合できる甕はなかった。

時期は平安時代前期に位置づけたい。



第38図 H 7 号住居址実測図

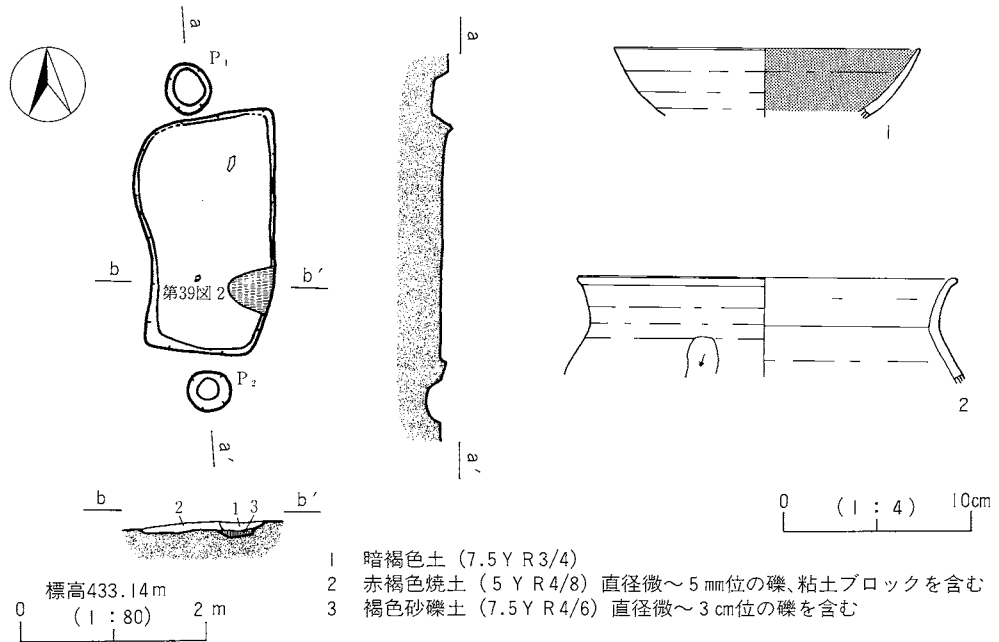
## 8) H 8 号住居址 (第39図)

検出位置—VIIIOあ3グリッド。

長軸2.52m、短軸1.3mの隅丸長方形を呈する。北壁長は1.22m、東壁長は2.48m、南壁長は92cm、西壁長は2.1mで、南北主軸はN-90°-Eを指す。壁残高は0.5~9cmを測る。床面は軟弱である。柱穴はP<sub>1</sub>、<sub>2</sub>が伴うと思われる。カマドは遺存状態が悪く、火床面のみの検出であった。遺物は土師器・黒色土器が若干出土している。

図示できたのは黒色土器杯(第39図1)、土師器甕(第39図2)の2点である。第39図1は内面黒色処理が施されている。

時期は出土遺物から平安時代(9世紀)に位置づけたい。



第39図 H 8 住居址・出土遺物実測図

## 2 掘立柱建物址

### 1) F 1 号掘立柱建物址 (第40図)

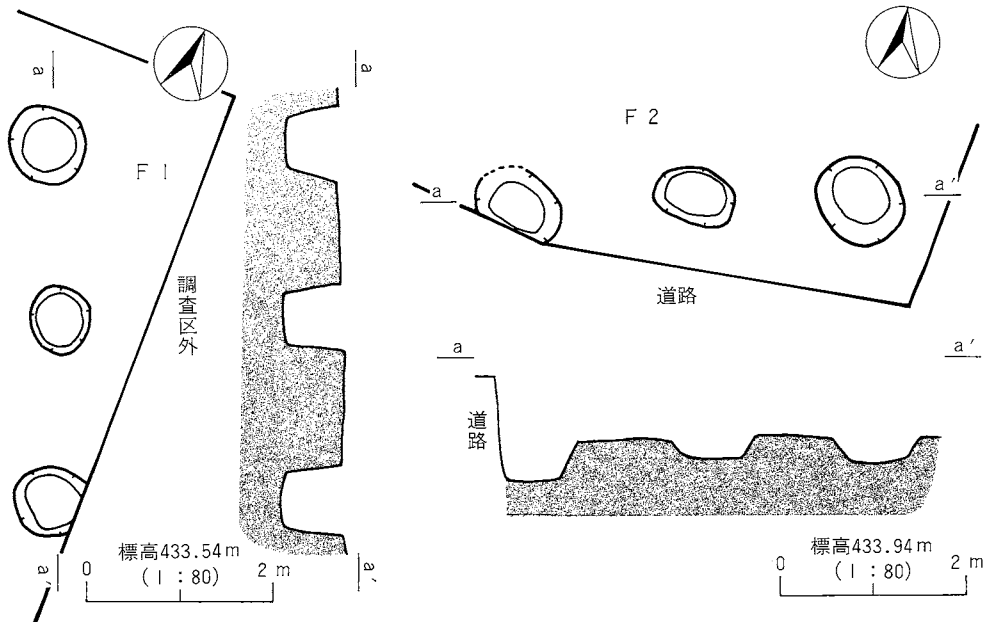
検出位置—VIIINあ6、Iこ6・こ7グリッド。

北壁と東壁が調査区外となるため、全容は不明だが、建物主軸はN-20°-Wを指す。各柱穴は平均37×38cmの円形を呈し、深さは51~63cmを測る。P<sub>3</sub>上層から灰釉陶器杯・土師器高坏片が出土している。時期は古墳時代後期~平安時代初頭に位置づけたい。

## 2) F 2号掘立柱建物址(第40図)

検出位置—XVINあ9・い9グリッド。

南壁・東壁が道路のため、全容は不明だが、建物主軸はN-22°—Eを指す。各柱穴は平均45×37cmの楕円形を呈し、深さは18~39cmを測る。遺物は皆無であった。時期は確認面から古墳時代後期~平安時代初頭に位置づけたい。



第40図 F 1・F 2号掘立柱建物址実測図

## 3 土坑址

### 1) D 1号土坑址(第41図)

検出位置—XVINあ9グリッド。

長軸1.52m、短軸76cmの楕円形。深さ30.5cm。

### 2) D 2号土坑址(第41図)

検出位置—VIIInい9グリッド。

H 3号住居址を切る。長軸1.3m、短軸1.12mの楕円形を呈し、深さは48cmである。遺物は底面から須恵器坏(第41図1)、土師器甕(第41図2)が出土した。第41図1は底部へラ削り+木調整で、第41図2は外面をへラ削り、横方向にハケ調整が施されている。

### 3) D 3号土坑址(第41図)

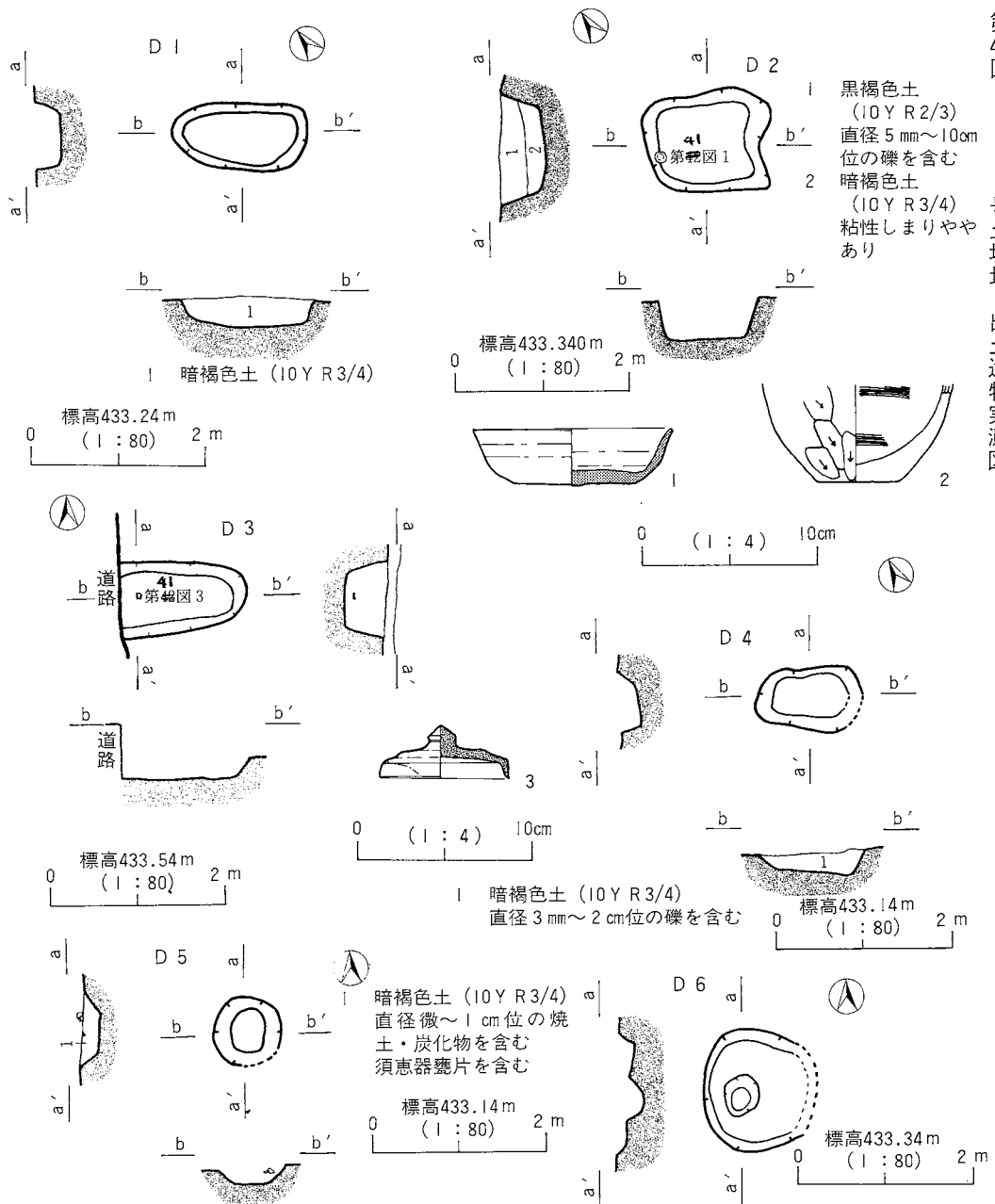
検出位置—XVIIIOい2グリッド。

H 1号住居址を切る。短軸80cmの楕円形。深さ25.5cm。覆土中から灰釉陶器薬壺の蓋(第41図3)・須恵器四耳壺片が出土した。蓋は焼成が良好で外面を全面ハケ塗りで施釉されている。時期は切り合い関係から平安時代(9世紀末~10世紀初頭)に位置づけられる。

### 4) D 4号土坑址(第41図)

検出位置—XVIIIOあ3・あ4グリッド。

長軸1.10m、短軸70cmの楕円形。深さ23.5cm。



5) D 5号土坑址 (第41図)

検出位置-Jこ4・Oあ4グリッド。  
長軸78cm、短軸76cmの円形。深さ21cm。

6) D 6号土坑址 (第41図)

検出位置-XVIIJこ2グリッド。  
長軸1.4m、短軸1mの楕円形。深さ34.5cm。

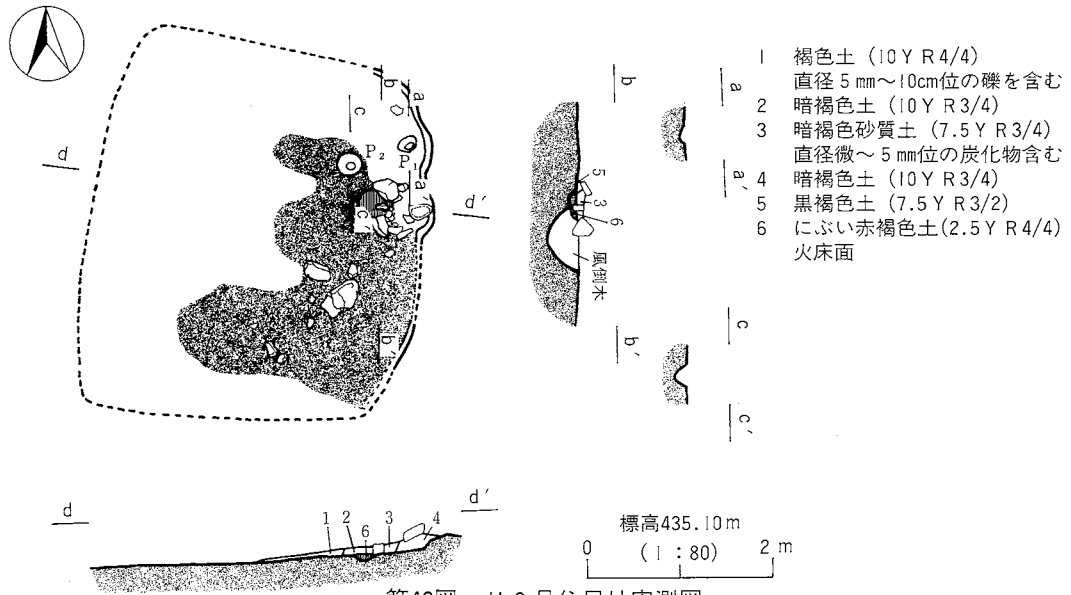
## 第3節 II区の遺構と遺物

### 1 竪穴住居址

#### 1) H9号住居址 (第42図)

検出位置—VIII き8・き9、く8・く9グリッド。

東壁側は風倒木を切り構築。カマド周辺部しか検出できなかったが、隅丸長方形を呈すると思われる。カマドの主軸方位はN-5°-Eを指す。壁残高は3~9cmを測る。貼床はカマド周辺部で堅固であった。ピットは2基検出されたが支柱穴は確認できなかった。カマドは東壁中央部に位置し、遺存状態が悪く袖石と思われる自然石と火床面のみ検出した。遺物は土師器・黒色土器がカマド周辺部から細片で出土している。時期は平安時代(9世紀)に位置づけられる。



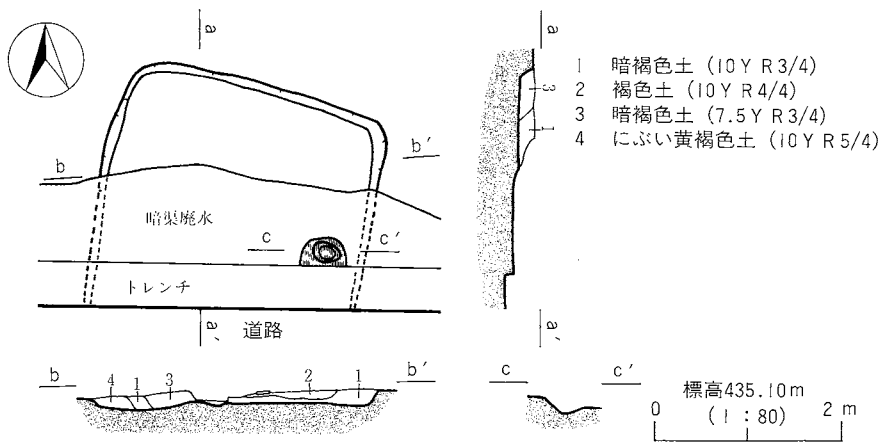
第42図 H9号住居址実測図

#### 2) H10号住居址 (第43図)

検出位置—VIII か9グリッド。

中央部から南側を暗渠排水に切られる。南壁と東西壁の一部が道路にあたるため、全容は確認できなかったが、隅丸長方形を呈すると思われる。北壁長は2.46m、カマドの主軸方位はN-10°-Eを指し、壁残高は11~17cmを測る。床面は軟弱ですぐにIII層になってしまう。カマドは東壁中央部に位置すると思われるが、暗渠排水に上層を破壊され遺存状態が悪く、火床面のみを検出であった。遺物は北西コーナー中央部から、土師器環・須恵器甕・灰釉陶器坏が細片で出土した。時期は出土遺物から平安時代(9世紀後半)に位置づけられる。



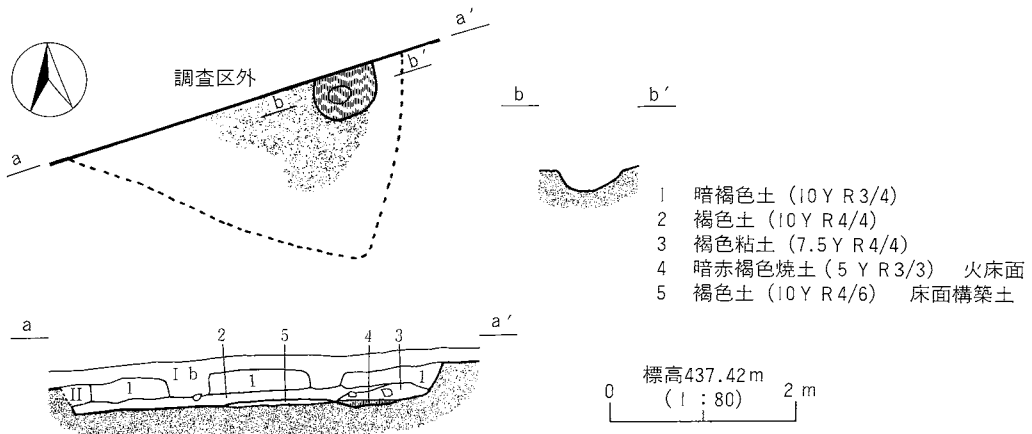


第43図 H10号住居址実測図

### 3) H11号住居址 (第44図)

検出位置-XVIIか9グリッド。II層上層で検出。

I b層が住居址内まで掘り込まれているため、プランは不明察である。北壁と東西壁の一部が調査区外となる。カマドを軸とした主軸方位は南北主軸は $N-10^{\circ}-E$ を指すと思われる。壁残高は11~17cmを測る。貼床が検出されたのはカマド周辺部のみであった。カマドは東壁に位置すると思われるが遺存状態が悪く、火床面と袖部の一部が断面で確認された。遺物は土師器坏・甕片が細片で出土している。時期は平安時代に位置づけたい。

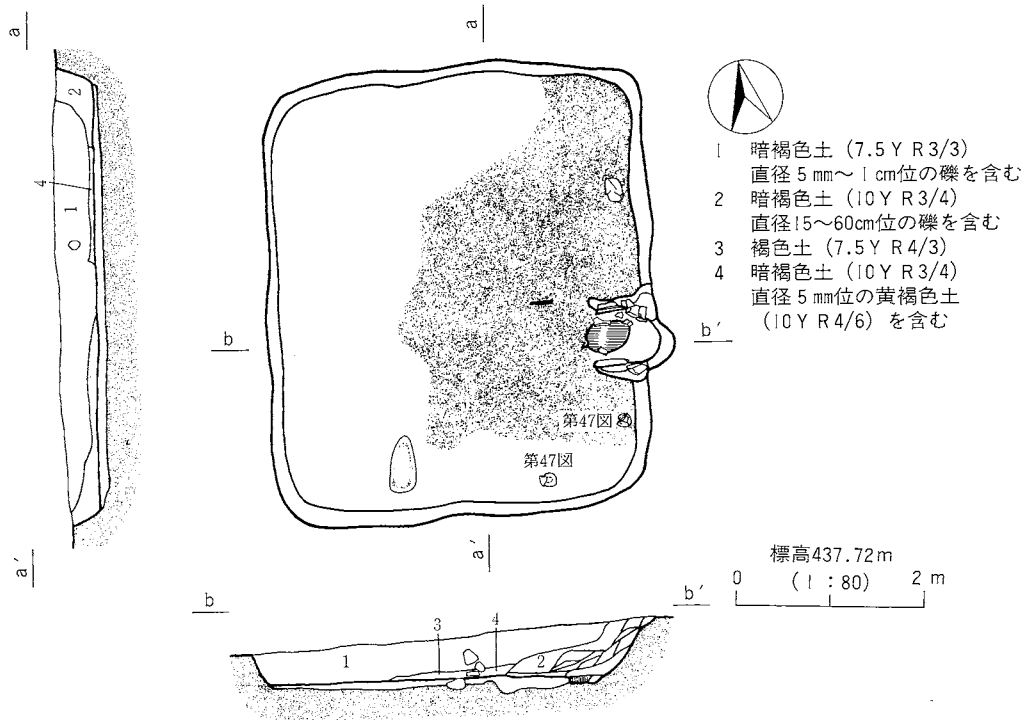


第44図 H11号住居址実測図

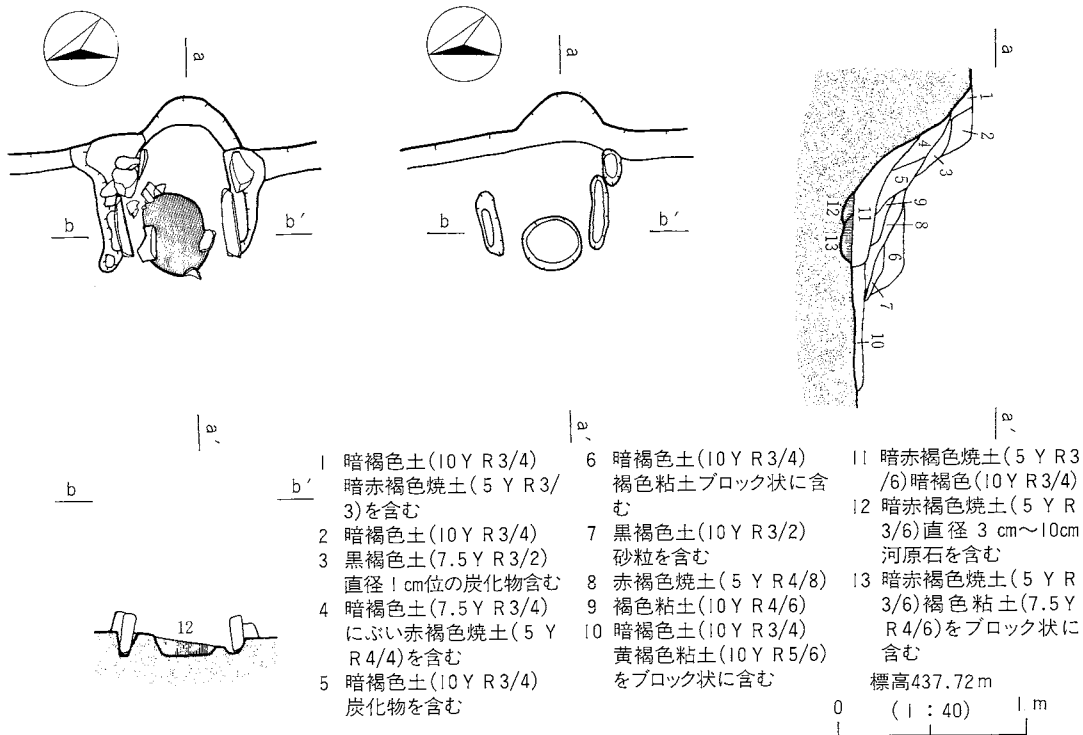
### 4) H12号住居址 (第45図)

検出位置-XVIIお5・お6、か5・か6グリッド。

D20号土坑址を切り構築。長軸4.6m、短軸3.84mの隅丸長方形を呈する。北壁長は3.5m、東壁長は4.28m、南壁長は3.28m、西壁長は4.22mで、カマドを軸とした南北主軸は $N-101^{\circ}-E$ を

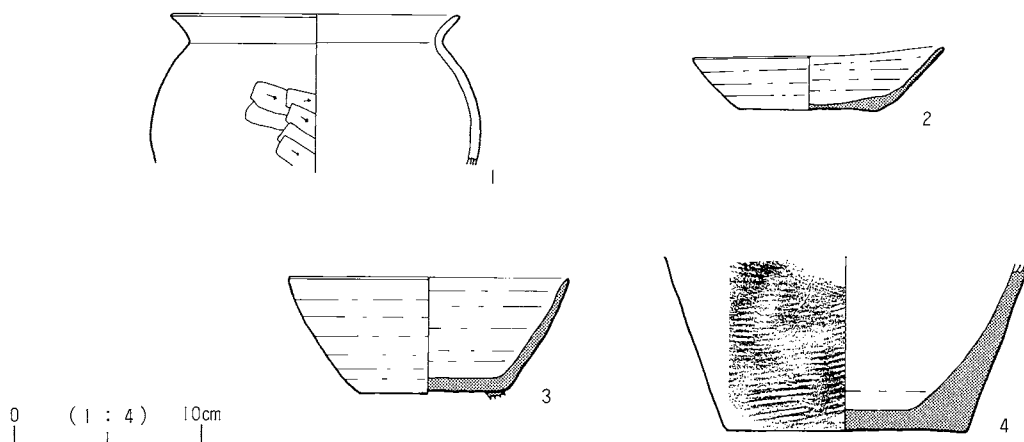


- 1 暗褐色土 (7.5 Y R 3/3)  
直径 5 mm ~ 1 cm 位の礫を含む
- 2 暗褐色土 (10 Y R 3/4)  
直径 15 ~ 60 cm 位の礫を含む
- 3 褐色土 (7.5 Y R 4/3)
- 4 暗褐色土 (10 Y R 3/4)  
直径 5 mm 位の黄褐色土  
(10 Y R 4/6) を含む



- 1 暗褐色土 (10 Y R 3/4)
- 2 暗褐色土 (10 Y R 3/4)
- 3 暗褐色土 (10 Y R 3/4)
- 4 暗褐色土 (7.5 Y R 3/4)  
直径 1 cm 位の炭化物を含む
- 5 暗褐色土 (10 Y R 3/4)  
炭化物を含む
- 6 暗褐色土 (10 Y R 3/4)  
褐色粘土ブロック状に含む
- 7 黒褐色土 (10 Y R 3/2)  
砂粒を含む
- 8 赤褐色焼土 (5 Y R 4/8)
- 9 褐色粘土 (10 Y R 4/6)
- 10 暗褐色土 (10 Y R 3/4)  
黄褐色粘土 (10 Y R 5/6)  
をブロック状に含む
- 11 暗赤褐色焼土 (5 Y R 3/6) 暗褐色 (10 Y R 3/4)
- 12 暗赤褐色焼土 (5 Y R 3/6) 直径 3 cm ~ 10 cm  
河原石を含む
- 13 暗赤褐色焼土 (5 Y R 3/6) 褐色粘土 (7.5 Y R 4/6) をブロック状に含む

第45図 H12号住居址実測図



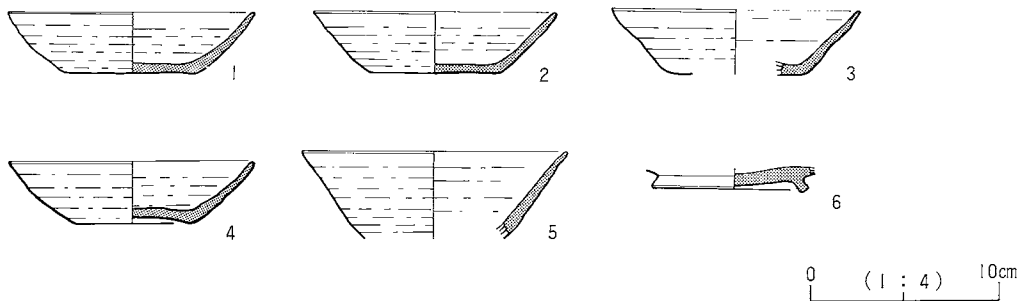
第46図 H12号住居址出土遺物実測図

指す。壁残高は22~45cmを測る。貼床はカマド周辺部から中央部にかけて堅固である。柱穴は検出されなかった。カマドは東壁中央部に位置し、自然石と粘土によって構築されている。遺物は土師器・須恵器・刀子が少量出土した。図示した須恵器の坏（第46図3）は高台が欠損している。須恵器坏（第46図2）は底部回転糸きり須恵器甕（第46図3）土師器甕（第46図1）も出土している。時期は平安時代（9世紀前半）に位置づけられる。

5) H13号住居址（第48図）

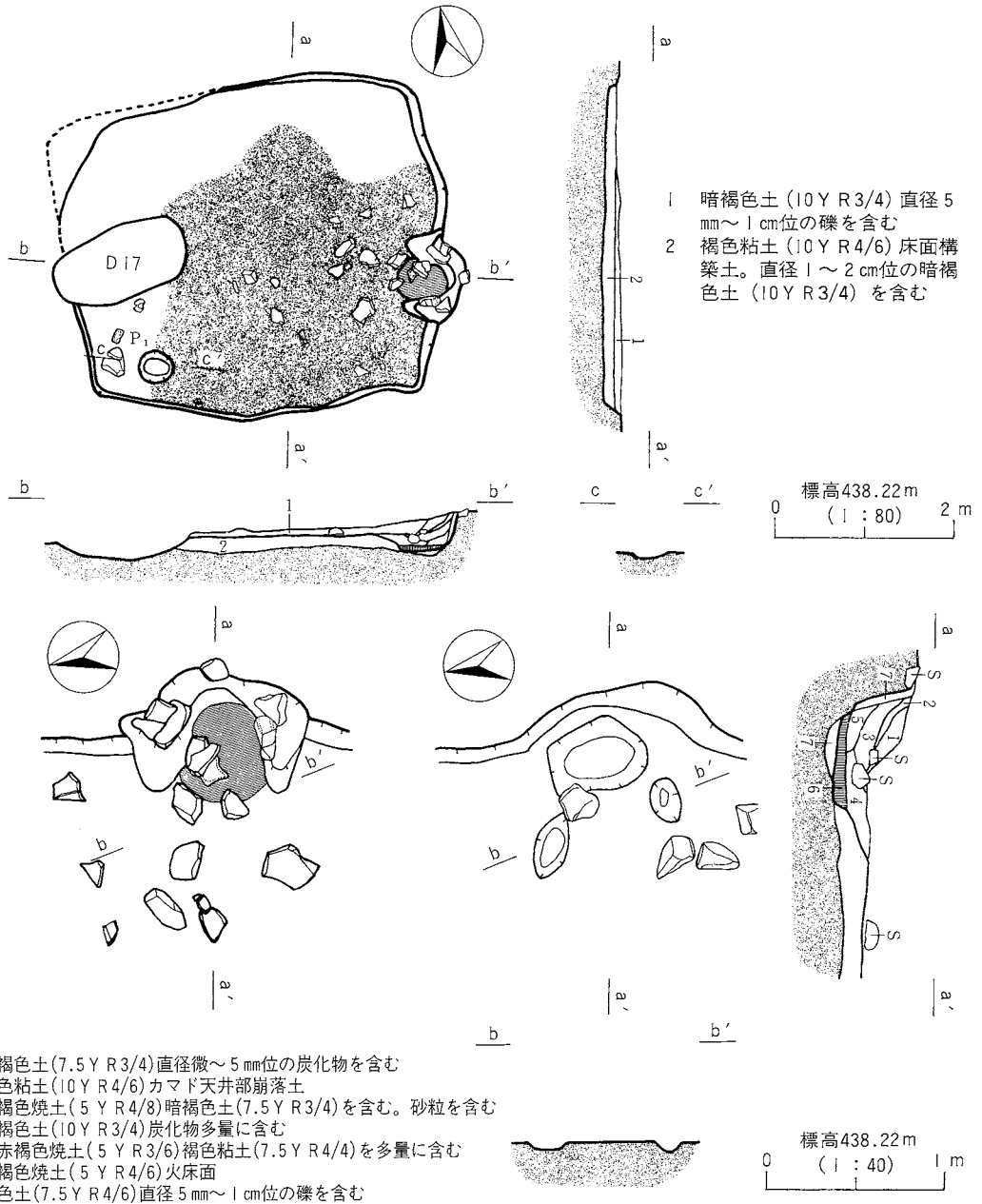
検出位置-XIIDい4・う5グリッド。

西壁をD17号土坑址に切られる。短軸3.7mの隅丸長方形を呈する。東壁長は3.34m、南壁長は3.54mで、カマドを軸とした南北主軸はN-102°-Eを指す。壁残高は5~33cmを測る。貼床はカマド周辺部から南壁周辺部にかけて堅固であった。ピットは1基検出された。カマドは東壁中央



第47図 H13号住居址実測図

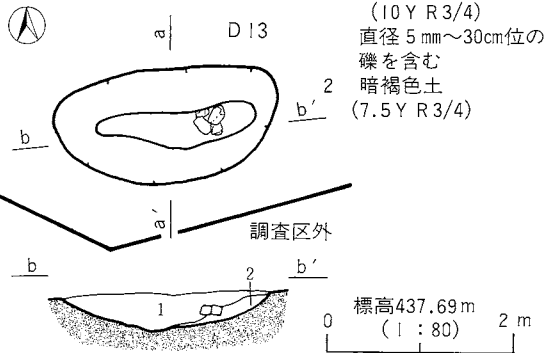
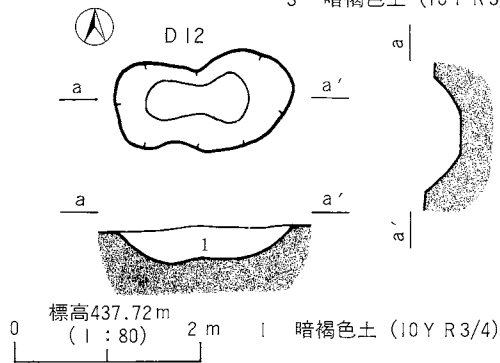
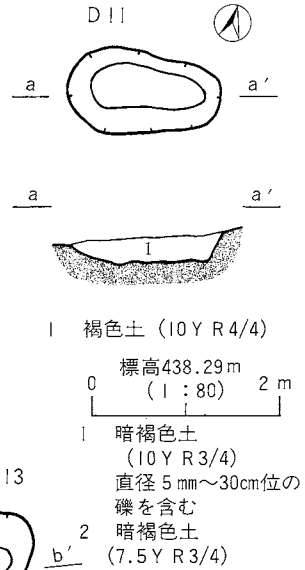
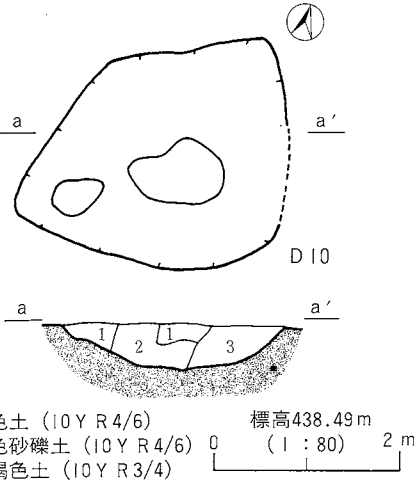
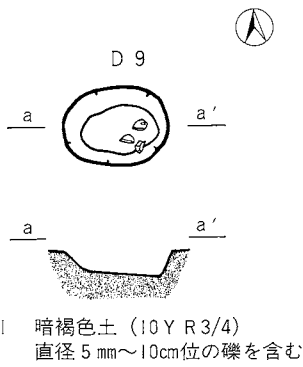
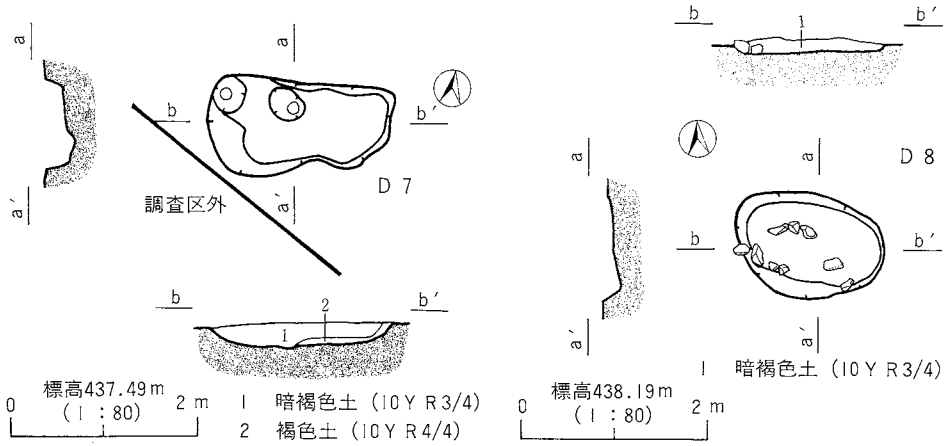
部に位置し、自然石と粘土によって構築されている。遺物は須恵器が主体で出土したが全体的に少量である。図示したのは須恵器の坏(第48図1~6)である。第48図1~5は底部回転糸切りの調整、第48図6は底部へラ切り後高台を付す。時期は平安時代(9世紀前半)に位置づけられる。



第48図 H13号住居址・カマド実測図

## 2 土坑址

第49図  
D7  
S13号土坑址実測図



1) D7号土坑址 (第49図)

検出位置-XIIDう7・8グリッド。  
長軸1.94m、短軸90cmの楕円形。深さ24cm。

3) D9号土坑址 (第49図)

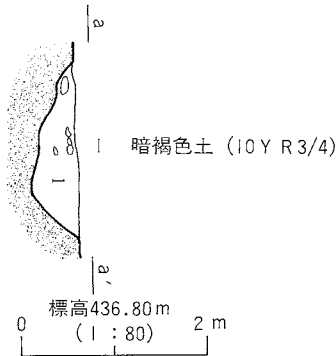
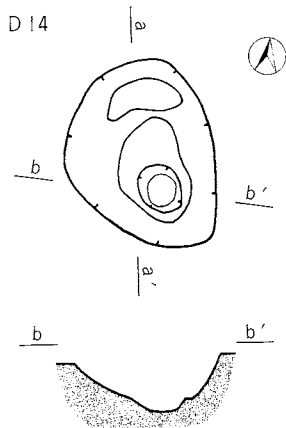
検出位置-XIIDえ5・え6グリッド。  
長軸1.1m、短軸84cmの楕円形。深さ30cm。

2) D8号土坑址 (第49図)

検出位置-XIIXこ5グリッド。  
長軸1.64m、短軸1.14mの楕円形。深さ24cm。

4) D10号土坑址 (第49図)

検出位置-XIIXこ6グリッド。  
長軸3.08m、短軸2.4m不整楕円形。深さ59.5cm。



5) D11号土坑址 (第49図)

検出位置-XVII区6・Dあ6グリッド。  
長軸1.62m、短軸84cmの楕円形。深さ23.5cm。

6) D12号土坑址 (第49図)

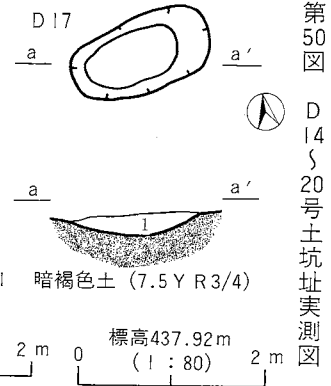
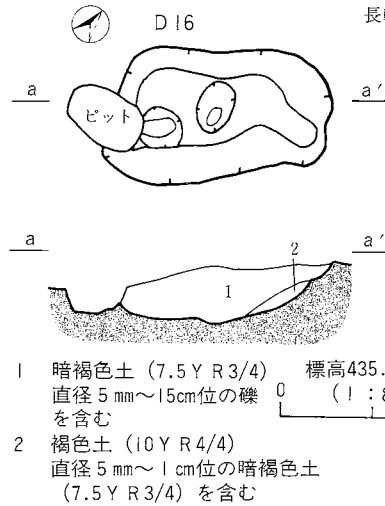
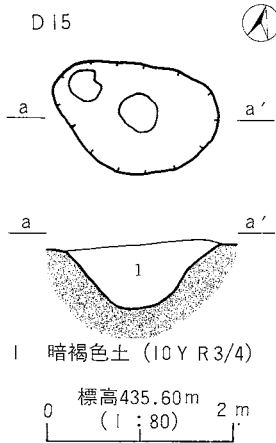
検出位置-XVII区え5・お5グリッド。  
長軸1.9m、短軸92cmの楕円形。深さ43cm。

7) D13号土坑址 (第49図)

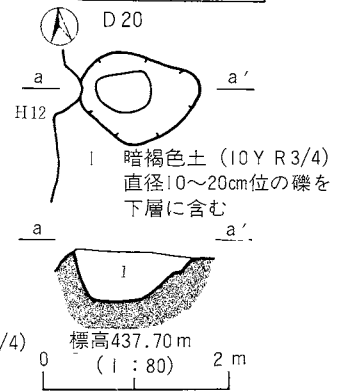
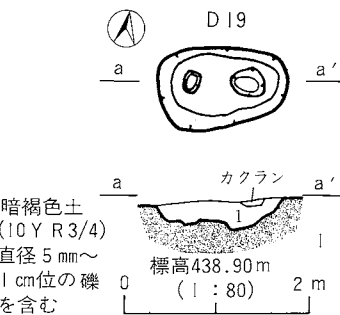
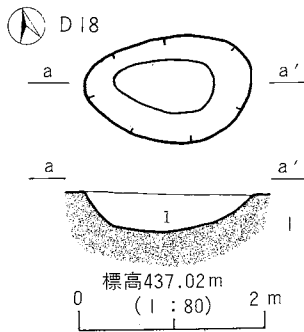
検出位置-XVII区い8グリッド。  
長軸2.32m、短軸1.24mの楕円形。深さ40cm。

8) D14号土坑址 (第50図)

検出位置-XVII区く6・7、け6・7グリッド。  
長軸2.1m、短軸1.52mの楕円形。深さ62cm。



第50図  
D14  
く  
20号土坑址実測図



9) D15号土坑址 (第50図)

検出位置-XVII区う7・え7グリッド。  
長軸1.78m、短軸1.22mの楕円形。深さ76cm。

10) D16号土坑址 (第50図)

検出位置-XVII区お9グリッド。  
長軸2.3m、短軸1.36mの楕円形。深さ68cm。  
41号ビットと切り合う。

11) D17号土坑址 (第50図)

検出位置-XVII区う5グリッド。  
長軸1.52m、短軸80cmの楕円形。深さ25.5cm。

12) D18号土坑址 (第50図)

検出位置-XVII区き5・く5グリッド。  
長軸1.78m、短軸1.12m楕円形。深さ46.5cm。

13) D19号土坑址 (第50図)

検出位置-XVII区こ7グリッド。長軸1.38m、短軸86cmの楕円形。深さ18cm。

14) D 20号土坑址 (第50図)

検出位置-XVII D お6グリッド。

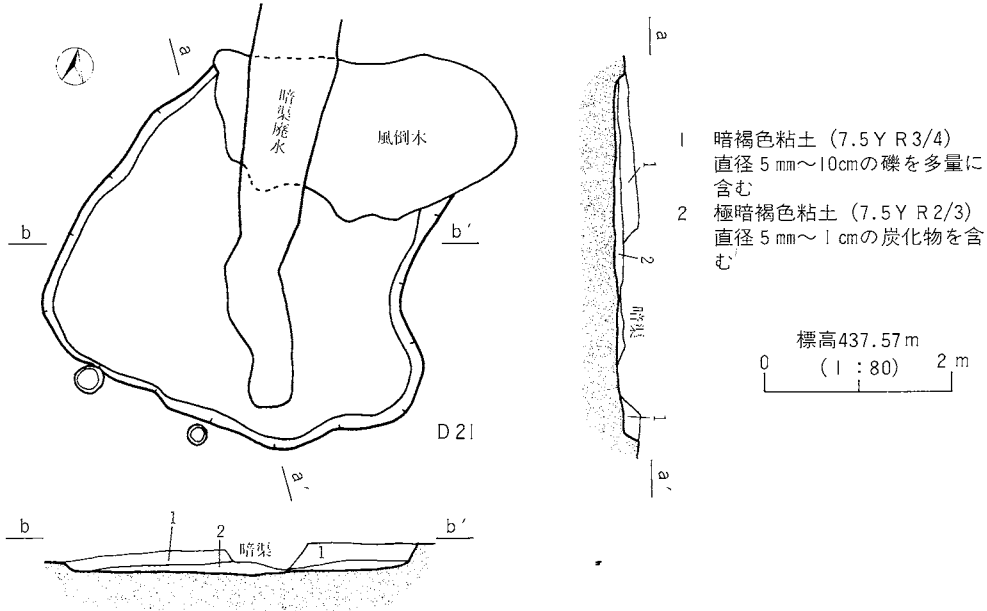
長軸1.26m、短軸96cmの楕円形。深さ62cm。西側立上りをH12号住居址に切られる。

15) D 21号土坑址 (第51図)

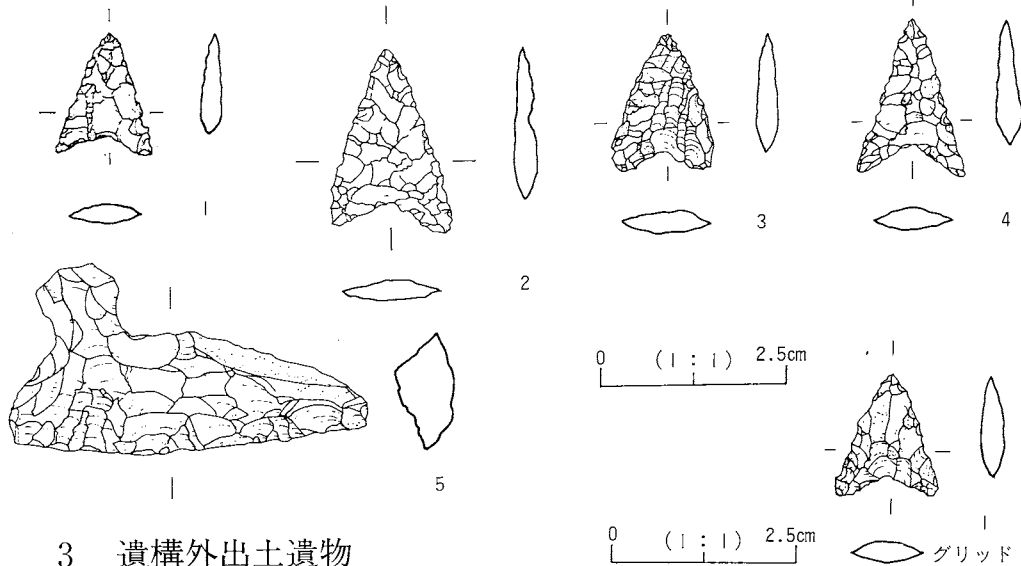
検出位置-XVII D こ6・こ7グリッド。

長軸4m、短軸3.5mの不整楕円形。深さ35cm。北側を風倒木と暗渠排水によって破壊されている。覆土中には前期の縄文土器、石匙、石鏃が多量に細片で出土した。全体的に遺物は西側に集中して出土しており、土器は1固体分の深鉢になると思われるが、軟弱で小片で出土している。図示したのは黒耀石製の石匙(第52図5)と石鏃(第52図1~4)である。

時期は出土遺物から縄文前期に位置づけられる。



第51図 D 21号土坑址・出土遺物実測図



第52図 遺構外出土遺物実測図

3 遺構外出土遺物

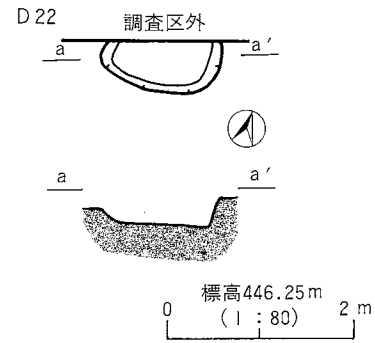
XVII あ9グリッドで黒耀石製の石鏃(第52図1)が出土している。

# 第4節 III区の遺構と遺物

## 1 土坑址

### 1) D22号土坑址 (第53図)

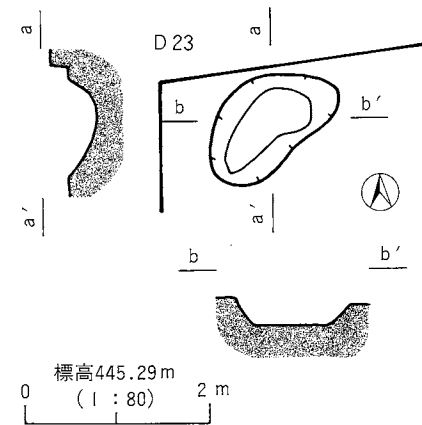
検出位置-XVMう10グリッド  
楕円形と思われる。深さ33.5cm。



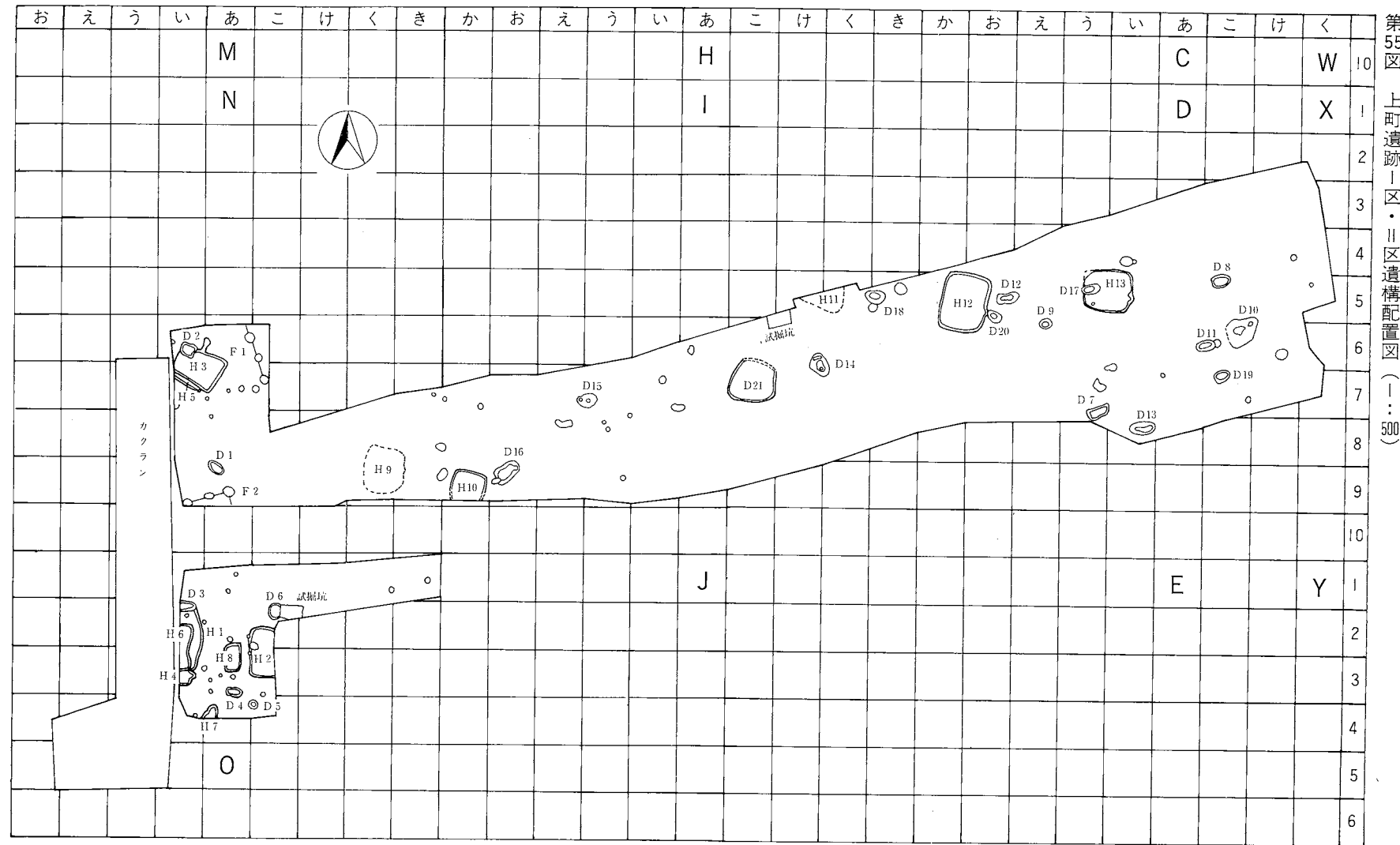
第53図 D22号土坑址実測図

### 2) D23号土坑址 (第54図)

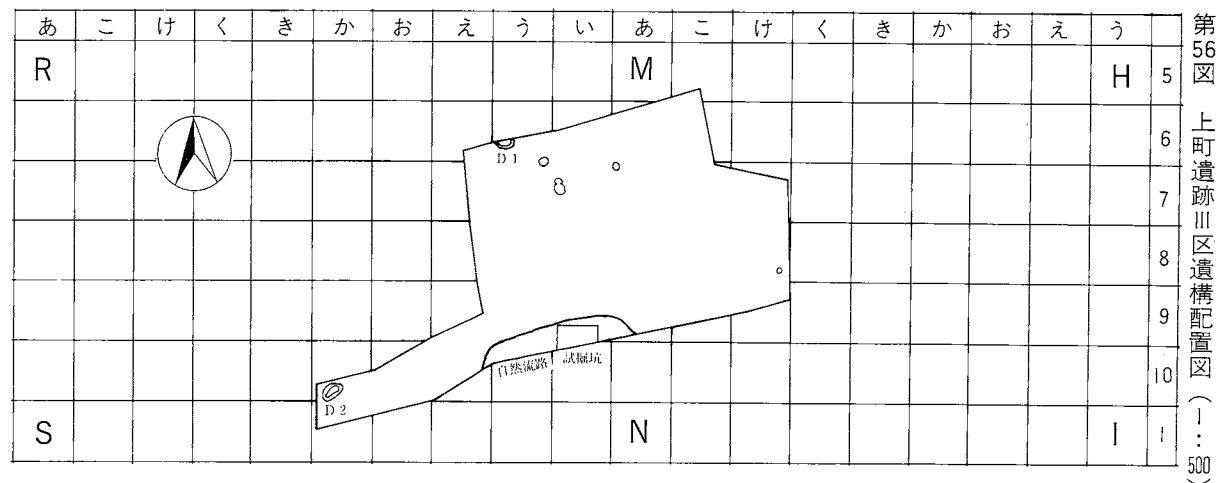
検出位置-XVMか10グリッド  
長軸1.6m、短軸90cmの楕円形。深さ23cm。



第54図 D23号土坑址実測図



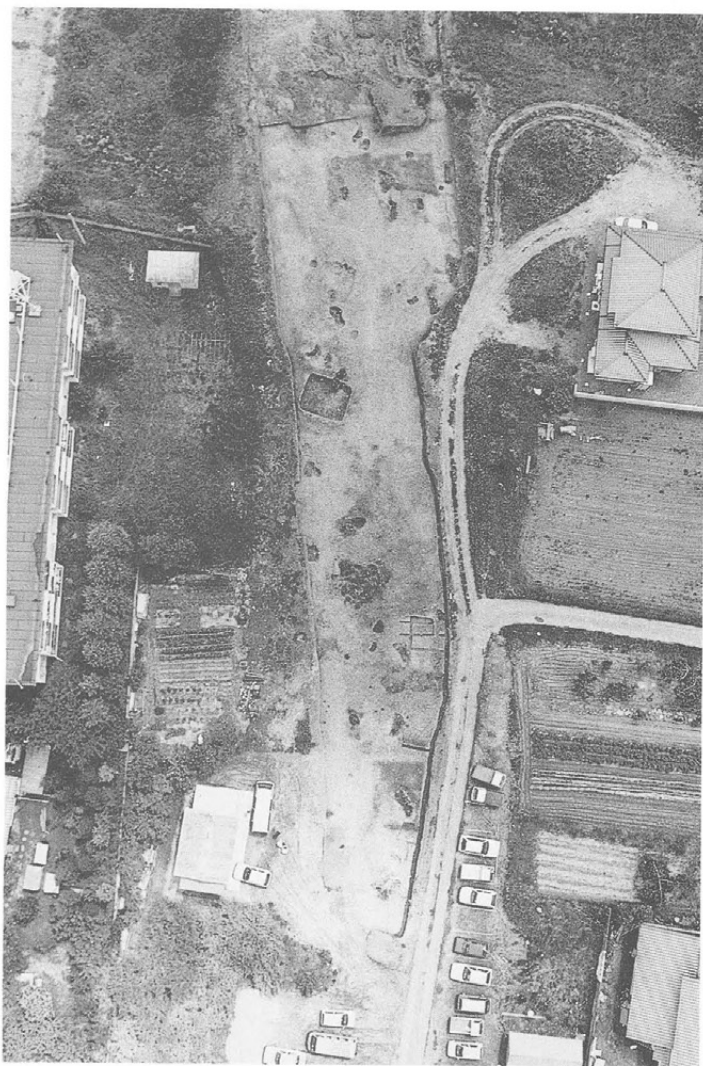
第55図 上町遺跡I区・II区遺構配置図 (1:500)



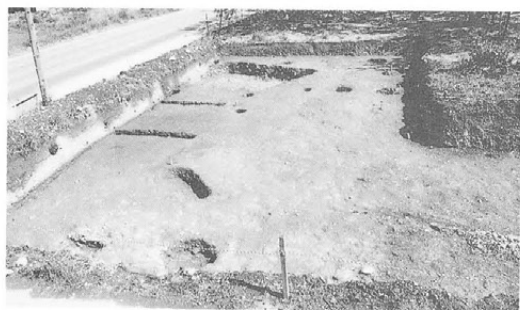
第56図 上町遺跡III区遺構配置図 (1:500)



## 第5節 写真図版



上町遺跡Ⅱ区航空写真



上町遺跡Ⅰ区北側全景（南より）



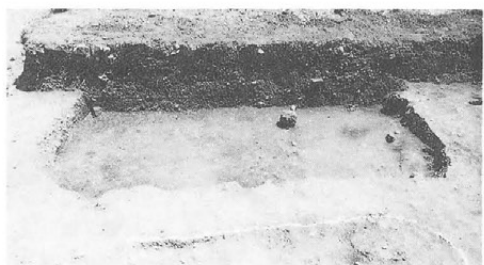
上町遺跡Ⅲ区全景（西より）



H 1号住居址遺物出土状況（西より）



H 1号住居址鹿角出土状況（西より）



H 2号住居址（西より）



H 3・5号住居址（南西より）



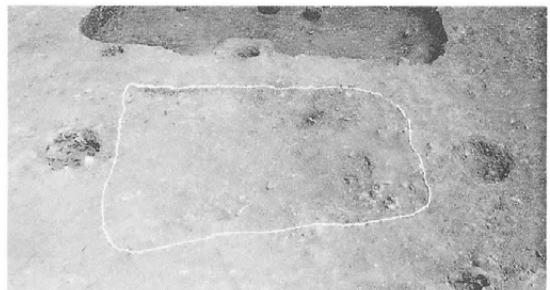
H 3号住居址カマド（南より）



H 3号住居址カマド掘方（南より）



H 6号住居址（東より）



H 7号住居址（西より）



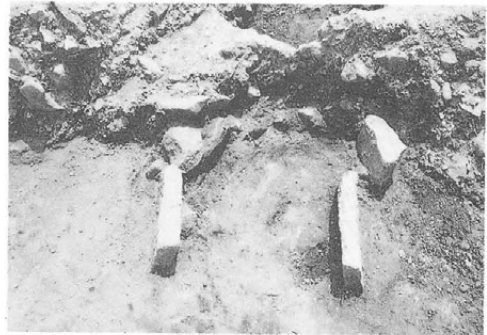
H 9号住居址 (西より)



H 10号住居址 (北より)



H 12号住居址 (西より)



H 12号住居址カマド (西より)



H 13号住居址 (西より)



H 13号住居カマド (西より)



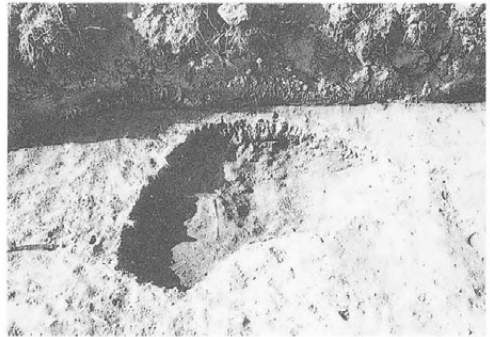
D 2号土坑址 (南より)



D 7号土坑址 (西より)



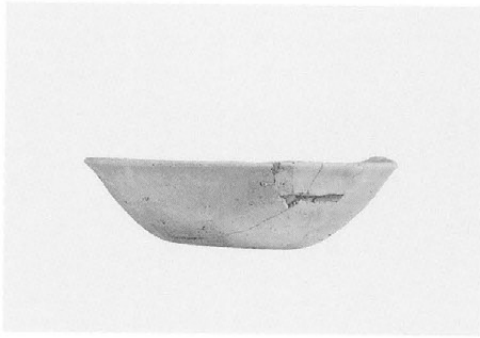
D 22号土坑址 (南より)



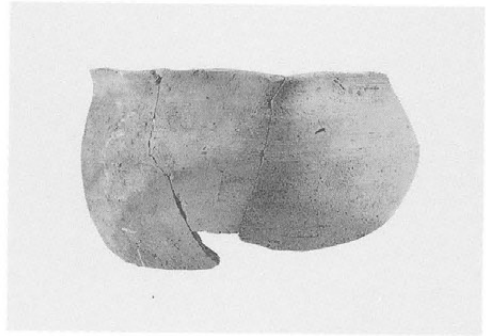
D 23号土坑址 (南より)



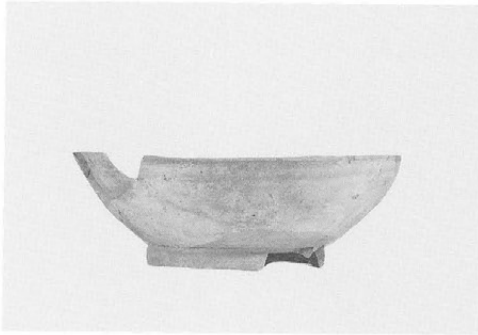
D 21号土坑址 (南より)



H 1 号住居址第30图 8



H 1 号住居址第31图20



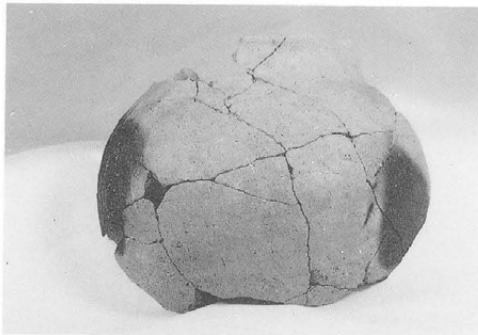
H 1 号住居址第31图12



H 1 号住居址第31图13



H 1 号住居址第31图14



H 3 号住居址第34图 2



H 3 号住居址第34图 1





H 3 号住居址第34图 4



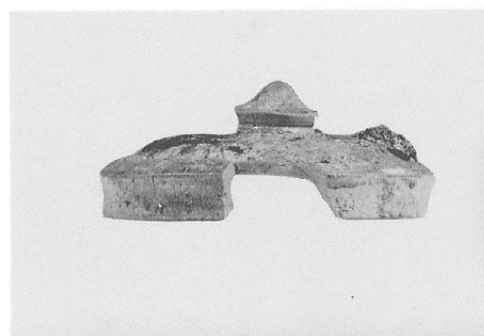
H 12号住居址第46图 3



H 13号住居址第47图 1



H 13号住居址第47图 4



D 3 号土坑址第41图 3



D 2 号土坑址第41图 1



D 21号土坑址第51图 5

# 第V章 寺浦遺跡

## 第1節 調査概要

### 1 遺跡の立地と概要

中之条遺跡群<sup>てらうら</sup>寺浦遺跡は標高433～422m前後を測り、御堂川・前沢川によって形成された複合扇状地の扇央部にあたる（第57図）。

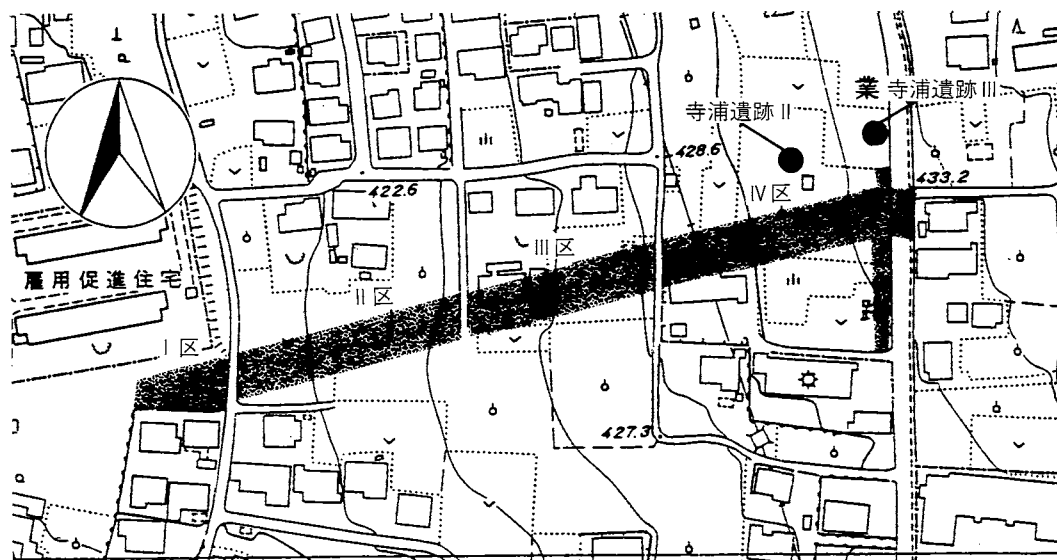
平成元年に作成された『坂城町遺跡分布図』によると弥生～平安時代の集落遺跡に位置づけられ、古代坂城郷のほぼ中央に位置する。当遺跡IV区北側で隣接する寺浦遺跡II（平成6年調査）では古墳後期～平安時代の竪穴住居址・掘立柱建物址等が検出され、同一集落であることが判明している。

遺跡名の「寺浦」は地籍が西念寺・一行寺の裏側にあたることからきた地名と思われるが、慶長7（1602）年の検地帳にはその名は見えない。

調査区の調査面積及び検出された遺構の概要は以下の通りである。

調査面積 I区-313m<sup>2</sup> II区-1,129m<sup>2</sup> III区-988m<sup>2</sup> IV区-1,742m<sup>2</sup> 計4,172m<sup>2</sup>

遺構 竪穴住居址-24棟（弥生後期2 古墳後期2 奈良・平安19 時期不明1）。掘立柱建物址-16棟（古墳後期～中世16）。竪穴状遺構-2棟（平安1 中世1）。土坑址-63基。ピット-214基。



第57図 寺浦遺跡位置図（1：2500）

## 2 基本層序

寺浦遺跡の基本層序は第58図に示したとおりである。

I a 層 盛土。

I b 層 宅地解体に伴う攪乱。

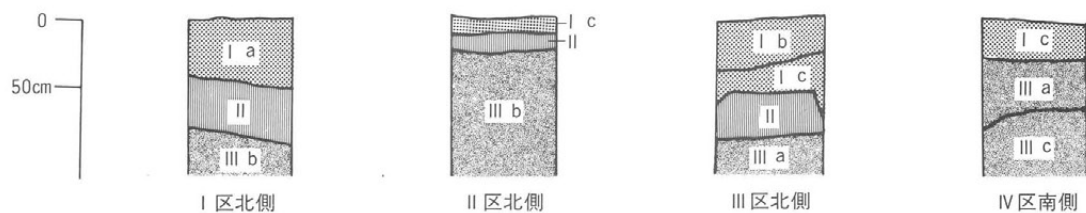
I c 層 耕作土

II 層 黒褐色土 (7.5Y R3/2) 平均的な堆積ではなく、窪みなどに溜まって堆積したものと考えられる。

III a 層 明黄褐色砂礫土 (10Y R6/6) III区・IV区遺構検出面。

III b 層 黄褐色砂質土 (10Y R5/6) I区・II区遺構検出面。

III c 層 褐色砂礫土 (7.5Y R4/4)



第58図 寺浦遺跡基本層序模式図

## 3 調査日誌

平成5年10月6日(月) 重機でI区表土除去。

19日(火) 重機でII区表土除去。

11月17日(水) T a 1号竪穴状遺構完掘。T a 1に住居址3棟切られていることが判明。

12月12日(日) 現地説明会行ふ。見学者約120名。

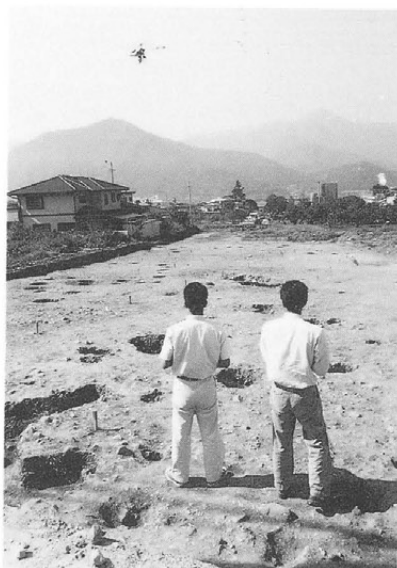
15日(水) I・II区の空中撮影行ふ。



現地説明会



- 22日（水） II区調査終了。
- 平成6年7月4日（水） 重機でIII区表土除去。
- 8日（金） III区調査開始。
- 15日（金） 隣接地で火事発生。調査団の活躍により鎮火。
- 8月25日（木） IV区表土除去。
- 10月6日（木） IV区南側の地下歩道・A01号線  
 拡幅範囲を重機で表土除去。攪乱が入っており、遺構は希薄。
- 19日（水） III・IV区空中撮影。撮影終了後  
 H22・23・24号住居址を検出。
- 11月15日（火） IV区調査終了。
- 平成7年8月1日（火） 重機でIV区東側の残地の表土除去。
- 22日（火） H19・20号住居址完掘。調査終了。



IV区空中撮影

## 第2節 I区の遺構と遺物

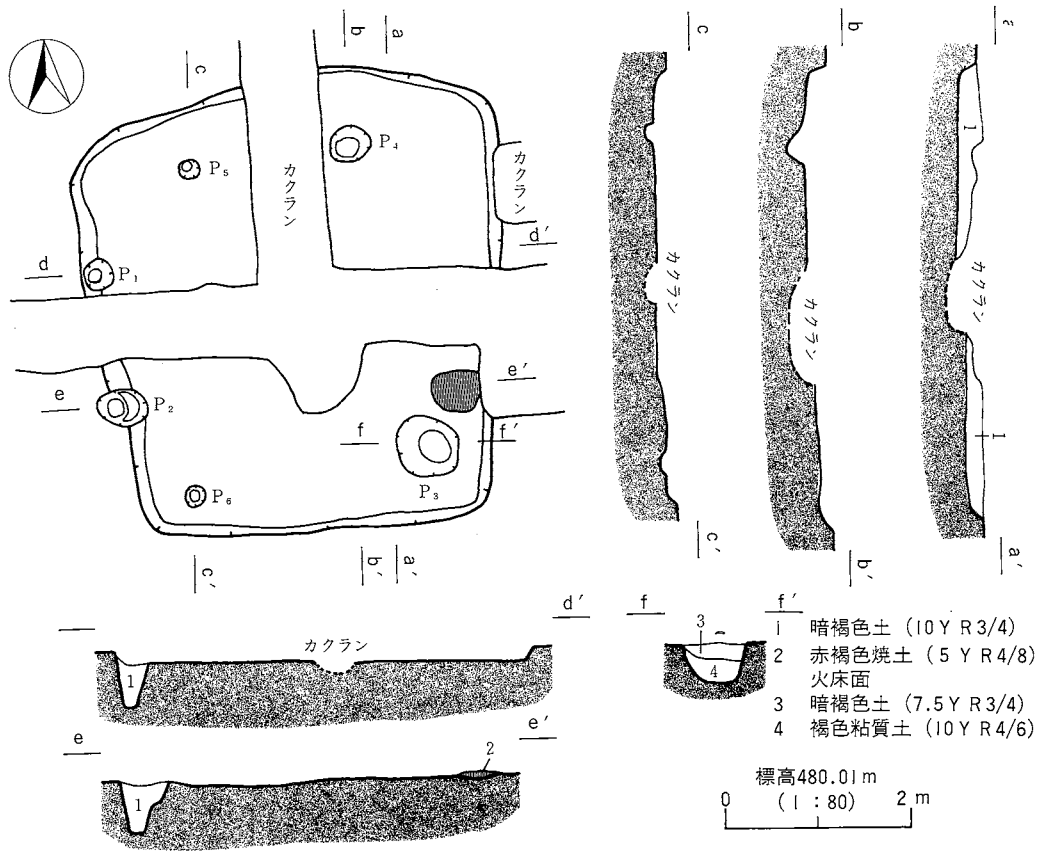
### 1 竪穴住居址

#### 1) H1号住居址 (第59図)

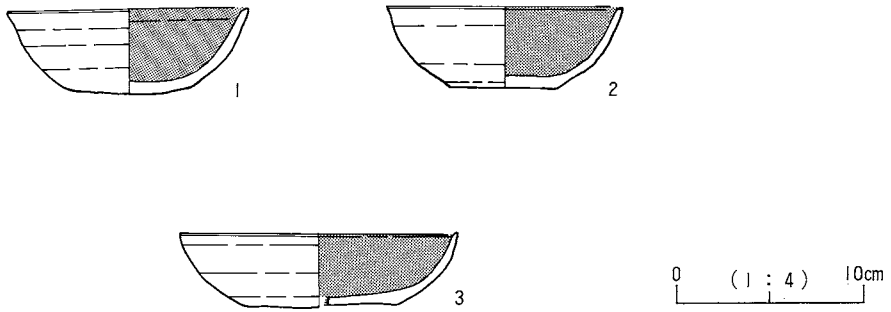
検出位置—XXIKい7・い8・う7・う8グリッド。

旧職業訓練学校建設時の攪乱を受け、北壁・東西壁及び床面の一部が破壊されている。長軸4.7m、短軸4.1mの隅丸長方形を呈する。北壁長は3.94m、東壁長は3.96m、南壁長は3.42m、西壁長は4.02mで、カマドを主軸とした南北主軸はN-90°を指す。壁残高は9~17cmを測る。床は攪乱部分以外は良好で堅固である。ピットは5基検出された。P<sub>1</sub>・<sub>2</sub>は入口施設の柱穴と思われ、深さはP<sub>1</sub>が60cm、P<sub>2</sub>が57cmを測る。P<sub>3</sub>は貯蔵穴と思われる。カマドは東壁中央部よりやや南側に位置し、遺存状態が悪く火床面のみ残存していた。遺物は覆土中・床面より土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器が出土している。図示したのは黒色土器坏 (第60図1~3) である。

出土遺物から平安時代 (9世紀後半) に位置づけられる。



第59図 HI号住居址実測図



第60図 HI号住居址出土遺物実測図

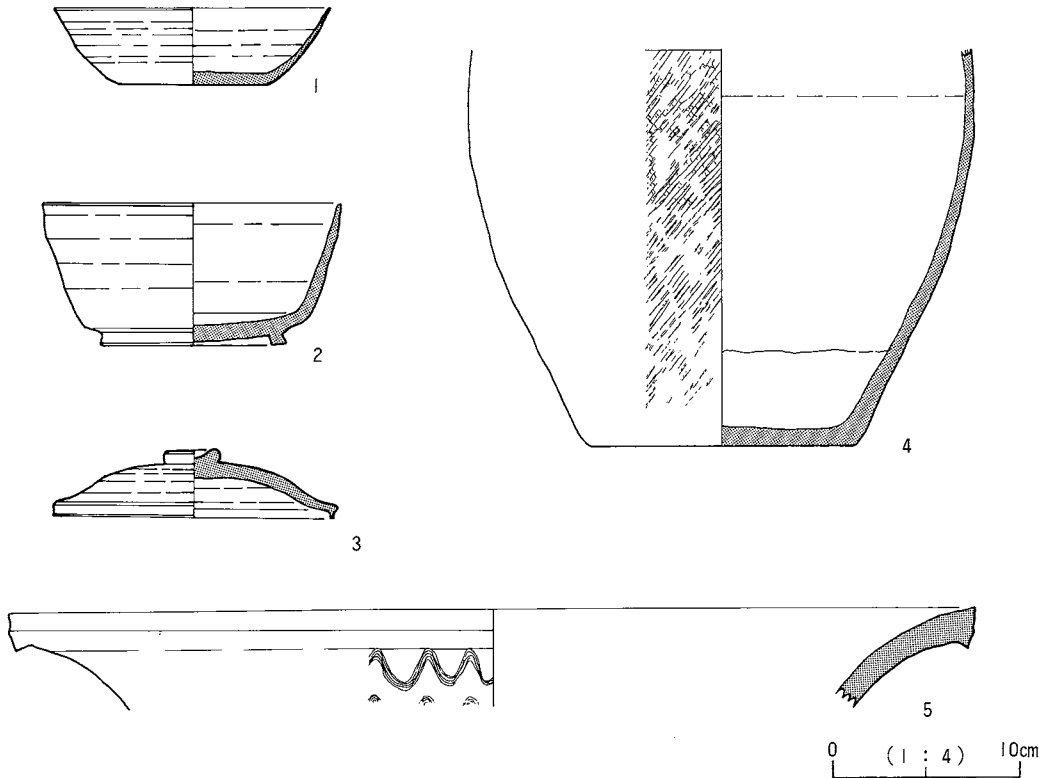
## 2) H 2 号住居址 (第62図)

検出位置—XXIKお6・お7・か6・か7グリッド。

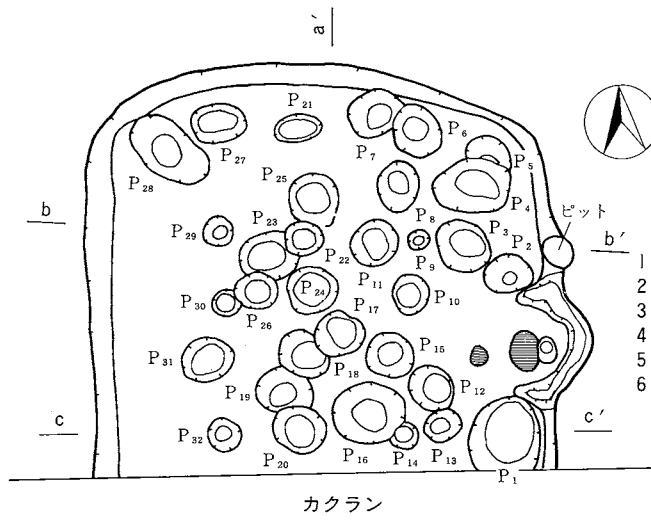
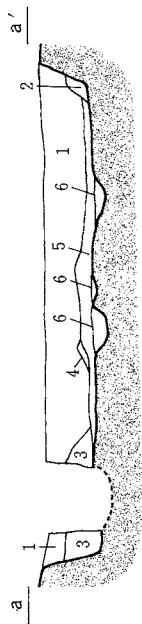
旧職業訓練学校建設時の攪乱を受け、東西壁及び床面の一部が破壊されている。長軸2.04m、短軸2.03mの隅丸長方形を呈する。北壁長は4.12m、東壁長は4.24m、南壁長は4.08m、西壁長は4.08mで、カマドを主軸とした南北主軸はN-99°-Eを指す。壁残高は33~52cmを測る。床は一面に焼土と炭化物が混入し、非常に軟弱である。ピットは32基検出されたが、覆土中には焼土、炭化物を多量に含んでいた。支柱穴はP 9・14・29・32と思われるが、焼土ピットによって切られている。カマドは東壁中央部に位置する。自然石と粘土による構築で、比較的良好である。遺物は覆土・床面より土師器・黒色土器・須恵器坏・蓋・甕が小片で多量に出土した。カマド周辺部に比較的多く出土している。図示したのは須恵器坏(第61図1・2)・蓋(第61図3)・甕(第61図4・5)である。第61図1は底部に糸切り痕が残る。

又「林」と書かれた須恵器坏の墨書土器も1片出土している。

時期は出土遺物によりに平安時代(9世紀前半)に位置づけられる。



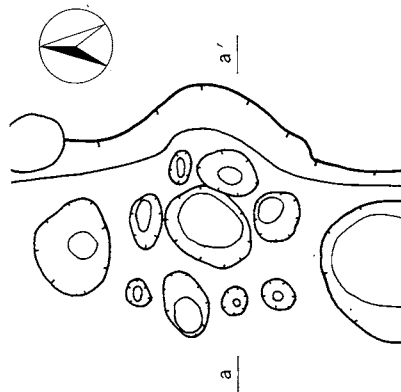
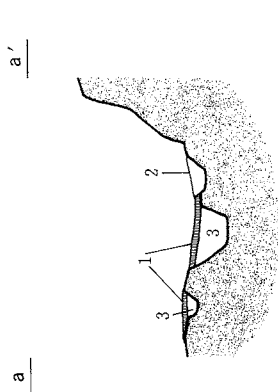
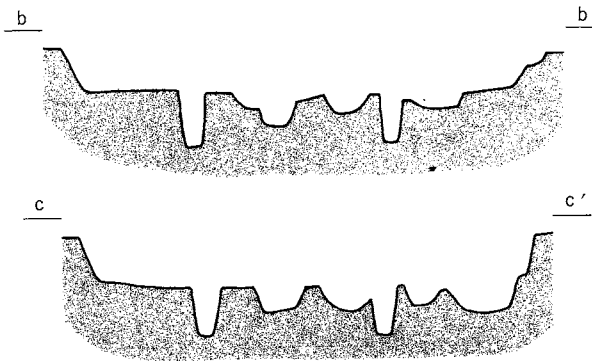
第61図 H 2 号住居址出土遺物実測図



- 1 暗褐色土 (7.5Y R3/4)
  - 2 褐色土 (10Y R4/4)
  - 3 暗褐色土 (7.5Y R3/4)
  - 4 暗赤褐色土 (5Y R3/3)
  - 5 暗褐色土 (10Y R3/4)
  - 6 明褐色土 (7.5Y R5/6)
- 焼土ブロック・炭化物を多量に含む

標高479.63m

0 (1:80) 2 m



- 1 暗赤褐色焼土 (5Y R3/6)
- 火床面
- 2 褐色土 (7.5Y R4/4)
- 焼土ブロック多量に含む
- 3 明褐色土 (7.5Y R5/6)
- 砂粒を含む

標高479.63m

0 (1:40) 1 m

第62図 H 2号住居址・カマド実測図

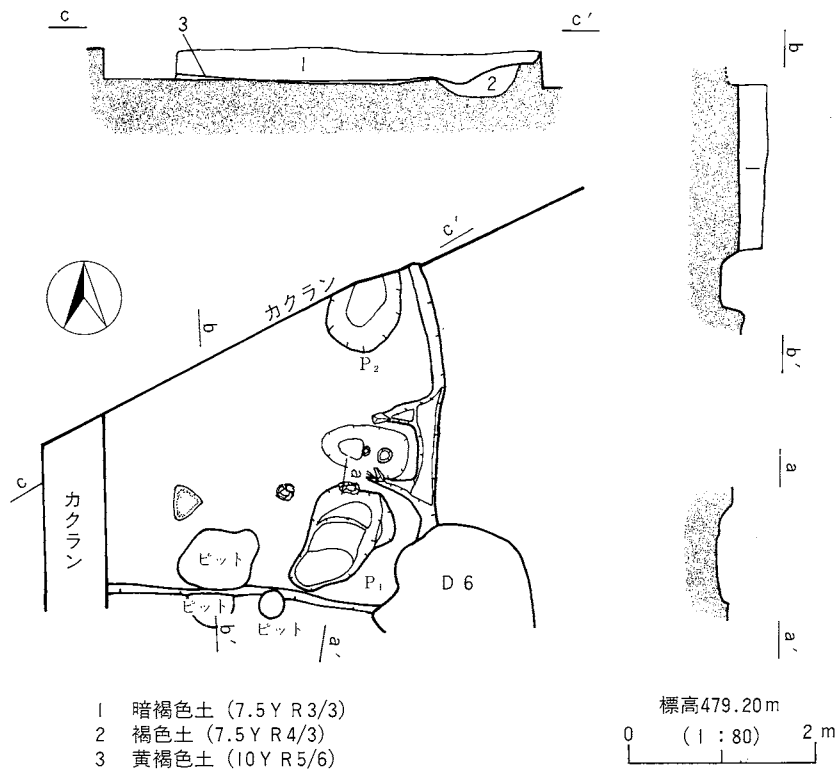
### 3) H 3 号住居址 (第63図)

検出位置—XXIKき6・き7・く7グリッド。

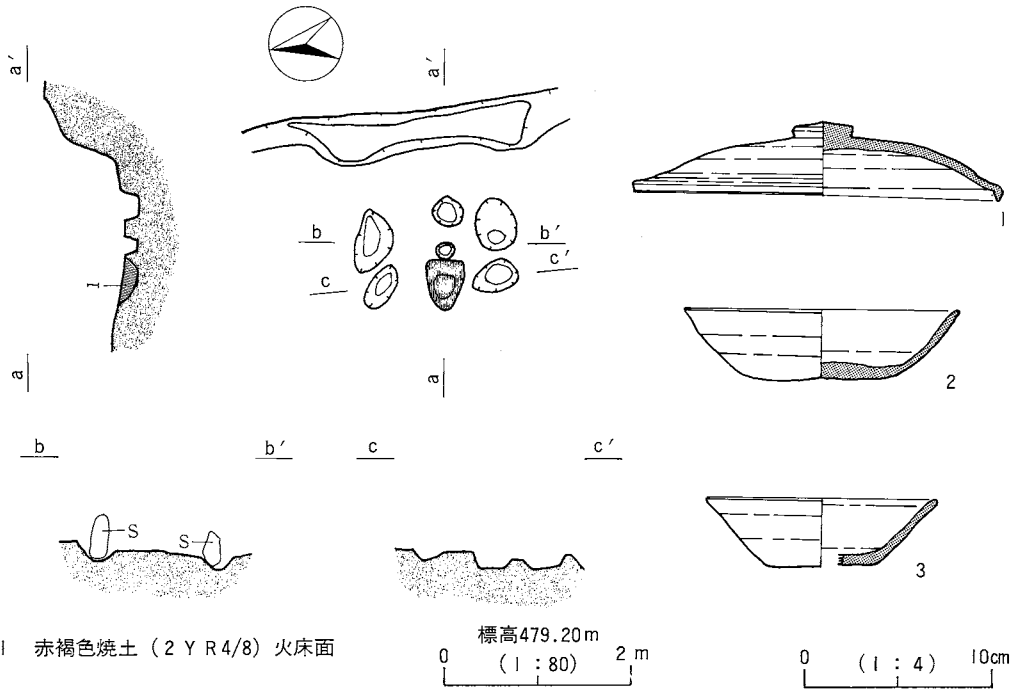
東壁の一部をD6号土坑址に切られる。北壁と東西壁の一部が攪乱によって破壊されているが、隅丸長方形を呈すると思われる。東壁長は3.7mで、カマドを主軸とした南北主軸はN-115°-Eを指す。壁残高は9~32cmを測る。貼床は平坦で堅固である。ピットは2基検出されたが主柱穴は検出されなかった。カマドは東壁中央部に位置するものと思われる。遺存状態は比較的良好で、粘土と自然石で構築されている。火床面には支脚石跡が2基検出された。

遺物は覆土中・床面から土師器・黒色土器・須恵器が出土している。図示したのは須恵器蓋(第64図1)・坏(第64図2・3)である。第64図1は天井部に宝珠形つまみをもつ。第64図2・3は底部回転糸切りである。

時期は平安時代(9世紀前半)に位置づけられる。



第63図 H 3 号住居址実測図

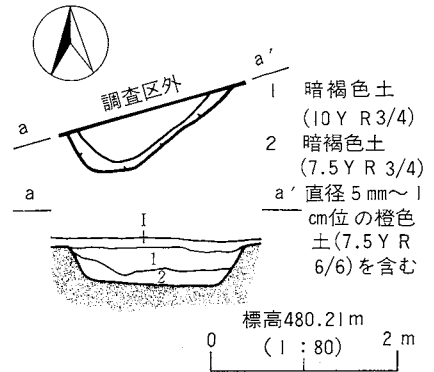


第64図 H 3号住居址カマド・出土遺物実測図

#### 4) H 4号住居址 (第65図)

検出位置—XXIKう5・え5グリッド。

北壁と東西壁の大部分が調査区外になるため、全容は把握できない。壁残高は10~16cmである。覆土中から弥生時代後期箱清水期の甕片1点出土した。時期は遺物から弥生時代後期以降に位置づけたい。



第65図 H 4号住居址実測図

## 2 掘立柱建物址

### 1) F 1号掘立柱建物址 (第66図)

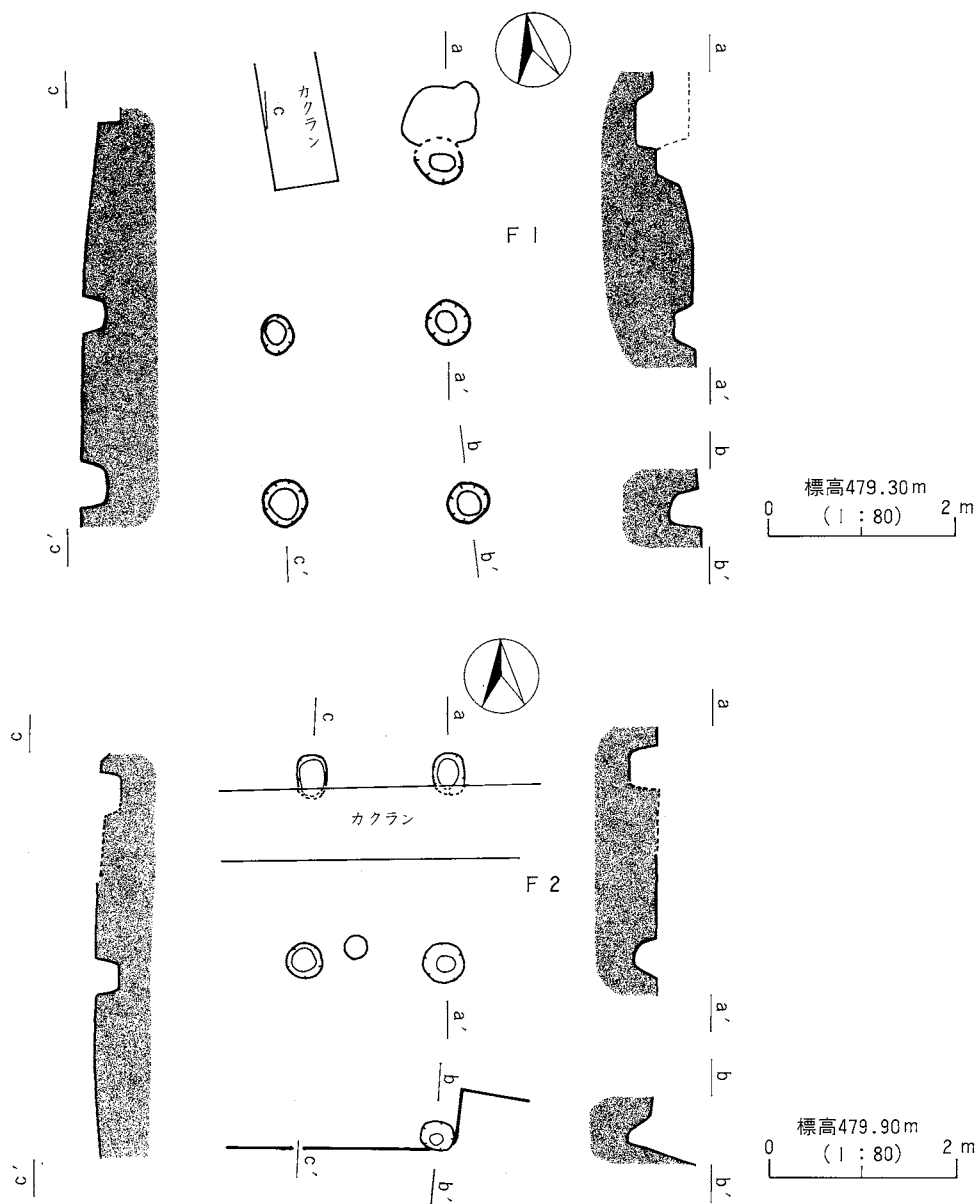
検出位置—XXIKき7・く7・く8グリッド。

南側は調査区外になるが、建物主軸はN-5°-Eを指す。長辺1.8m、短辺96cmで、2間×1間の側柱の建物址に推定される。各柱穴は平均19×18cmの円形を呈する。深さは19~32cmを測る。遺物は皆無であった。時期は確認面から古墳時代後期~平安時代に位置づけられる。

2) F 2号掘立柱建物址 (第66図)

検出位置—XXIKき7・き8グリッド。

南側は調査区外になるが、建物主軸はN-3°-Wを指す。長辺1.95m、短辺73cmで、2間×1間の側柱の建物址と推定される。各柱穴は平均21×19cmの円形を呈する。深さは19~32cmを測る。遺物は皆無であった。時期は確認面から古墳時代後期~平安時代に位置づけられる。

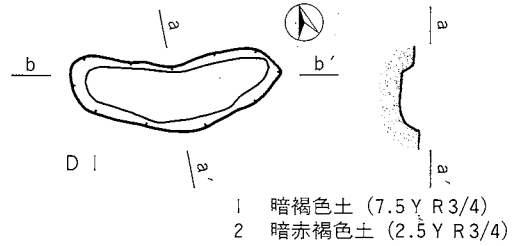


第66図 F 1・2号掘立柱建物址実測図

### 3 土坑址

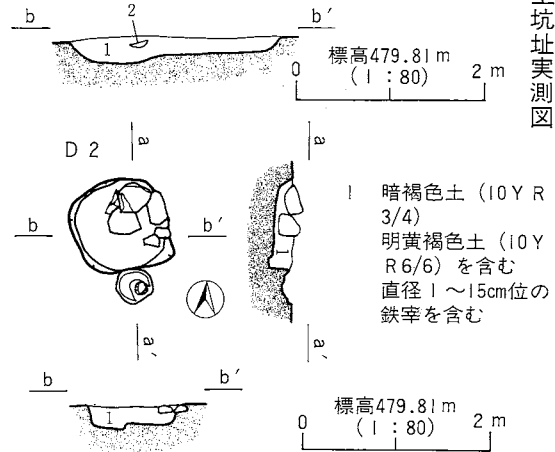
#### 1) D 1号土坑址 (第67図)

検出位置-XXIKう5・え5グリッド。  
長軸2.14m、短軸72cmの不整楕円形。深さ24cm。



#### 2) D 2号土坑址 (第67図)

検出位置-XXIKい5グリッド。  
長軸1.24m、短軸1.02mの楕円形。深さ21cm。覆土中から鉄滓・鉄砧石・黒色土器坏片が出土した。鉄砧石は半壊されていることから、廃絶土坑と考えられる。時期は平安時代(9世紀後半)に位置づけられる。



#### 3) D 3号土坑址 (第68図)

検出位置-XXIKい5グリッド。  
長軸1.44m、短軸70cmの不整楕円形。深さ27cm。D 2号土坑址と同様に鉄滓・土師器片を含むことから、廃絶土坑と考えられる。時期は平安時代(9世紀後半)に位置づけられる。

#### 4) D 4号土坑址 (第68図)

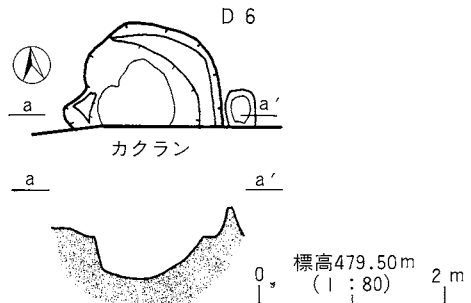
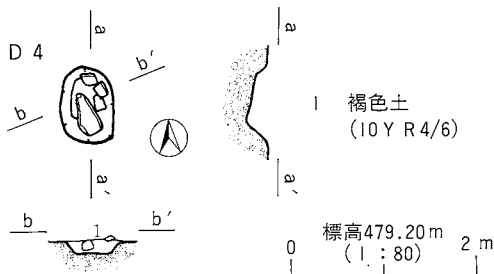
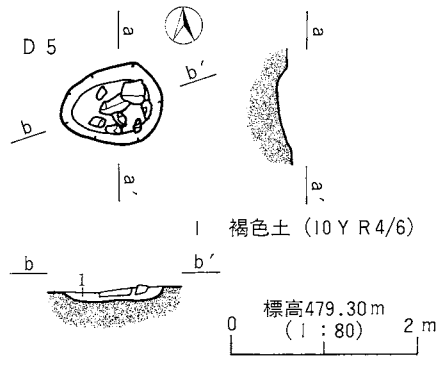
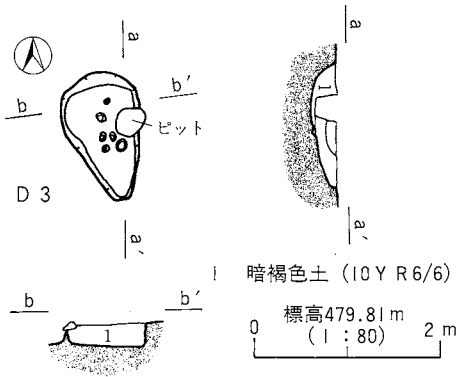
検出位置-XXIKき6・き7グリッド。  
H 3号住居址埋没後に構築。長軸82cm、短軸56cmの楕円形。深さ12cm。

#### 5) D 5号土坑址 (第68図)

検出位置-XXIKき7・く7グリッド。  
長軸1.6m、短軸80cmの楕円形。深さ17cm。

#### 6) D 6号土坑址 (第68図)

検出位置-XXIKけ3グリッド。  
H 3号住居址を切り構築。旧職業訓練学校建設時の攪乱のため、南側が破壊されている。深さ41cm。



第67図  
D 1・2号土坑址実測図

第68図  
D 3・5・6号土坑址実測図



## 第3節 II区の遺構と遺物

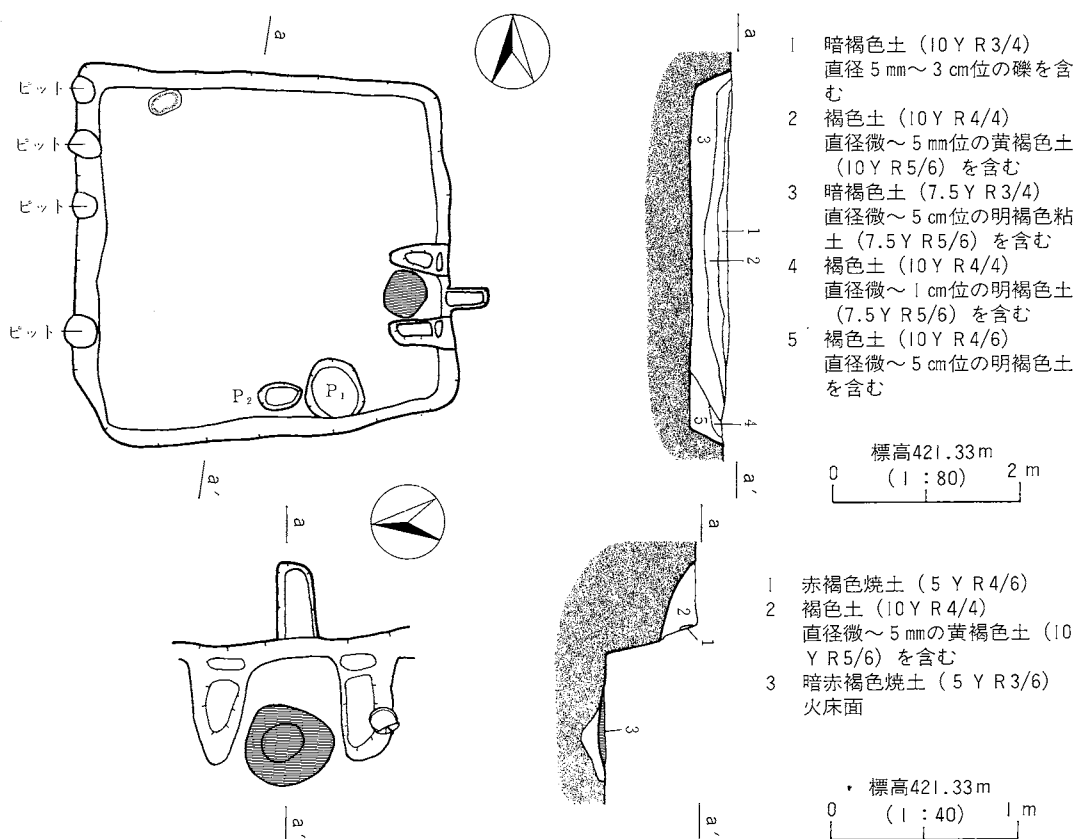
### 1 竪穴住居址

#### 1) H5号住居址 (第69図)

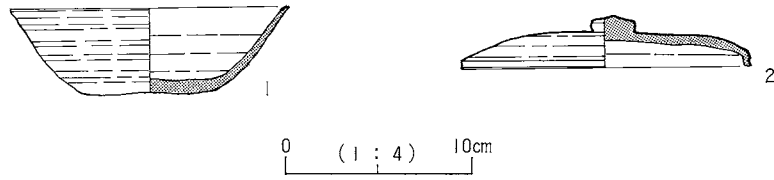
検出位置—XXIFき6・き7・く6・く7グリッド。

長軸3.54m、短軸3.46mの隅丸長方形を呈する。北壁長は3.38m、東壁長は3.12m、南壁長は3.52m、西壁長は3.6mで、カマドを主軸とした主軸方位はN-92°-Eを指す。壁残高は24~51cmを測る。ほぼ平坦な床面で、ピットが2基検出されたが、柱穴は検出されなかった。カマドは東壁中央部に位置し、袖部は自然石と粘土によって構築され、煙道部が張り出す。遺物は土師器・黒色土器・須恵器環、蓋、甕が出土している。図示したのは須恵器環(第70図1)・蓋(第70図2)である。第70図1は底部へラ切りである。

時期は奈良時代末~平安時代(8世紀後半~9世紀初頭)に位置づけられる。



第69図 H5号住居址実測図

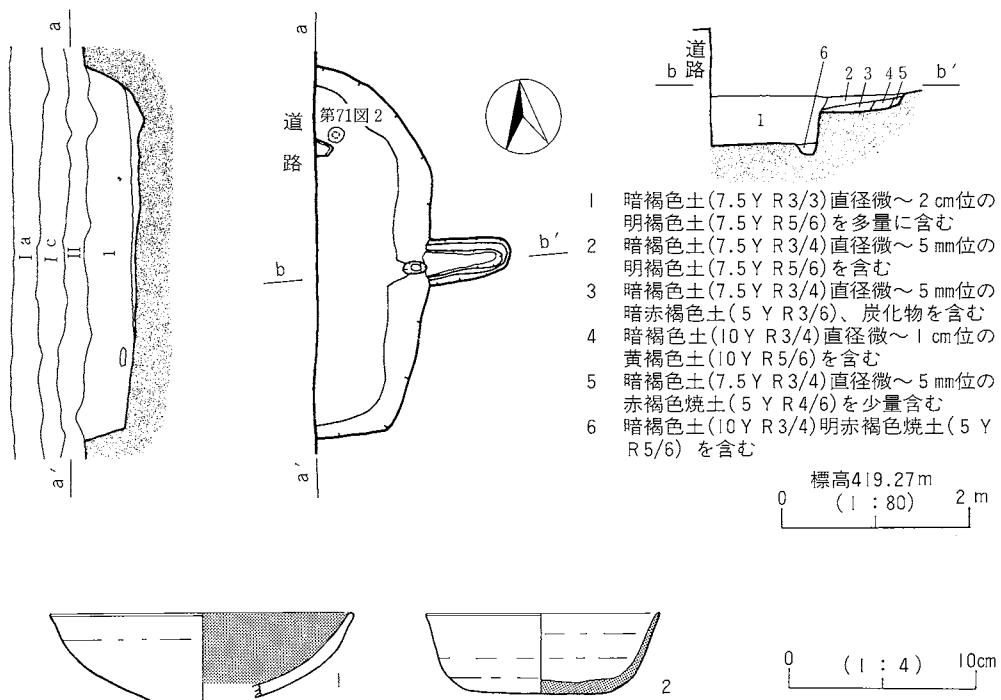


第70図 H5号住居址出土遺物実測図

2) H6号住居址 (第71図)

検出位置—XXXIFこ4・こ5グリッド。

西壁と南北壁の一部が道路となるため、全容は把握できないが隅丸長方形を呈すると思われる。東壁長は2.96mで、カマドを主軸とした南北主軸はN-87°-Eを指す。壁残高は43~51cmを測る。床は平坦で、柱穴は検出されなかった。カマドは東壁中央部に位置し、煙道部が長く張り出す。火床面は検出されず、ピット状の掘り込みが確認された。遺物は土師器・黒色土器・須恵器が出土している。図示した遺物は内面黒色処理の黒色土器坏(第71図1)で、口縁付近を横ナデ、内面をミガキで調整されている。須恵器坏(第71図2)は底部へラ切りである。時期は出土遺物から奈良時代(8世紀前半)に位置づけられる。



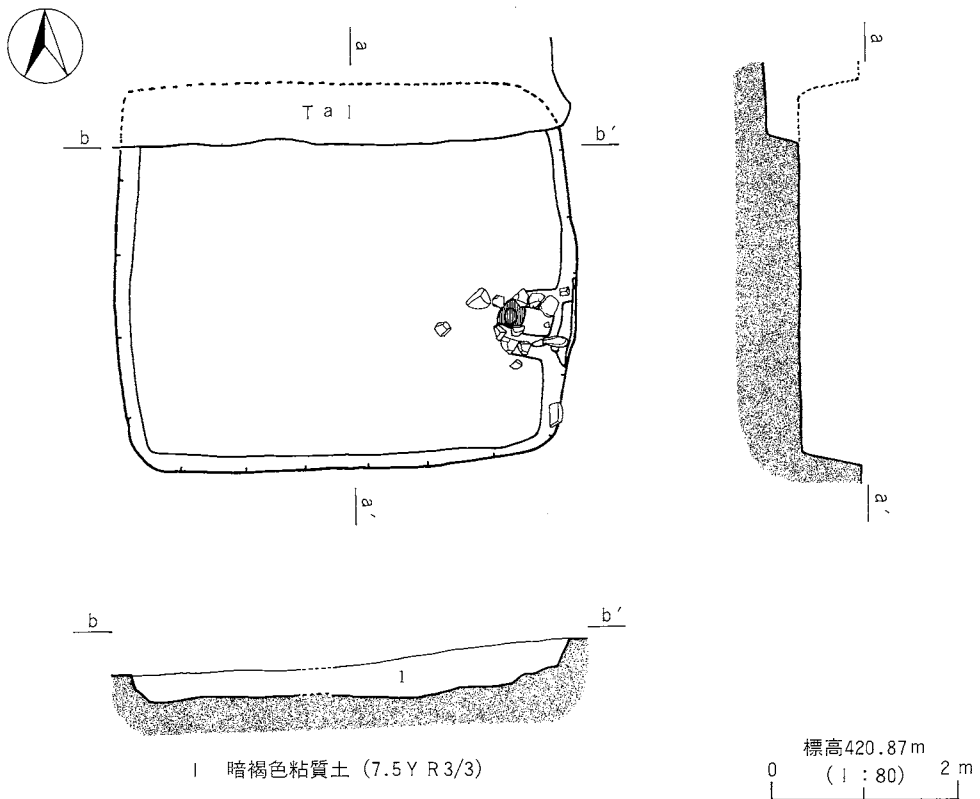
第71図 H6号住居址・出土遺物実測図

### 3) H 7 号住居址 (第72図)

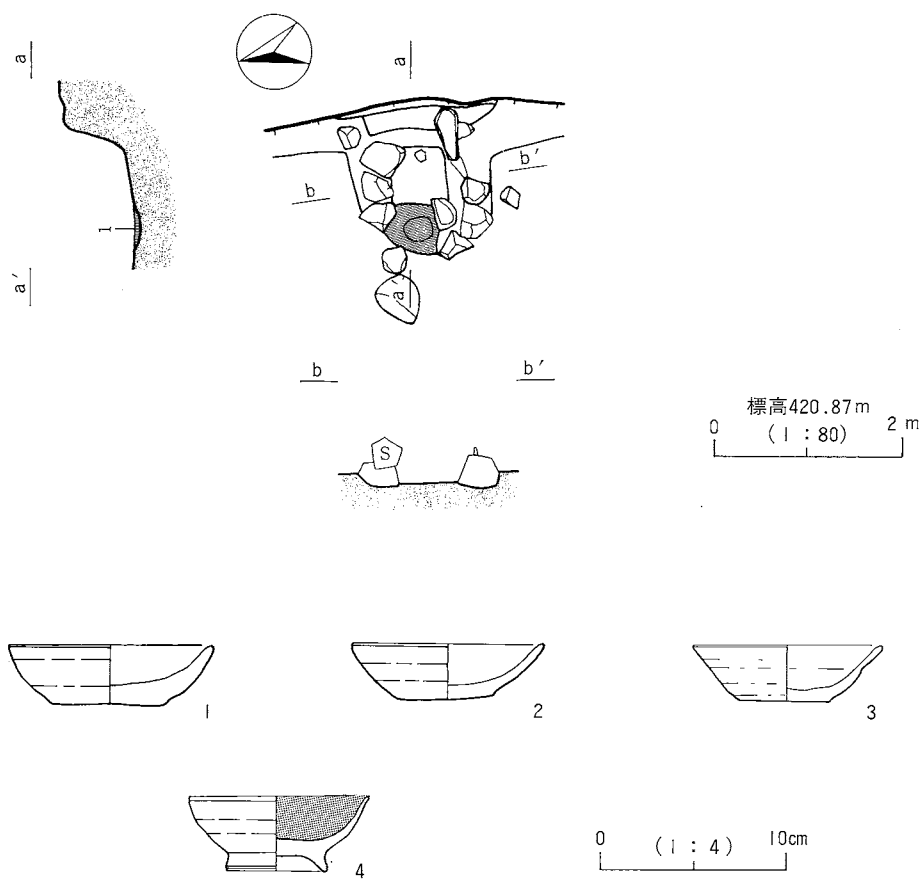
検出位置—XXIFお4・お5・か4・か5・き4・き5グリッド。

H 8 号住居址埋没後に構築。北壁を T a 1 号竪穴状遺構によって切られる。長軸4.56mの隅丸長方形を呈する。東壁長は3.5m、南壁長は4.26mで、カマドを主軸とした南北主軸はN-99°-Eを指す。壁残高は6~20cmを測る。カマド周辺部以外床は非常に軟弱である。柱穴は検出されなかった。遺物は土師器・黒色土器・灰釉陶器が出土している。図示したのは底部回転糸切り調整の土師器坏(第73図1~3)、黒色土器坏(第73図4)である。

出土遺物から平安時代(10世紀~11世紀初頭)に位置づけられる。



第72図 H 7 号住居址実測図

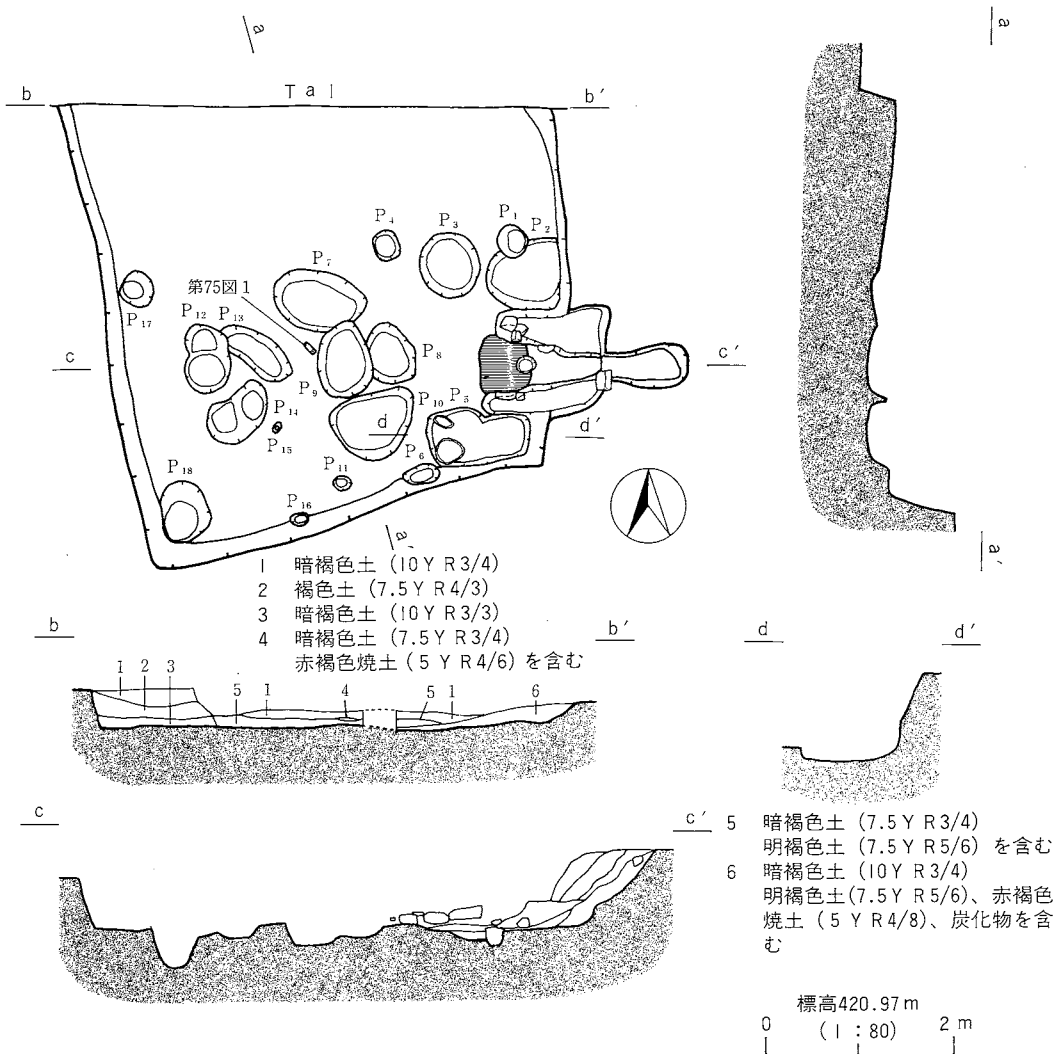


第73図 H 7号住居址カマド・出土遺物実測図

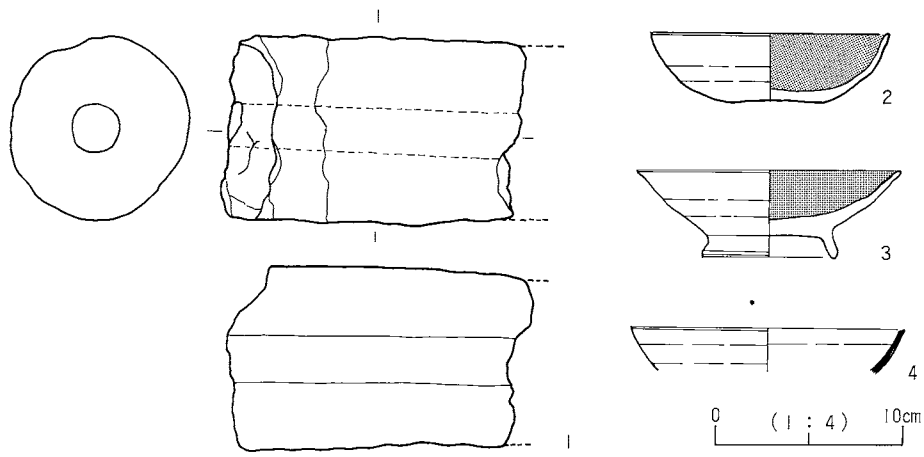
#### 4) H 8号住居址 (第77図)

検出位置—XXIFお4・お5・か4・か5・き4・き5グリッド。

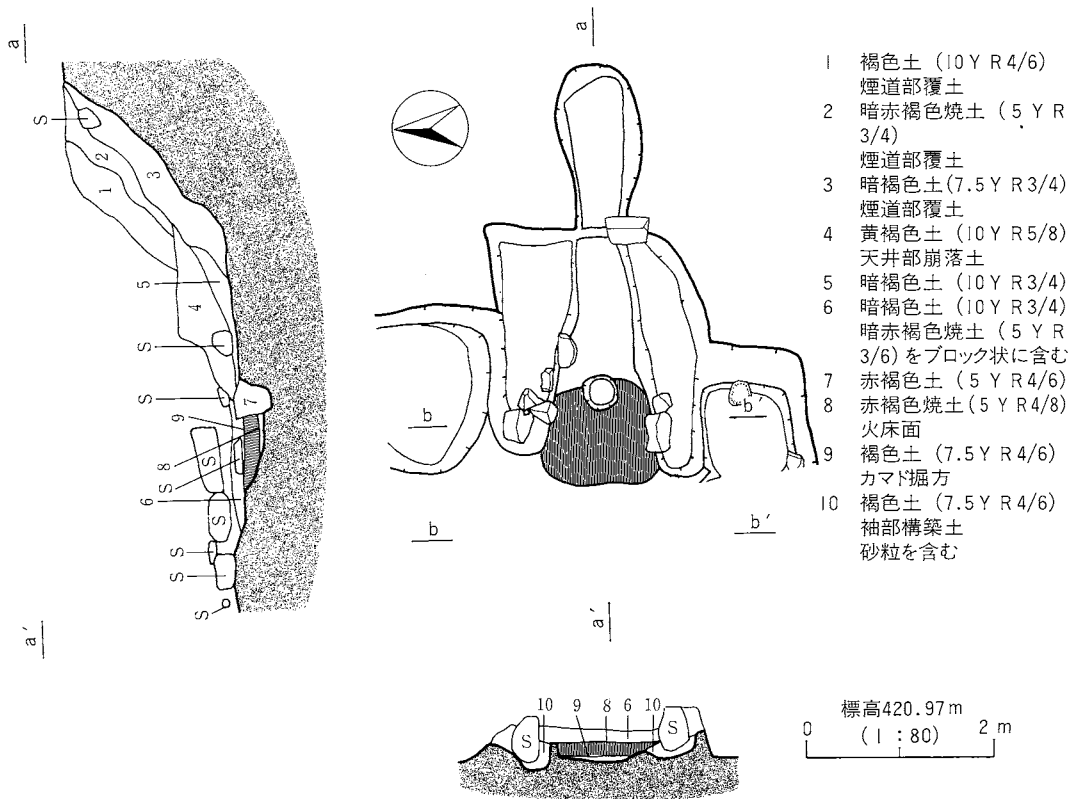
H 9・13号住居址を切って構築。北壁をT a 1号竪穴状遺構に切られる。長軸5mで隅丸長方形を呈する。東壁長は3.84m、南壁長は4.02mで、カマドを軸とした南北主軸はN-86°-Eを指す。壁残高は24~61cmを測る。床面はカマド周辺部は堅固だが、全体的に焼土・炭化物を多量に含み軟弱な床である。ピットは18基検出されたが覆土中には焼土、炭化物を多量に含んでいる。P 5は貯蔵穴と思われる。カマドは東壁中央よりやや東側に位置し、カマド周辺には使用した構築石材が散在していた。袖部は河原石と粘土によって構築され、煙道部は長く張り出す形状を呈す。遺物は覆土・床面において多量の土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器・韃の羽口 (第75図1) が出土している。火床面からは緑釉陶器坏が出土している。



第74図 H8号住居址実測図



第75図 H8号住居址出土遺物実測図



第76図 H 8号住居カマド実測図

図示したのは、黒色土器坏 (第75図2)・椀 (第75図3) である。緑釉陶器坏 (第75図4) は、焼成良好である。

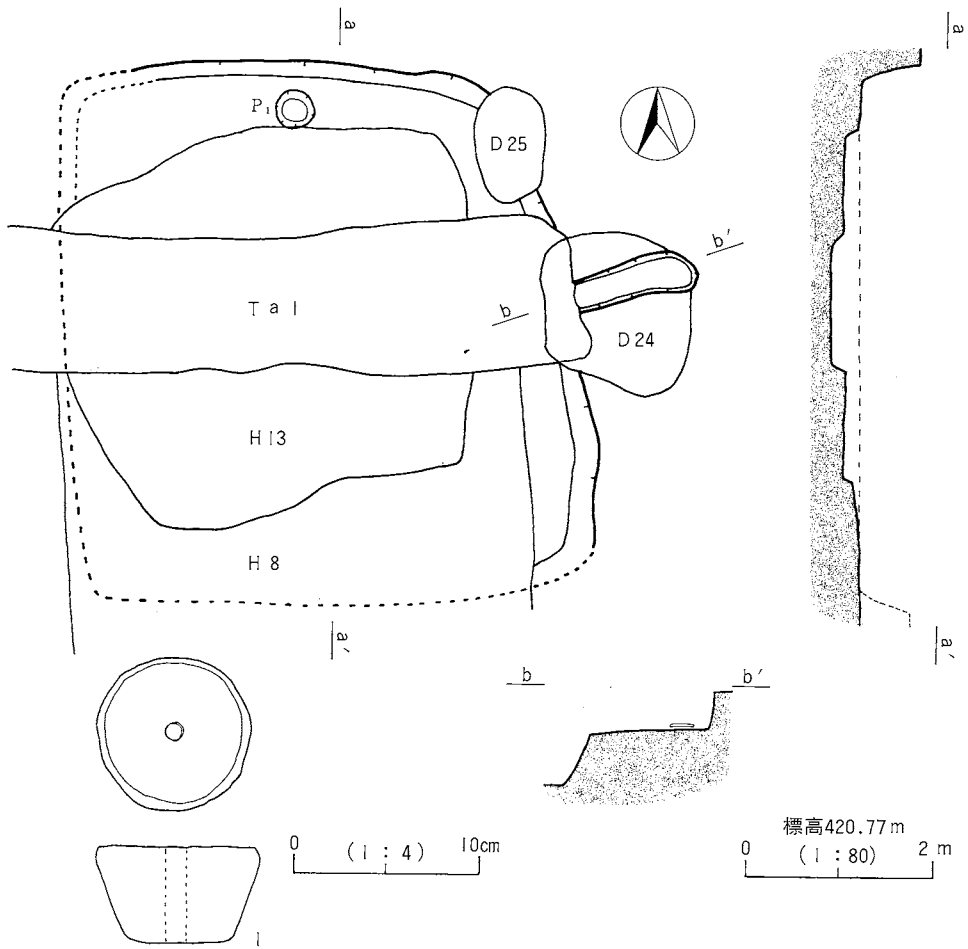
時期は平安時代 (9世紀後半) に位置づけられる。

#### 5) H 9号住居址 (第77図)

検出位置XXIFお4・お5・か4・か5グリッド。

H12号住居址を切って構築。H13・8・7号住居址、T a 1 竪穴状遺構、D25・24号土坑址による破壊が著しい。長く張り出した煙道部と北壁の一部しか残存していないが、隅丸長方形を呈すると思われる。カマドはT a 1号竪穴状遺構によって破壊され、煙道部分しか残存しない。ただし煙道部上層もD24号土坑址の掘り込みによって削平されている。煙道を主軸とした南北主軸はN-71°-Eを指す。煙道部からは土師器甕・須恵器甕が出土している。遺物は床面からの出土はほとんどないが、大型の紡錘車 (第77図1) が出土している。土製品で焼成も良好である。

出土遺物から奈良時代 (8世紀前期) に位置づけられる。



第77図 H9号住居址・出土遺物実測図

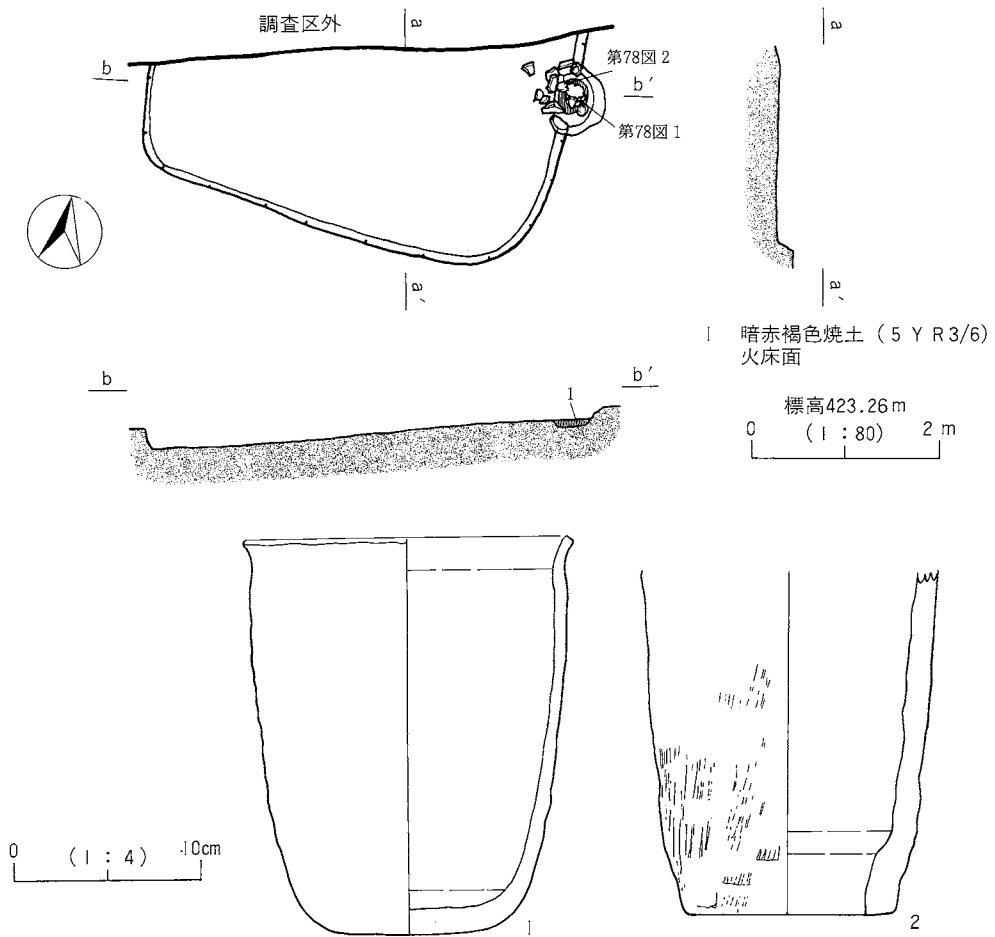
## 6) H10号住居址 (第78図)

検出位置—XXIEお10・か10グリッド。

北壁と東西壁の一部が調査区外になるため全容は把握できないが、隅丸長方形を呈すると思われる。南壁長は3.84mで、カマドを主軸とした南北主軸はN-98°-Eを指す。壁残高は12~21cmを測る。カマドは東壁中央部に位置すると思われる。リングの木の根が混入し、遺存状態は非常に悪く、袖石となる自然石が散在していた。遺物はカマドから土師器甕 (第78図1)、円筒形土製品 (第78図2)、黒色土器坏が出土している。

第78図1は内外面ミガキが施されている。

時期は古墳時代後期 (7世紀後半) に位置づけられる。



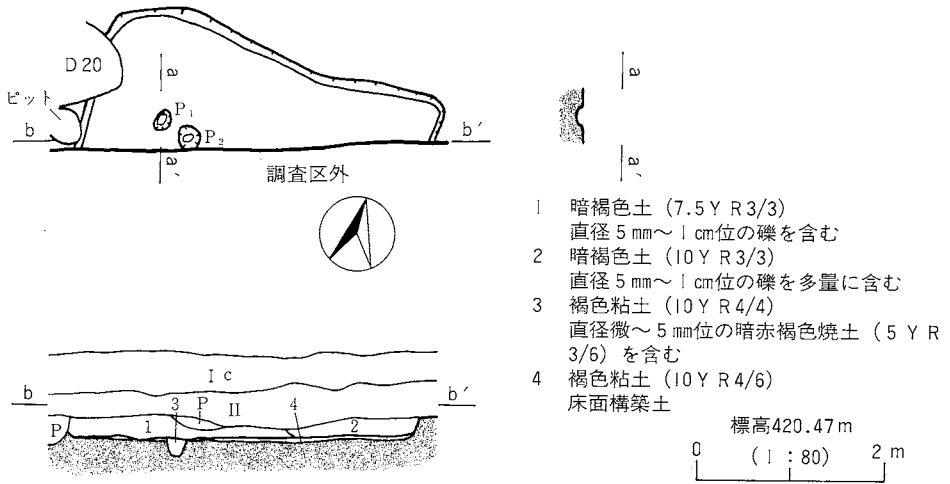
第78図 H10号住居址・出土遺物実測図

7) H11号住居址 (第79図)

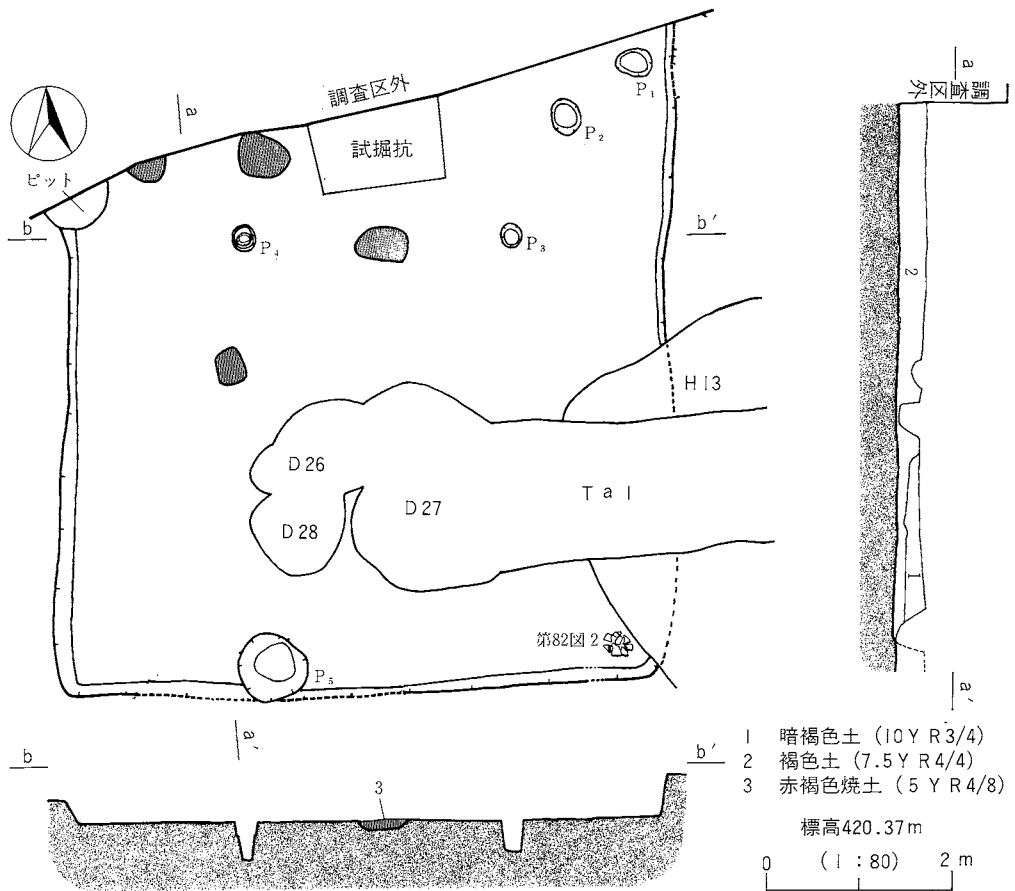
検出位置—VIIIFか7・き7グリッド。

西壁をD20号土坑址に切られる。南壁と東西壁の一部が調査区外となり、全容は把握できないが隅丸長方形を呈すると思われる。東壁長は3.52mで、壁残高は17~25cmを測る。床は軟弱であった。ピット2基検出したが、支柱穴となるかはっきりせず、炉も検出されなかった。遺物は弥生土器壺、甕片が散在して覆土、床面から出土している。時期は出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

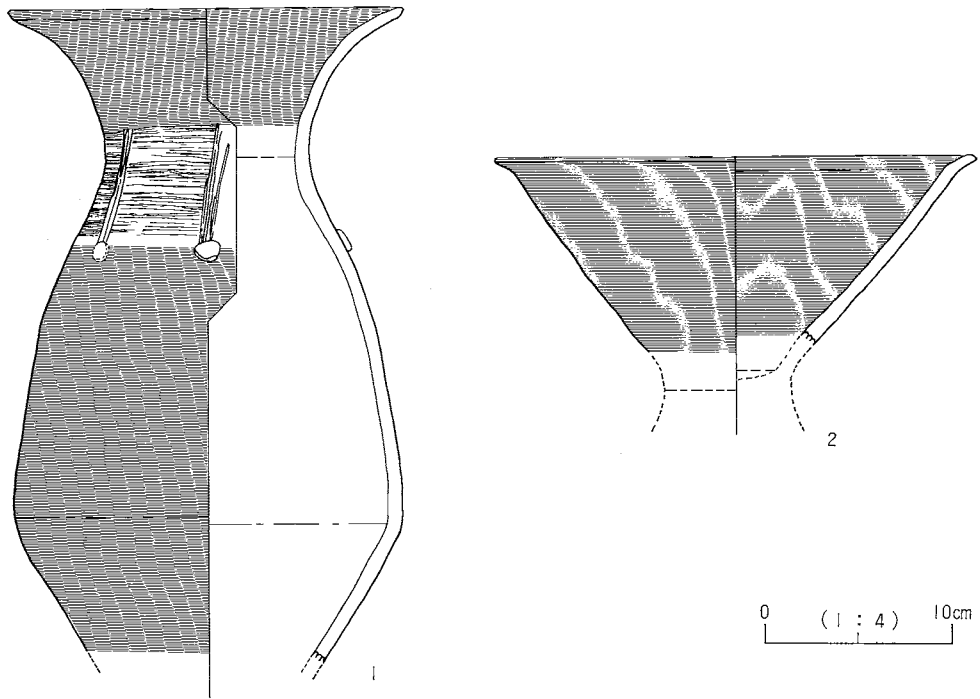




第79図 H11号住居址実測図



第80図 H12号住居址実測図



第81図 H12号住居址出土遺物実測図

#### 8) H12号住居址 (第80図)

検出位置—XXIFく3・く4・き4・き5・か3・か4グリッド。

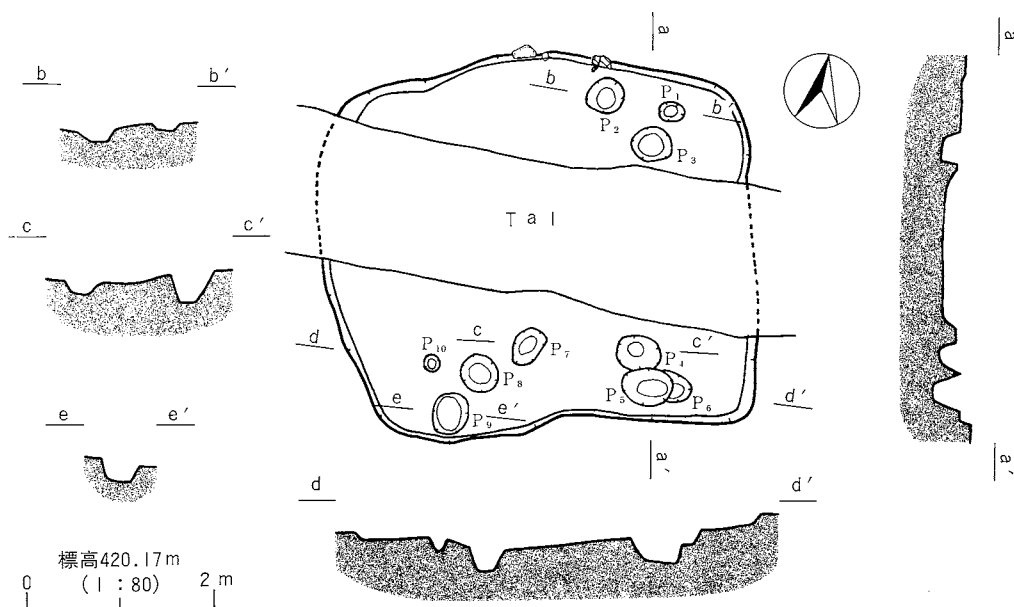
H9・13号住居址、D27~28号土坑址、Ta1・2号竪穴状遺構、F3号掘立柱建物址に切られる。北壁と東西壁の一部が調査区外になるため、全容は把握できなかったが隅丸長方形を呈すると思われる。東壁長は6.82m、南壁長は6.02m、西壁長は5.16mで、南北主軸はN-118°-Eを指す。壁残高は平均16~47cmを測る。床は平坦で、ピットは5基検出した。P<sub>3</sub>・<sub>4</sub>は主柱穴になるとと思われる。遺物は床面から弥生土器甕片が出土している。図示した弥生土器は壺(第81図1)・高坏(第81図2)である。第81図1は頸部に櫛描きT字文を施した後、ボタン状貼り付けが行われる。P<sub>5</sub>から出土した。

時期は弥生時代後期に位置づけられる。

#### 9) H13号住居址 (第82図)

検出位置—XXIFき4・か4グリッド。

H9号住居址を切り構築。長軸3.88m、短軸3.18mの隅丸長方形を呈する。北壁長は3.8m、東



第82図 H13号住居址実測図

壁長は6.08m、南壁長は3.48m、西壁長は3.1mで、主軸方位はN-12°-Wを指す。壁残高は平均3~16cmを測る。ピットは5基検出され、P3・5・8が主柱穴と考えられる。遺物は土師器片が細片で出土したが、図示できるものはない。時期はH8・9号住居址との切り合い関係から古墳時代後期~奈良時代に位置づけたい。

## 2 掘立柱建物址

### 1) F3号掘立柱建物址 (第83図)

検出位置-XXIFか3・き3グリッド。

北壁が調査区外となるため全容は把握できなかったが、建物主軸はN-85°-Eを指す。長辺1.88m、短辺83cmで、各柱穴は平均33×31cmの円形を呈し、深さは25~56cmを測る。遺物は皆無であった。時期は確認面から古墳時代後期~平安時代に位置づけられる。

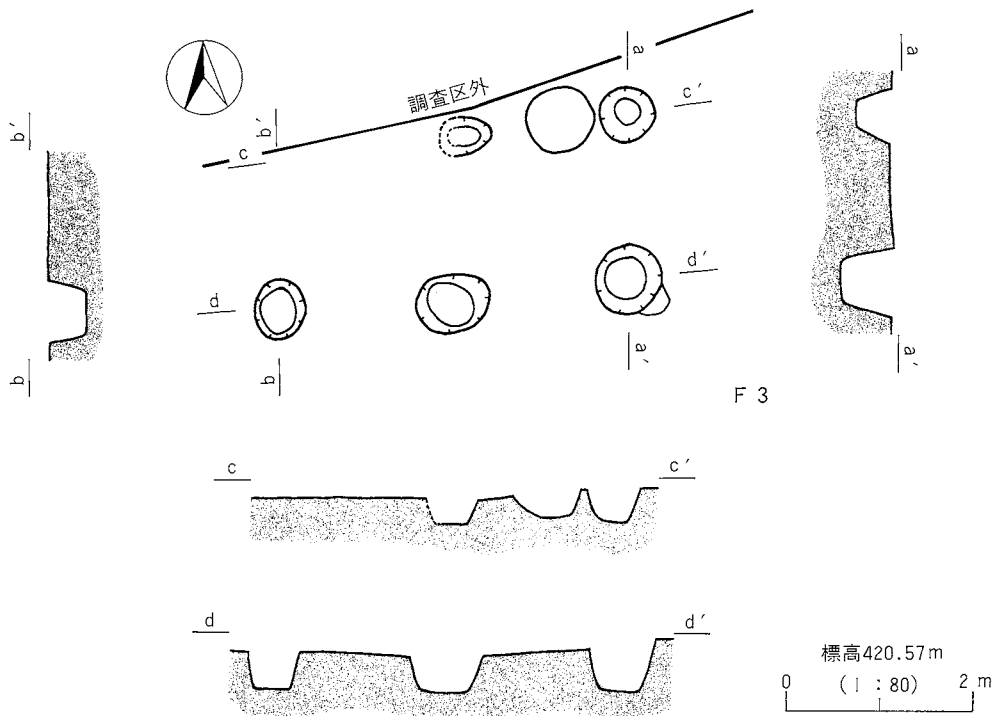
### 2) F4号掘立柱建物址 (第84図)

検出位置-XXIFき7・く7グリッド。

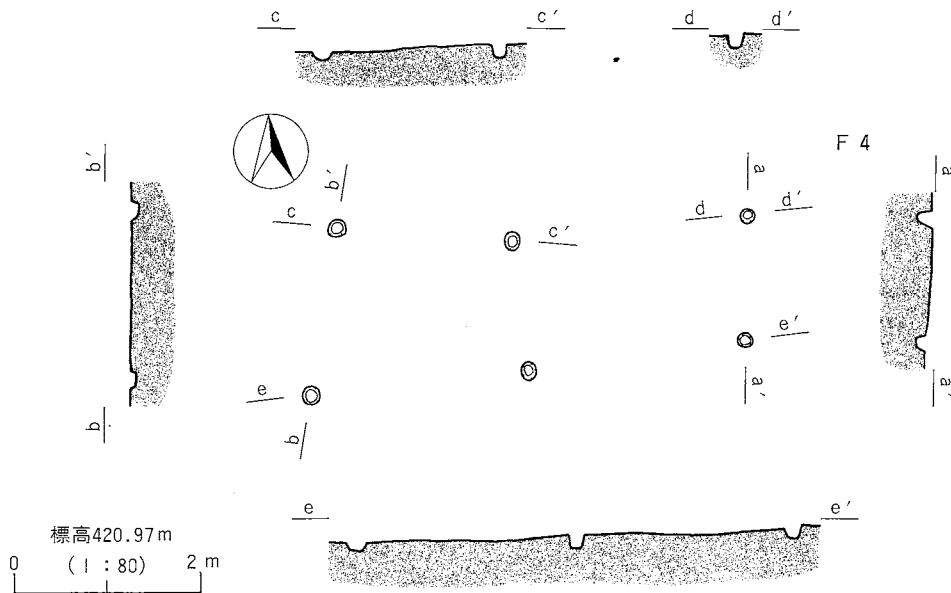
建物主軸はN-93°-Eを指す。長辺2.27cm、短辺79cmで、2間×1間の側柱の建物址を呈する。各柱穴は平均9×9cmの円形を呈し、深さは8~15cmを測る。遺物は皆無であった。切り合い関係から中世の遺構と考えられる。

### 3) F5号掘立柱建物址 (第85図)

検出位置-XXIFけ6・け7・こ6・こ7グリッド。



第83図 F 3号掘立柱建物址実測図



第84図 F 4号掘立柱建物址実測図

建物主軸はN-8°-Eを指す。長辺1.58m、短辺1.11mで、2間×1間の側柱の建物址を呈する。各柱穴は平均27×28cmの円形を呈し、深さは22~49cmを測る。遺物は皆無であった。時期は古墳時代後期~平安時代に位置づけたい。

4) F 6号掘立柱建物址 (第86図)

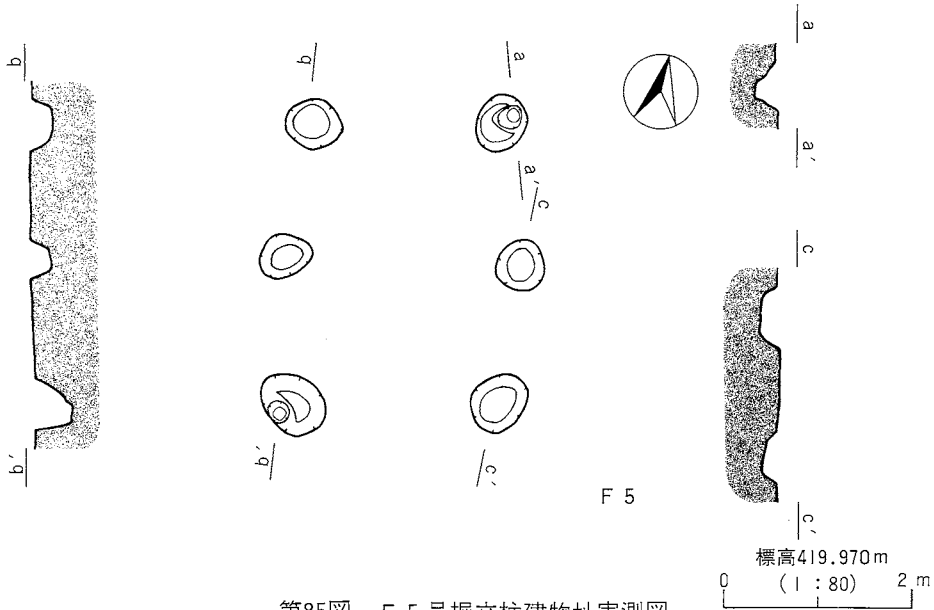
検出位置—XXIFあ4・あ5グリッド。

建物主軸はN-3°-Eを指す。長辺1.74m、短辺1.22mで、2間×1間の側柱の建物址を呈する。各柱穴は平均15×12cmの円形を呈し、深さは13~19cmを測る。中央部のピットは伴うか不明である。遺物は皆無であったが、時期は中世に位置づけたい。

5) F 16号掘立柱建物址 (第87図)

検出位置—XXIAお1・お2・か1・か2グリッド。

建物主軸はN-90°を指す。長辺1.31m、短辺74cmで、1間×1間の側柱の建物址を呈す。各柱穴は平均26×25cmの円形を呈し、深さは22~56cmを測る。遺物は皆無であった。時期は古墳時代後期~平安時代に位置づけたい。



第85図 F 5号掘立柱建物址実測図

### 3 竪穴状遺構

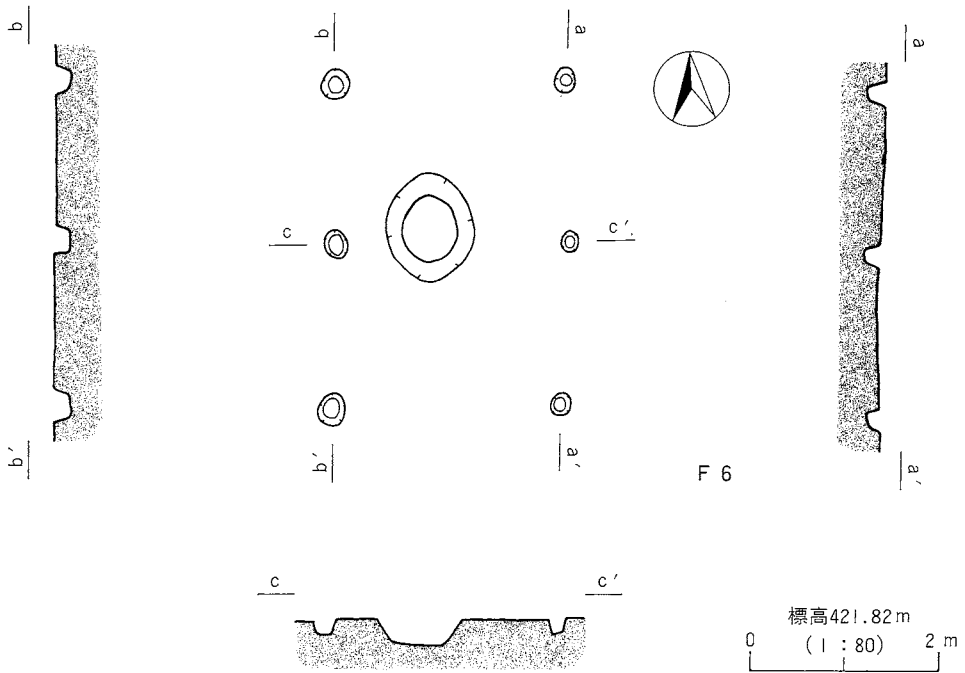
1) T a 1号竪穴状遺構 (第88図)

検出位置—XXIFお4・か4・き4グリッド。

H 7号住居址、D 27号土坑址を切って構築。長軸7.12m、短軸1.20mの不正方形を呈する。壁残高は68~102cmを測り、主軸方位はN-2°-Eを指す。遺物は土師器・黒色土器・須恵器・貨幣(第88図1)・祥符元宝(北宋1008年)が出土している。時期は切り合い関係から中世に位置づけられる。

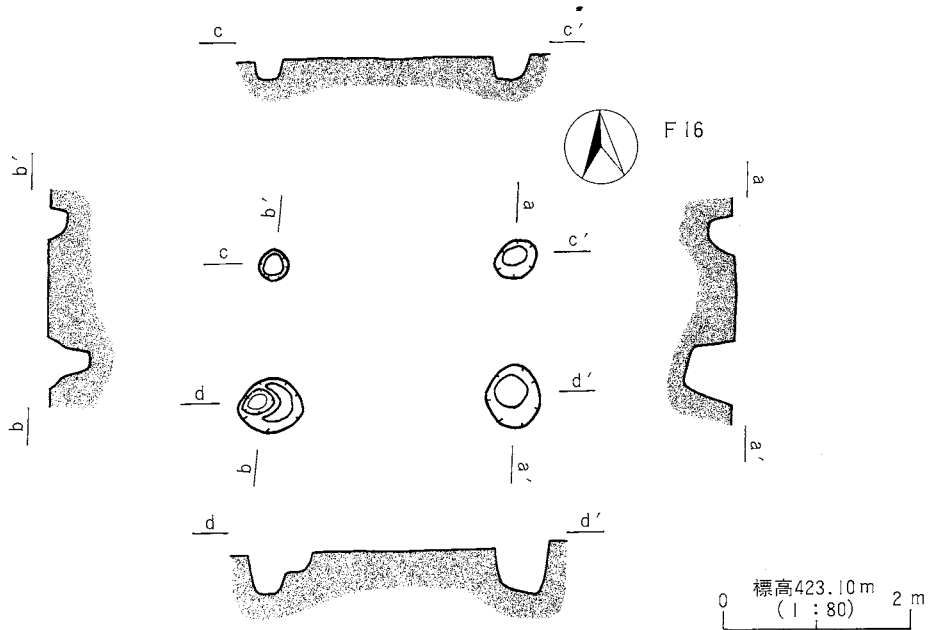
2) T a 2号竪穴状遺構 (第89図)

検出位置—XXIFき5・く5グリッド。



第86図 F 6号掘立柱建物址実測図

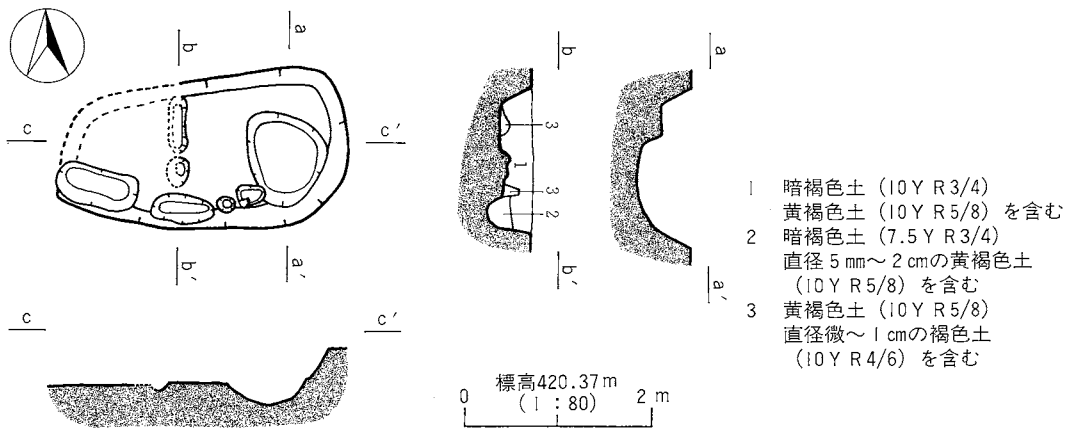
H12号住居址を切って構築。長軸3.04m、短軸1.6mの不正楕円を呈する。壁残高は32cmを測り、主軸方位はN-10°-Eを指す。底面はピットが7基検出されたが、柱穴と判断できない。遺物は須恵器坏が出土している。時期は平安時代（9世紀）に位置づけられる



第87図 F 16号掘立柱建物址実測図



第88図 T a l 号竖穴状遺構実測図



第89図 T a 2号竪穴状遺構実測図

## 4 土坑址

### 1) D 7号土坑址 (第90図)

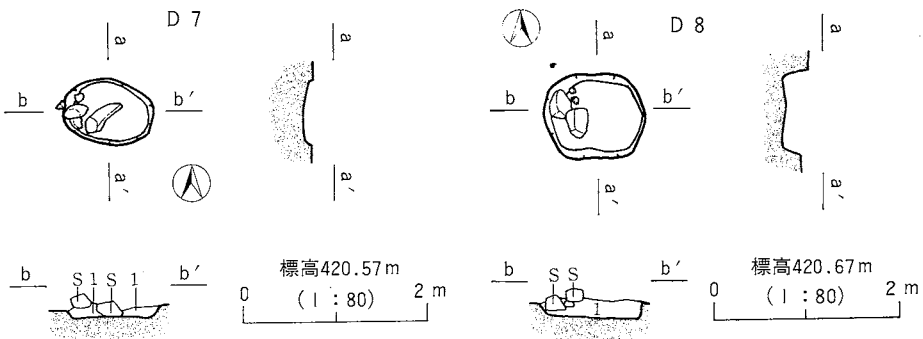
検出位置-XXIFき6グリッド。

長軸98cm、短軸70cmの楕円形。深さ12cm。遺物は黒色土器坏 (第90図1) が出土した。時期は平安時代 (9世紀後半) に位置づけられる。

### 2) D 8号土坑址 (第90図)

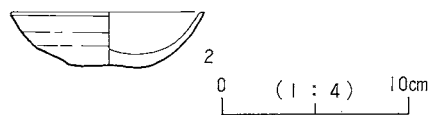
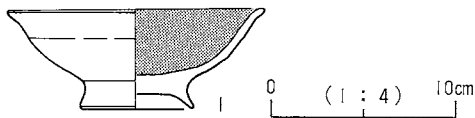
検出位置-XXIFか6グリッド。

長軸1.08m、短軸88cmの楕円形。深さ24cm。遺物は土師器坏 (第90図2) が完形で出土している。時期は平安時代 (10世紀~11世紀初頭) に位置づけられる。



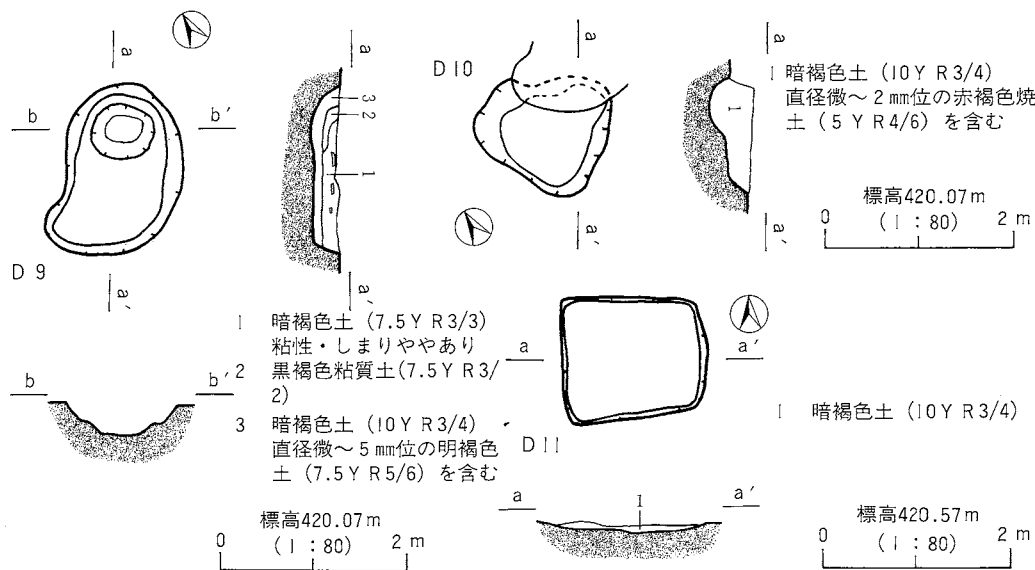
- 1 黒褐色土 (7.5Y R3/2)  
直径微~5mm位の明褐色土 (10Y R1) を含む  
直径1~3cm位の暗褐色土 (10Y R3/4) を含む

- 1 暗褐色土 (10Y R3/4)  
直径微~1cm位の炭化物を含む



第90図 D 7・8号土坑址・出土遺物実測図





### 3) D9号土坑址 (第91図)

検出位置-XXIFけ4・5グリッド。  
D10号土坑址を切る。長軸1.9m、短軸1.28mの楕円形。深さ21cm。遺物は須恵器甕片1点出土している。

### 4) D10号土坑址 (第91図)

検出位置-XXIFけ5グリッド。  
D9号土坑址に切られる。長軸1.38mの楕円形。深さ25cm。

### 5) D11号土坑址 (第91図)

検出位置-XXIFお6・か6グリッド。  
長軸1.56m、短軸1.3mの楕円形。深さ15cm。覆土中からインク瓶が出土したことから、近代以降の土坑である。

### 6) D12~19号土坑址 (第92図)

検出位置-XXIFく4・け4グリッド。  
楕円形の土坑群で、切り合い関係が判明しないまま掘り下げたため、重複関係がはっきりしない。深さはD12が78cm。D13が44cm。D14が26cm。D15が35cm。D16が27cm。D17が24cm。D18が84cm。D19が26cmである。遺物は土師器坏・須恵器蓋片が出土している。完形の土器はなく、小片で覆土中から出土している。時期は平安時代に位置づけられる。

### 7) D20号土坑址 (第93図)

検出位置-XXIFき7グリッド。  
H11号住居址を切り構築。長軸1.34m、短軸1.02mの楕円形。深さ17cm。覆土中から土師器片が出土している。

### 8) D21号土坑址 (第93図)

検出位置-XXIFか7グリッド。  
長軸1.72m、短軸70cmの楕円形。深さ20cm。

### 9) D22号土坑址 (第93図)

検出位置-XXIEう10グリッド。  
長軸1.86m、短軸1.08mの楕円形。深さ26cm。

### 10) D23号土坑址 (第93図)

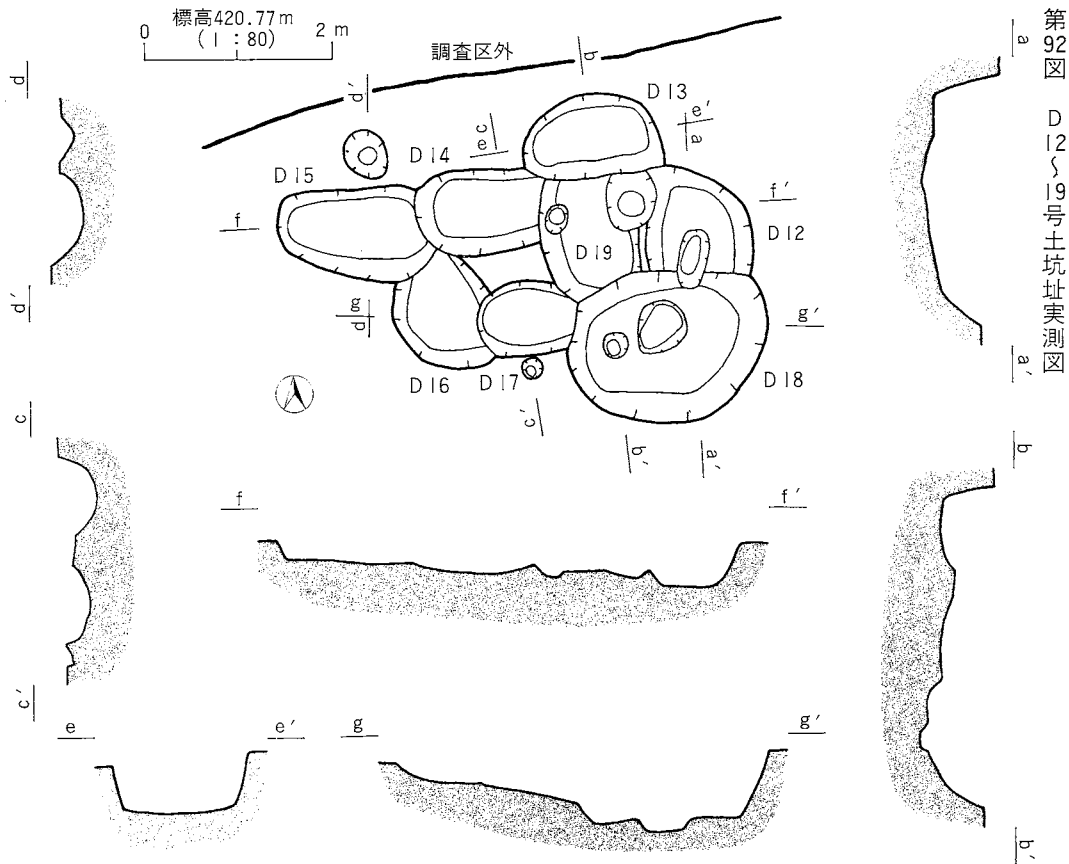
検出位置-XXIAう1・う2グリッド。  
長軸2.14m、短軸1.32mの楕円形。深さ50cm。

### 11) D24号土坑址 (第94図)

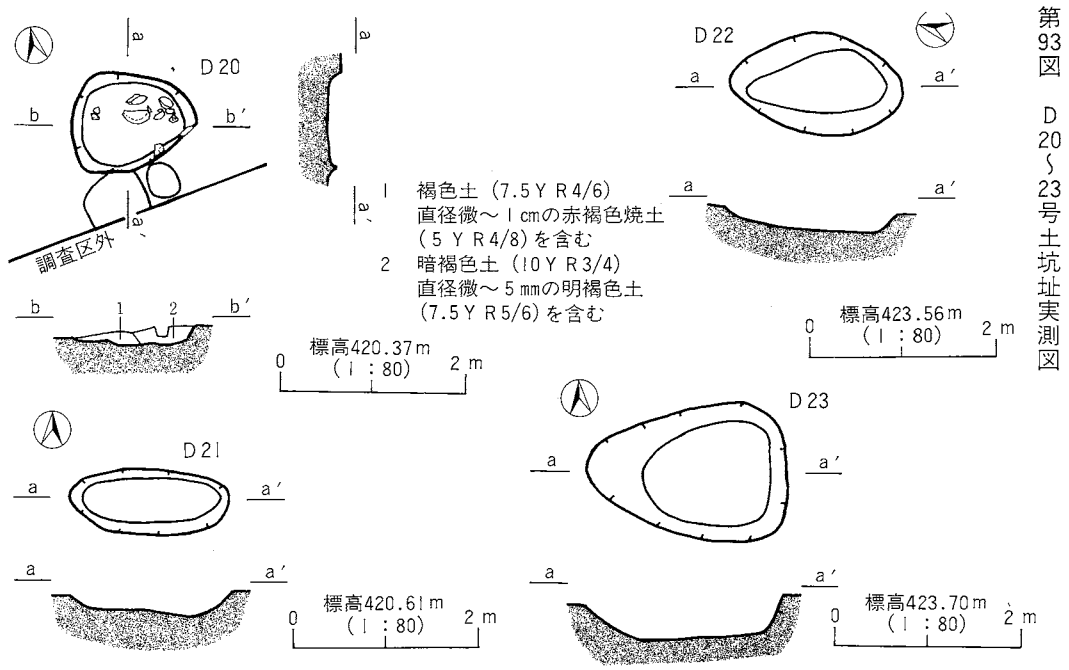
検出位置-XXIFお4グリッド。  
H9号住居址、T a 1号竪穴状遺構址を切り構築。長軸1.72m、短軸1.52mの楕円形。深さ31cm。覆土中から近世陶器片が1点出土していることから、時期は近世に位置づけられる。

### 12) D25号土坑址 (第94図)

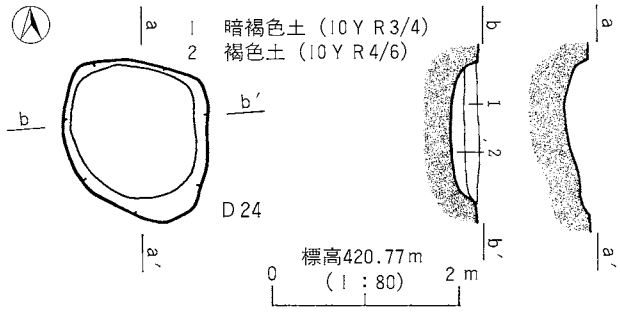
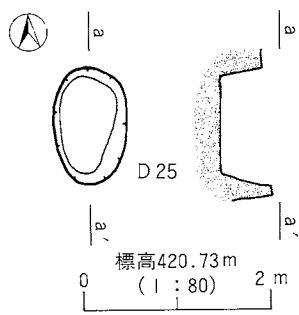
検出位置-XXIFお4・か4グリッド。  
H9号住居址を切り構築。長軸1.2m、短軸70cmの楕円形。深さ50cm。



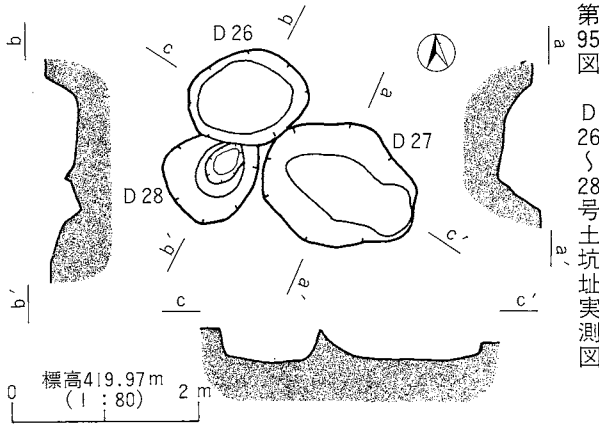
第92図  
D12～19号土坑址実測図



第93図  
D20～23号土坑址実測図



第94図 D24・25号土坑址実測図



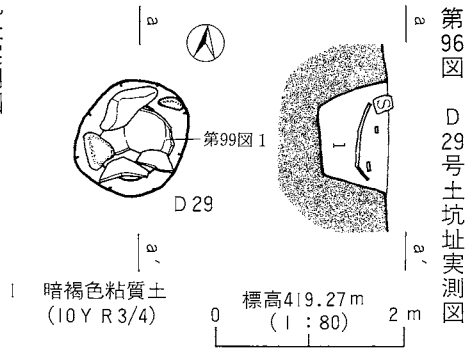
第95図 D26・27・28号土坑址実測図

13) D26・27・28号土坑址 (第95図)

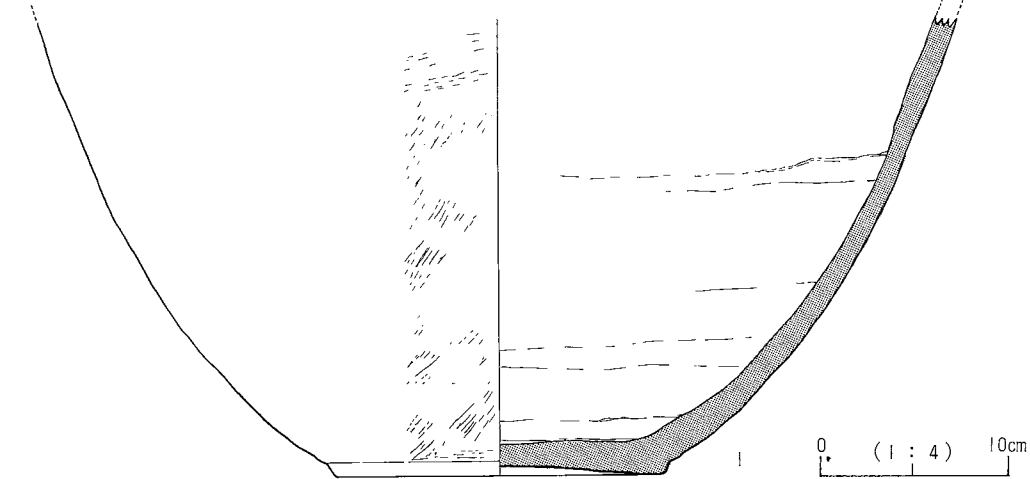
検出位置—XXIFき4・く4グリッド。3基の土坑群でH12号住居址を切り構築。D26は長軸1.3mの楕円形。深さ43cm。D27は長軸1.74m、短軸1.36mの楕円形。深さ38cm。D28は短軸96cmの楕円形。深さ46cm。覆土中から土師器・須恵器が出土した。時期は出土遺物から平安時代(9世紀前半)に位置づけられる。

14) D29号土坑址 (第96図)

検出位置—XXIFく6グリッド。  
H5号住居址埋没後に構築。長軸64cm、短軸58cmの円形。深さ34cm。覆土中から須恵器甕(第99図1)・灰釉陶器片が出土した。時期は平安時代(9世紀後半)に位置づけられる。



第96図 D29号土坑址実測図



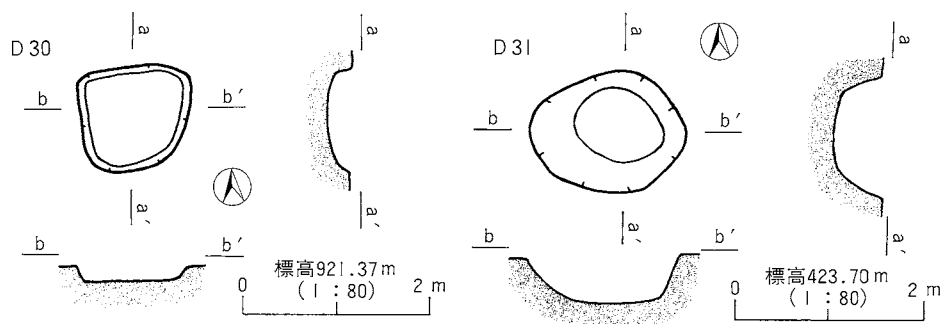
15) D30号土坑址 (第98図)

検出位置—XXIFう5グリッド。  
長軸1.18m、短軸1.12mの楕円形。深さ15cm。

16) D31号土坑址 (第98図)

検出位置—XXIAい3グリッド。  
長軸1.66m、短軸12.8mの楕円形。深さ53cm。

第97図 D29号土坑址出土遺物実測図



## 第4節 III区の遺構と遺物

### 1 竪穴住居址

#### 1) H14号住居址 (第99図)

検出位置—XXEお10・か10、XXIAお1・か1グリッド。

住宅建設に伴う攪乱のため、南側上層が削平されている。長軸2.60m、短軸2.48mの隅丸方形を呈する。北壁長は2.48m、東壁長は2.52m、南壁長は2.28m、西壁長は2.20mで、カマドの主軸方位はN-82°-Eを指す。壁残高は平均9~31cmを測る。床は平坦で、ピットは2基検出された。カマドは東壁中央部に位置し、自然石と粘土によって構築されている。遺物は希薄で土師器・須恵器がカマド周辺部から小片で出土した。図示したのは土師器甕(第99図1)・須恵器(第99図2)である。第99図1は内外面横ナデ調整粘土板を2枚重ねて整形している。第99図2は底部をへら切り+へら削りで調整されている。時期は奈良時代(8世紀前半)に位置づけられる。

#### 2) H15号住居址 (第100図)

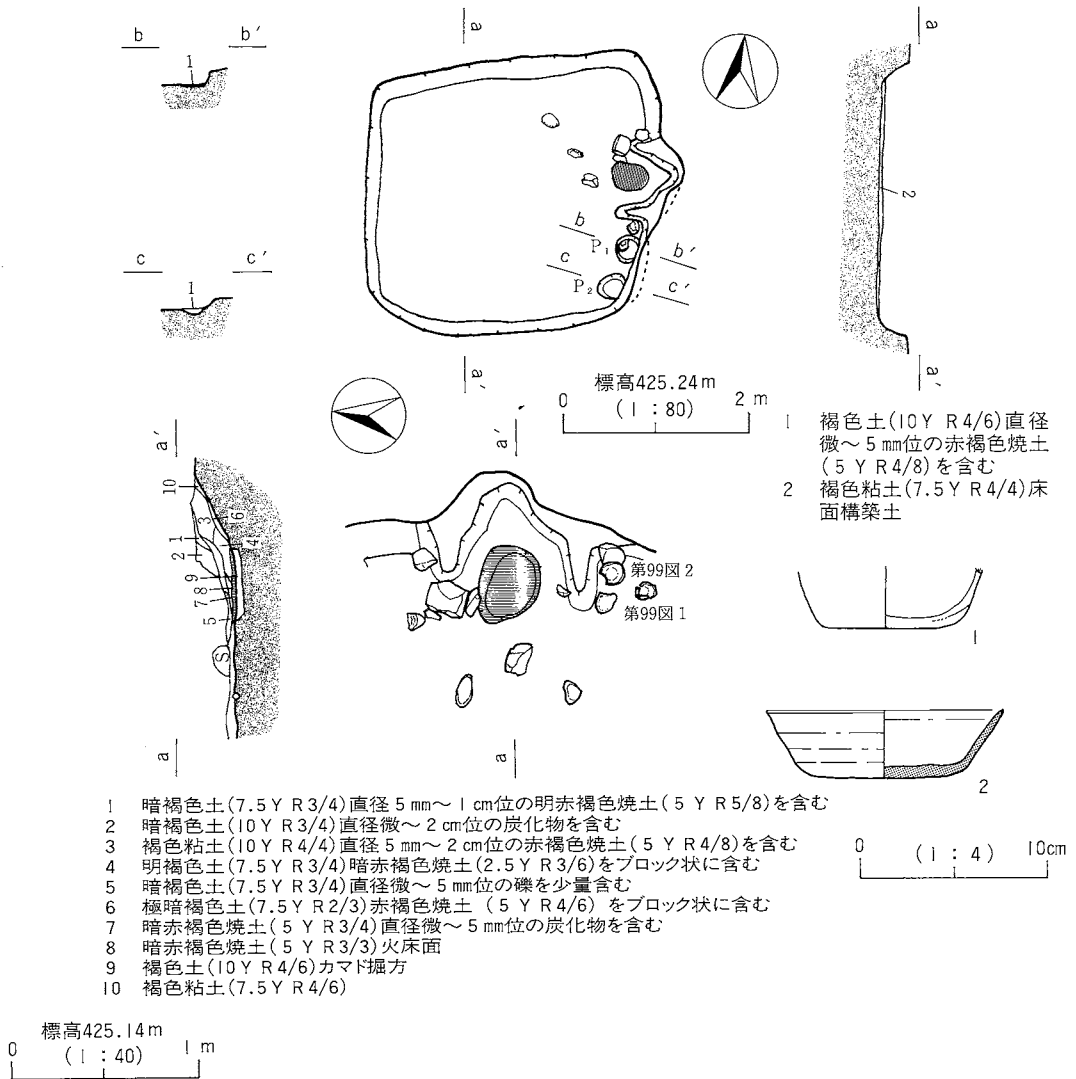
検出位置—XXEく8・く9・け8・け9グリッド。

北壁及び東西壁の一部が調査区外にあたるため全容は確認できなかったが、隅丸長方形を呈すると思われる。南壁長は4.58m、壁残高は平均26~50cmを測る。床面には一面に焼土と炭化物が飛び散っていた。ピットは7基検出され、覆土中には焼土・炭化物を多量に含む。遺物は須恵器が主体に覆土中・床面から出土している。図示できたものは須恵器坏(第100図1・2)・蓋(第100図3)である。第100図1・2は底部回転糸切りの調整である。時期は出土遺物から平安時代(9世紀前半)に位置づけられる。

#### 3) H16号住居址 (第101図)

検出位置—XXIAき1・き2・く1・く2グリッド。

西壁に攪乱が入り破壊され、プラン不明瞭であるが、長軸4.9m、短軸4.76mの隅丸長方形を呈する。東壁長は4.6m、南壁長は4.5m、西壁4.4mで、カマドを主軸とした南北主軸はN-83°-Eを指す。壁残高は11~17cmを測る。床面は全面貼床が施され、平坦な面を成す。ピットは7基検



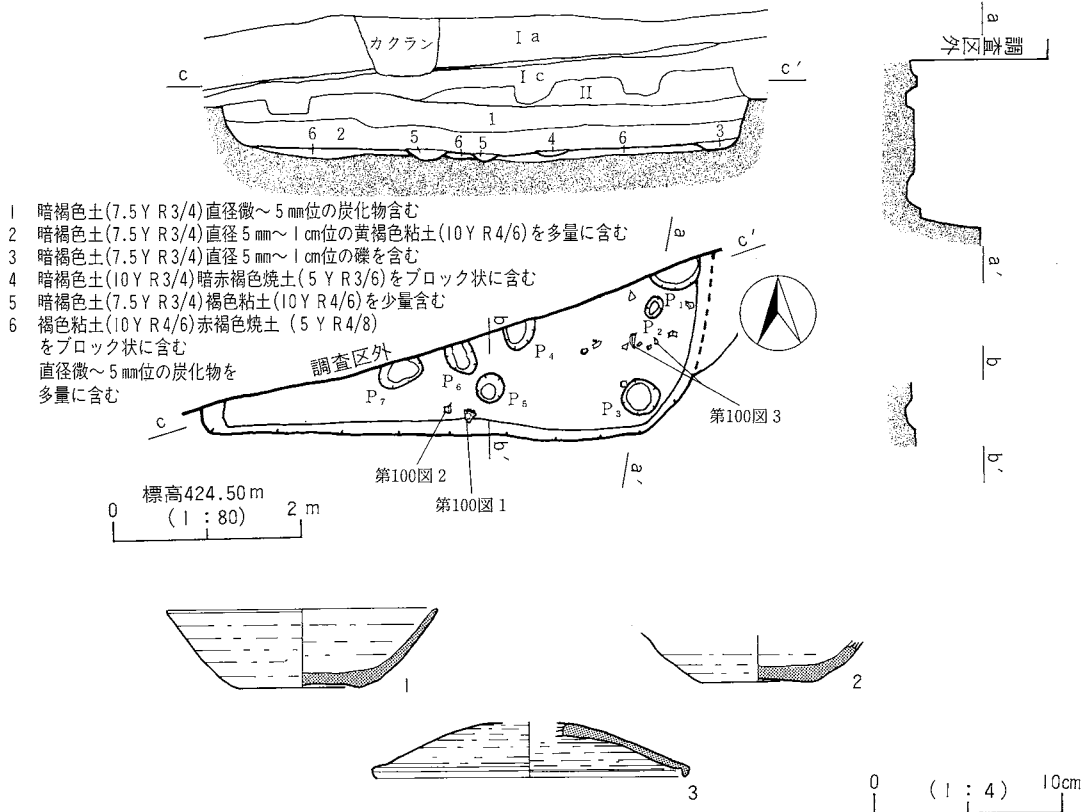
第99図 H14号住居址・出土遺物実測図

出された。カマド南脇にあるP1は貯蔵穴にあたと考えられる。カマドは東壁中央部よりやや南側に位置する。崩落、流出が著しく、袖石と思われる自然石が火床面周辺部に散在している。遺物は覆土中・床面から土師器・黒色土器・須恵器坏、甕が出土している。図示したのは黒色土器碗(第101図1)・須恵器坏(第101図2)である。第101図2は底部回転ヘラ切りで調整されている。時期は奈良時代末~平安時代初頭(8世紀末~9世紀初頭)に位置づけられる。

#### 4) H17号住居址(第102図)

検出位置—XXIAい1・い2グリッド。

D46号土坑址を切り構築。南壁及び東西壁の一部が調査区外になるため全容は把握できない。



第100図 H15号住居址・出土遺物実測図

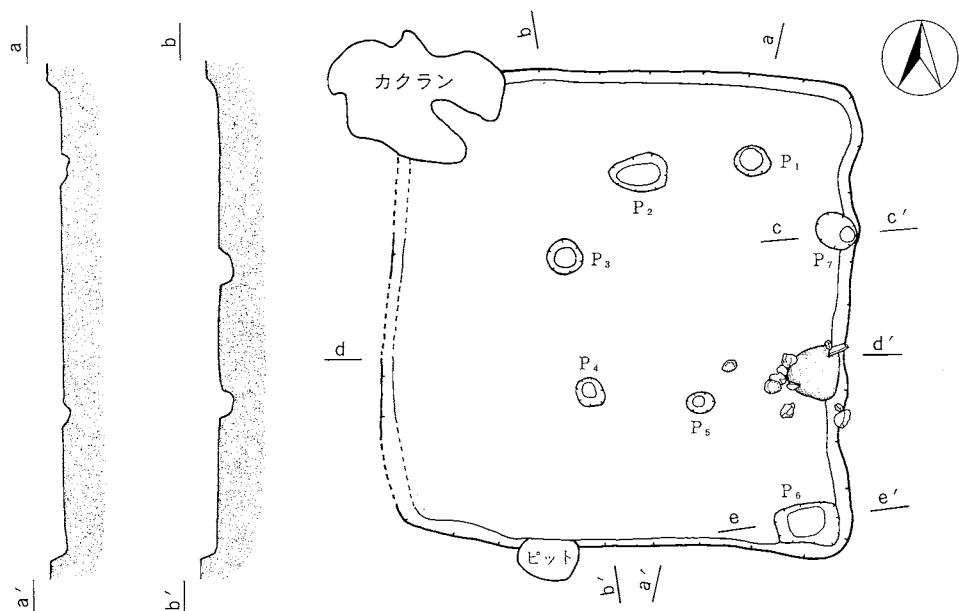
壁残高は8〜35cmを測る。ピットは2基検出された。遺物は土師器・須恵器が細片で覆土中から出土した。時期は平安時代に位置づけたい。

#### 5) H18号住居址 (第103図)

検出位置—XXEい8・い9、う8グリッド。

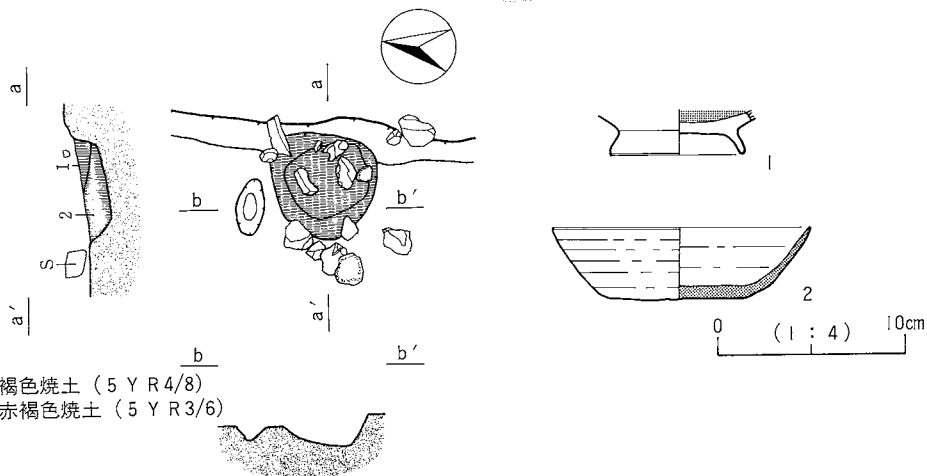
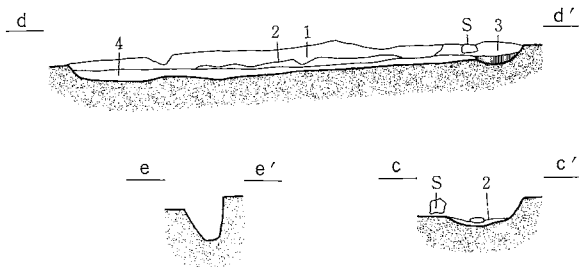
D43号土坑址を切る。長軸3.7m、短軸3.5mの隅丸方形を呈する。北壁長は3.6m、東壁長は3.08m、南壁長は3.1m、西壁長は2.8mで、カマドを主軸とした南北主軸はN-10°-Eを指す。壁残高は10〜34cmを測る。北壁周辺部を除き、全面貼床が施される。ピットは3基検出された。P<sub>1</sub>は貯蔵穴と思われる。上層には直径50cm程の平坦な自然石が堆積していた。カマドは東壁中央部に位置し、自然石と粘土によって構築されている。火床面は真っ赤に焼け込み、中央部には主柱石が置かれていた。遺物はカマド周辺から南壁付近に出土量が多い。土師器・黒色土器・須恵器が出土している。図示したのは底部回転糸切り調整の黒色土器坏(第105図1〜3)・須恵器四耳壺(第105図4・5)である。

時期は平安時代(9世紀後半)と考えられる。



- 1 暗褐色土 (10Y R3/4)  
直径 5 mm ~ 1 cm 位の礫多量に含む
- 2 暗褐色土 (7.5Y R3/4)
- 3 暗褐色土 (10Y R3/4)  
1層に比べ
- 4 褐色土 (7.5Y R4/4)  
床面構築土

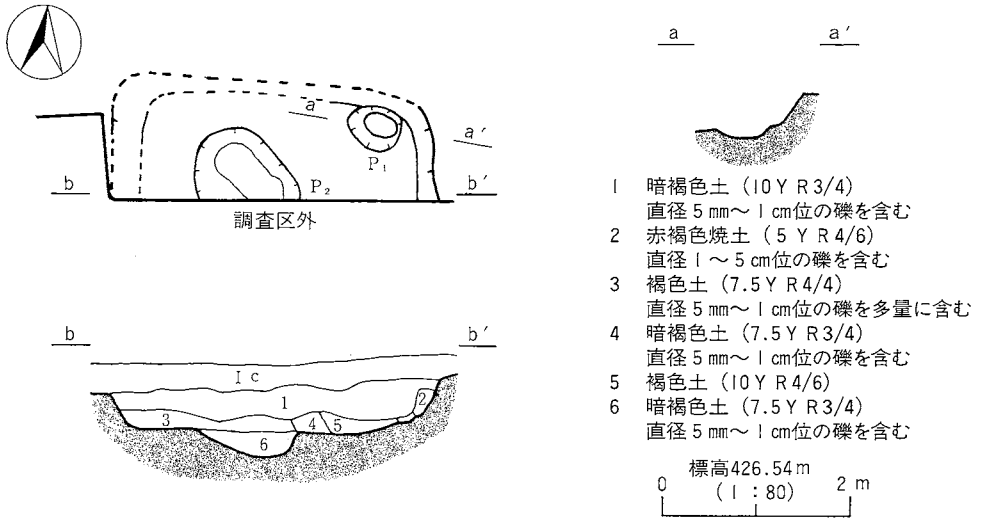
標高425.04 m  
0 (1 : 80) 2 m



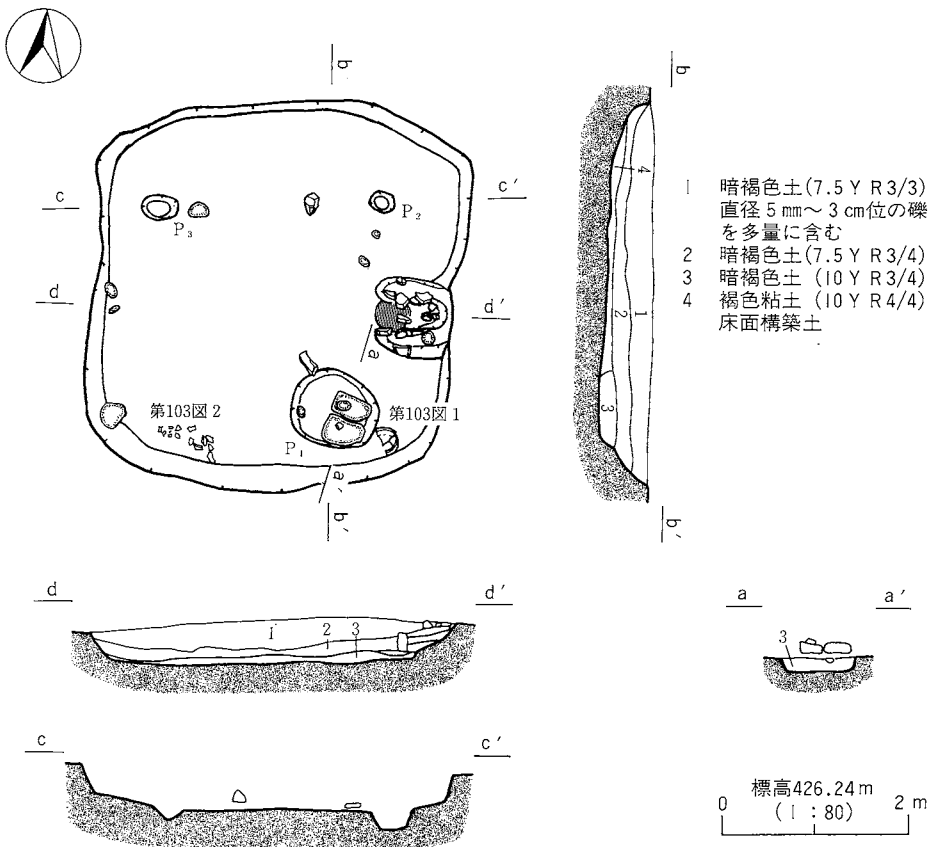
- 1 赤褐色焼土 (5 Y R4/8)
- 2 暗赤褐色焼土 (5 Y R3/6)

標高425.04 m  
0 (1 : 40) 1 m

第101図 H16号住居址・カマド・出土遺物実測図

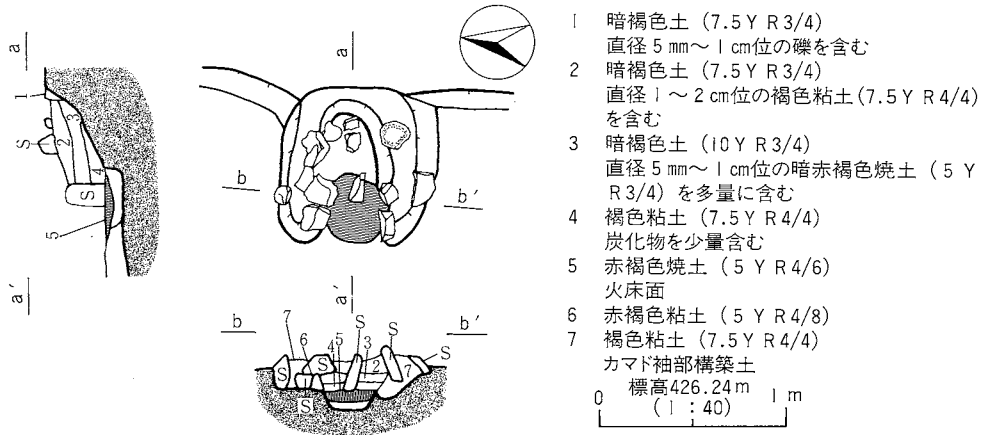


第102図 H17号住居址実測図

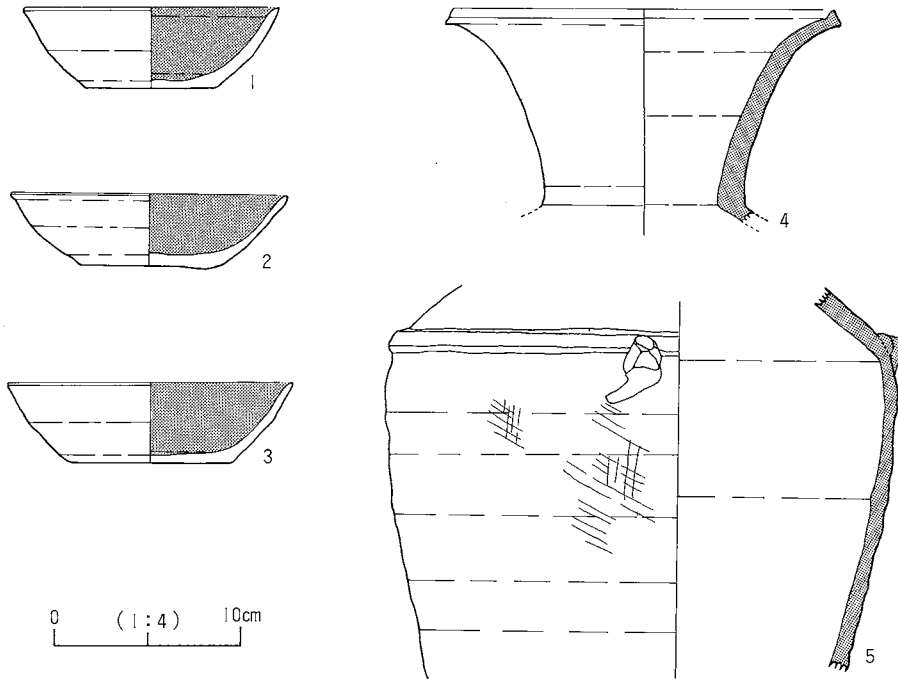


第103図 H18号住居址実測図





第104図 H18号住居址カマド実測図

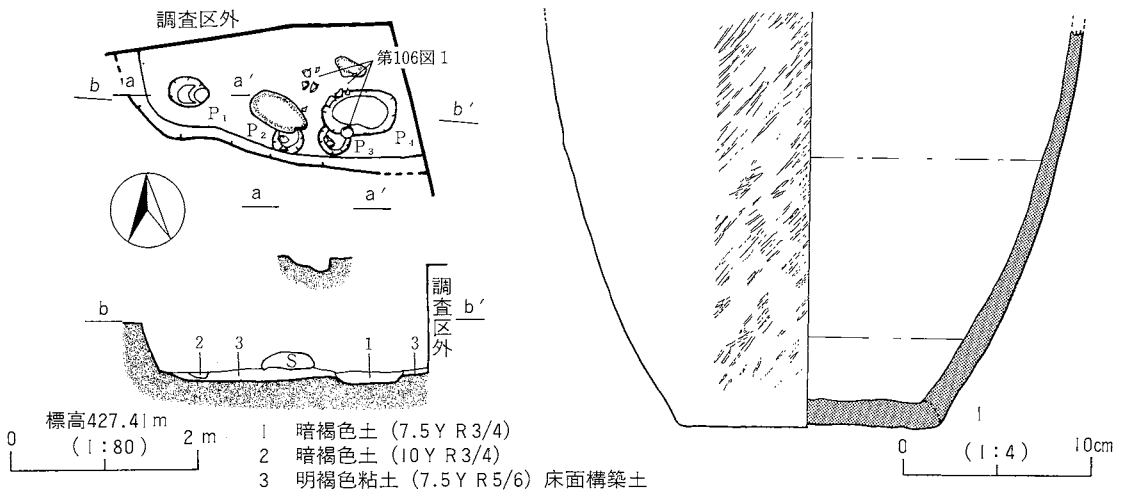


第105図 H18号住居址出土遺物実測図

6) H21号住居址 (第106図)

検出位置 - XVIIY お5・か5グリッド。

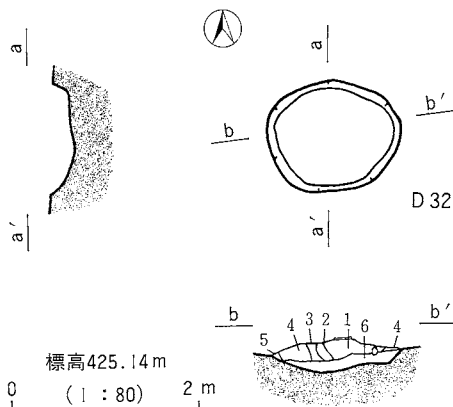
北壁及び東西壁が調査区外になるため全容は把握できない。壁残高は平均27~64cmを測る。全面貼床で非常に堅固である。ピットは4基検出された。床面に直径50cm程の河原石が南壁コーナーで検出したが用途は不明である。床面には須恵器甕片が粉碎され散在していた。人為的な破棄と考えられる。図示した須恵器甕 (第106図1) は外面叩きによる調整が施されている。時期は平安時代 (9世紀) に位置づけられる。



第106図 H21号住居址出土遺物実測図

## 2 土坑址

第107図  
D 32号土坑址・出土遺物実測図



- 1 暗褐色土 (10Y R3/4)  
直径5mm~1cm位の礫を含む  
直径1~8cm位の鉄を含む
- 2 黒褐色土 (10Y R2/3)  
直径5mm~2cm位の炭化物を多量に含む  
直径5mm~2cm位の鉄を含む
- 3 暗褐色土 (10Y R3/3)  
直径微~5mm位の炭化物を少量含む
- 4 暗褐色土 (7.5Y R3/4)  
直径5mm~3cm位の礫を多量に含む
- 5 暗褐色土 (7.5Y R3/4)  
直径5mm位の礫を含む
- 6 暗褐色土 (7.5Y R3/3)  
直径5mm~3cm位の礫を含む

### 1) D 32号土坑址 (第107図)

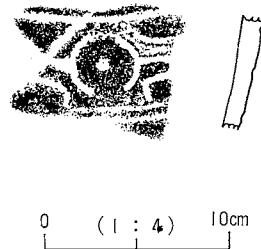
検出位置-XXIEか8・き8グリッド。  
長軸1.42m、短軸1.18mの楕円形。深さ23cm。遺物は鉄滓・須恵器甕片が出土した。下層から縄文土器鉢片1個体分出土した。時期は平安時代に位置づけたい。

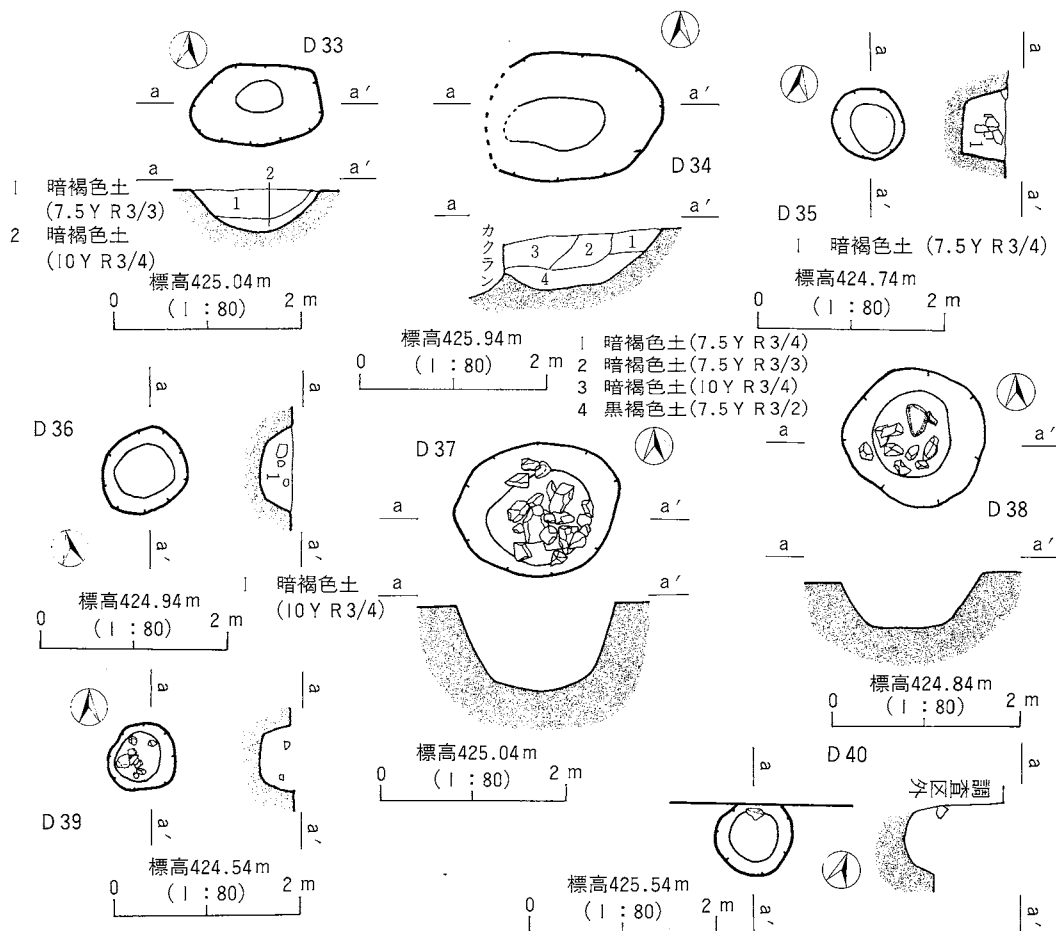
### 2) D 33号土坑址 (第108図)

検出位置-XXIAか1・き1グリッド。  
長軸1.4m、短軸90cmの楕円形。深さ47cm。

### 3) D 34号土坑址 (第108図)

検出位置-XXIEう9グリッド。  
短軸1.34mの楕円形。深さ69cm。上層から縄文土器が出土。





4) D 35号土坑址 (第108図)

検出位置—XXIEく9グリッド。  
長軸80cm、短軸74cmの円形。深さ48cm。

6) D 37号土坑址 (第108図)

検出位置—XXIEけ9グリッド。  
長軸72cm、短軸72cmの円形。深さ30cm。

8) D 39号土坑址 (第108図)

検出位置—XXIEく9グリッド。  
長軸1.54m、短軸1.52mの円形。深さ30.5cm。

10) D 41号土坑址 (第109図)

検出位置—XXEい6・い7・う6・う7グリッド。  
長軸1.6m、短軸1.36mの楕円形。深さ21cm。

12) D 43号土坑址 (第109図)

検出位置—XXIEあ8・あ9・い8・い9グリッド。  
H18号住居址に切られる。長軸1.18mの楕円形。深さ82cm。

14) D 45号土坑址 (第109図)

検出位置—XXEい10、XXIAい1グリッド。  
短軸68cmの楕円形。深さ49cm。

5) D 36号土坑址 (第108図)

検出位置—XXIEき8グリッド。  
長軸1m、短軸86cmの楕円形。深さ35cm。

7) D 38号土坑址 (第108図)

検出位置—XXIEき9グリッド。  
長軸1.78m、短軸1.4mの卵形。深さは47cm。

9) D 40号土坑址 (第108図)

検出位置—XXIEく8グリッド。  
長軸84cmの円形。深さ37.5cm。

11) D 42号土坑址 (第109図)

検出位置—XXEい7・う7グリッド。  
長軸3.48m、短軸1.68mの楕円形。深さ78cm。

13) D 44号土坑址 (第109図)

検出位置—XXIYけ7・こ7グリッド。  
長軸1.6m、短軸82cmの楕円形。深さ38cm。

15) D 46号土坑址 (第109図)

検出位置—XXIAう1グリッド。  
H17号住居址に切られる。深さ52cm。

16) D 61号土坑址 (第109図)

検出位置-XIIIYき8・く8グリッド。  
長軸1.24m、短軸80cmの楕円形。深さ44cm。

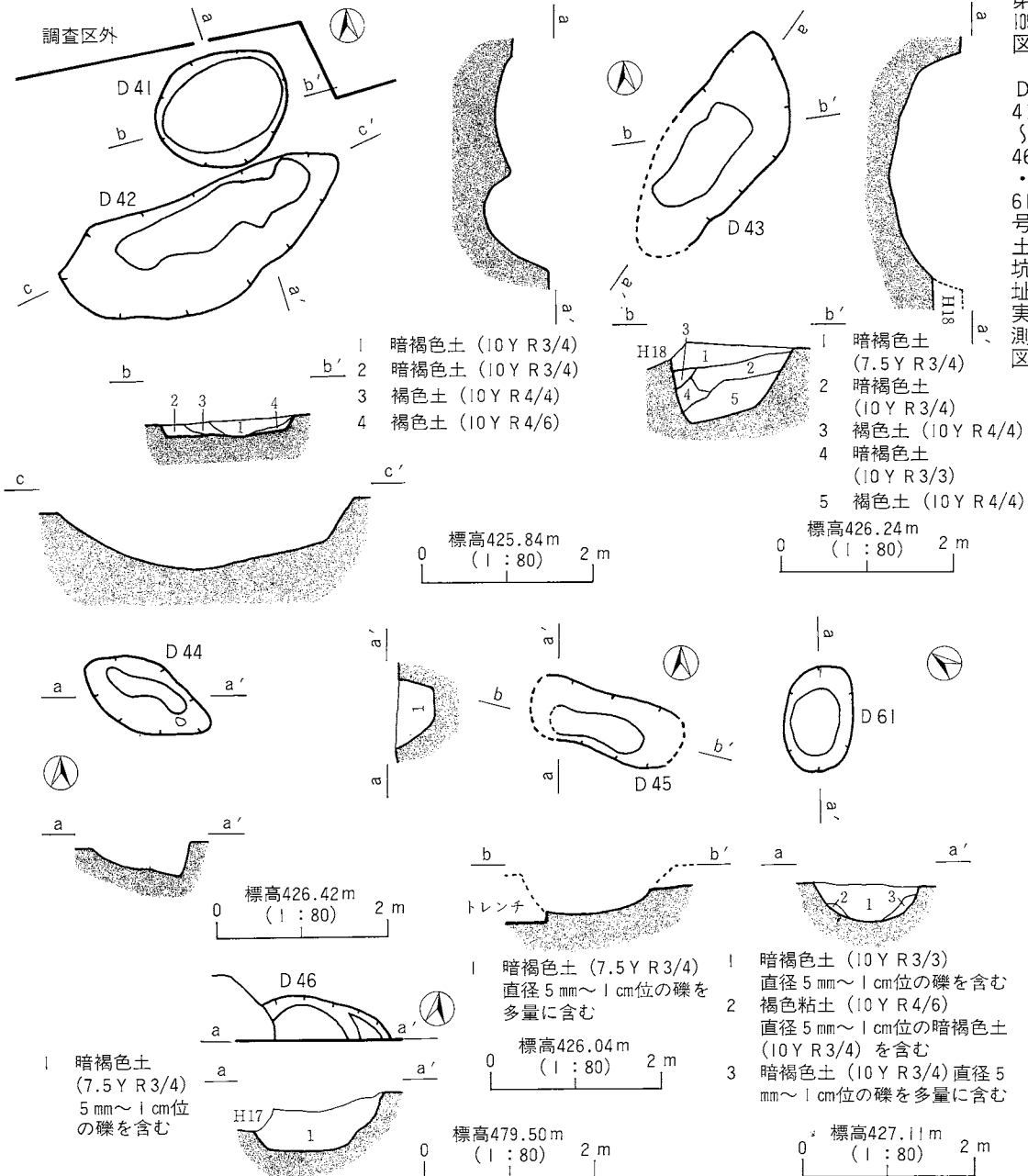
17) D 62号土坑址 (第110図)

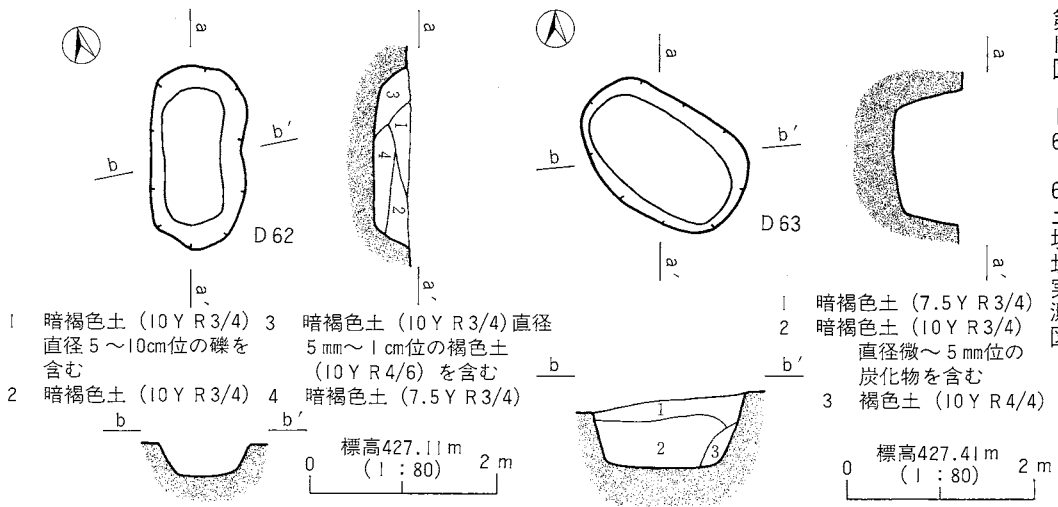
検出位置-XIIIYき8・き9グリッド。  
長軸1.96m、短軸96cmの楕円形。深さ41cm。  
D33~D44・61~63土坑の時期は柱出面から縄文時代  
~平安時代に位置づけたい。

18) D 63号土坑址 (第110図)

検出位置-XIIIYき7グリッド。  
長軸1.9m、短軸1.24mの楕円形。深さ83cm。

第109図  
D 41  
S 46  
・ 61号土坑址実測図





## 第5節 IV区の遺構と遺物

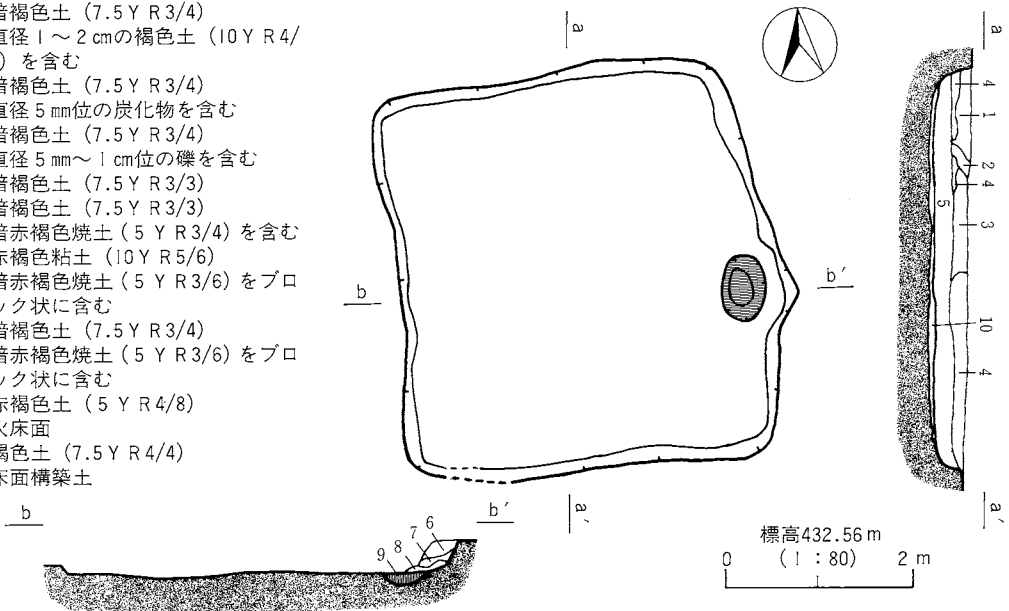
### 1 竪穴住居址

#### 1) H19号住居址 (第111図)

検出位置—XVIN え9・え10・お9・お10グリッド。

H19号住居址を切る。長軸3.98m、短軸3.92mの隅丸方形を呈する。北壁長は3.4m、東壁長は3.8m、南壁長は3.6m、西壁長は3.66mで、カマドを主軸とした南北主軸はN-90°-Eを指す。

- 1 褐色土 (7.5Y R4/4)
- 2 暗褐色土 (7.5Y R3/4) 直径1~2cmの褐色土 (10Y R4/6) を含む
- 3 暗褐色土 (7.5Y R3/4) 直径5mm位の炭化物を含む
- 4 暗褐色土 (7.5Y R3/4) 直径5mm~1cm位の礫を含む
- 5 暗褐色土 (7.5Y R3/3)
- 6 暗褐色土 (7.5Y R3/3) 暗赤褐色焼土 (5Y R3/4) を含む
- 7 赤褐色粘土 (10Y R5/6) 暗赤褐色焼土 (5Y R3/6) をブロック状に含む
- 8 暗褐色土 (7.5Y R3/4) 暗赤褐色焼土 (5Y R3/6) をブロック状に含む
- 9 赤褐色土 (5Y R4/8) 火床面
- 10 褐色土 (7.5Y R4/4) 床面構築土



第111図 H19号住居址実測図

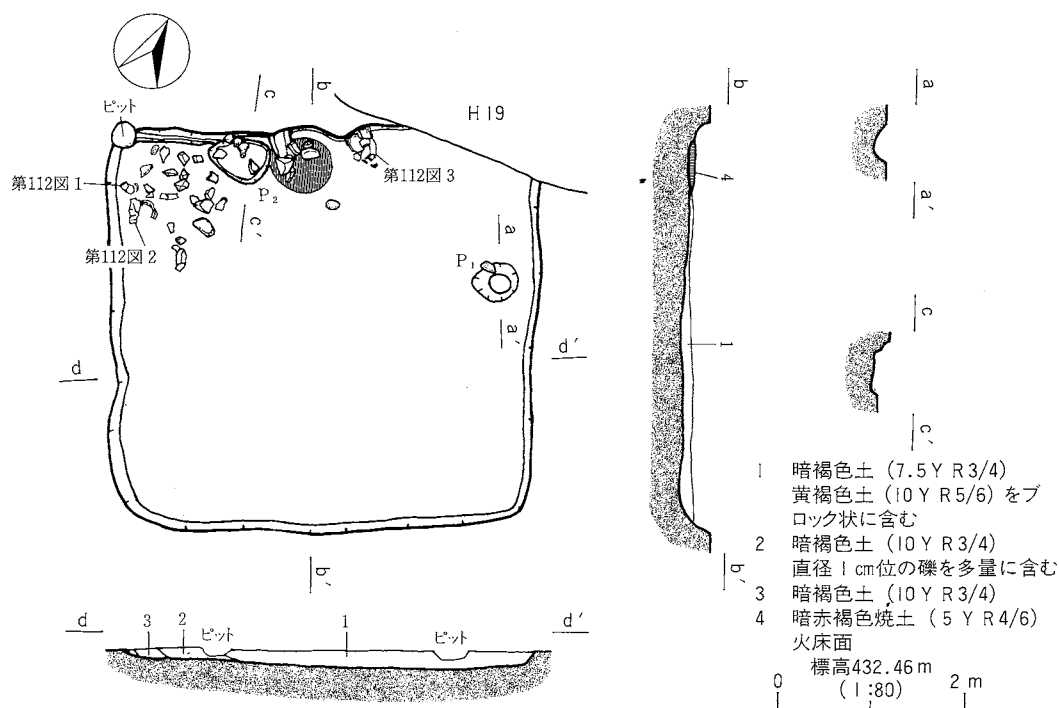
壁残高は平均13～36cmを測る。床面は平坦でピットは検出されなかった。カマドは東壁中央部に位置し、火床面の残存していた。遺物は覆土中から土師器・須恵器が細片で出土した。時期は平安時代（9世紀前期）に位置づけられる。

## 2) H 20号住居址 (第112図)

検出位置—XVIN え 8・え 9・お 8・お 9 グリッド。

H19号住居址に切られる。長軸4.40m、短軸4.08mで隅丸長方形を呈する。南壁長は3.98m、西壁長は3.92mで、カマドを主軸とした南北主軸はN-26°-Wを指す。壁残高は平均6～16cmを測る。西壁には周溝が巡り深さは3～5cm程を測る。床面はカマド周辺部が堅固だった以外軟弱であった。ピットは2基検出された。P<sub>2</sub>は貯蔵穴と思われ、袖石に使用されたと思われる自然石が出土した。カマドは北壁中央部に位置する。火床面のみであった。遺物は土師器主体で北西壁付近に集中して出土した。土師器甕・円筒型土製品等カマドに使用される土器群が投げ込まれていた。図示したのは、円筒型土製品(第113図1・2)、土師器甕(第113図3)である。

時期は古墳時代末～奈良時代に位置づけられる。



第112図 H 20号住居址実測図

## 3) H 22号住居址 (第114図)

検出位置—XVIIY あ 5・い 4・い 5 グリッド。

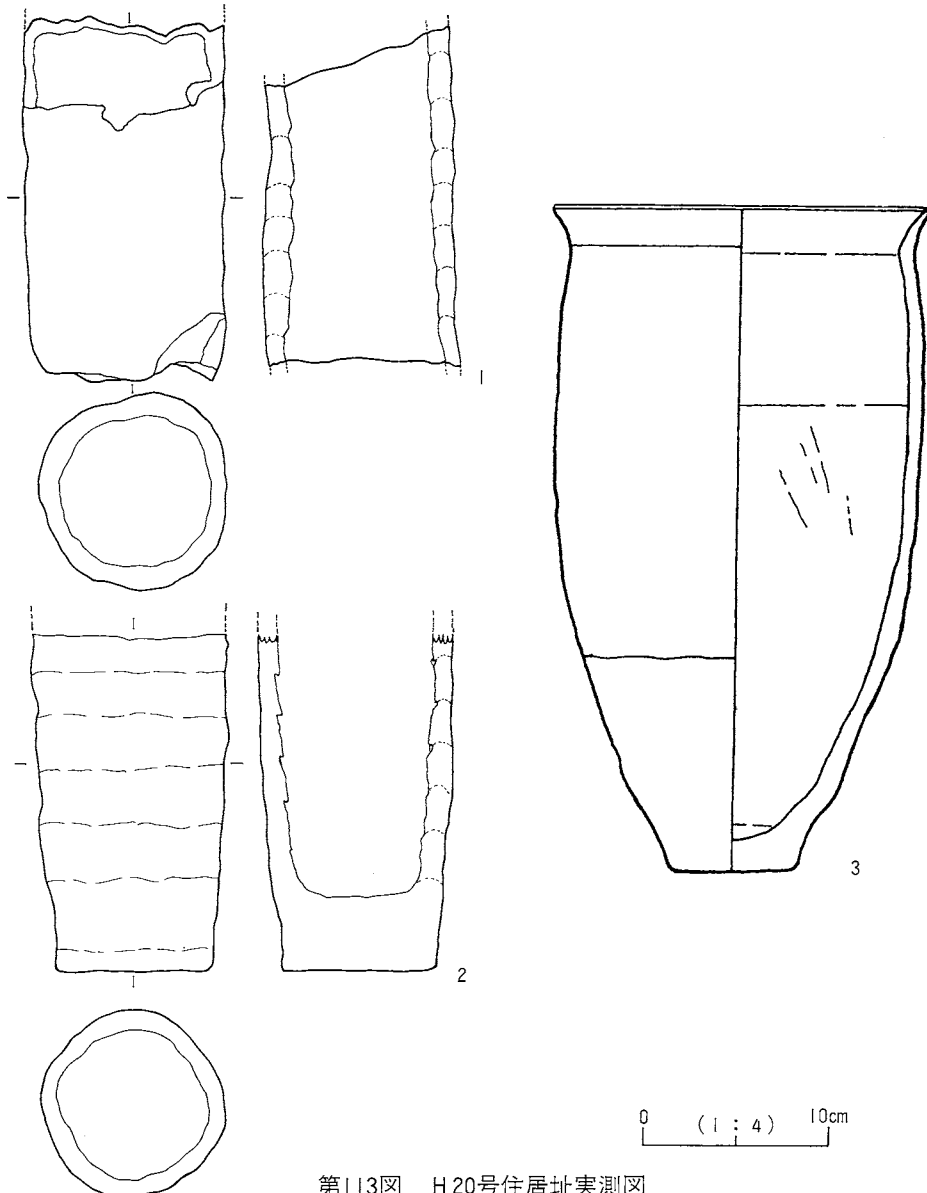
H24号住居址埋没後構築。長軸3.56m、短軸3.42mの隅丸方形を呈する。北壁長は2.78m、東

壁長は3.4m、南壁長は3.14m、西壁長は3.02mで、カマドを主軸とした南北主軸はN-100°-Eを指す。壁残高は平均11~31.5cmを測る。床面は非常に軟弱である。ピットは3基検出した。P<sub>2</sub>が貯蔵穴と思われる。カマドは自然石による構築である。遺物は土師器坏・椀・甕片が出土した。図示したのは底部回転糸切りの土師器坏（第115図1・2）・須恵器坏（第115図3）である。

時期は平安時代（10世紀）に位置づけられる。

#### 4) H23号住居址（第116図）

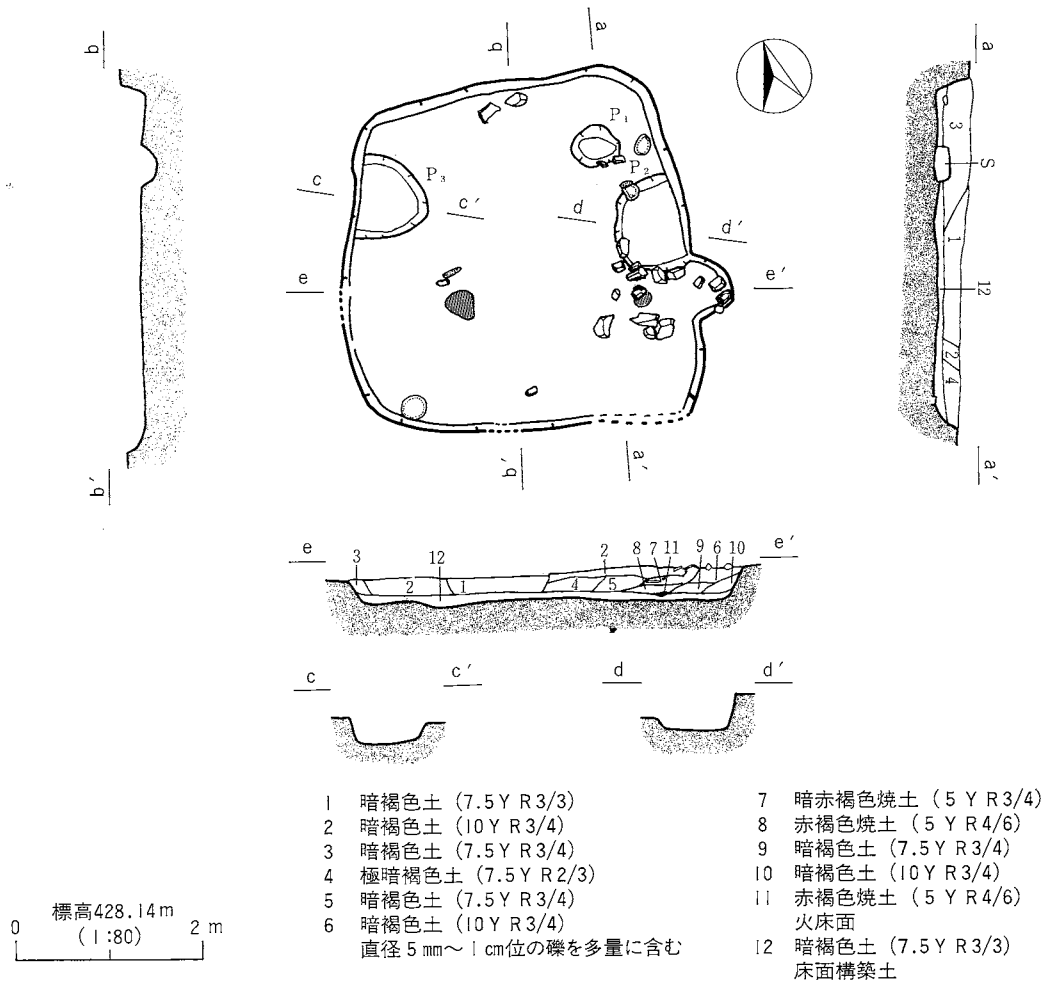
検出位置-WVIIYあ4・あ14グリッド。



第113図 H20号住居址実測図

H22・24号住居址を切り構築。北壁及び東西壁の一部が調査区外となり、全容は把握できないが、短軸3.20mの隅丸長方形を呈すると思われる。南壁長は3.20mで、カマドを主軸とした南北主軸はN-90°-Eを指す。壁残高は18~37cmを測る。床面は平坦で、置物は土師器・須恵器が出土した。図示したのは須恵器甕(第117図1)・坏(第117図2)である。

時期は平安時代(9世紀前半)に位置づけられる。



第114図 H22号住居址実測図

### 5) H24号住居址(第119図)

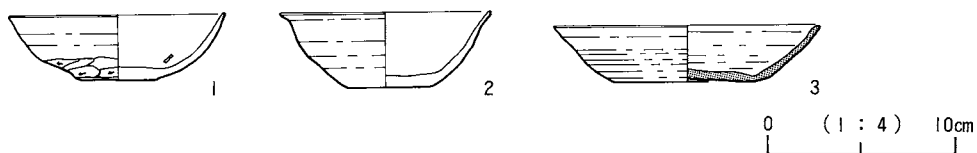
検出位置-XVIIYあ4・あ5・い4・い5グリッド。

北壁をH23号住居址に切られる。南壁の一部を攪乱で破壊されている。長軸6.04m、短軸5.98mの隅丸長方形を呈する。北壁長は4.52m、東壁長は5.56m、南壁長は5.68m、西壁長は4.66mで、カマドは2期検出され、主軸とした南北主軸はN-88°-E、N-105°-Eを指す。壁残高は

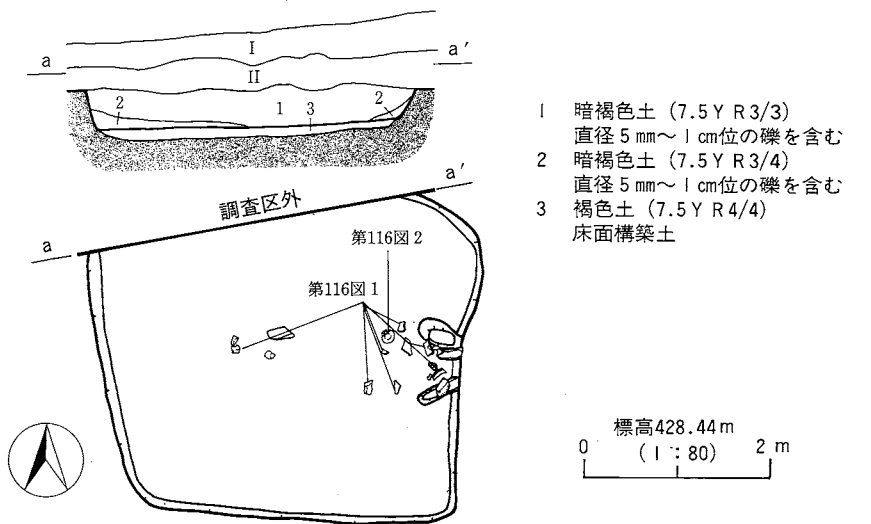


12.5~56cmを測る。ピットは19基検出した。P<sub>3</sub>・7・18・19が支柱穴と考えられる。床面は平坦である。西壁周辺の床面に自然石が規則的に並んでいた。遺物は散在して土師器・須恵器が出土した。図示したのは土師器坏（第118図1）・須恵器坏（第118図2~9）・蓋（第118図10）・壺（第118図11）である。

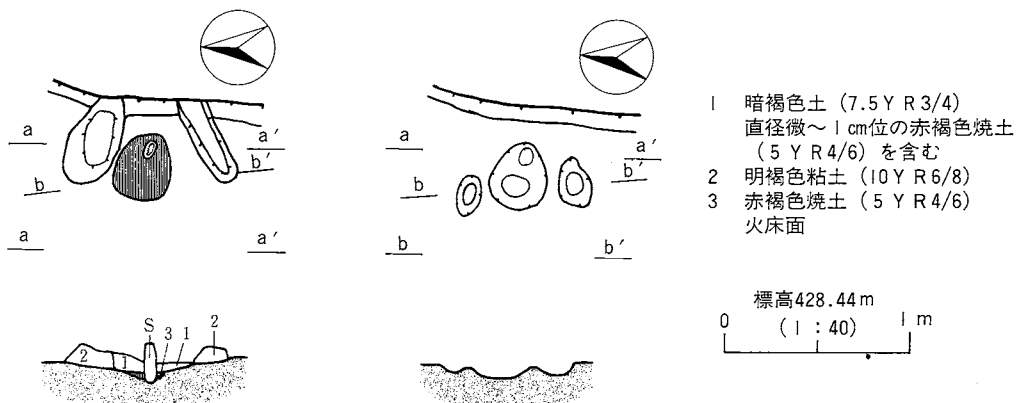
時期は奈良時代末~平安時代（8世紀末~9世紀前半）に位置づけられる。



第115図 H22号住居址出土遺物実測図

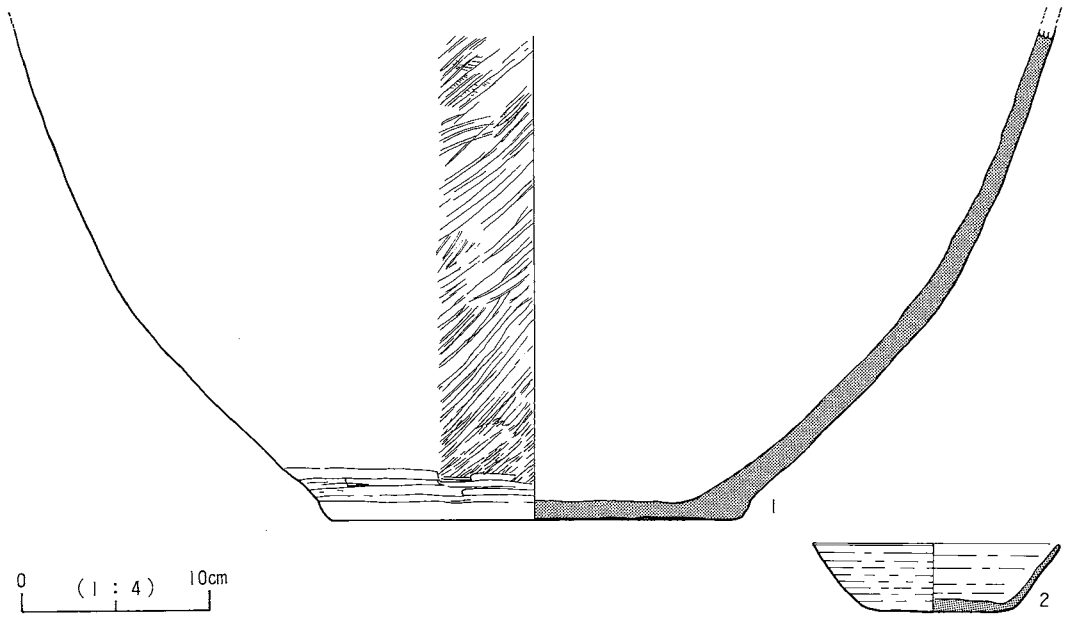


- 1 暗褐色土 (7.5Y R3/3)  
直径5mm~1cm位の礫を含む
- 2 暗褐色土 (7.5Y R3/4)  
直径5mm~1cm位の礫を含む
- 3 褐色土 (7.5Y R4/4)  
床面構築土

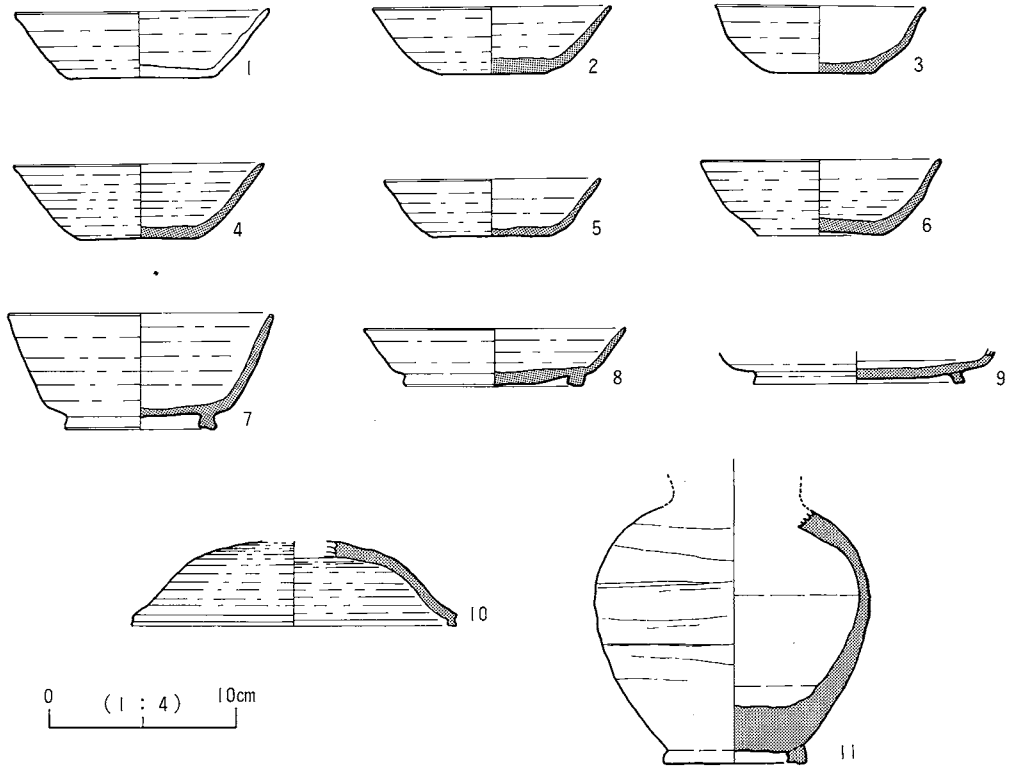


- 1 暗褐色土 (7.5Y R3/4)  
直径微~1cm位の赤褐色焼土  
(5Y R4/6)を含む
- 2 明褐色粘土 (10Y R6/8)
- 3 赤褐色焼土 (5Y R4/6)  
火床面

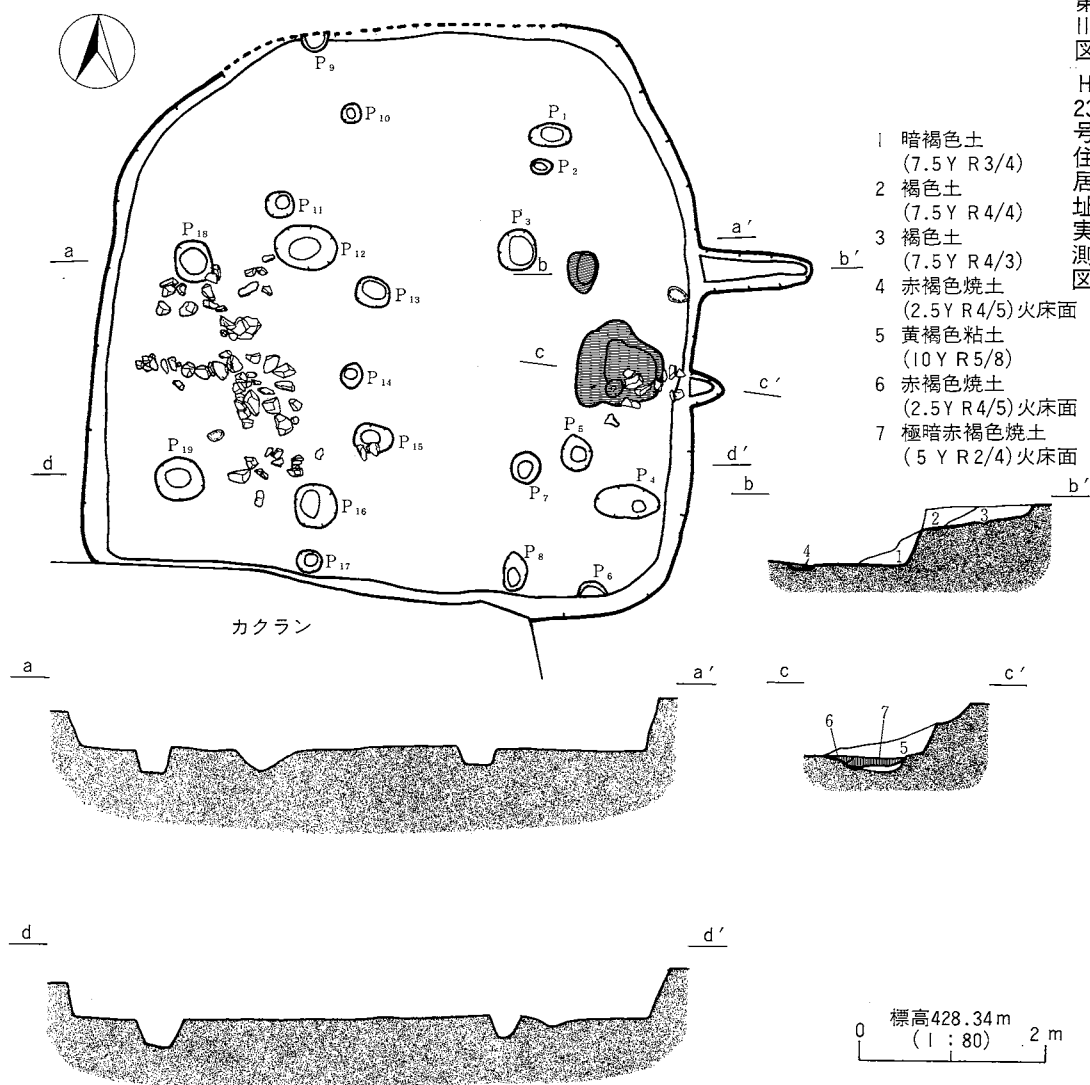
第116図 H23号住居址・カマド実測図



第117图 H23号住居址出土遺物実測図



第118图 H24号住居址出土遺物実測図

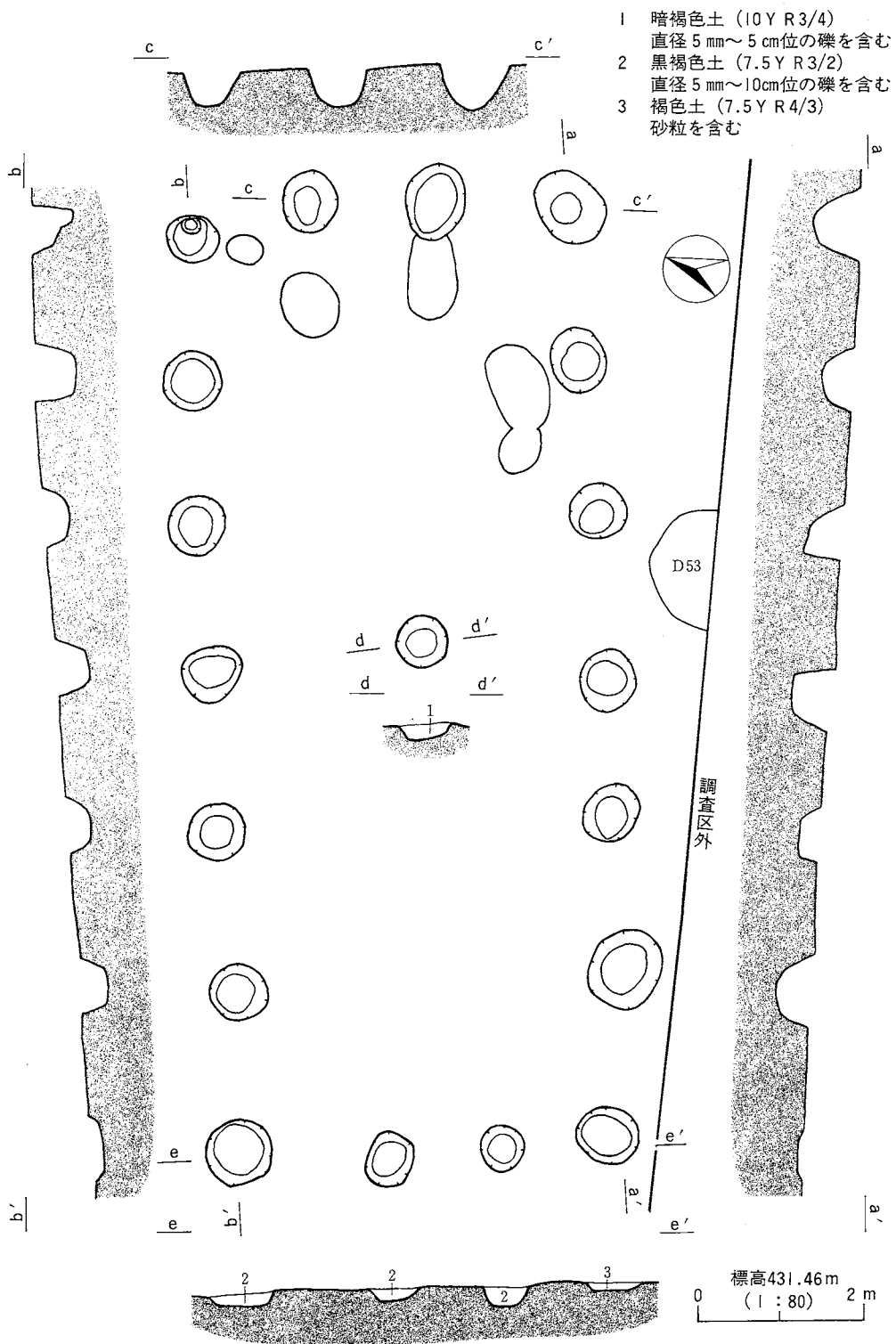


## 2 掘立柱建物址

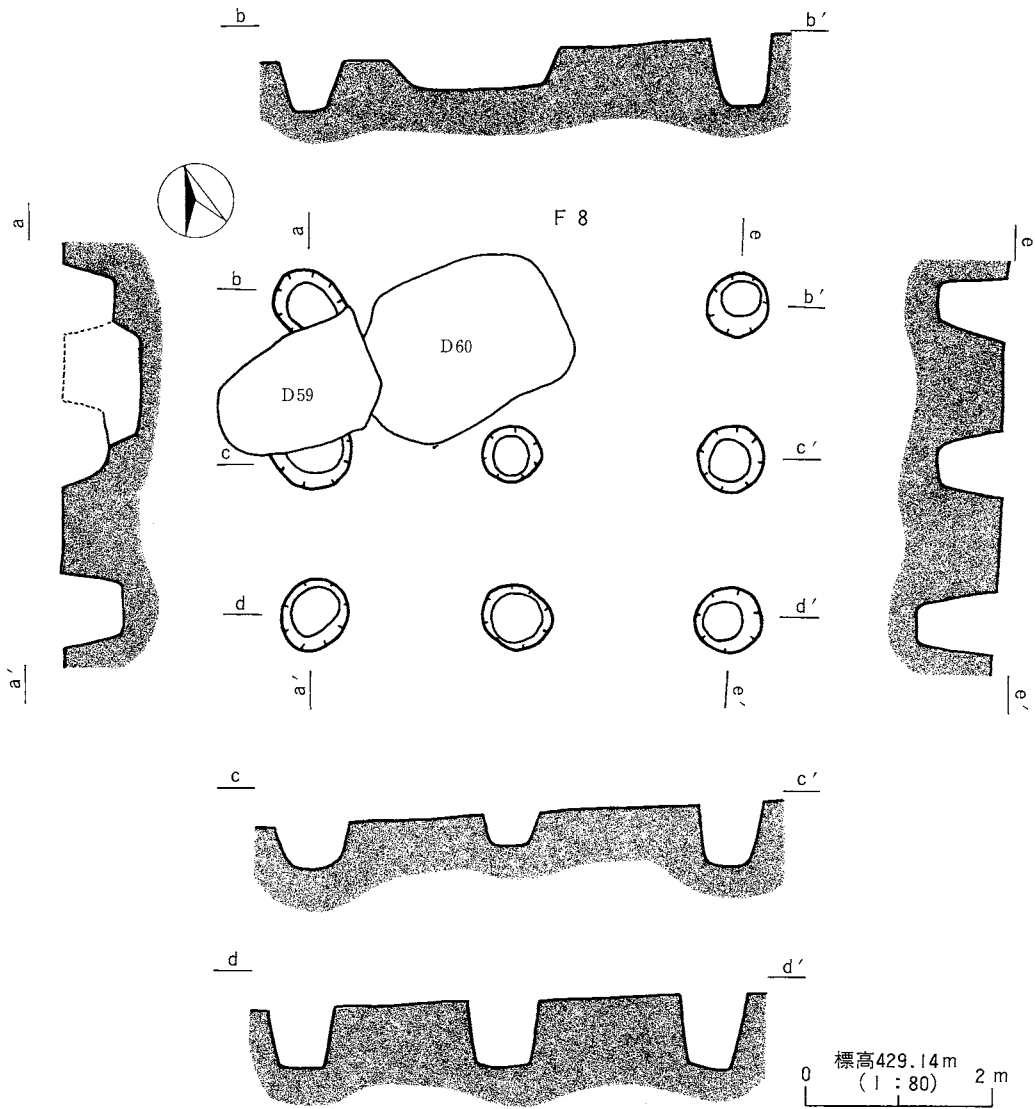
### 1) F 7号掘立柱建物址 (第120図)

検出位置-XVIIIOけ3・け4・こ4・け5・こ5・Tあ4・い4・あ5・い5グリッド。

建物主軸方位はN-20°-Wを指す。長辺11.44m、短辺は4.6mで3間×6間の総柱の建物である。各柱穴は平均6.9×6.8cmの楕円形を呈する。深さは13~56cmを測る。時期は古墳時代後期~平安前期に位置づけたい。



第120図 F 7号掘立柱建物址実測図



第121図 F 8号掘立柱建物址実測図

2) F 8号掘立柱建物址 (第121図)

検出位置—XIIIトク4・く5・け4グリッド。

D59・60号土坑址に切られる。建物主軸方位はN-113°-Eを指す。長辺2.4m、短辺82cmで、2間×2間をの総柱の掘立柱建物址である。各柱穴は平均36×36cmの円形を呈する。深さは36~80cmを測る。遺物は須恵器甕片が出土している。時期は古墳時代後期~平安前期に位置づけたい。

3) F 9号掘立柱建物址 (第123図)

検出位置—XIIIトウ2・え2グリッド。

F10号掘立柱建物址を切る。建物主軸方位はN-8°-Eを指し、側柱の建物址と思われる。各柱穴は平均26×23cmの楕円形を呈する。深さは20~38cmを測る。遺物は皆無であった。時期は古墳時代後期~平安前期に位置づけたい。

#### 4) F10号掘立柱建物址 (第122図)

検出位置-XVIIIえ1・え2・お2グリッド。

寺浦遺跡IIのF10号掘立柱建物址と並ぶ。建物主軸はN-26°-Eを指し、側柱の建物址と思われる。各柱穴は平均34×30cmの楕円形を呈する。深さは53~70cmを測る。遺物は土師器片が出土している。時期は古墳時代後期~平安前期に位置づけたい。

#### 5) F11号掘立柱建物址 (第124図)

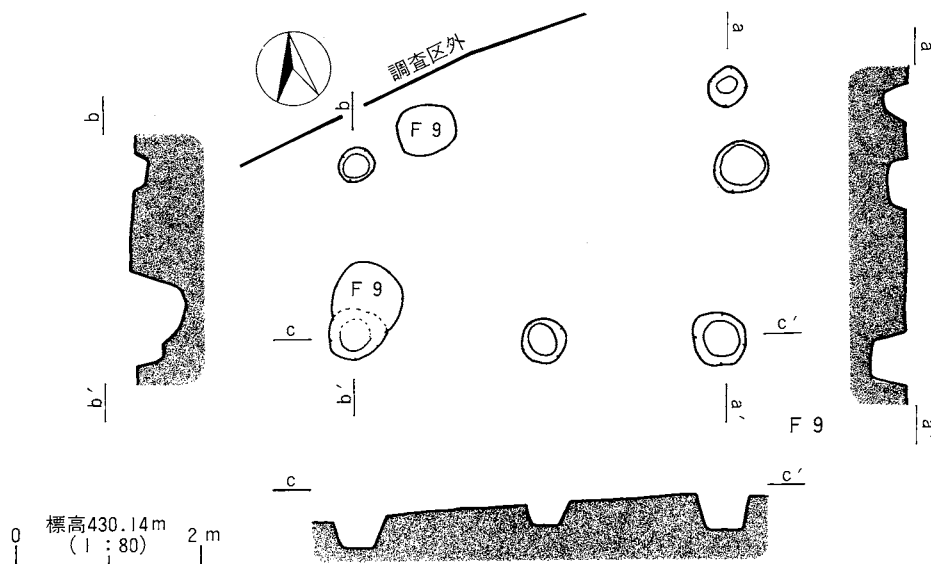
検出位置-XVIIお4・お5・お6・か4・か5・か6グリッド。

D54号土坑址に切られる。建物主軸はN-8°-Wを指す。長辺8.84m、短辺2.84mで5間×1間の側柱の建物址である。各柱穴は平均30×32cmの楕円形を呈する。深さは22~43cmを測る。遺物は土師器細片で出土している。時期は古墳時代後期~平安時代に位置づけたい。

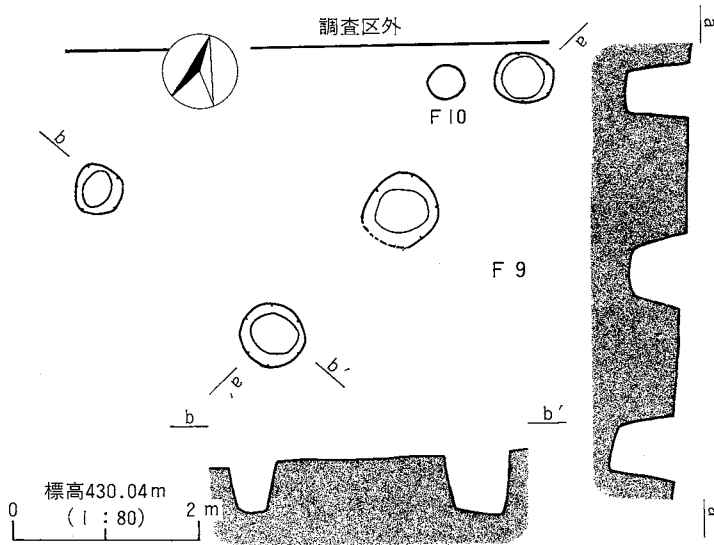
#### 6) F12号掘立柱建物址 (第125図)

検出位置-XVIIお1・お2グリッド。

建物主軸はN-17°-Wを指し、長辺1.46m、短辺1.41mで、1間×2間の側柱の建物址である。各柱穴は平均20×20cmの円形を呈する。深さは12~33cmを測る。遺物は皆無であった。時期は古墳時代後期~中世に位置づけたい。



第122図 F10号掘立柱建物址実測図

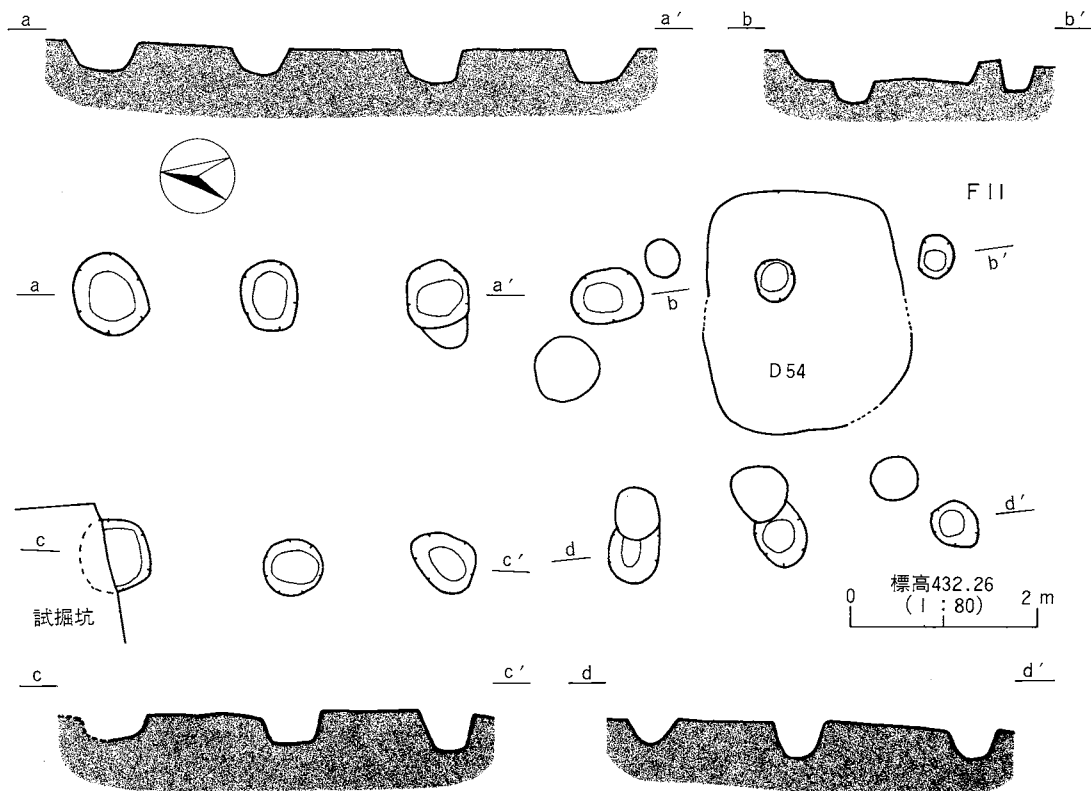


第123図 F 9号掘立柱建物址実測図

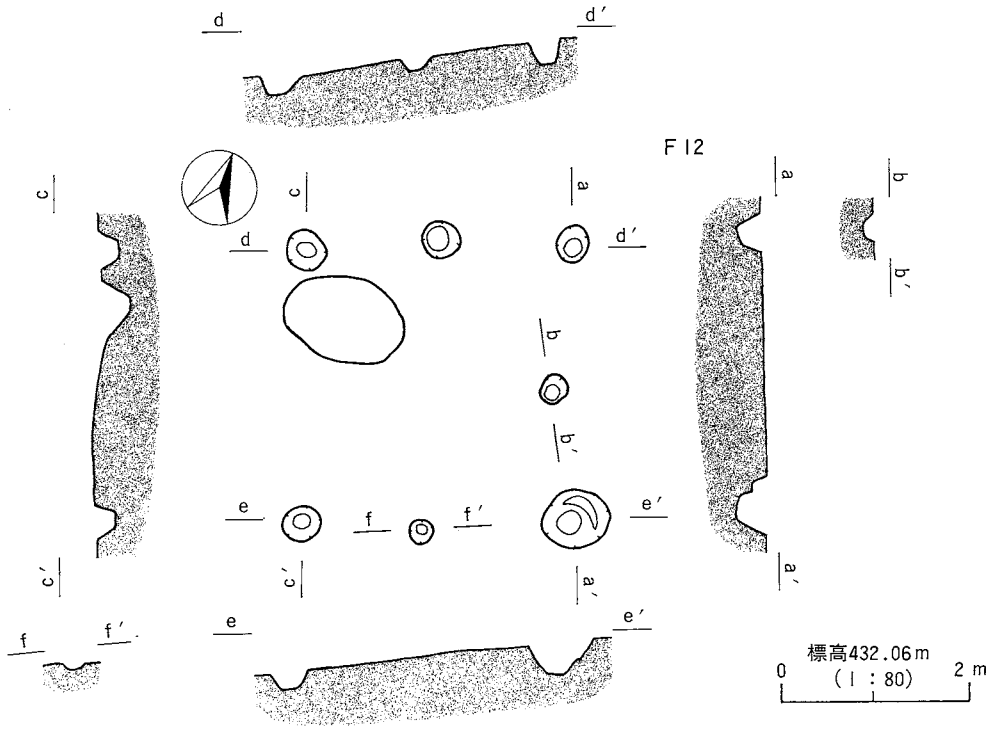
7) F13号掘立柱建物址(第126図)  
 検出位置—XVINお10、お1・  
 お2・か1・か2グリッド。

D47号土坑址に切られる。建  
 物主軸はN-9°-Wを指す。  
 長辺は3.67m、短辺は1.86m  
 で4間×1間の側柱の建物址  
 である。

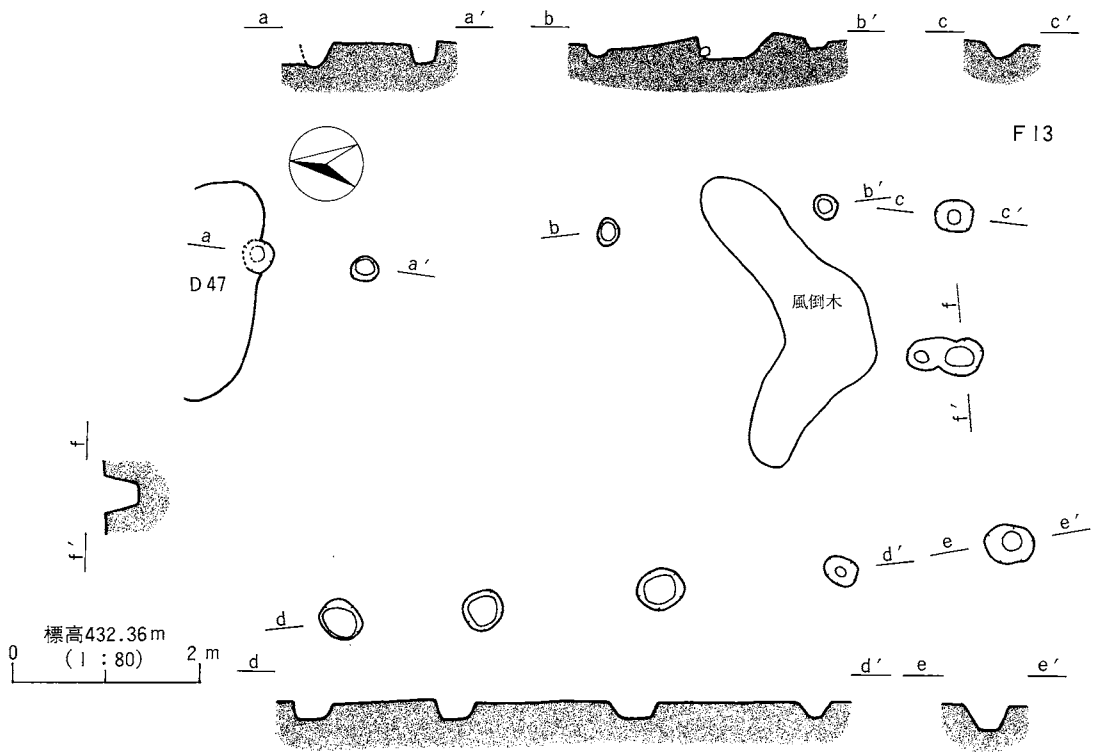
各柱穴は平均19×18cmの円  
 形を呈する。深さは11~55cmを  
 測る。遺物は皆無であったが、  
 石鉢がグリッド遺物で検出され  
 たことから、中世に位置づけら  
 れた。



第124図 F 11号掘立柱建物址実測図

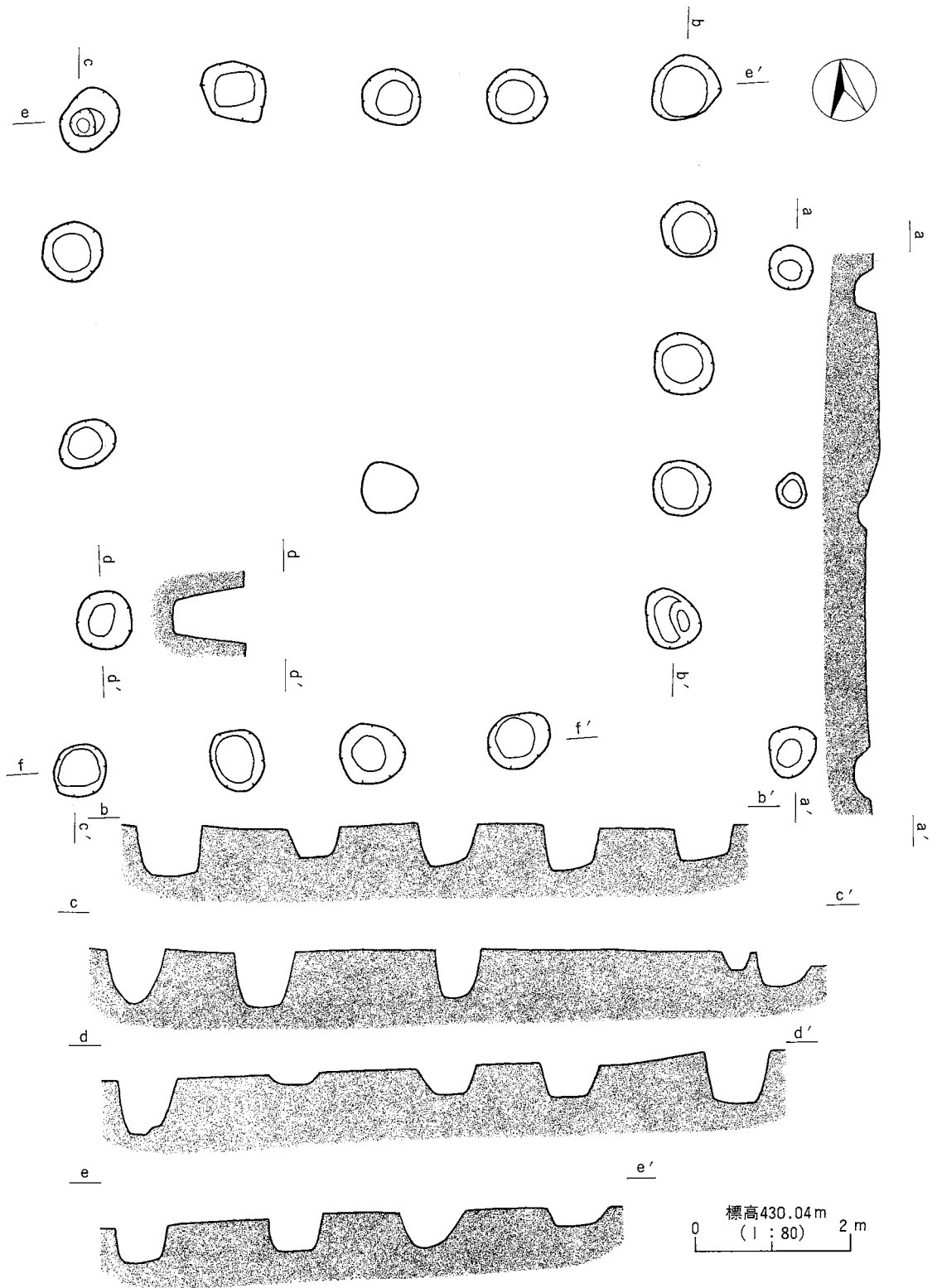


第125图 F12号掘立柱建物址実測図

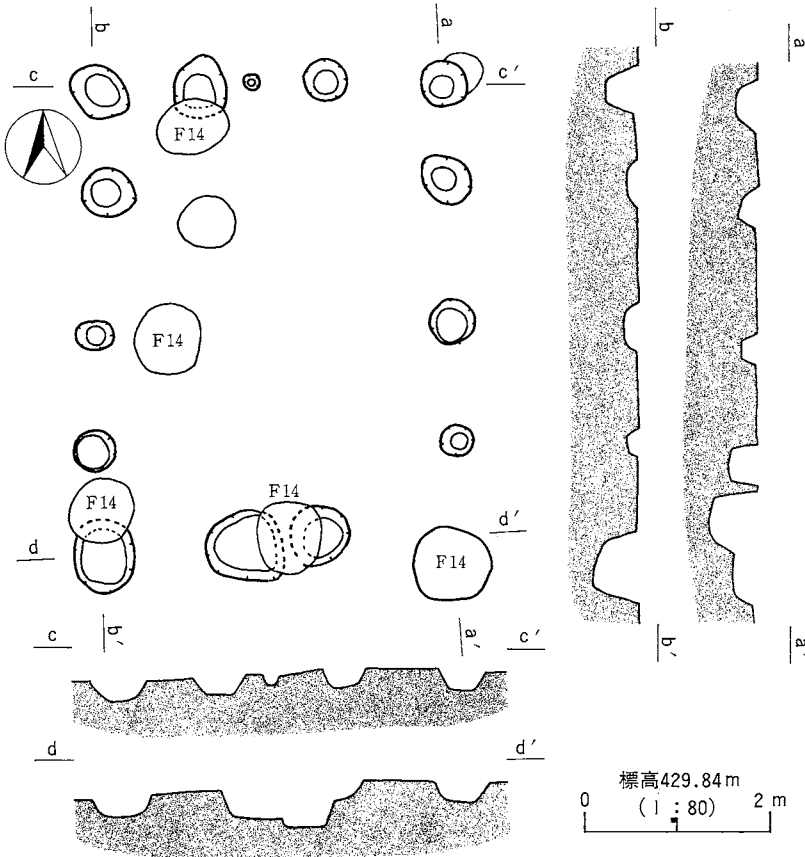


第126图 F13号掘立柱建物址実測図





第127图 F14号掘立柱建筑物址实测图



第128図 F15号掘立柱建物址実測図

8) F14号掘立柱建物址(第127図)  
 検出位置-XVIIお4・お5・か4・か5グリッド。建物主軸はN-10°-Wを指す。長辺8.38m、短辺7.76mで5間×4間の側柱の建物址である。F15号掘立柱建物址を切る。各柱穴は平均7×7cmを呈する。深さは14~55cmを測る。時期は古墳時代後期~平安前期に位置づけたい。

9) F15号掘立柱建物址 (第128図)

検出位置-XVIIえ3・お3・か3・え4・お4・お5・え3・か4・か5グリッド。

建物主軸はN-5°-Wを指す。長辺5.14m、短辺3.74mで4間×3間の側柱の建物址である。各柱穴は平均4.2×4.6cmの楕円形を呈する。深さは24~95cmを測る。遺物は皆無であった。時期は古墳時代後期~平安前期に位置づけたい。

### 3 土坑址

1) D47号土坑址 (第129図)

検出位置-XVINお10・か10グリッド。

長軸2.26m、短軸1.12mの楕円形。深さ24cm。土坑内には自然石が多量に検出された。覆土1層には炭化物を含んでいたが、骨片は検出されなかった。遺物は内耳土器・須恵器が若干出土している。時期は室町時代(15世紀)に位置づけられる。

2) D48号土坑址 (第129図)

検出位置-XVIIおけ2グリッド。

長軸2.26m、短軸1.84mの不整楕円形。深さ51cm。

6) D50号土坑址 (第129図)

検出位置-XVINか8グリッド。

長軸1.94mの楕円形。深さ36cm。

5) D49号土坑址 (第129図)

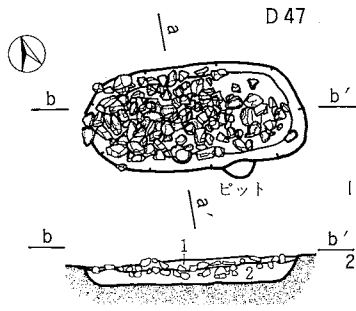
検出位置-XVIIお8・か8グリッド。

長軸2.26m、短軸1.6mの楕円形。深さ62.5cm。

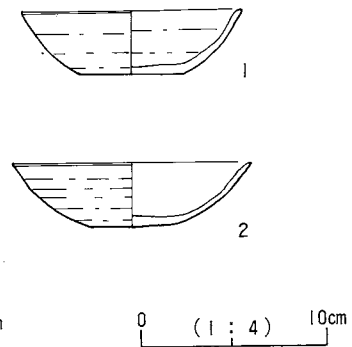
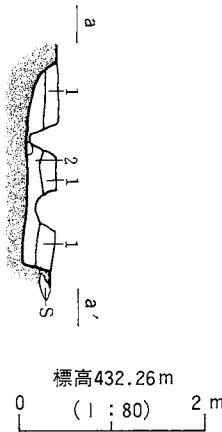
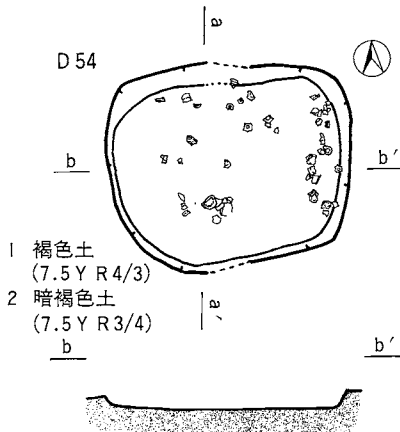
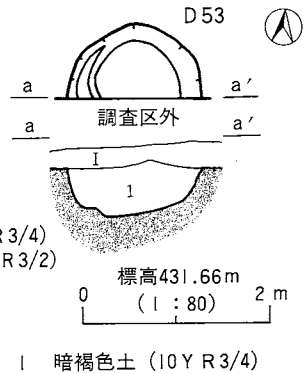
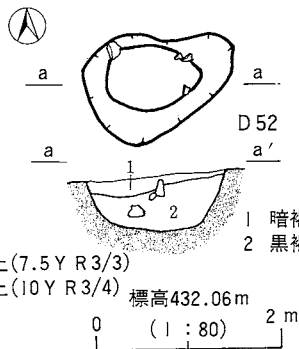
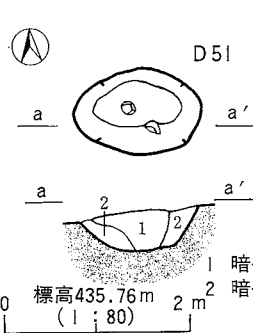
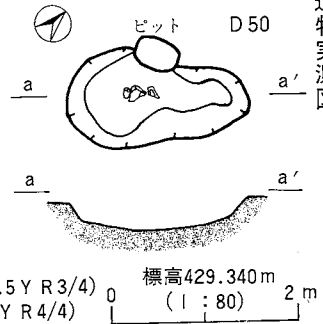
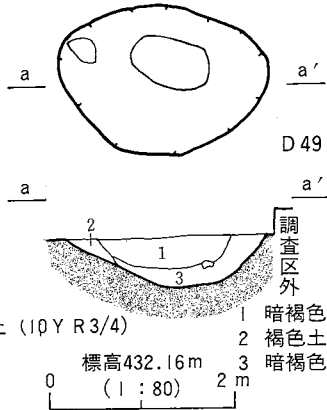
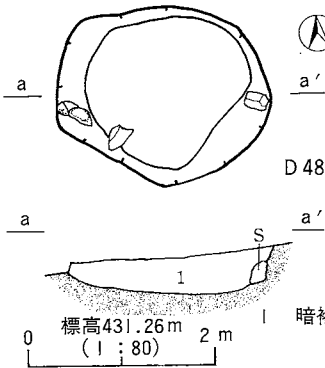
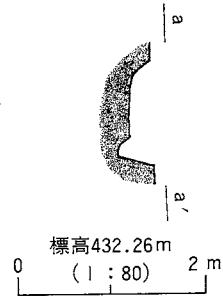
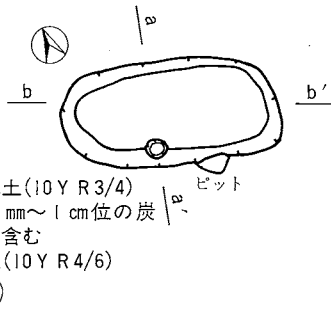
7) D51号土坑址 (第129図)

検出位置-XVIIおき1グリッド。

長軸1.34m、短軸92cmの楕円形。深さ52cm。



1 暗褐色土(10Y R3/4)  
直径5mm~1cm位の炭  
化物を含む  
2 褐色土(10Y R4/6)



8) D52号土坑址 (第129図)

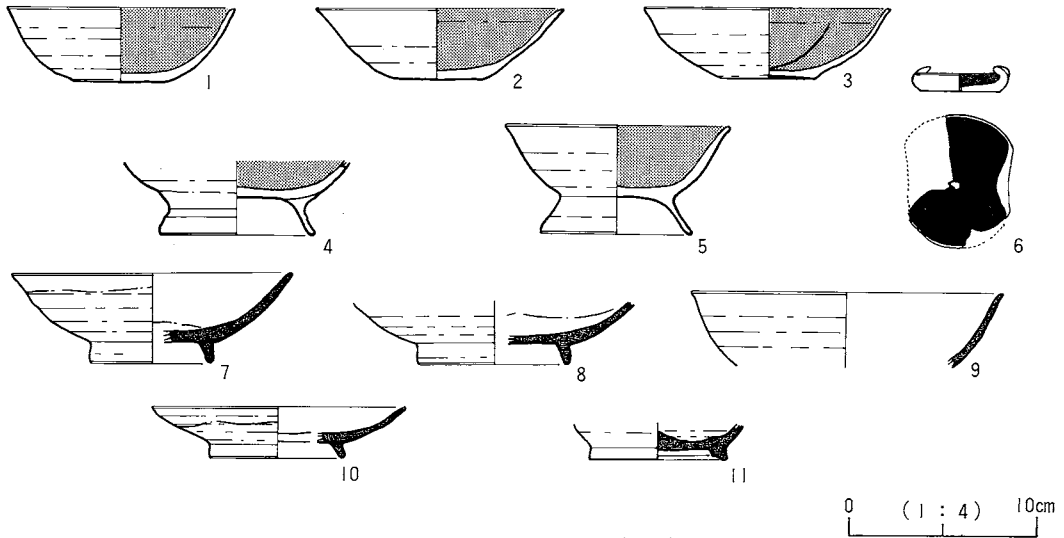
検出位置—XVIIIOか2・き2グリッド。  
長軸1.66m、短軸1.04mの不正形楕円形。深さ67cm。

9) D53号土坑址 (第129図)

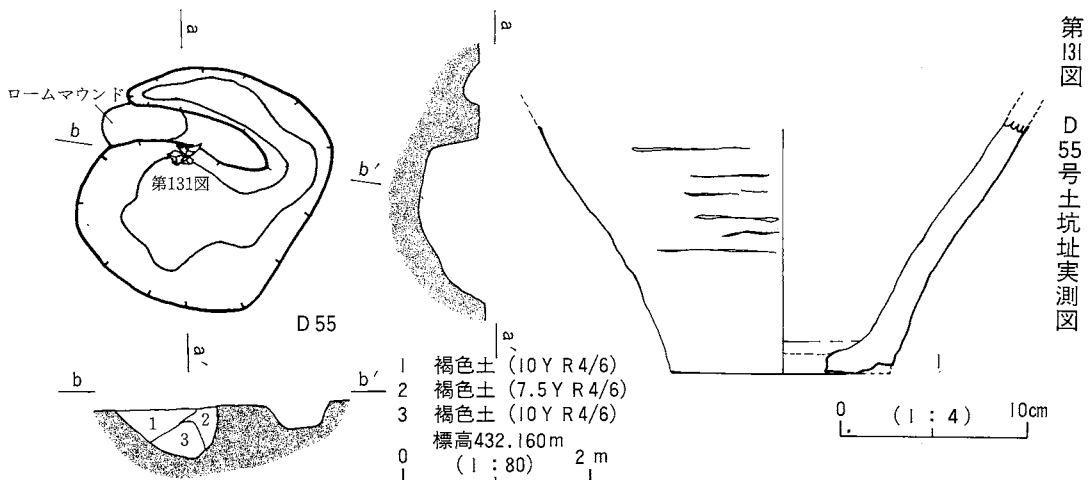
検出位置—XVIIIOけ5グリッド。  
長軸1.44mの楕円形と思われる。深さ43cm。

10) D54号土坑址 (第129図)

検出位置—XVIIIOお6・か6グリッド。  
長軸2.6m、短軸2.3mの楕円形。深さは32cm。F11号掘立柱建物址を切る。土師器・黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器が出土したことから廃絶土坑あるいは堅穴状遺構とも考えられる。  
図示したのは土師器環 (第129図1・2)・黒色土器環 (第130図1~3)・碗 (第130図4・5)・耳皿 (第130図6)・灰釉陶器碗 (第130図7~10)・壺 (第130図11) である。時期は平安時代 (9世紀後半) に位置づけられる。



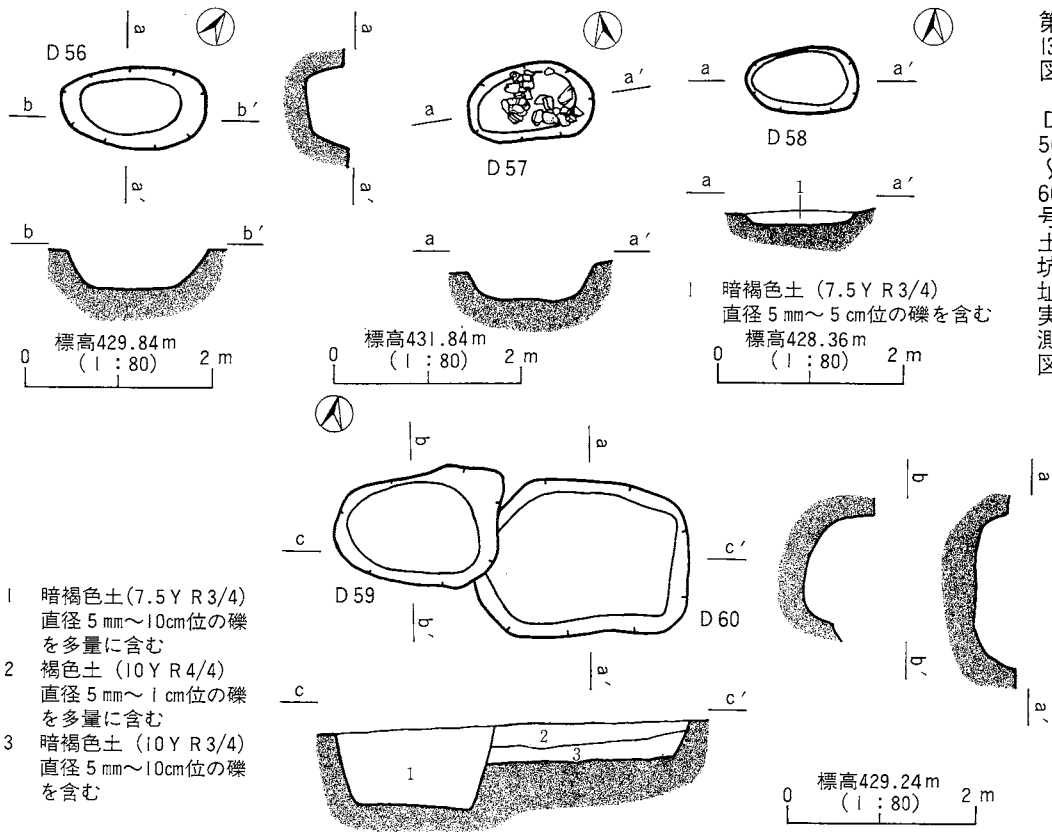
第130図 D54号土坑址出土遺物実測図



第131図 D55号土坑址実測図

11) D55号土坑址 (第131図)

検出位置—XVIIINか10・き10グリッド。  
長軸2.64m、短軸2.62mの不正楕円形を呈する。深さ70cm。ロームマウンドが検出されたことから、当初風倒木と思われたが、掘り下げたところロームマウンド下層から土師製土製品 (第131図1) が出土したことから土坑として扱う。時期は不明である。



12) D56号土坑址 (第132図)

検出位置-ⅧITえ6グリッド。  
長軸1.54m、短軸88cmの楕円形。深さ43.5cm。

14) D58号土坑址 (第132図)

検出位置-ⅧIYう8グリッド。  
長軸1.2m、短軸70cmの楕円形。深さ17cm。

16) D60号土坑址 (第132図)

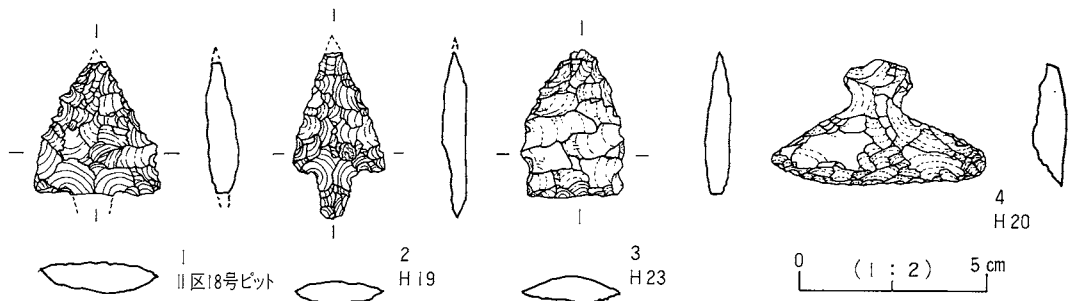
検出位置-ⅧITく4・け4グリッド。  
短軸1.66mの楕円形。深さ51.5cm。

13) D57号土坑址 (第132図)

検出位置-ⅧIOか7グリッド。  
長軸1.32m、短軸82cmの楕円形。深さ41cm。

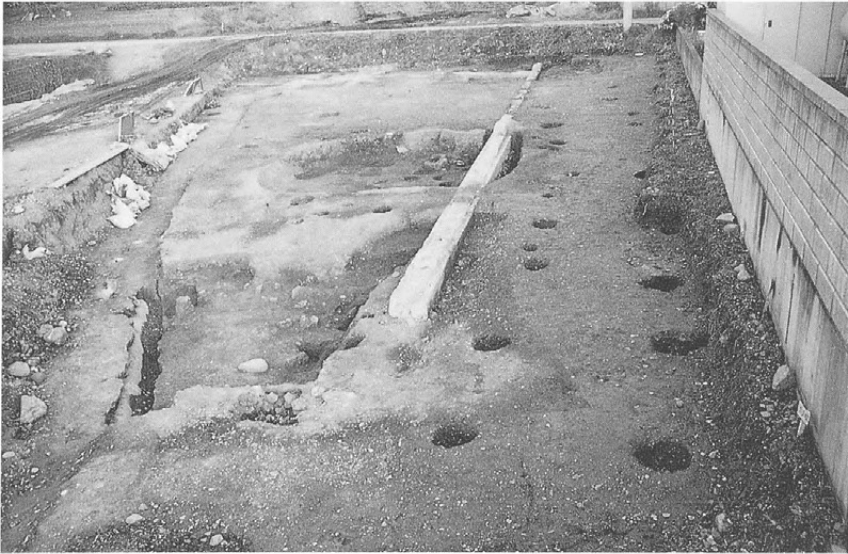
15) D59号土坑址 (第132図)

検出位置-ⅧITけ4グリッド。  
D60号土坑址を切り構築。長軸1.58mの楕円形。深さ10.5cm。時期は平安時代に位置づけたい。



第133図 寺浦遺跡遺構外出土遺物実測図

## 第6節 写真図版



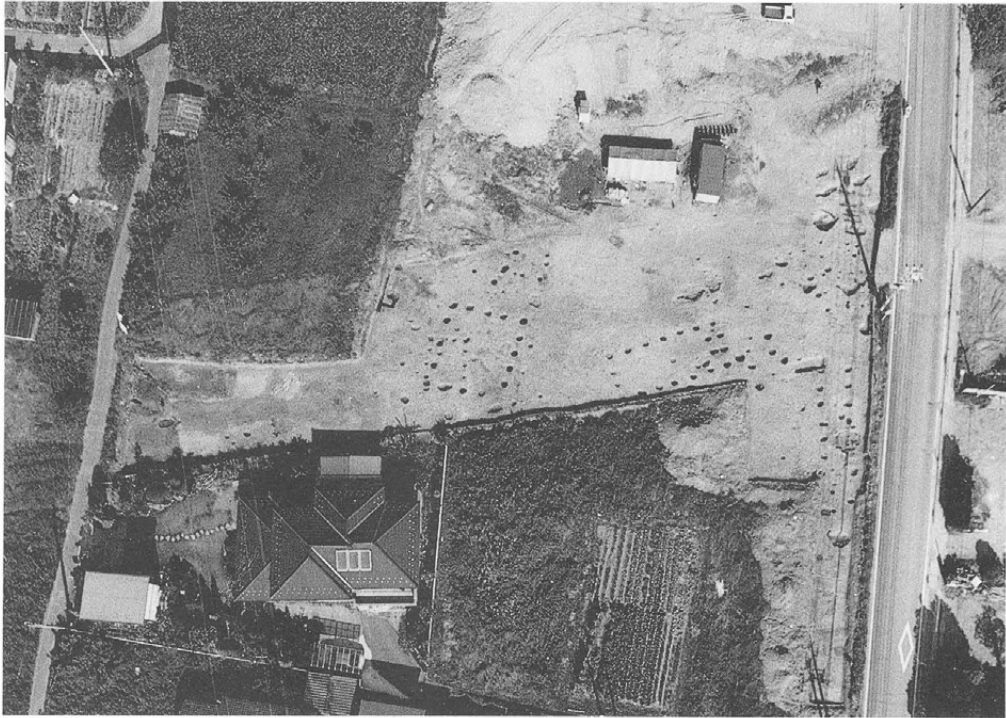
寺浦遺跡Ⅰ区全景（西より）



寺浦遺跡Ⅱ区航空写真



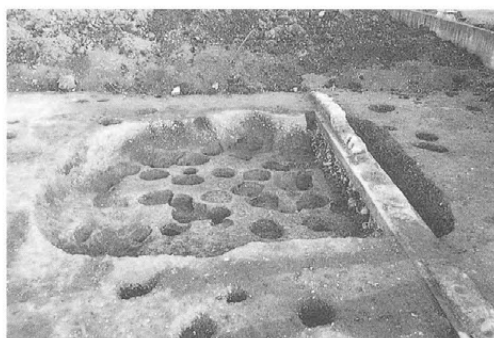
寺浦遺跡Ⅲ区航空写真



寺浦遺跡Ⅳ区航空写真



H 1号住居址 (西より)



H 2号住居址 (西より)



H 3号住居址 (西より)



H 5号住居址 (西より)



H 5号住居址カマド (西より)



H 6号住居址 (西より)



H 8号住居址 (西より)

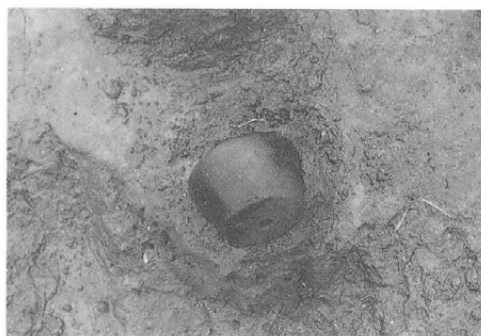


H 8号住居址羽口出土状況 (西より)





H 8号住居址カマド（西より）



H 9号住居址紡錘車出土状況（南より）



H10号住居址円筒型土製品出土状況（西より）



H14号住居址（西より）



H15号住居址（南より）



H16号住居址（西より）



H18号住居址（西より）



H19号住居址 (西より)



H20号住居址 (南より)



H21号住居址 (南より)



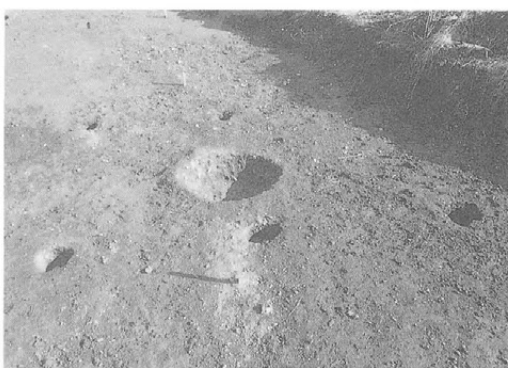
H22号住居址 (西より)



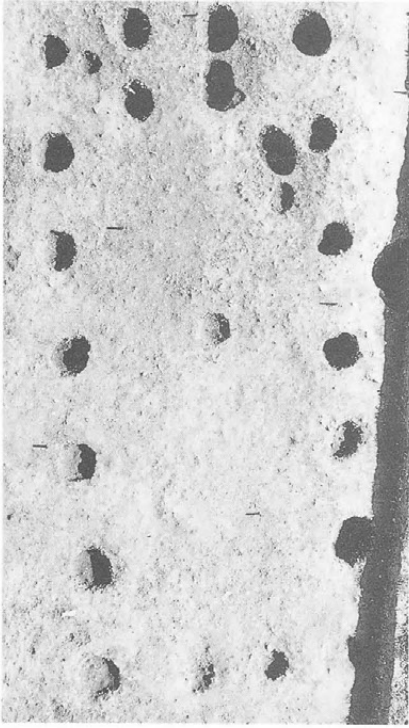
H23・24号住居址 (西より)



F1・2号掘立柱建物址 (西より)



F6号掘立柱建物址 (西より)



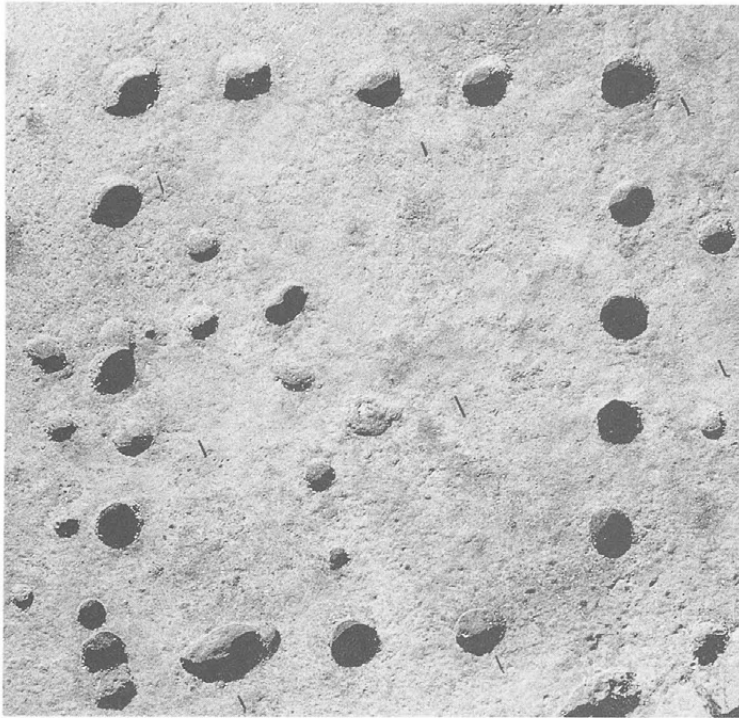
F 7号掘立柱建物址航空写真



F 8号掘立柱建物址（西より）



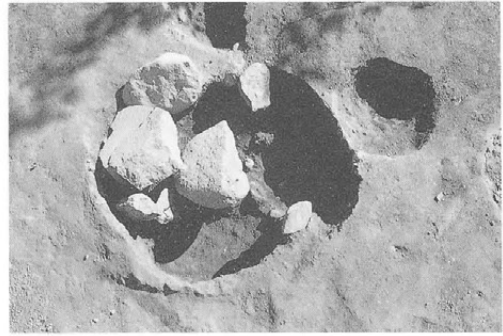
F 11号掘立柱建物址（北より）



F 14・15号掘立柱建物址航空写真



T a 1号竖穴状遺構 (西より)



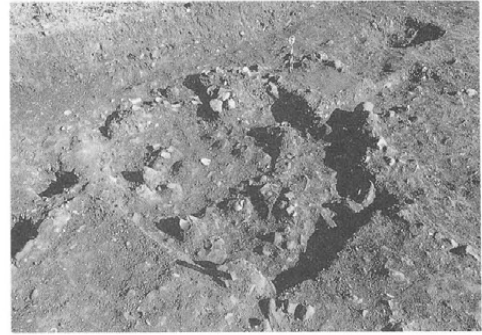
D 2号土坑址 (西より)



D 32号土坑址 (南より)



D 47号土坑址 (北より)



D 54号土坑址 (北西より)



D 55号土坑址 (南より)



D 55号土坑址建物出土状況 (北より)

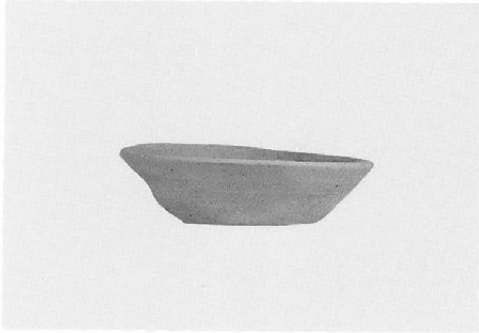




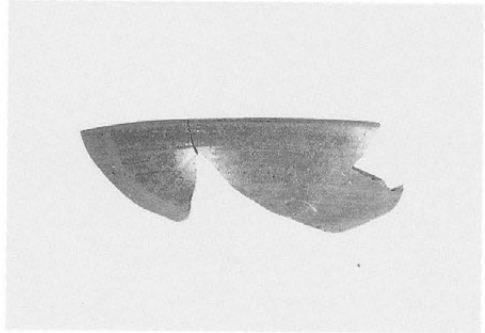
H 3 号住居址第64图 1



H 6 号住居址第71图 2



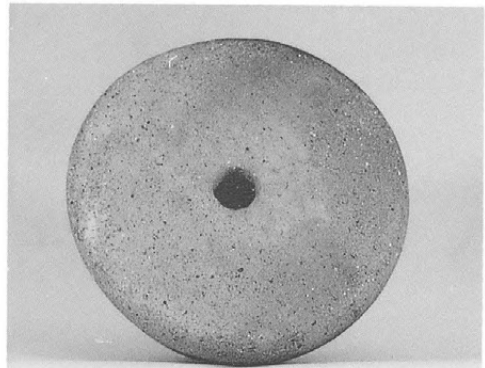
H 7 号住居址第73图 3



H 8 号住居址第75图 4



H 8 号住居址第75图 1

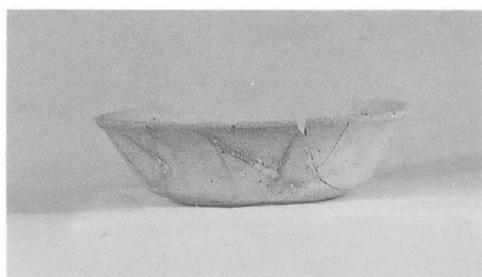


H 9 号住居址第77图 1

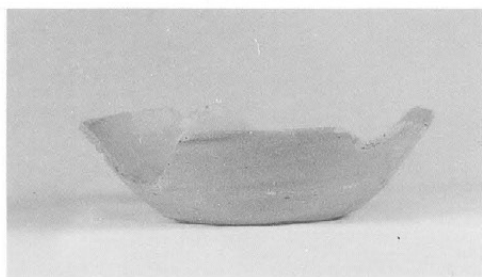




H 10号住居址第78图 2



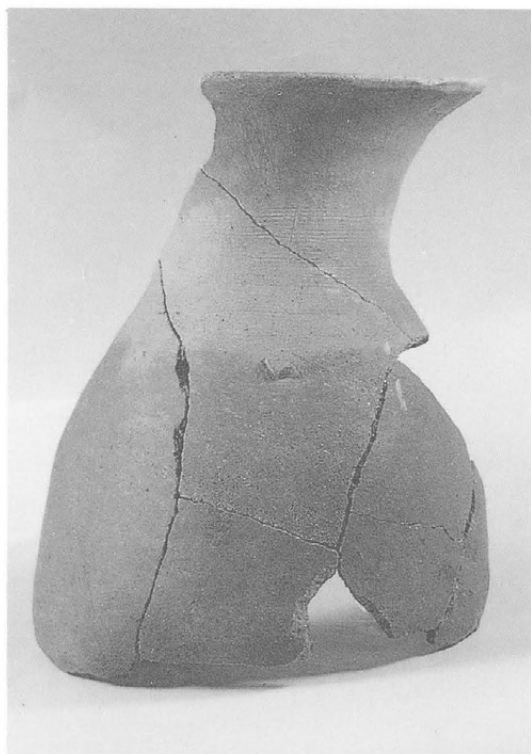
H 14号住居址第99图 2



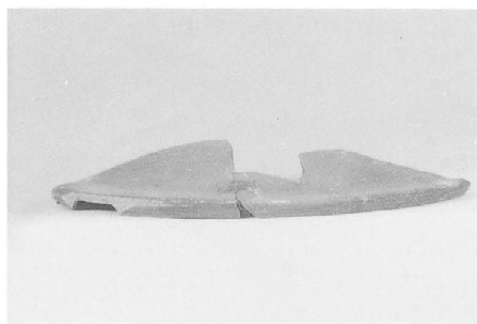
H 15号住居址第100图 1



H 18号住居址第105图 4



H 12号住居址第81图 1



H 15号住居址第100图 3



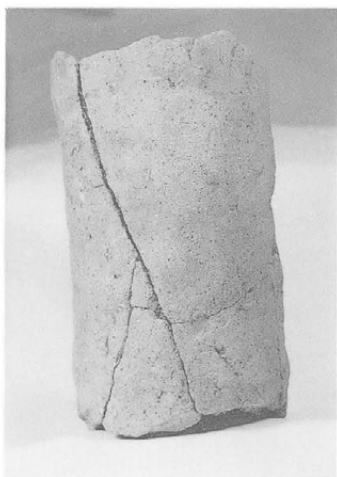
H 18号住居址第105图 5



H 18号住居址第105图 2



H 21号住居址第101图 1



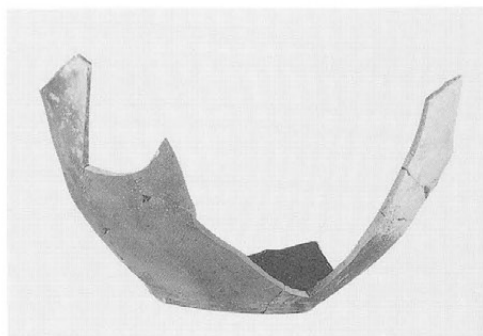
H 20号住居址第113图 1



H 20号住居址第113图 2



H 20号住居址第113图 3



H 23号住居址第117图 I



D 29号土坑址第97图 I



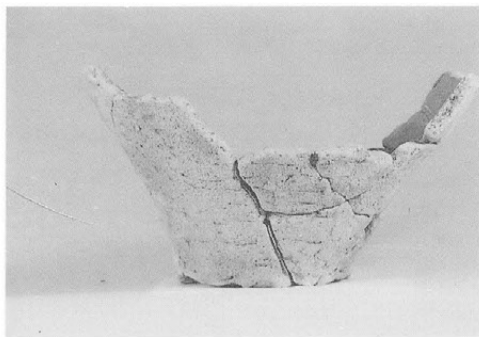
H 24号住居址第118图 II



D 3号土坑址鉄砧石

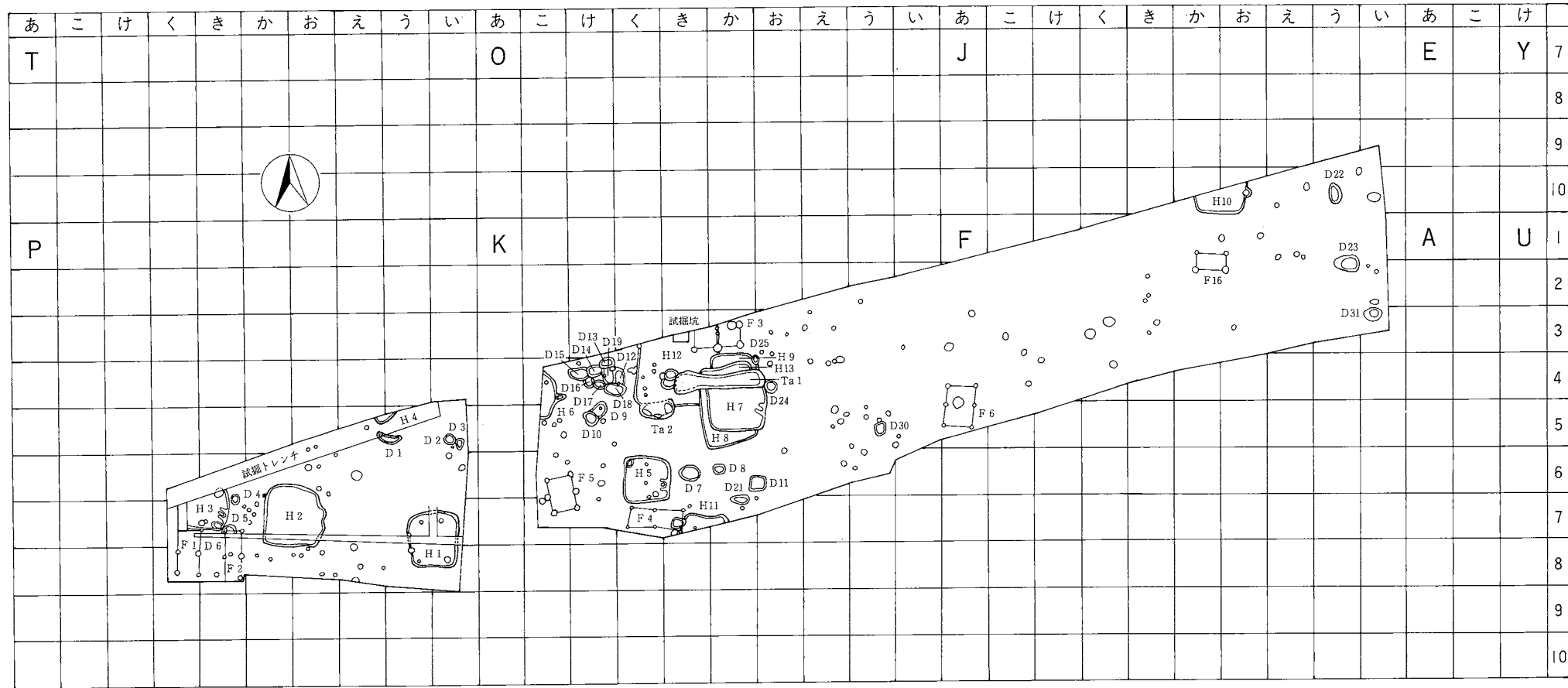


D 54号土坑址第130图 6

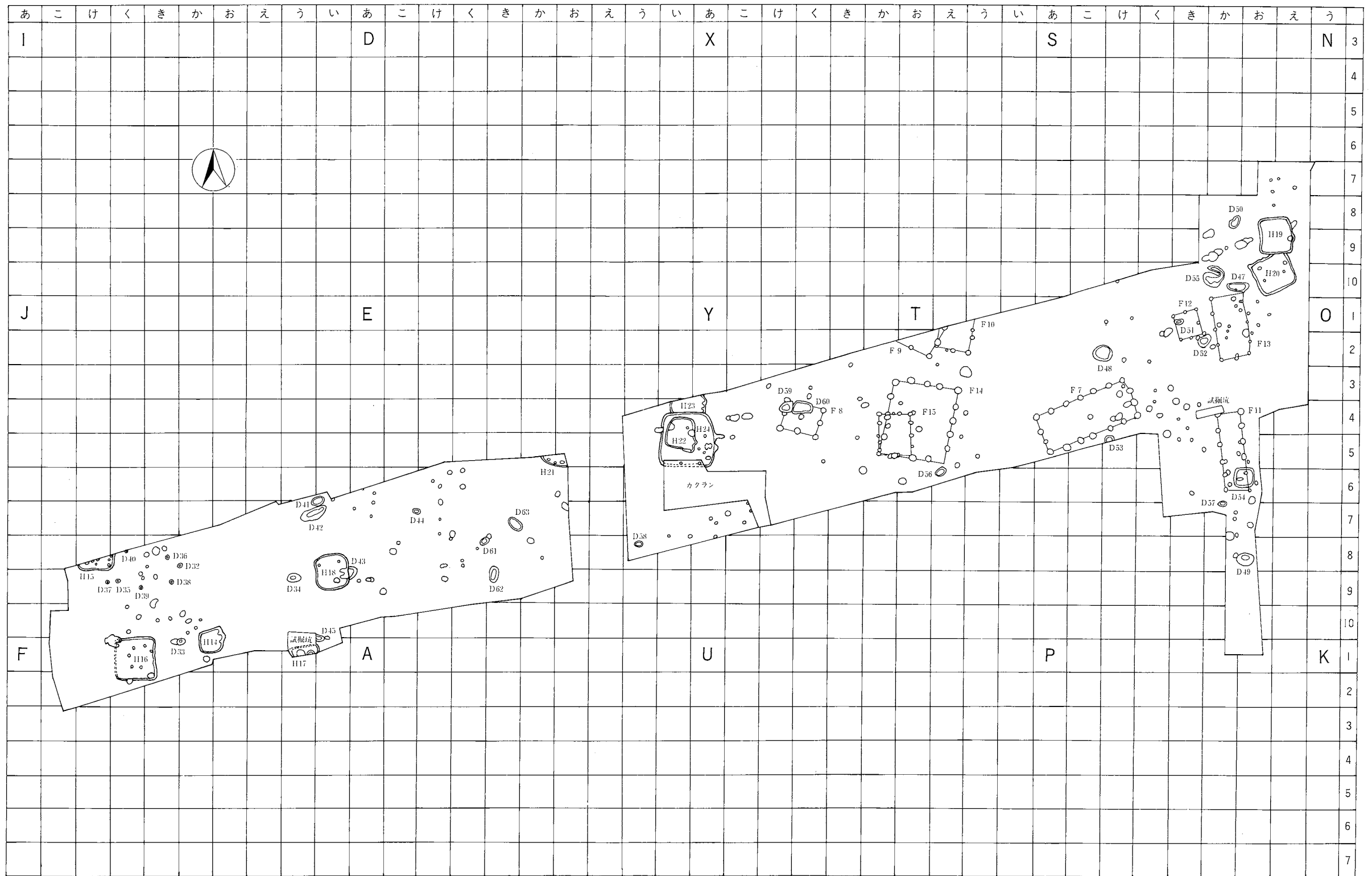


D 55号土坑址第131图 I





第134図 寺浦遺跡I区・II区遺構配置図(1:500)



第135図 寺浦遺跡Ⅲ区・Ⅳ区遺構配置図 (1 : 500)

# 第VI章 東町遺跡

## 第1節 調査概要

### 1 遺跡の立地と概要

中之条遺跡群東町遺跡は標高413m内外を測る。御堂川、前沢川によって形成された複合扇状地の扇端部にあたる。江戸時代後期に作成された『中之条村御林絵図』（格致学校歴史民俗資料館所蔵）を見ると、当遺跡調査内には慶長5（1600）年創建といわれる浄土宗の西念寺（現存）の末寺一行寺が所在していた。後に一行寺は廃寺となり、明治になると格致学校（移築現存、県宝）が建てられていた。

平成元年に作成された『坂城町遺跡分布図』によると弥生～平安時代の集落遺跡に位置づけられ前沢川をはさんで南側には、村上義清の子景国が拠ったと伝えられる観音坂城跡があり、城の西側を近世の北国街道が南北に横断している。また安永8（1779）年には中之条村に中之条陣屋が設置されるなど中世～近世にかけて重要な位置を占める遺跡である。

遺跡名となる「東町」は旧中之条村の集落に関係する地名と思われるが、『中之条村御林絵図』を見ると「寺浦」の地籍となっており、明治以降に改正されたと考えられる。

調査区の調査面積及び調査区から検出された遺構の概要は以下のとおりである。

調査面積 173m<sup>2</sup>

遺構 掘立柱建物址－2棟（近世）。土坑址－4基。ピット－4基。



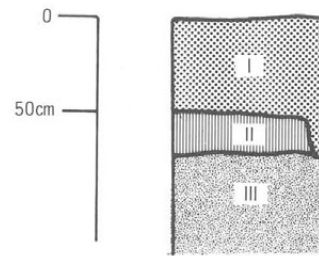
第136図 東町遺跡位置図（1：5000）

### 2 基本層序

東町遺跡の基本層序は第137図に示したとおりである。

I 層 格致学校復元・解体に伴う攪乱層。

- II 層 暗褐色土 (10Y R3/3) 斬移層
- III 層 黄褐色砂質土 (10Y R5/6) 遺構確認面



第137図 東町遺跡基本層序模式図

### 3 調査日誌

平成5年10月12日(火) 重機で表土除去。攪乱が遺構確認面にまで達しており、検出困難。

調査区南側でピット群確認。北側でも土坑2基検出。ピットは掘立柱建物址になる可能性あり。

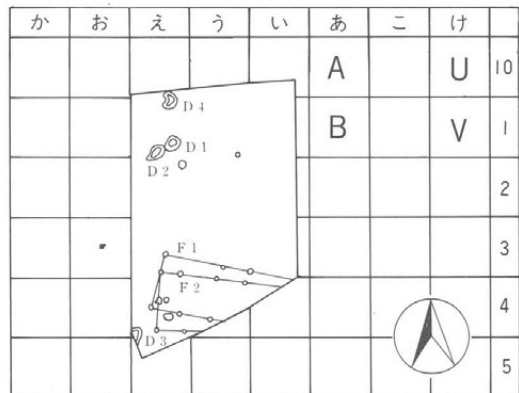
13日(水) 重機による表土除去終了。ピット群は掘立柱建物址と判明。

15日(金) F1号掘立柱建物址から段皿を検出。近世の建物址と判明する。D3・4号土坑址を検出し、調査終了する。

18日(月) 埋め戻しを行う。



表土除去作業



第138図 東町遺跡遺構配置図 (1:500)

## 第2節 遺構と遺物

### 1 掘立柱建物址

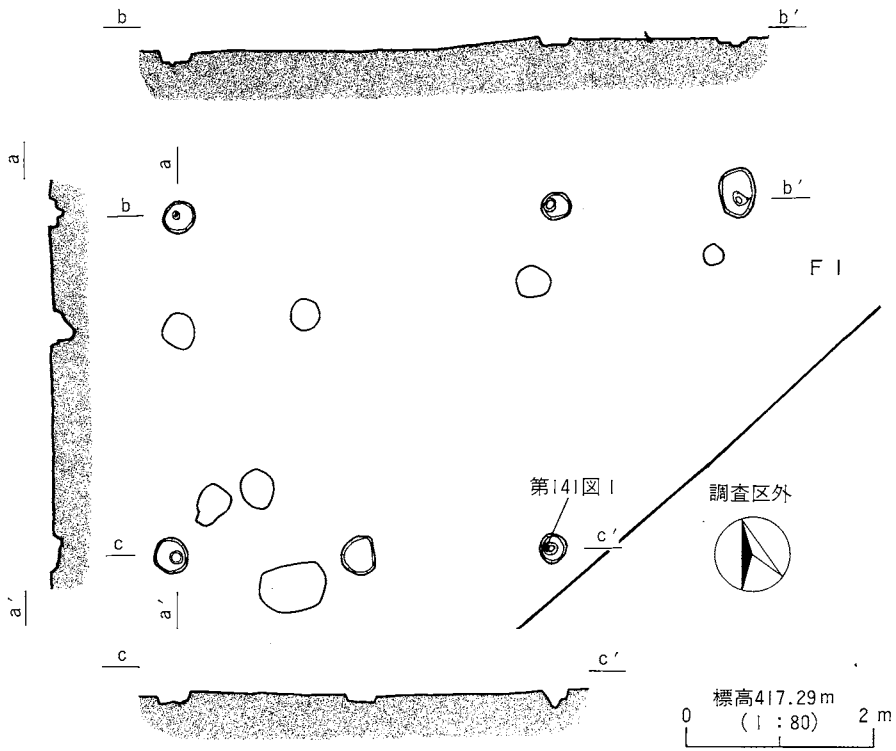
1) F1号掘立柱建物址 (第140図)

検出位置—XXVBi3・う3・え3・う4・え4グリッド。

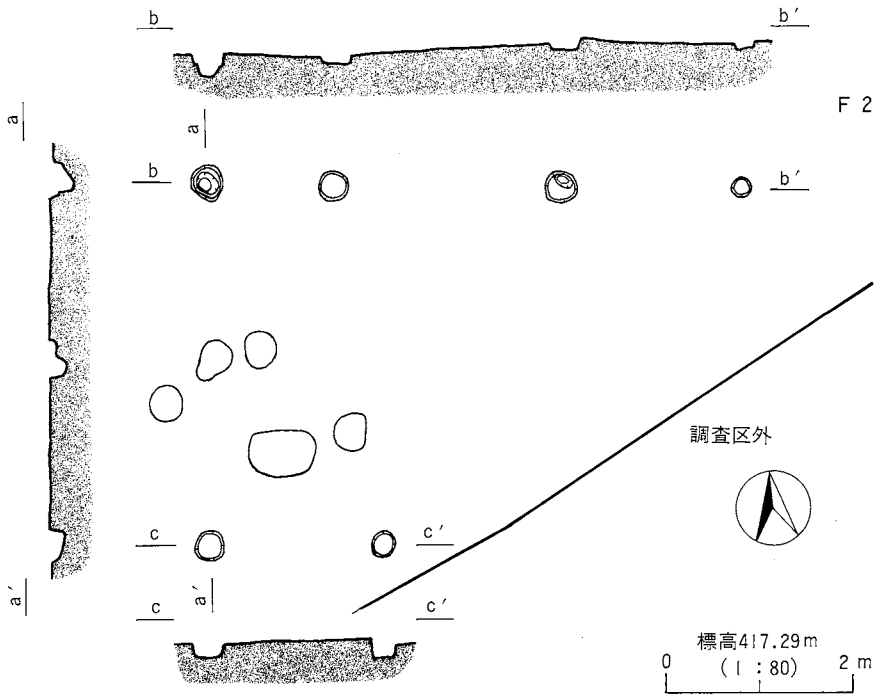
F2号掘立柱建物址と重複関係だが、新旧関係は不明である。南東壁の一部が調査区外となるため全容は把握できなかったが、建物主軸はN-72°-Wを指す。短辺は4.5mで、1間×4間の側柱の建物址と推定される。各柱穴は平均40×46cmの円形ないし楕円を呈し、深さは9～25cmを測る。遺物は陶器が出土した。図示した陶器(第139図1)は瀬戸物と思われ、内面に胎土目が見られる。時期は出土遺物から近世後期に位置づけられる。



第139図 F1号掘立柱建物址出土遺物実測図



第140図 F 1号掘立柱建物址実測図



第141図 F 2号掘立柱建物址実測図

## 2) F 2号掘立柱建物址 (第141図)

検出位置-XXVBえ3・う4・え4グリッド。

F 1号掘立柱建物址と重複する。南東壁の一部が調査区外となるため全容は把握できなかったが、建物主軸はN-69°-Wを指す。短辺は4.8mで、2間×4間の側柱の建物址と推定される。各柱穴は平均36×38cmの円形ないし楕円形を呈し、深さは8~25cmを測る。遺物は皆無であった。時期はF 1号掘立柱建物址との重複関係から、近世後期に位置づけたい。

## 2 土坑址

### 1) D 1号土坑址 (第142図)

検出位置-XXVBえ1グリッド。  
長軸1.26m、短軸1.02mの不整楕円形。深さ32cm。

### 2) D 2号土坑址 (第142図)

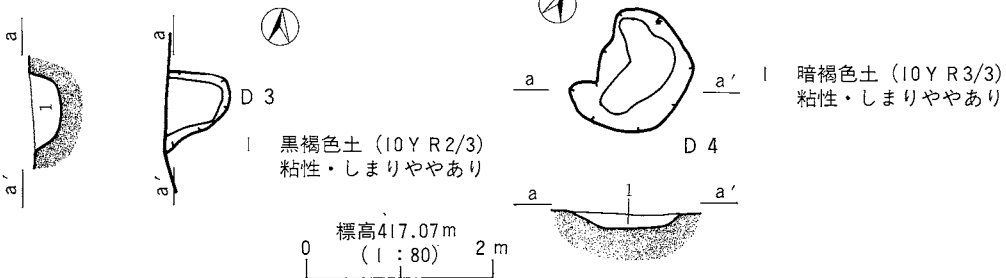
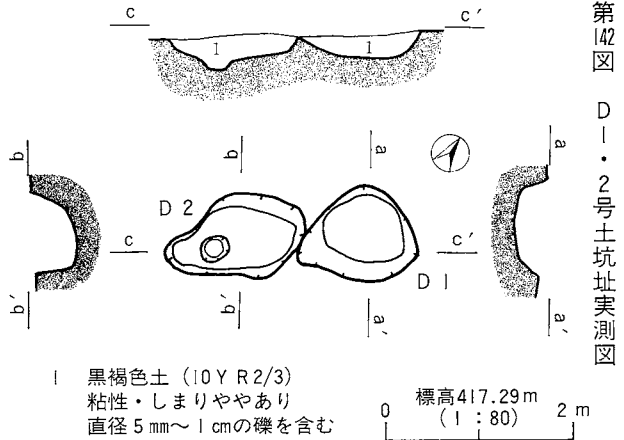
検出位置-XXVBえ1・え2グリッド。  
長軸1.58m、短軸96cmの不整楕円形。深さ26cm。

### 3) D 3号土坑址 (第143図)

検出位置-XXVBえ4・え5・お4・お5グリッド。  
短軸72cmの楕円形と思われる。深さ13cm。

### 4) D 4号土坑址 (第143図)

検出位置-XXVAえ10・Bえ1グリッド。  
長軸1.24m、短軸94cmの不整楕円形。深さ20cm。D 1~4の時期は不明である。



## 3 遺構外出土遺物

I層カクランから出土した土師器の坏 (第144図1) で、底部は回転糸切りで調整されている。時期は平安時代 (10世紀後半) の所産と考えられる。



第144図 遺構外出土遺物実測図

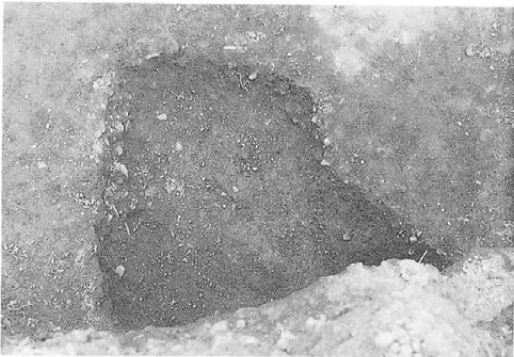
### 第3節 写真図版



F1・2号掘立柱建物址（西より）



調査区全景（北より）



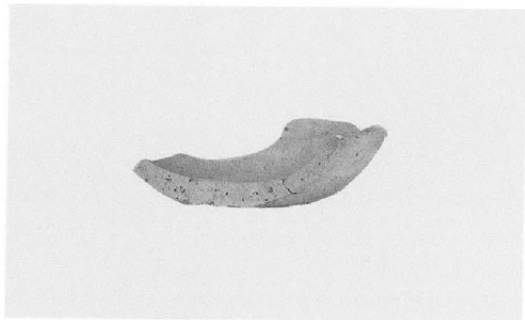
D3号土坑址（西より）



F1遺物出土状況（南より）



F1号掘立柱建物址第139図1



遺構外出土遺物第144図1

## 第Ⅶ章 成果と課題

### 第1節 縄文時代

縄文時代の遺構としては、豊饒堂遺跡のQ1特殊遺構、上町遺跡のD21号土坑址、寺浦遺跡等がある。どの遺構も遺物の遺存状態が悪い。特に豊饒堂遺跡では摩耗されている土器がほとんどであることから、当遺跡東側の山麓に遺跡が展開されていることが予想される。上町遺跡のD21号土坑址は廃棄土坑と考えられる。隣接する寺浦遺跡でも土坑、ピットからの前期～中期の土器の出土はあったが、住居址は検出されなかった。今後の調査で付近に集落址の存在が予想される。

### 第2節 弥生時代

弥生時代後期の遺構としては、豊饒堂遺跡のH1号住居址、寺浦遺跡のH11・12号住居址がある。豊饒堂遺跡のH1号住居址は1棟のみの検出だが、地形的にも大集落があったと考えにくく、季節的な生業による小規模集落址が展開していると考えられる。一方寺浦遺跡の2棟の住居址は扇状地の扇端部に位置している。奈良・平安期以降の遺構によって破壊されている部分が多く、全容を発掘できなかった。当遺跡北方1kmに所在する宮上遺跡Ⅲ(平成7年調査)で弥生時代後期の住居址が3棟検出されたことから、扇状地の扇端部に集落址が展開されていることが予想される。逆に西側の段丘下は湧水があり、千曲川の沖積地となることから水田址が展開することが予想される。

上町・寺浦遺跡航空写真





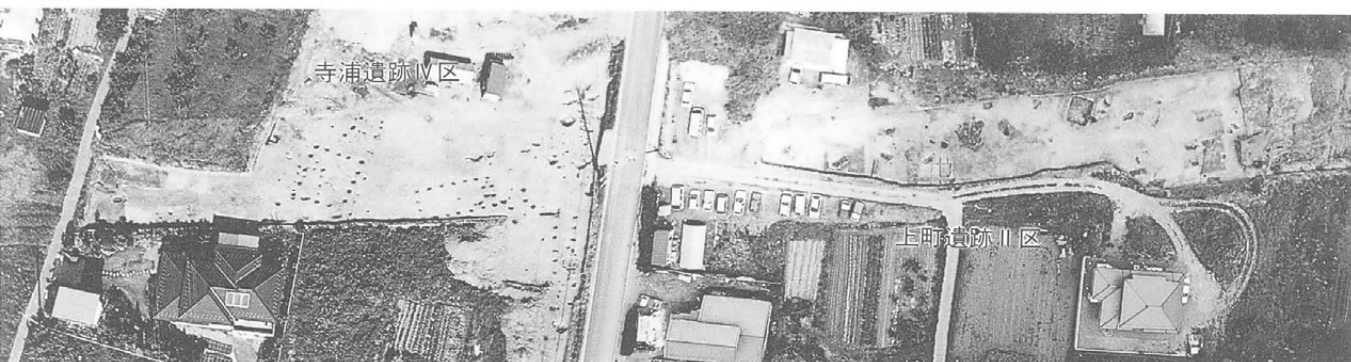
### 第3節 古 代

古墳時代後期の遺構としては上町遺跡のH 3・5号住居址、寺浦遺跡でH 9・10号住居址等がある。掘立柱建物址は遺物が少なく断定はできないが古墳時代後期～平安時代前期にあたと推定される。時期は2時期あるいは3時期に分けられると思われる。

奈良・平安時代の遺構としては豊饒堂遺跡のH 2・3号住居址、0 1号火葬墓址、上町遺跡のH 1・2・4・6～13号住居址、D 3号土坑址、寺浦遺跡のH 1～3・5～8・13～19・20～24号住居址等がある。

以上のことから7世紀後半～8世紀にかけての集落は上町・寺浦遺跡周辺に展開したと考えられる。標高的には440～420m前後で、中之条遺跡群・宮上遺跡・北浦遺跡でも同様に展開し、上町遺跡東側の豊饒堂遺跡にまで進展しない。豊饒堂遺跡東側に所在する御堂川古墳群・牧場の地名「牧ノ内」の存在がどのように関連するか課題である。

その後9世紀後半に至って、豊饒堂遺跡付近まで集落が展開するが、一時的な開発だったようで、再び10世紀代になって集落が展開するが、古墳後期～奈良時代ほど大規模な集落とはならず、小規模で散在的な集落であったらしい。又、豊饒堂遺跡D 1号土坑址・寺浦遺跡D 2・32号土坑址のように鉄滓を破棄したと思われる土坑から、中世の開畝製鉄遺跡の起因となる、製鉄遺跡が付近に存在することが予想される。坂城地区の式内社坂城神社・込山廃寺の存在、北日名経塚も含めて考えると、古代坂城郷の集落の変遷を考えるうえで重要な位置を示す集落となるように思われる。





# 豊饒堂遺跡・上町遺跡・寺浦遺跡・東町遺跡調査体制

## 事務局

教 育 長 西沢 民雄  
 社会教育課長 塩野入 猛  
 文化財係長 山崎政弘 (平成7年3月31日退任)  
                   小宮山久春 (平成7年4月1日着任)  
 文化財係 助川朋広 小平光一  
                   青木 卓 (嘱託職員)  
                   瀬在孝子 (臨時職員)

調査指導者 小平和夫 (長野県文化課指導主事)  
 調査担当者 小平光一 (坂城町教育委員会学芸員)

協力者 (平成5年度) 赤塚 淳 天田悦子 天田澄子  
                   塩野入早苗 春原かずい 中村久子  
                   萩野れい子 宮尾美代子 (以上、臨時職員)  
                   青木 清 池上武人 池田輝昭  
                   上野かず江 桂 喜重 北村春子  
                   窪田盛次 窪田義巳 小林さよ子  
                   小宮山武義 鈴木猶子 諏訪孝雄  
                   高橋幸世 竹内 巧 竹内平治  
                   竹鼻 茂 田中 勤 塚田智子  
                   中島勘蔵 中島千津子 中曽根啓一郎  
                   中村さつき 中村謙三 中村泰幸  
                   中村容民 三橋義人 宮島まき子  
                   宮沢義広 宮原正明 望月武志  
                   矢島岩太郎 柳沢良子 山崎貞子  
                   山辺ケサエ 吉池為男

(以上、(社)更埴広域シルバー人材センター)



協力者 (平成6年度) 天田悦子 天田澄子 小宮山愛子  
                   塩野入早苗 春原かずい 高木和子  
                   中村久子 萩野れい子 宮尾美代子

(以上、臨時職員)

青木 清 池田てる子 石井和美  
 五十嵐信男 大柴はついで 桂 喜重  
 窪田盛次 小島光子 小林 巴  
 小林さよ子 諏訪孝雄 竹内 巧  
 田中 勤 塚田智子 中島金子  
 中村静枝 中村容民 羽毛田とし子  
 松本よし子 三井重子 三橋義人  
 宮入梅子 森下幸忠 矢島岩太郎  
 柳沢勲夫 柳沢良子 山崎貞子

(以上、(社)更埴広域シルバー人材センター)

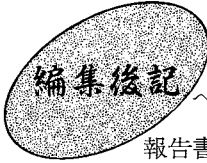
林 秀樹 (大学生)



協力者 (平成7年度) 天田澄子 塩野入早苗 春原かずい  
                   高木和子 中村久子 萩野れい子  
                   宮尾美代子 (以上、臨時職員)

浅野井 禅 花岡敏幸 宮澤 護  
 宮原 淳 山口 真 山城達人

(以上、高校生)



苦戦苦闘の3年間の発掘調査が終了し、報告書刊行となりました。調査担当者として初めての現場と報告書作成。すべてが試行錯誤の連続でした。

報告書作成に必要な情報を現場で得られながら、各県市町村ごとに報告書の掲載方法が違うに戸惑い、どれが基準何だろうと考えると報告書は沈滞。著者の勉強不足のため、豊富な資料を生かしきれず、不備な点が多いことを反省します。

今回の発掘調査・整理作業の過程で、大竹憲昭、小池幸夫、小平和夫、丸山敏一郎、森嶋稔、山岡邦章、和根崎剛の諸氏には、多大なるご指導ご鞭撻並びに心温まるご支援激励等を賜りましたこと、心よりお礼申し上げます。

文末になりましたが猛暑に負けず、厳寒に負けず作業を行ってくれた協力者の皆さん、報告書刊行にご尽力をいただいた鬼灯書籍株式会社の皆さんに深く感謝を申し上げます。

そしてこの大試掘坑によって開かれた先人の残した歴史の一端を今後解明できるよう努力していきたいと思えます。

(不掘是如何)

発行日 1996年3月29日  
編集者 坂城町教育委員会  
発行者 坂城町教育委員会  
〒389-06 長野県埴科郡坂城町大字中之条2468番地 ☎0268-82-2069  
印刷者 鬼灯書籍株式会社  
〒381 長野県長野市柳原2133-5 ☎026-244-0235  
印刷仕様◇版型 B5版◇頁数 138頁◇版組 電子組版◇整版 モノクロ写真150線  
◇用紙 表紙レザック180kg本文コート紙90kg◇製本 糸かがり



報告書抄録

ふりがな	ぶぎょうどういせき・うわまちいせき・てらうらいせき・ひがしまちいせき
書名	豊饒堂遺跡・上町遺跡・寺浦遺跡・東町遺跡
副書名	長野県坂城町県単街路・県単高速道路関連道路改良事業発掘調査報告書
シリーズ名	坂城町埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第5集
編著者名	小平 和夫 小平 光一
編集機関	坂城町教育委員会
所在地	〒389-06 長野県埴科郡坂城町大字中之条2468番地 TEL (0268) 82-2069
発行年月日	1996年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ぶぎょうどういせき 豊饒堂遺跡	ながの けんぱにしがぐんか 長野県埴科郡坂 城町大字中之 条	1521		36°26'40"	138°11'50"	1993年 9月1日～ 10月4日	1,103㎡	県単高速 道路関連 道路改良 事業に伴 う事前調 査
うわまちいせき 上町遺跡				36°26'30"	138°11'35"	1994年 4月13日～ 7月6日	1,798㎡	
てらうらいせき 寺浦遺跡				36°26'30"	138°11'25"	1993年 10月6日～ 12月22日 1994年 7月8日～ 11月15日 1995年 8月1日～ 8月22日	4,172㎡	県単街路 事業に伴 う事前調 査
ひがしまちいせき 東町遺跡				36°26'30"	138°11'40"	1993年 10月12日～ 10月15日	173㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
豊饒堂	集落址	縄文(早期) 弥生・平安～中世	竪穴住居址 3棟 (弥生・平安) 竪穴状遺構 1棟 (中世) 火葬墓址 1基 (奈良) 土坑址 8基	縄文土器(早期) 石鏃・石匙 弥生土器(後期) 土師器 須恵器	奈良時代の火葬墓を 検出。
上町	集落址	縄文(前期) 古墳～平安	竪穴住居址 13棟 (古墳～平安) 掘立柱建物址 2棟 (古墳～平安) 土坑址 2基	縄文土器(前期) 石鏃・石匙 土師器 須恵器 灰釉陶器	古墳時代後期～平安 時代主体の複合遺跡
寺浦	集落址	縄文(中期) 弥生～平安	竪穴住居址 24棟 (弥生～平安) 掘立柱建物址 16棟 (古墳～中世) 竪穴状遺構 2棟 (平安～中世) 土坑址 63基	縄文土器(中期) 石鏃・石匙 弥生土器 土師器 須恵器 灰釉陶器 緑釉陶器	古墳時代後期～平安 時代主体の複合遺跡
東町	集落址	近世	掘立柱建物址 2棟 (近世) 土坑址 4基	土師器 唐津系陶器	近世の掘立柱建物 2 棟検出。